

しもひらの
下平野遺跡

2024

公益財団法人山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター

序

本書は、熊本郡田布施町下田布施に所在する下平野遺跡の発掘調査の記録をまとめたものです。調査は、南周防農地整備事業西田布施・友石団地に先立って、中国四国農政局南周防農地整備事業所及び田布施町教育委員会から発掘調査業務の委託を受け、公益財団法人山口県ひとづくり財団が実施しました。

今回の調査では、鎌倉時代を中心とする流路や掘立柱建物、土坑等が検出され、当時の土師器の杯・皿や陶磁器、中国銭、鍛冶関係遺物等が出土しました。

とりわけ、縄文時代早期のトロトロ石器の出土や鎌倉時代に営まれた集落と使用された土器等の遺物は、この地域の当時の暮らしを知るうえで、貴重な資料になると考えられます。

今後、この調査成果を、郷土史や文化財保護に対する理解、教育や文化の振興、学術研究等に広く活用していただければ幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施並びに本報告書の作成にあたり、御支援、御協力を賜りました関係各位に対し、衷心より感謝申し上げます。

令和6年3月

公益財団法人 山口県ひとづくり財団
理 事 長 浅 原 司

例 言

- 1 本書は、令和4（2022）年度に実施した下平野遺跡（山口県熊毛郡田布施町下田布施地内）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、公益財団法人山口県ひとつくり財団が、農林水産省中国四国農政局〔令和4年度契約名：南周防農地整備事業西田布施・友石団地埋蔵文化財発掘調査（その5）委託業務、令和5年度契約名：南周防農地整備事業西田布施・友石団地埋蔵文化財発掘調査取りまとめ（その2）委託業務〕と、田布施町教育委員会〔令和4年度契約名：下平野遺跡発掘調査委託業務、令和5年度契約名：下平野遺跡発掘調査取りまとめ委託業務〕からの委託を受けて実施した。
- 3 調査組織は以下のとおりである。

調査主体	公益財団法人山口県ひとつくり財団山口県埋蔵文化財センター		
調査担当	次 長	石 井 龍 彦	（令和4年度）
	調査第二課主査	岡 田 裕 之	（令和4・5年度）
	文化財専門員	鈴 木 卓	（令和4・5年度）
		井 川 隆 司	（令和5年度）
		井 上 広 之	（令和5年度）
- 4 本書の第1・2図は、南周防農地整備事業所提供の地図を元に作成し、第3図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「柳井」を複製使用した。
- 5 本書に使用した方位は、国土座標（世界測地系）の北で示し、標高は海拔標高（m）である。
- 6 本書に使用した土色の色調標記は、農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell方式による。
- 7 図版中の遺構・遺物番号は、実測図のそれと対応する。
- 8 出土遺物実測図のうち、断面黒塗は須恵器を示す。
- 9 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

SB	掘立柱建物	SA	柱列（柵・塀等）	SP	柱穴	SK	土坑	SD	溝
----	-------	----	----------	----	----	----	----	----	---
- 10 石器・石製品の石材鑑定については、山口県立山口博物館の赤崎英里氏の御教示いただいた。
- 11 資料の分析・鑑定に関して、出土炭化材の放射性炭素年代測定（AMS法）及び樹種同定、金属関連遺物の分析調査を業者に委託し、その成果を第IV章に掲載した。
- 12 本書の挿図・写真は、調査・整理担当者が分担して作成した。文章の執筆は、IV自然科学分析を委託業者が行い、その他と編集を岡田が担当した。

本文目次

I	調査の経緯と概要	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査の経過と概要	2
II	遺跡の位置と環境	5
1	地理的環境	5
2	歴史的環境	5
III	調査の成果	10
1	1区の成果	10
(1)	概要	10
(2)	基本層序	10
(3)	遺構と遺物	12
2	2区の成果	102
(1)	概要	102
(2)	基本層序	103
(3)	遺構と遺物	103
IV	自然科学分析	118
1	放射性炭素年代測定〔令和4年度委託分〕	118
2	下平野遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)〔令和5年度委託分〕	124
3	下平野遺跡出土炭化材の樹種同定	128
4	下平野遺跡出土鉄関連遺物の自然科学分析〔令和4年度委託分〕	133
5	下平野遺跡出土鉄関連遺物の自然科学分析〔令和5年度委託分〕	140
V	総括	147
1	中世の集落	147
(1)	出土遺物について	147
(2)	集落の変遷	150
2	古墳時代の遺物包含層出土土器	150
3	縄文時代以前の石器	154
	まとめ	155

挿図目次

第 1 図	西田布施・友石団地内の発掘調査遺跡の位置 …………… 1	第 39 図	1 区 SK283 出土遺物実測図 …… 65
第 2 図	下平野遺跡の調査範囲 …………… 2	第 40 図	1 区土杭出土遺物実測図 (3) …… 66
第 3 図	遺跡の位置と周辺の主な遺跡 …………… 6	第 41 図	1 区土杭出土遺物実測図 (4) …… 68
第 4 図	1 区遺構配置図 …………… 11	第 42 図	1 区土杭出土遺物実測図 (5) …… 69
第 5 図	1 区北半遺構配置図 …………… 12	第 43 図	1 区土杭出土遺物実測図 (6) …… 71
第 6 図	1 区土層断面図 …………… 13	第 44 図	1 区 SD 1 実測図 …………… 73
第 7 図	1 区 SB1・2 実測図 …………… 14	第 45 図	1 区 SD 1 出土遺物実測図 (1) …… 74
第 8 図	1 区 SB3・4 実測図 …………… 16	第 46 図	1 区 SD 1 出土遺物実測図 (2) …… 75
第 9 図	1 区 SB1・3・4 出土遺物実測図 …… 17	第 47 図	1 区 SD 1 出土遺物実測図 (3) …… 76
第 10 図	1 区 SB5～7 実測図 …………… 18	第 48 図	1 区溝出土遺物実測図 …………… 77
第 11 図	1 区 SB5～7 出土遺物実測図 …… 19	第 49 図	1 区遺構外遺物実測図 (1) …… 79
第 12 図	1 区柱列実測図 (1) …………… 20	第 50 図	1 区遺構外遺物実測図 (2) …… 80
第 13 図	1 区柱列実測図 (2) …………… 22	第 51 図	2 区遺構配置図 …………… 102
第 14 図	1 区柱列実測図 (3) …………… 23	第 52 図	2 区土層断面図 …………… 103
第 15 図	1 区柱列出土遺物実測図 …………… 25	第 53 図	2 区掘立柱建物実測図 …………… 104
第 16 図	1 区柱穴配置図 …………… 27	第 54 図	2 区柱穴出土遺物実測図 …… 106
第 17 図	1 区柱穴実測図 (1) …………… 28	第 55 図	2 区 SD 1 実測図 …………… 107
第 18 図	1 区柱穴実測図 (2) …………… 30	第 56 図	2 区西側遺物包含層出土遺物実測図 (1) …………… 108
第 19 図	1 区柱穴出土遺物実測図 (1) …… 31	第 57 図	2 区西側遺物包含層出土遺物実測図 (2) …………… 109
第 20 図	1 区柱穴出土遺物実測図 (2) …… 33	第 58 図	2 区西側遺物包含層出土遺物実測図 (3) …………… 110
第 21 図	1 区柱穴出土遺物実測図 (3) …… 35	第 59 図	2 区西側遺物包含層出土遺物実測図 (4) …………… 111
第 22 図	1 区柱穴出土遺物実測図 (4) …… 36	第 60 図	2 区遺構外遺物実測図 (1) …… 113
第 23 図	1 区柱穴出土遺物実測図 (5) …… 38	第 61 図	2 区遺構外遺物実測図 (2) …… 114
第 24 図	1 区柱穴出土遺物実測図 (6) …… 40	第 62 図	マルチプロット図 …………… 121
第 25 図	1 区柱穴出土遺物実測図 (7) …… 41	第 63 図	暦年校正結果 (1) …………… 122
第 26 図	1 区柱穴出土遺物実測図 (8) …… 43	第 64 図	暦年校正結果 (2) …………… 123
第 27 図	1 区柱穴出土遺物実測図 (9) …… 45	第 65 図	暦年校正年代グラフ …………… 127
第 28 図	1 区柱穴出土遺物実測図 (10) …… 47	第 66 図	下平野遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真 (1) …………… 131
第 29 図	1 区柱穴出土遺物実測図 (11) …… 48	第 67 図	下平野遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真 (2) …………… 132
第 30 図	1 区柱穴出土遺物実測図 (12) …… 50	第 68 図	鉄関連遺物の遺物写真 (A、B) と断面組織の走査型電子顕微鏡反射電子像 (C、D) (1) …………… 136
第 31 図	1 区柱穴出土遺物実測図 (13) …… 51		
第 32 図	1 区土杭実測図 (1) …………… 52		
第 33 図	1 区土杭実測図 (2) …………… 55		
第 34 図	1 区土杭出土遺物実測図 (1) …… 57		
第 35 図	1 区土杭実測図 (3) …………… 59		
第 36 図	1 区土杭出土遺物実測図 (2) …… 61		
第 37 図	1 区 SK249 実測図 …………… 62		
第 38 図	1 区 SK249 出土遺物実測図 …… 63		

第 69 図	鉄関連遺物の遺物写真 (A、B) と断面組織の走査型電子顕微鏡反射電子像 (C、D) (2) …… 137	第 74 図	鉄関連遺物の遺物写真 (A、B) と断面組織の走査型電子顕微鏡反射電子像 (C、D) (3) …… 145
第 70 図	鉄関連遺物の遺物写真 (A、B) と断面組織の走査型電子顕微鏡反射電子像 (C、D) (3) …… 138	第 75 図	鉄関連遺物の遺物写真 (A、B) と断面組織の走査型電子顕微鏡反射電子像 (C、D) (4) …… 146
第 71 図	鉄関連遺物の遺物写真 (A、B) と断面組織の走査型電子顕微鏡反射電子像 (C、D) (4) …… 139	第 76 図	下平野遺跡出土の中世土器・陶磁器 …… 148
第 72 図	鉄関連遺物の遺物写真 (A、B) と断面組織の走査型電子顕微鏡反射電子像 (C、D) (1) …… 143	第 77 図	下平野遺跡の建物・柱列と主な土坑の変遷 …… 151
第 73 図	鉄関連遺物の遺物写真 (A、B) と断面組織の走査型電子顕微鏡反射電子像 (C、D) (2) …… 144	第 78 図	下平野遺跡と周辺遺跡出土の古墳時代の土師器 …… 152
		第 79 図	下平野遺跡出土の石器 …… 154

表目次

第 1 表	1 区出土土器観察一覧表 (1) …… 82	第 23 表	2 区出土土器観察一覧表 (1) …… 115
第 2 表	1 区出土土器観察一覧表 (2) …… 83	第 24 表	2 区出土土器観察一覧表 (2) …… 116
第 3 表	1 区出土土器観察一覧表 (3) …… 84	第 25 表	2 区出土土器観察一覧表 (3) …… 117
第 4 表	1 区出土土器観察一覧表 (4) …… 85	第 26 表	2 区出土石器観察一覧表 …… 117
第 5 表	1 区出土土器観察一覧表 (5) …… 86	第 27 表	2 区出土鉄器観察一覧表 …… 117
第 6 表	1 区出土土器観察一覧表 (6) …… 87	第 28 表	2 区出土土製品観察一覧表 …… 117
第 7 表	1 区出土土器観察一覧表 (7) …… 88	第 29 表	測定試料および処理 …… 119
第 8 表	1 区出土土器観察一覧表 (8) …… 89	第 30 表	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 …… 120
第 9 表	1 区出土土器観察一覧表 (9) …… 90	第 31 表	放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{14}\text{C}$ (Libby Age)、pMC) …… 126
第 10 表	1 区出土土器観察一覧表 (10) …… 91	第 32 表	放射性炭素年代測定結果 (暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代) …… 126
第 11 表	1 区出土土器観察一覧表 (11) …… 92	第 33 表	下平野遺跡出土炭化材の樹種同定結果 …… 128
第 12 表	1 区出土土器観察一覧表 (12) …… 93	第 34 表	分析対象一覧 …… 133
第 13 表	1 区出土土器観察一覧表 (13) …… 94	第 35 表	蛍光 X 線分析による半定量分析結果 (mass%) …… 134
第 14 表	1 区出土土器観察一覧表 (14) …… 95	第 36 表	鉱物組成の X 線分析結果 …… 135
第 15 表	1 区出土土器観察一覧表 (15) …… 96	第 37 表	分析対象一覧 …… 140
第 16 表	1 区出土土器観察一覧表 (16) …… 97	第 38 表	蛍光 X 線分析による半定量分析結果 (mass%) …… 141
第 17 表	1 区出土土器観察一覧表 (17) …… 98	第 39 表	鉱物組成の X 線分析結果 …… 142
第 18 表	1 区出土土器観察一覧表 (18) …… 99		
第 19 表	1 区出土土器観察一覧表 (19) …… 100		
第 20 表	1 区出土石器・石製品等観察一覧表 …… 100		
第 21 表	1 区出土金属製品観察一覧表 …… 101		
第 22 表	1 区出土土製品観察一覧表 …… 101		

図版目次

表紙	遺跡上空から石城山を臨む	9-2	1区 SP142 土器出土状況(南から)
図版1-1	遺跡遠景(北西から)	9-3	1区 SP275 白磁出土状況(南から)
1-2	遺跡遠景(西から)	9-4	1区 SP319 土器・礫出土状況(南から)
図版2-1	遺跡遠景(北東から)	9-5	1区 SP336 土器出土状況(南から)
2-2	遺跡全景(東から)	9-6	1区 SP344 土器出土状況(東から)
図版3-1	遺跡全景(西から)	9-7	1区 SP365 土器・礫出土状況(南から)
3-2	遺跡全景(真上から、上が東)	9-8	1区 SP384 土器出土状況(南から)
図版4-1	1区全景(真上から、上が東)	図版10-1	1区 SP434 土器出土状況(南から)
4-2	2区全景(真上から、上が南)	10-2	1区 SP464 土器出土状況(東から)
図版5-1	1区北半近景(真上から、上が東)	10-3	1区 SP465-466 間土器出土状況(東から)
5-2	1区北半完掘状況(東から)	10-4	1区 SP466 土器出土状況(東から)
図版6-1	1区西壁(A-A')土層(東から)	10-5	1区 SP601 土器出土状況(北から)
6-2	1区西壁(B-B')土層(東から)	10-6	1区 SP656 土器出土状況(南東から)
6-3	1区南壁(C-C')土層(北西から)	10-7	1区 SP791 土器出土状況(北から)
図版7-1	1区掘立柱建物配置(真上から、上が東)	10-8	1区 SP688 土器出土状況(南から)
7-2	1区 SB 1 完掘状況(東から)	図版11	1区掘立柱建物出土遺物(1)
図版8-1	1区 SB 1 構成柱穴(SP356)土層断面(西から)	図版12	1区掘立柱建物・柱列出土遺物
8-2	1区 SB 1 構成柱穴(SP386)土層断面(西から)	図版13	1区柱穴出土遺物(1)
8-3	1区 SB 6 構成柱穴(SP868)土器・礫出土状況(南から)	図版14	1区柱穴出土遺物(2)
8-4	1区 SA 1 構成柱穴(SP929)土器出土状況(東から)	図版15	1区柱穴出土遺物(3)
8-5	1区 SA 5 構成柱穴(SP808)土器出土状況(南から)	図版16-1	1区 SP360・361 土器出土状況(東から)
8-6	1区 SA 7 構成柱穴(SP825)土器出土状況(北から)	16-2	1区 SP334 土器出土状況(南から)
8-7	1区 SA11 構成柱穴(SP435)土器出土状況(北から)	16-3	1区 SP394 土器出土状況(西から)
8-8	1区 SP100 青磁出土状況(東から)		
図版9-1	1区 SP110 土器出土状況(西から)		

16-4	1区SP431 土器出土状況(北から)	32-2	1区SK24 土器出土状況(東から)
16-5	1区SP448 土器出土状況(南から)	32-3	1区SK15 土層断面(南から)
図版17-1	1区SP577 土器出土状況(北西から)	32-4	1区SK15 完掘状況(南から)
17-2	1区SP747 土器出土状況(南から)	32-5	1区SK43 土層断面(東から)
17-3	1区SP1141 土器出土状況(西から)	32-6	1区SK45 完掘状況(南東から)
17-4	1区SP3086 土器出土状況(東から)	32-7	1区SK51 完掘状況(南から)
17-5	1区SP589 柱出土状況(南から)	32-8	1区SK52 土器出土状況(北から)
17-6	1区SP880 柱出土状況(北から)	図版33-1	1区SK52 完掘及び土器出土状況(東から)
17-7	1区SP1227 礫出土状況(北から)	33-2	1区SK69 土器出土状況(東から)
17-8	1区SP1229 礫出土状況(西から)	33-3	1区SK73 完掘状況(東から)
図版18	1区柱穴出土遺物(4)	33-4	1区SK87 完掘状況(南から)
図版19	1区柱穴出土遺物(5)	33-5	1区SK223 土層断面(東から)
図版20	1区柱穴出土遺物(6)	図版34-1	1区SK218 完掘状況(東から)
図版21	1区柱穴出土遺物(7)	34-2	1区SK242 完掘状況(西から)
図版22	1区柱穴出土遺物(8)	34-3	1区SK246 土層断面(北から)
図版23	1区柱穴出土遺物(9)	34-4	1区SK246 木炭検出状況(南から)
図版24	1区柱穴出土遺物(10)	34-5	1区SK252 完掘状況(北西から)
図版25	1区柱穴出土遺物(11)	34-6	1区SK269 土器出土状況(東から)
図版26	1区柱穴出土遺物(12)	34-7	1区SK253 土層断面(東から)
図版27	1区柱穴出土遺物(13)	34-8	1区SK253 完掘状況(東から)
図版28	1区柱穴出土遺物(14)	図版35-1	1区SK275 完掘状況(北から)
図版29	1区柱穴出土遺物(15)	35-2	1区SK277 完掘状況(北から)
図版30	1区柱穴出土遺物(16)	35-3	1区SK280 完掘状況(西から)
図版31-1	1区SK 1 土層断面(東から)	35-4	1区SK249 掘り込み状況(南から)
32-2	1区SK 1 完掘状況(南から)	35-5	1区土坑出土遺物(1)
33-3	1区SK 2 土層断面(西から)	図版36	1区土坑出土遺物(2)
31-4	1区SK 2 完掘状況(南から)	図版37	1区土坑出土遺物(3)
31-5	1区SK 3 土層断面(北東から)	図版38	1区土坑出土遺物(4)
31-6	1区SK 3 完掘状況(東から)	図版39-1	1区SK283 遺物出土状況(北から)
31-7	1区SK11 完掘状況(南から)	39-2	1区SK249 掘り込み状況(北から)
31-8	1区SK13 完掘状況(南から)	図版40	1区SK283・SK249 出土遺物
図版32-1	1区SK14 完掘状況(東から)	図版41	1区SK249 出土遺物
		図版42	1区土坑出土遺物(5)
		図版43	1区土坑出土遺物(6)
		図版44	1区土坑出土遺物(7)

- 図版 45 1区土坑出土遺物(8)
- 図版 46 1区土坑出土遺物(9)
- 図版 47 1区土坑出土遺物(10)
- 図版 48-1 1区SD 1完掘状況(東から)
- 48-2 1区SD 1完掘状況(西から)
- 図版 49-1 1区SD 1東壁土層(西から)
- 49-2 1区SD 1西壁土層(東から)
- 49-3 1区SD 1土器一括出土状況(東から)
- 図版 50 1区SD 1出土遺物(1)
- 図版 51 1区SD 1出土遺物(2)
- 図版 52 1区SD 1出土遺物(3)
- 図版 53 1区SD 1出土遺物(4)
- 図版 54 1区SD 1・溝出土遺物
- 図版 55 1区遺構外遺物(1)
- 図版 56 1区遺構外遺物(2)
- 図版 57 1区遺構外遺物(3)
- 図版 58-1 2区完掘状況(北東から)
- 58-2 2区完掘状況(南西から)
- 図版 59-1 2区北壁土層(南から)
- 59-2 2区東壁(D-D')土層(西から)
- 59-3 2区西壁(E-E')土層(東から)
- 図版 60-1 2区SD 1完掘状況(北東から)
- 60-2 2区SD 1完掘状況(南西から)
- 図版 61-1 2区SP63土器出土状況(東から)
- 61-2 2区西側遺物包含層土器出土状況(1)(南から)
- 61-3 2区西側遺物包含層土器出土状況(2)(東から)
- 図版 62-1 2区西側遺物包含層土器出土状況(3)(北から)
- 62-2 2区西側遺物包含層土器出土状況(4)(東から)
- 62-3 2区西側遺物包含層土器出土状況(5)(東から)
- 図版 63 2区柱穴・西側遺物包含層出土遺物
- 図版 64 2区西側遺物包含層出土遺物(1)
- 図版 65 2区西側遺物包含層出土遺物(2)
- 図版 66 2区西側遺物包含層出土遺物(3)
- 図版 67 2区西側遺物包含層出土遺物(4)
- 図版 68 2区西側遺物包含層出土遺物(5)
- 図版 69 2区西側遺物包含層出土遺物(6)
- 図版 70 2区遺構外遺物(1)
- 図版 71 2区遺構外遺物(2)

I 調査の経緯と概要

1 調査に至る経緯（第1・2図）

農林水産省中国四国農政局は、農村の活性化や農業の競争力強化を図るため、柳江市、熊毛郡田布施町及び光市の一部で、南周防農地整備事業を進めている。これらの事業は、広域でほ場整備工事が行われるため、事業計画と埋蔵文化財保護との調整を図ることが必要であり、埋蔵文化財の状況を把握する目的で、県や町の文化財部局が試掘調査を行ってきた。

西田布施・友石団地においては、平成31（令和元）年度に田布施町教育委員会が試掘調査を実施し、遺跡の有無やその範囲が確認されている。この結果を受けて、山口県教育委員会と事業主体である南周防農地整備事業所は遺跡の取り扱いについて協議を行い、工事によって影響を受ける6遺跡の範囲について（第1図）、令和2年度からの3年間で発掘調査を実施することとなった。令和2年度の馬場遺跡、助本遺跡、森永遺跡、令和3年度の辻花遺跡は、中国四国農政局南周防農地整備事業所及び田布施町教育委員会の委託を受けた公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センターが調査を実施した。

下平野遺跡は、農林水産省中国四国農政局及び田布施町教育委員会の委託を受けて、令和4年度に当センターが3,835㎡（南周防農地整備事業所委託分3,715㎡、田布施町教育委員会委託分120㎡）の範囲について、記録保存のための発掘調査を実施した。



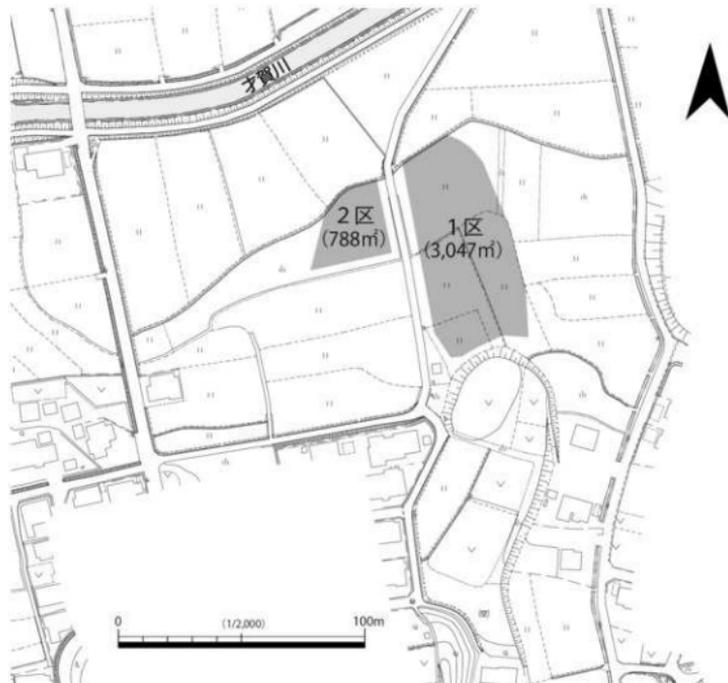
第1図 西田布施・友石団地内の発掘調査遺跡の位置

なお、調査地は東西2か所に分かれており、東側を1区(3,047㎡)、西側を2区(788㎡)と呼ぶこととした(第2図)。

2 調査の経過と概要

令和4年度は、諸手続きや委託契約等の現場準備を進め、4月28日に南周防農地整備事業所との初回業務打合せ及び現地確認を行った。6月7日に調査範囲の縄張り、6月9日に南周防農地整備事業所の担当者を交えての縄張り確認、6月20日に地元関係者への実施挨拶を行い、7月12日には発掘作業員説明会を実施した。7月27日から重機による除草作業と表土除去及び駐車場整備を開始し、8月30日に終了した。その間、8月16日から8月18日にかけて仮設事務所と仮設トイレ等の設置や電気配線、8月23日に仮設水道の設置を行った。

9月2日には発掘作業員による発掘器材の搬入を行い、9月7日から本格的に発掘作業員を稼働して環境整備と壁面清掃に着手した。9月9日からは1区、9月30日から2区の遺構検出作業を開始し、10月4日に完了した。遺構検出の結果、1区の北半分に中世の柱穴や土坑が多数集中し、調査区の東西を横断する流路を確認したが、南半分は後世の耕作地利用による攪乱を受けており、遺構の密度が薄いことが判明した。2区では、1区に続く流路と少数の柱穴や土坑、調査区の北側から西



第2図 下平野遺跡の調査範囲

側にかけて遺物包含層を確認した。10月4日から2区の遺物包含層の掘削、10月11日から2区の流路の掘り込みを行い、10月14日に2区の掘り込みを一旦終了した。その間の10月7日から調査員が1区の遺構配置略測図の作成を行い、それがほぼ完了した10月18日から1区の遺構掘り込みや遺物包含層の掘削に着手した。それ以降、調査員が遺構の土層断面や遺物出土状況、完掘状況等の写真撮影及び実測図作成を随時実施した。なお、10月12日と10月19日には、国土座標杭の設置を業務委託により行った。

遺構検出作業や遺物包含層等掘削の進捗にともない、遺構数が当初の想定を大幅に上回ることが判明したため、11月24日から11月25日にかけて駐車場を拡張した上で、12月5日から発掘作業員を追加雇用了。1月12日に1区の遺構掘り込みをほぼ完了し、1月16日から1区の空中写真測量前の清掃を開始したが、大雪のため中断し、1区の実機ヘリコプターによる空中写真測量（図化撮影）は2月3日に実施した。2区は、1区の遺構掘り込みと併行して、1月6日から遺物包含層の掘削を再開し、2月2日から遺構の掘り込みに着手した。2月14日から空中写真撮影前の清掃を行い、2月17日に調査区全体の空中写真撮影と全方位システムの動画撮影等、2区の空中写真測量（図化撮影）を実施した。

その後、補足的に遺構の掘り込みを行った後、2月27日に器材を撤出し、発掘作業員の稼働を終了した。2月24日に仮設水道撤去、2月27日に電気配線撤去を行い、2月28日に仮設事務所と仮設トイレ等を撤去した。その後、調査員による補足の測量を行い、3月16日に南周防農地整備事業所職員の立会の下、現地引渡しを行い、すべての現地調査を完了した。



重機による表土除去



作業風景①



作業風景②



空中写真撮影・測量（2回目）

なお、出土遺物は、随時、センターに持ち帰り、洗浄、接合、復元等の作業を行い、遺構図面や写真等の記録類も整理を進め、報告書作成のための基礎的な資料化を行った。併せて、出土した炭化材は放射性炭素年代測定（AMS法）や樹種同定等の自然科学分析を、金属関連遺物は顕微鏡観察やEPMA調査等の分析調査をそれぞれ専門業者に委託して実施し、金属製品と木製品の保存処理も業務委託により実施した。

令和5年度は、農林水産省中国四国農政局及び田布施町教育委員会からの委託を受けて、報告書取りまとめ業務に着手し、5月25日には南周防農地整備事業所との初回業務打合せを行った。年度当初から、昨年度に引き続き、出土遺物の洗浄、接合、復元等の整理事業のほか、遺構図面や遺構写真等の記録類の整理を進め、関連資料の収集を行った。また、昨年度実施できなかった出土遺物の中から厳選し、炭化材の放射性炭素年代測定（AMS法）や金属関連遺物の分析調査、金属製品の保存処理について、専門業者との委託契約を行った。

報告書作成に当たっては、まず出土遺物のピックアップを行い、出土地点、残存状態、特徴等にもとづき選別し、図化するものを決定した。4月6日からは空中写真測量によって作成した遺構図面の整理と割付を行い、報告書挿図の作成を進めた。5月16日から出土遺物の実測図の作成を始めたが、点数が600点を超えたため、すべて完了したのは12月6日であった。それと併行して、9月4日からは遺物図面のデジタルトレースを開始し、12月20日からは遺物図面の割付を行った。10月5日から12月6日までは遺物写真撮影を行い、12月7日から遺物写真の整理・現像と、遺物及び遺構写真図版の作成を進めた。

その一方で、関連資料の収集を行いながら文章の執筆を進めていき、整理した挿図や写真図版のほか、業務委託した自然科学分析等の成果品とともに編集を行った。令和6年2月13日に報告書原稿を入稿した後、校正作業を経て、本報告書を刊行するに至った。

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

下平野遺跡は、熊本県田布施町下田布施に所在する。田布施町は山口県の南東部、熊本半島の西側に位置し、町域の北側と西側で光市、東側で柳井市と平生町に接する。北側に神籠石を有する石城山(362 m)、西側に呉籠山(293.8 m)と千坊山(298.7 m)が連なり、東側には低地部が広がる。南に目を向けると、平生湾及び瀬戸内海が広がり、離島の馬島も町域に含まれる。町域は、山林と山々から派生する丘陵、点在する独立丘陵、その間を埋めるように広がる谷底平野から成り立つ。町域の中央は、田布施川が貫流し、いくつもの支流に分かれている。

下平野遺跡の所在する下田布施は、田布施町中部にあり、地区の多くは小起伏山地と、そこから派生する丘陵に囲まれた地域である。遺跡は、東西方向に流れる才賀川に向かって、北側に張り出した丘陵先端部の低台地上に立地する。

2 歴史的環境

近年、田布施町内では国営圃場整備事業に伴う発掘調査が行われ、町内の歴史が次々に明らかにされている。

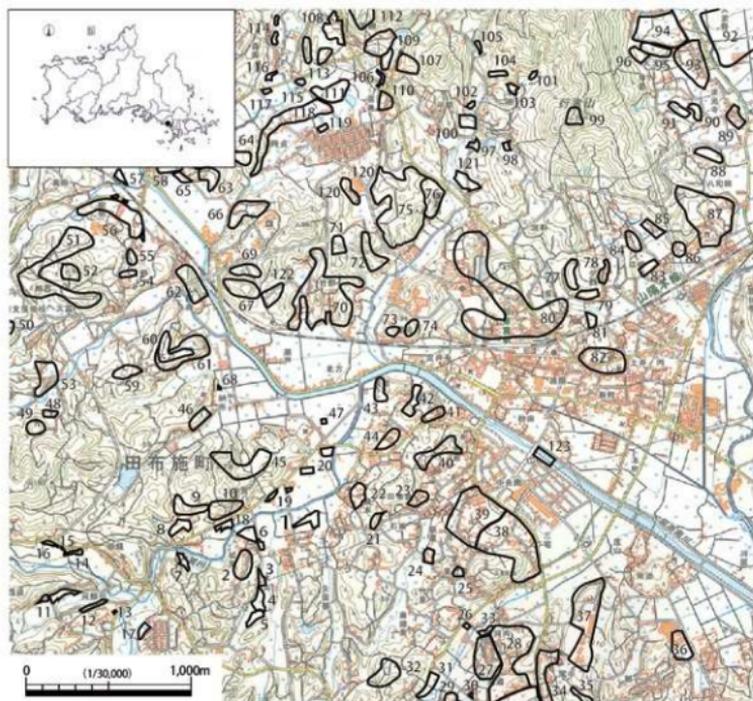
町内に人々の活動の痕跡がみられるのは縄文時代からであるが、これまで、いくつかの遺跡で縄文土器片が出土するなど、断片的に遺跡の存在をうかがえる程度であった。田布施町周辺における縄文時代の遺跡分布の中心は室津半島沿岸部にあり、半島西岸の平生町岩田遺跡では、後期から晩期にかけての土器が多数出土し、西部瀬戸内地域の土器編年の基準となっている。半島先端の長島にある上関町田ノ浦遺跡は前期から晩期の土器が多数出土し、石材供給の中継地点と考えられている。

しかし近年になって、町内で本格的な発掘調査が実施されるようになり、才賀川上流域の田縫遺跡(14)では縄文土器を出土した土坑がみつかった。また、辻花遺跡(6)では、縄文時代晩期の土器埋設遺構やドングリ貯蔵用土坑9基が確認されており、県内及び町内の縄文時代晩期の様相の一端を知りうる貴重な資料が得られた。

弥生時代前期の集落跡はこれまで確認されていないが、馬場遺跡(8)では弥生時代前期後半に比定される胴部に羽状文を施した壺が出土しており、前期の人々の生活の痕跡がみられる。

中期に入ると、町内各所の低地や丘陵に集落が形成される。麻郷奥地区の樹枝状の丘陵に挟まれた沖積地に所在する、中期前半の見用遺跡(31)では、県内の焼立竪穴建物の最古の事例である円形竪穴建物が確認された。この住居からは須玖式土器など北部九州との交流を示す遺物が出土している。その他、石城山南麓では中溝遺跡(106)、行者山麓周辺では平井遺跡(103)、木地遺跡(104)、中屋B遺跡(100)等で小規模な集落が営まれている。

中期後半になると、県下有数の低地性集落跡である明地遺跡(92)では、県指定有形文化財となった、国内最大を誇る分銅形土製品が出土し、他にも船の描かれた絵画土器、土鍾、石鍾等、海とかわる遺物がみられる。さらに、吉備、伊予、山陰等の様々な地域の土器も出土しており、広範囲に



- 1 下平野遺跡 2 松尾遺跡 3 森永遺跡 4 東東藤遺跡 5 梨本遺跡 6 辻佐遺跡 7 助本遺跡 8 馬場遺跡
 9 才賀B遺跡 10 才賀遺跡 11 小神田遺跡 12 法神田遺跡 13 中西尾崎遺跡 14 田樋遺跡 15 大迫B遺跡
 16 大迫A遺跡 17 平田遺跡 18 斜光遺跡 19 岩光遺跡 20 松ノ内遺跡 21 藤本A遺跡 22 藤本B遺跡
 23 石迫遺跡 24 森尾五郎郎遺跡 25 竹重遺跡 26 松元遺跡 27 尾迫稲荷山遺跡 28 尾迫遺跡 29 伊幸田遺跡
 30 有古遺跡 31 見用遺跡 32 警固原遺跡 33 八頭遺跡 34 尾中遺跡 35 月輪遺跡 36 藤尾遺跡 37 山崎原遺跡
 38 三宅遺跡 39 神過原遺跡 40 名蔵遺跡 41 長田C遺跡 42 長田A遺跡 43 長田B遺跡 44 長田遺跡
 45 才賀A遺跡 46 納所遺跡 47 上友石遺跡 48 長光古墳 49 大田金比羅社遺跡 50 大田A古墳群
 51 木ノ井山古墳群 52 木ノ井山遺跡 53 大田遺跡 54 蓮池寺遺跡 55 宮川遺跡 56 開明遺跡 57 天徳遺跡
 58 田熊A遺跡 59 大力遺跡 60 国森古墳群 61 国森遺跡 62 石走山遺跡 63 瓜迫B遺跡 64 瓜迫古墳群
 65 尻尻遺跡 66 瓜迫A遺跡 67 後井古墳群 68 松末遺跡 69 上後井遺跡 70 竹部遺跡 71 竹部古墳群
 72 御蔵戸B遺跡 73 深田古墳 74 深田遺跡 75 御蔵戸古墳群 76 御蔵戸遺跡 77 徳吉古墳群 78 隣河内遺跡
 79 徳吉遺跡 80 長合遺跡 81 上ヶ西遺跡 82 波野市遺跡 83 尾崎遺跡 84 上ヶ遺跡 85 久保遺跡
 86 波野天王山遺跡 87 八和田遺跡 88 敷合古墳群 89 東光寺古墳 90 妙見遺跡 91 天王山古墳群 92 明地遺跡
 93 天王原遺跡 94 惣津遺跡 95 納蔵原古墳群 96 納蔵原遺跡 97 妙法寺遺跡 98 水奥遺跡 99 行者山城跡
 100 中屋B遺跡 101 粟川遺跡 102 中屋A遺跡 103 平井遺跡 104 木地遺跡 105 三反地遺跡 106 中溝遺跡
 107 宝前原遺跡 108 下小田遺跡 109 別所遺跡 110 宿井B遺跡 111 宿井C遺跡 112 宮田古墳群
 113 京城古墳群 114 森國遺跡 115 東森國遺跡 116 友貞B遺跡 117 友貞遺跡 118 上時貞遺跡 119 中市遺跡
 120 宿井A遺跡 121 西河内遺跡 122 後井遺跡 123 田布施川河床遺跡

第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡

わたる地域との関わりが明らかとなった。ほぼ同時期の開明遺跡（56）でも同様な出土品が認められる。これらの集落は、古柳井水道との関係を考えると、海の間に他地域との交易や交流を活発に行っていたことがわかる。

一方、海から離れた山間部にあり、周辺地域との交流がほとんどうかがえない場所に営まれた集落もある。本遺跡周辺では、平田遺跡（17）と三坪遺跡が当てはまる。他にも標高40mほどの奥まった谷間に位置する奈良二ツ池遺跡では、周防型壺が一括で出土し、中溝遺跡（106）では、弥生時代中期～後期の竪穴建物や貯蔵穴等の遺構が多数確認された。また、平井遺跡（103）や上時貞遺跡（118）では、出土遺物がほぼ在来系土器に限られ、閉鎖的な環境が想像できる。

馬場遺跡（8）では、弥生時代中期末～後期初頭の直径が11mにも及ぶ県内最大規模の竪穴建物や焼失竪穴建物が確認されたほか、備後、山陰、伊予、九州系の影響を受けた土器がみついている。

弥生時代後期になると、田布施川中流域右岸の独立丘陵上にある石走山遺跡（62）で方形台状墓群が形成されており、地域をまとめる権力者が出現する。

田布施町は県内有数の古墳密集地として知られ、規模の大小を問わず、ほとんどの古墳が田布施川中～下流域に集中している。この一帯は当時、古柳井水道の沿岸部と推定されており、その東側の入口には全長98mの柳井茶白山古墳、西側の入口には全長120mの白鳥古墳をはじめ、阿多田古墳や神花山古墳など、県内でも有数の前方後円墳が築かれることから、交通や交易の要衝であったこの地を押さえることが、権力者にとっていかに重要であったかがわかる。

町内では、4世紀前半の築造で、県内最古の方墳とされる国森古墳（60）があり、鉄製武器や工具を中心とする副葬品が出土し、昭和63（1988）年に県指定有形文化財に指定されている。続く5世紀中頃に築造された木ノ井山古墳（52）は、県内では珍しい粘土椀を埋葬主体とし、円筒埴輪をもっている。このタイプの埋葬主体は、近畿地域を中心に分布するため、ヤマト政権と近い勢力との関わりがうかがえる。6世紀中頃に築造された納蔵原古墳（95）は、小型の前方後円墳で円筒埴輪をもち、埋葬主体に横穴式石室を採用しており、周防国造に系譜をもつ被葬者が想定される。

これ以降、町内の古墳は小型化していく。田布施川中流域左岸の後井古墳群（67）は3基の円墳からなり、そのうち1号墳は、県内最大で中国地方でも有数の規模をもつ横穴式石室を埋葬主体とし、6世紀後半に比定される。その被葬者は、納蔵原古墳に続く、周防国造の系譜を引く豪族と考えられる。その付近で、近年新たに確認された下小田古墳（108）は、6世紀末～7世紀初頭に築造された横穴式石室をもつ円墳で、刀装具・馬具・玉類・須恵器等の豊富な副葬品が出土し、なかでも刀装具は銀象嵌が施された県内初の出土品である。その被葬者として、後井古墳群に次ぐクラスの地域豪族が考えられる。

その他、田布施川中～下流域では、左岸に稲荷山古墳、深田古墳（73）、御蔵戸古墳群（75）があり、河川から少し離れた丘陵上でも宮田古墳群（112）、京城古墳群（113）、友兼古墳群等の群集墳が営まれる。その対岸には相ヶ迫古墳があり、少し離れた河口付近右岸には高塔古墳群、上八海古墳群、下八海古墳群等が営まれるが、これ以降、古墳築造は衰退する。

古代の熊毛地域も、光市石城山神籠石が築かれるなど、重要拠点であったことがみとれる。天智2（663）年の白村江の敗戦以後、畿内政権が唐軍の侵攻に備えて西日本の防衛強化を図るなかで、

構築された軍事施設の一つと考えられる。

律令体制下で周防国が成立すると、田布施町域は熊毛郡に属した。平安時代前期頃に編纂された『和名類聚抄』によると、熊毛郡には7つの郷が置かれ、下田布施地域は「多仁郷」に属したとされる。

町内の奈良・平安時代の遺跡として、町内南西部の千坊山付近に所在する東千坊山鹿寺跡がある。調査では、軒平瓦や軒丸瓦が多数出土し、奈良時代もしくは平安時代の寺が建立されたと想定される。

律令時代になると、公印制度が始まり、官衙等の公的施設や有力者による公印、私印の使用が地方にも広がった。尾尻遺跡(65)では、「三川私印」の印文がある銅製の私印が出土し、県内初の例となった。同遺跡では、緑釉陶器や青磁・白磁等の高級品が出土し、主柱穴やカマド等をもたない堅穴建物等、一般集落とは異なる特殊な性格をもつため、官衙関連遺跡と推定されている。

中世の田布施町は、多仁荘、波野荘、美和荘に含まれた。鎌倉時代の水奥遺跡(98)では、平安時代末～鎌倉時代前半の一括廃棄土坑が確認され、青磁や刀子等のほか、200点を超える膨大な量の土師器の皿や杯等が出土しており、宴会や特別な儀式が行われた可能性がある。見用遺跡(31)でも、同時期の掘立柱建物15棟が検出され、鎌倉時代初頭の井戸からは230個以上の土師器皿や杯、碗、青磁・白磁の破片等が出土した。

室町時代の田布施町は大内氏の勢力下に置かれ、平野部には「波野殿」と呼ばれた大内弘直の居館跡とされる波野市遺跡(82)があり、土塁が確認されている。助本遺跡(7)では、14世紀後半に比定される土坑から、炭化材や炭化物とともに人骨、数珠が出土し、火葬遺構と考えられる。その形態も楕円形の長軸に煙道を作る特殊な形態をもち、東国や畿内の遺跡に比較的多くみられ、外來の葬送習俗にもとづく可能性がある。

大内氏滅亡後、毛利氏の支配下となる。天正14(1586)年には、毛利輝元が下田布施瀬戸の東漸寺に対して、田布施八幡宮(八尋石八幡宮)の神領田九反半、分米六石の知行を安堵している。

近世の田布施町は、慶安3(1650)年、上関宰判の管轄下に置かれ、享保5(1720)年の村分け以後、上田布施村と下田布施村とに分かれた。近世の田布施地域の中心は下田布施村であったようで、全域に民家が散在していた。それらの屋根はほとんど茅葺きであったが、瓦屋根もみられたという。下田布施村は、田地の面積が麻郷村に次いで広く、天保期の米の生産高は麻郷村に次いで高かったという。

萩藩は、家臣団の支配方法として、地方知行を中心に行っており、元文3(1738)年時点において当地域は佐世氏、柳沢氏、桂氏の給領地となっていた。

当時、藩によって奨励されていた政策として、防長三白と称される米・紙・塩の生産があったが、ハゼの木から採れる蠟生産も盛んであり、防長四白ともいわれた。沿岸部では、温暖な気候を活かして製塩業が盛んとなり、麻郷塩田源治郎浜跡をはじめ、その後も次々と塩田が開発された。『防長風土注進案』の記載には、村中が山村で谷間が深く、「難所の田畠が多い」ため、平地が少なく農業に苦心しており、田畑の畔にも雑穀を植え、本業の合間に蓑・小縄・編笠等の生産に精を出すなど、様々な工夫をして生計を維持していたようである。

明治22(1889)年の町村制施行により、下平野遺跡のある下田布施地区は、波野・大波野・上田布施の3村と合併して田布施村になった。その後、大正10(1921)年の町制施行を経て、昭和30(1955)年に城南村・麻郷村・麻里府村と合併し、現在の田布施町が誕生した。

引用・参考文献

- 荒時周平 2021 「田布施町内の発掘調査成果の視点から」『田布施町郷土館 研究紀要』第 22 号、田布施町郷土館
- 『角川日本地名大辞典』編纂委員会ほか編 1988『角川日本地名大辞典 35 山口県』、角川書店
- 『角川日本姓氏歴史人物大辞典』編纂委員会 1991『角川日本姓氏歴史人物大辞典 35 山口県』、角川書店
- 田布施町教育委員会 1988『国森古墳』
- 田布施町教育委員会 1996『納蔵原古墳』
- 田布施町教育委員会 2016『上時貞遺跡』
- 田布施町教育委員会 2018『広報たふせ』No.979・No.981・No.983
- 田布施町教育委員会 2019『広報たふせ』No.995
- 田布施町教育委員会 2021『広報たふせ』No.1013
- 田布施町教育委員会 2022『広報たふせ』No.1025
- 田布施町史編纂委員会 1990『田布施町史』
- 光市教育委員会 2011『史跡 石城山神籠石保存管理計画策定報告書』
- 山口県教育委員会 1993『石走山遺跡』
- 山口県教育委員会 1994『木ノ井山古墳』
- 山口県教育財団・山口県教育委員会 1993『明地遺跡』
- 山口県教育財団・山口県教育委員会 1994『明地遺跡Ⅱ』
- (財)山口県ひとつづくり財団山口県埋蔵文化財センター 2006『石走山遺跡Ⅱ』
- (公財)山口県ひとつづくり財団山口県埋蔵文化財センター 2013『開明遺跡 尾尻遺跡』
- (公財)山口県ひとつづくり財団山口県埋蔵文化財センター 2014『堀川遺跡 平井遺跡 三反地遺跡 水奥遺跡 西河内遺跡 中屋B遺跡』
- (公財)山口県ひとつづくり財団山口県埋蔵文化財センターほか 2020『見用遺跡』
- (公財)山口県ひとつづくり財団山口県埋蔵文化財センターほか 2020『森国遺跡 下小田遺跡』
- (公財)山口県ひとつづくり財団山口県埋蔵文化財センター 2021『助本遺跡 森永遺跡』
- (公財)山口県ひとつづくり財団山口県埋蔵文化財センター 2022『馬場遺跡』
- (公財)山口県ひとつづくり財団山口県埋蔵文化財センター 2023『辻花遺跡』
- 山口県文書館 1962『防長風土注進案』第五巻 上関宰判 上

Ⅲ 調査の成果

1 1区の成果

(1) 概要 (第4・5図、図版4・5)

下平野遺跡は、北側を流れる才賀川に向けて張り出した丘陵から続く台地上に位置する。1区の調査範囲は南北に長く、その中央付近から北側にかけてほぼ平坦面をなし、東側でわずかに落ち込む。南側はやや窪んで湿地堆積となり、南壁付近に向かって、次第に高くなる。標高は、平坦面が12.50m、東側落ち込みと南側の窪地が12.25m、南壁付近の傾斜面で12.50～13.00mを測る。

遺構は、調査区の北半分に集中し、南半分ではほとんど確認できなかった。南半分の窪地部分は当時も利用されておらず、その他の部分は後世の削平のため、遺構密度が低いと推定する。遺構の種類は、調査区の北寄りを北東-南西方向に横断する流路をはじめ、その埋土上面や周辺に柱穴約1,400個、土坑約270基、木炭焼成坑1基、溝13条を確認した。柱穴からは、掘立柱建物7棟と柱列15条を復元できた。柱穴の中には、根石や柱材を残すものがあるほか、柱穴や土坑には、木炭や焼土を含むものが多いことから、火災を被ったものと考えられる。

出土遺物は、土師器、須恵器、瓦質土器、陶器(常滑焼)、青磁、白磁、鉄器(鉄釘)、銅銭、土製品(羽口)、鉈滓等の中世の遺物が中心で、弥生土器や石器(トトロ石器、石鏃、剥片)等も少数出土した。

(2) 基本層序 (第6図、図版6)

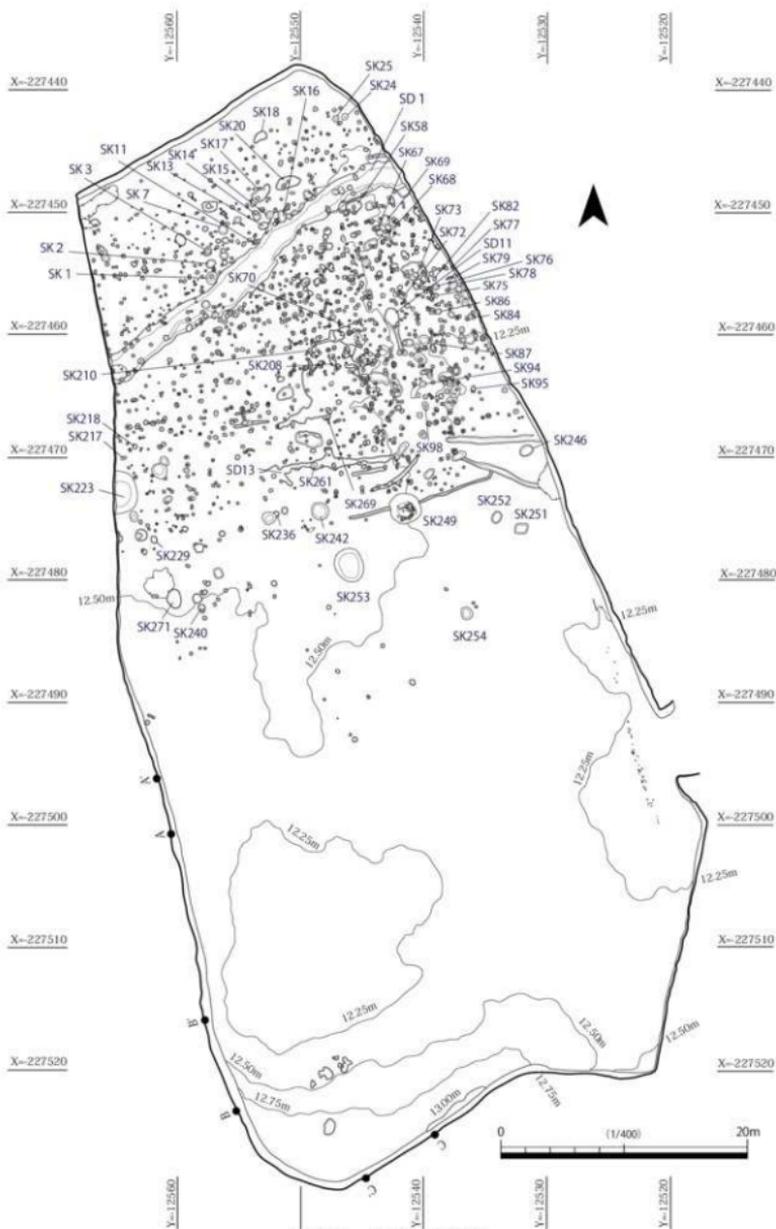
1区の土層は、西壁の中央付近(A-A')と南寄り(B-B')、南壁(C-C')の3箇所を観察を行った。

西壁中央付近(A-A')は、1層が表土、2層が耕作土、3層が盤土、4層が旧耕土であり、その下層は一部に遺構埋土(5層)、北半に灰色粘質土の堆積土である6層がみられる。7～9層は地山で、7層が浅黄色粘土であり、8層が灰色、9層が黄褐色のいずれも礫混じりの砂質土である。

西壁南寄り(B-B')は、1層が表土、2層が耕作土、3・4層と6～8層が旧耕土、5層は客土である。9層は黄灰色の小礫混じり砂質土からなる地山で、湿地堆積土と考える。

南壁(C-C')は、1層が表土、2層が耕作土、3・4層が旧耕土、5層が客土、6層が旧耕土または客土である。7層は明黄褐色粘土からなる地山で、マンガン粒を含む。

以上から、1区の基本層序をまとめると、Ⅰ：表土、Ⅱ：耕作土及び盤土、Ⅲ：旧耕土、Ⅳ：地山となる。旧耕土は、調査区南寄りで厚く、2～5層に分層でき、過去に数回程度の耕作があったと考える。地山は、南壁付近で明黄褐色粘土、中央付近から南寄りにかけての窪地周辺では、灰色～黄褐色の礫混じり砂質土を主体とする。



第4図 1区遺構配置図



第5図 1区北半遺構配置図

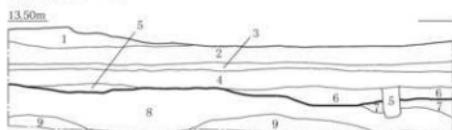
(3) 遺構と遺物

①掘立柱建物

SB 1 (第7・9図、図版7・8・11)

1区北半の西寄り、SD 1のすぐ南側に位置する、桁行3間、梁行2間の建物で、主軸方向はN 83°

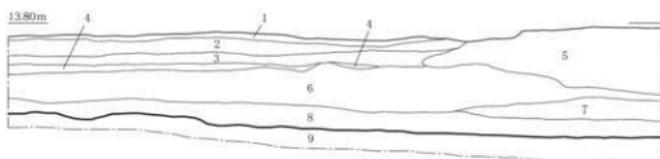
1区西壁(A-A')



土層凡例

- 1 表土 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質土 植物根痕跡あり
- 2 耕作土 にぶい黄褐色 (10YR7/2) 粘質土 植物根を含む
- 3 盤土 浅灰色 (2.5Y7/4) 粘質土
- 4 旧耕土 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質土
- 5 遺構埋土 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土 炭片を含む
- 6 塚積土 灰色 (5B/) 粘質土 浅灰色 (2.5Y8/4) 粘土ブロックを含む
- 7 地山1 浅灰色 (2.5Y8/4) 粘土
- 8 地山2 灰色 (5Y6/1) 砂質土 礫が混じる
- 9 地山3 黄褐色 (10YR7/8) 砂質土 礫が混じる

1区西壁(B-B')



土層凡例

- 1 表土 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質土 植物根を多く含む
- 2 耕作土 にぶい黄褐色 (10YR7/2) 粘質土 植物根を含む
- 3 旧耕土 青灰色 (5B6/1) 粘質土 植物根痕跡あり
- 4 旧耕土 灰黄褐色 (10YR6/2) 弱粘質土
- 5 客土 (埋土) 明黄褐色 (10YR7/6) 粘質土と2層土、3層土、表土:暗赤褐色 (5YR3/2) 弱粘質土
- 6 旧耕土 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘質土 植物根痕跡あり
- 7 旧耕土 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘質土 植物根痕跡あり
- 8 旧耕土 灰色 (5Y5/1) 粘質土 植物根痕跡あり
- 9 地山3 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂質土 小礫を若干含む、埋土塚積土あり

1区南壁(C-C')



土層凡例

- 1 表土 暗赤褐色 (5YR3/2) 粘質土 植物根を多く含む
- 2 耕作土 にぶい黄褐色 (10YR7/2) 粘質土 植物根を含む
- 3 旧耕土 青灰色 (5B6/1) 粘質土 植物根痕跡を含む
- 4 旧耕土 灰黄褐色 (10YR6/2) 弱粘質土
- 5 客土 褐色 (10YR4/6) 粘質土
- 6 旧耕土または客土 褐灰色 (10YR6/1) 粘質土 礫・植物根痕跡を含む。部分的に地山ブロックあり
- 7 地山 明黄褐色 (10YR7/6) 粘土 マンガン粒を含む



第6図 1区土層断面図

E、検出面での標高は12.60～12.80mである。規模は、桁行が南北両側とも5.96m、梁行が東側で3.68m、西側で3.70mを測り、床面積は約22.0㎡となる。柱間隔は、桁行の北側が西から1.96m、2.04m、1.96m、南側が西から1.96m、1.96m、2.04m、梁行が1.84～1.84～1.86mを測る。構成柱穴の直径は24～48cm、深さは24～54cmで、埋土は炭混じりの黒褐色土及び褐色土を主体とし、SP349では焼土も混じる。

遺物は、すべての構成柱穴から出土している。1～6の土師器皿のうち、1～5は復元径が6.0～7.5cmで、底部を回転ヘラ切りし、6は復元径が9.4cmで、やや深底である。7～9は、土師器杯でいずれも底部外面は回転糸切りである。10は青磁碗で、外面に鎬蓮弁文のある龍泉窯系である。11は東播系須恵器の鉢、12は和釘である。

構成柱穴SP351とSP386から出土した炭化材の樹種同定の結果は、それぞれサクラ属とツバキ属

であり、放射性炭素年代測定（AMS法）による暦年代範囲（2 σ ）は、それぞれ1299-1372calAD（72.80%）と1301-1370calAD（73.77%）の結果が得られた。

出土遺物や年代測定結果から、遺構の時期は14世紀前半頃～後半と考える。

SB 2（第7図）

1区北半の東寄り、SD 1のすぐ北側に位置する。南東端の柱穴はSD 1の埋土に掘り込まれており、検出できなかった。桁行2間、梁行3間の両廂の建物で、主軸方向はN 10°W、検出面での標高は12.50～12.60 mである。規模は、桁行が5.32 m、梁行が4.20 mを測り、床面積は22.3㎡となる。柱間間隔は、桁行の西側が北から0.90 m、2.60 m、1.80 mを測り、北廂に比べて南廂の方が長い。構成柱穴の直径は22～42 cmで北廂及び身舎の北面で小さく、深さは22～50 cm（SP1212は推定で60 cm）である。埋土は炭混じりの黒褐色土を主体とし、SP233は褐色で焼土・炭が混じる。

遺物は、構成柱穴から土師器小片が出土しているが、図化できるものはなかった。

遺構の時期は、構成柱穴SP1213はSK20埋土を掘り込み、SP199はSP120を壊しており、13世紀後半～14世紀前半と考える。

SB 3（第8・9・24・25図、図版11・23・24）

1区北半の東寄り、SD 1の南側に位置する、桁行3間、梁行1間または2間の建物と推定するが、桁行北東隅から南に向かって2番目の構成柱穴を確認できず、梁行南側中央の構成柱穴は、柱筋から外側に外れていた。建物の主軸方向はN 9°W、検出面での標高は12.52～12.60 mである。規模は、桁行が東側で6.76 m、西側で6.64 m、梁行が3.96 mを測り、床面積は26.5㎡となる。柱間間隔は、桁行の西側が北から2.40 m、2.08 m、2.16 mを測り、梁行の北側が西から2.28 m、1.66 m、南側が西から1.72 m、2.20 mで、中央の柱穴がそれぞれ東側と西側に寄っていた。構成柱穴の直径は20～44 cm、深さは20～52 cmで、埋土は炭混じりの黒褐色土と褐色土を主体とし、SP489は焼土が混じるが、SP785は地山ブロックの混じる黄褐色土を主体とする。

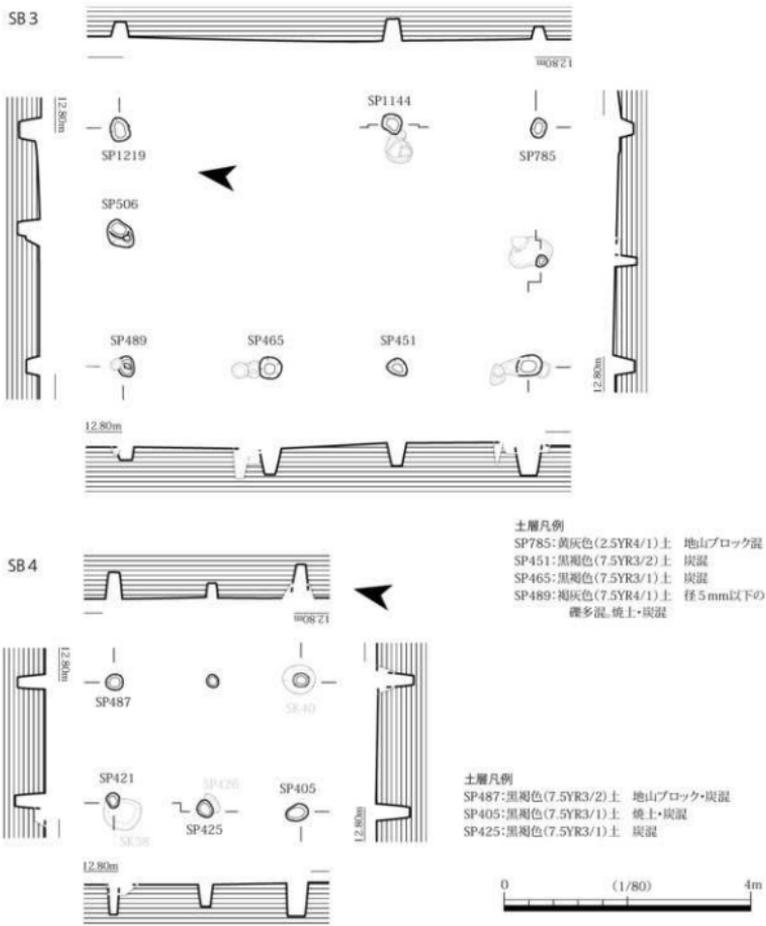
また、SP144出土炭化材の樹種同定結果は、広葉樹のコナラ属アカガシ亜属で、堅硬な薪炭材として普通に利用される樹種であった。

遺物は、13～20がSP465、170・171がSP451、185・186がSP489（旧）からそれぞれ出土した土師器皿である。13～18は口径が5.5～7.0 cm、19・20は口径が8.0 cmと8.5 cmで、大きく2種類あり、前者の口縁は直立気味、後者は外傾する。170・171は口径が8.4 cmと8.8 cmで、口縁が内湾気味に開く。185・186は口径が大小あるが、いずれも口縁の立ち上がりがわずかである。いずれも底部は回転ヘラ切りである。

出土遺物から、遺構の時期は13世紀後半～14世紀中頃と考える。

SB 4（第8・9図、図版11）

1区北半の中央付近、SD 1の南側に位置する、桁行2間、梁行1間の建物で、主軸方向はN 13°W、検出面での標高は12.60 mである。規模は、桁行が3.04 m、梁行が北側で2.00 m、南側で2.08 mを測り、床面積は6.20㎡となる。柱間間隔は、桁行の東側が北から1.60 m、1.44 mで、西側が北から1.48 m、1.56 mを測る。構成柱穴の直径は20～30 cm、深さは26～54 cmで、埋土は炭混じりの黒褐色土を主体とし、SP387で地山ブロック、SP405で焼土が混じる。



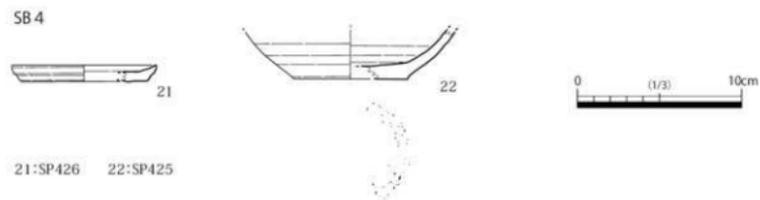
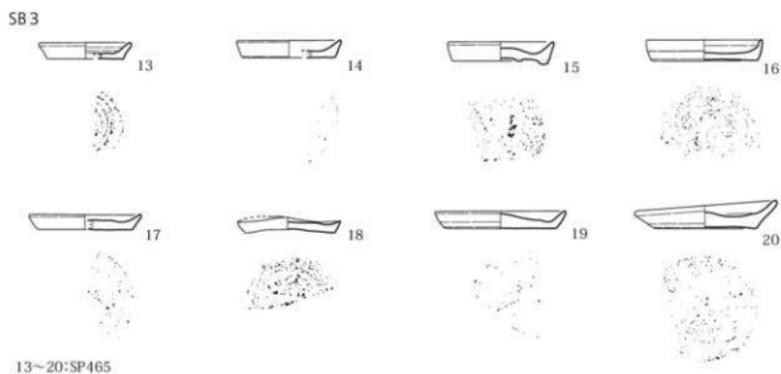
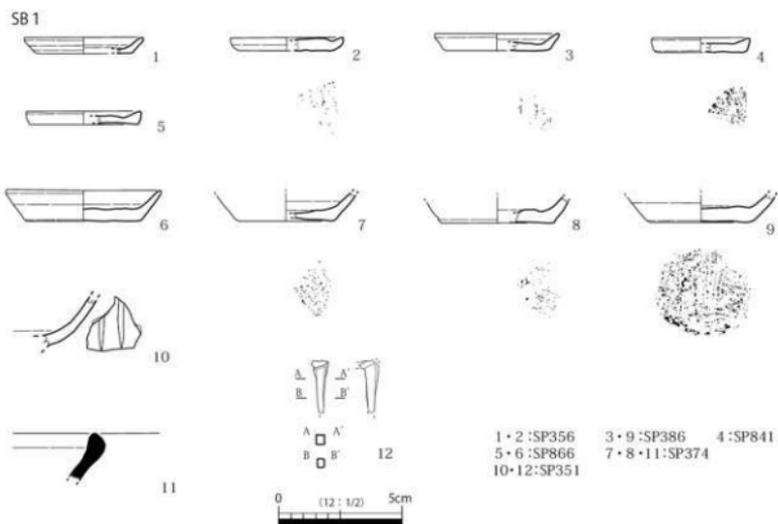
第8図 1区SB 3・4実測図

遺物は 21 が土師器皿、22 が土師器杯で、22 は体部が内湾気味に開くものである。底部はいずれも回転ヘラ切りである。構成柱穴 SP405 から出土した炭化材の放射性炭素年代測定（AMS 法）による暦年代範囲（2 σ ）は、1175-1267calAD（95.4%）結果が得られた。

出土遺物や年代測定結果から、遺構の時期は 13 世代と考える。

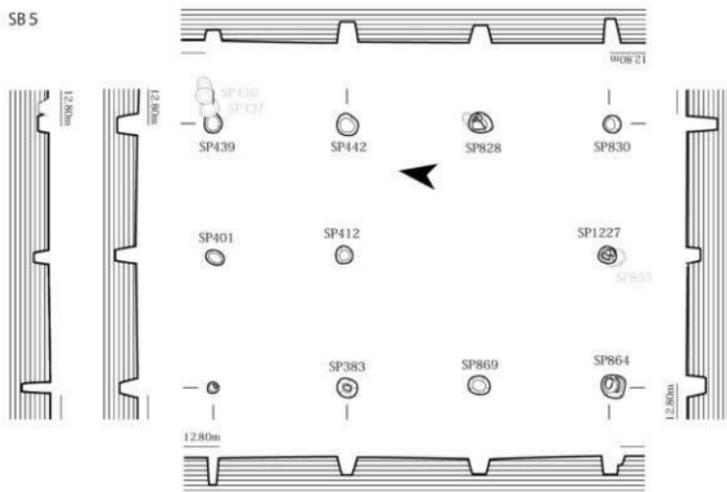
SB 5（第 10・11・24・27 図、図版 11・12・22・27）

1 区北半の西寄り、SD 1 の南側に位置する、桁行 3 間、梁行 2 間（三間一面）の建物で、主軸方向は N 10°W で、検出面での標高は 12.62 m である。規模は、桁行が東側で 6.48 m、西側で 6.44 m、



第9図 1区SB 1・3・4出土遺物実測図

SB 5



土層凡例

SP439: 灰褐色(7.5YR4/2)土 焼土・炭混

SP442: 黒褐色(7.5YR3/1)土 炭混

SP828: 黒褐色(7.5YR3/1)土 径5cm程度の礫多混・炭混

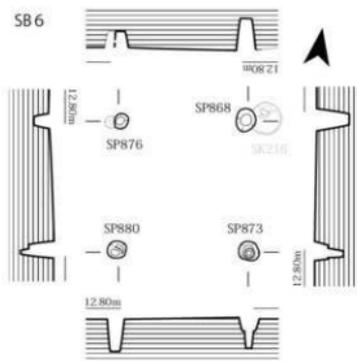
SP830: 黒褐色(7.5YR3/1)土 炭混

SP869: にぶい・黄褐色(10YR5/3)土 径5cm程度の礫多混

SP383: 暗褐色(7.5YR3/3)土 地山ブロック少混・焼土・炭混

SP401: 黒褐色(7.5YR3/1)土 炭混

SB 6



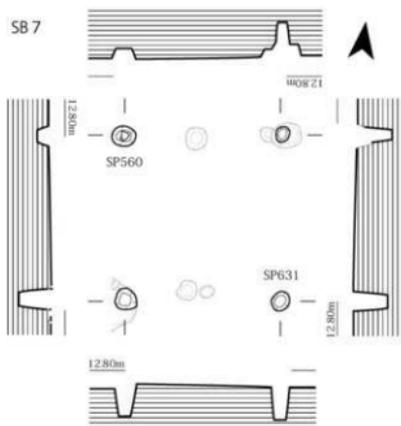
土層凡例

SP868: 灰黄褐色(10YR6/2)土 地山ブロック多混

SP880: 暗灰色(7.5YR5/1)土 褐色(7.5YR4/3)土

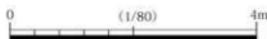
との混成・焼土・炭混

SB 7

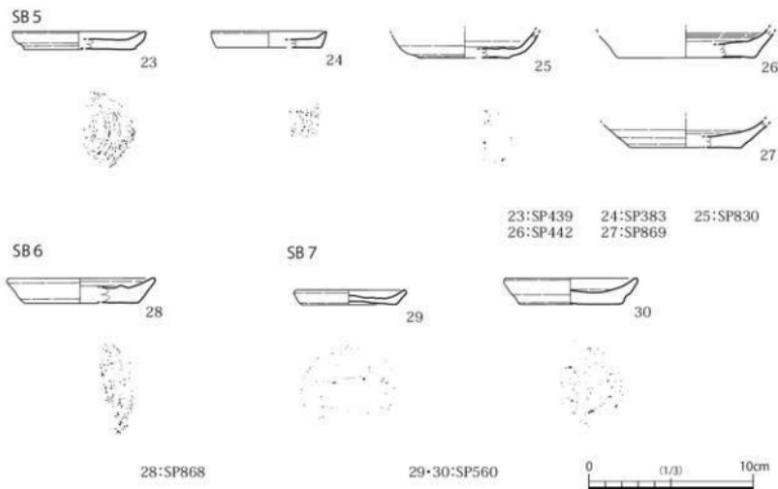


土層凡例

SP631: 黒褐色(7.5YR3/1)土 炭混



第10図 1区SB 5~7実測図



第 11 図 1 区 SB 5～7 出土遺物実測図

梁行が 4.32 m を測り、床面積は 27.90㎡となる。柱間隔は、桁行の東側が北から 2.18 m、2.18 m、2.12 m を測り、西側で北から 2.18 m、2.18 m、2.08 m を測り、梁行が南北とも西から 2.14 m、2.18 m を測る。構成柱穴の直径は 20～40cm、深さは 18～52cm である。埋土は、炭混じりの黒褐色土を主体とするものが多く、SP439 と SP383 は焼土混じりのそれぞれ灰褐色土と暗褐色土である。SP869 は直径 5cm 程度の礫が多く混じる。

遺物は、23・24・239 が土師器皿、25・26 が土師器杯で、27 は皿と推定する。25・27 の底部が回転糸切りで、他は回転ヘラ切りである。154 が不明鉄製品（和釘か）である。

構成柱穴 SP383 と SP828 から出土した炭化材の放射性炭素年代測定(AMS法)による暦年代範囲(2 δ)は、それぞれ 1264-1299calAD (95.4%) と 1225-1277calAD (95.4%) の結果が得られた。

出土遺物や年代測定結果から、遺構の時期は、13 世紀後半～14 世紀前半と考える。

SB 6 (第 10・11 図、図版 8・12)

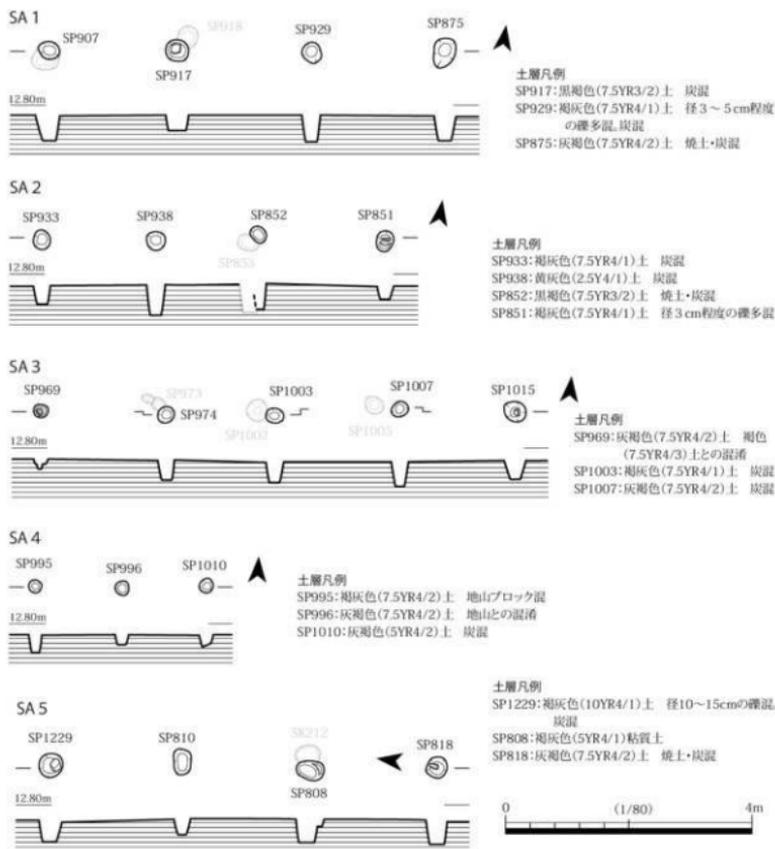
1 区北半の西寄り、SD 1 の南側に位置し、SB 1 の南側桁筋と重複する。1 間×1 間の平面形が方形の建物で、主軸方向は N 10°W、検出面での標高は 12.56～12.62 m である。規模は、1 辺が 2.16 m を測り、床面積は 4.67㎡となる。構成柱穴の直径は 22～40cm、深さは 24～54cm である。埋土は、SP868 が地山ブロックの多く混じる灰黄褐色土、SP880 が焼土・炭混じりの褐色土からなる。

遺物は、28 が SP868 出土の土師器皿で、口径が 8.9cm、厚手の底部をもち口縁が外傾する。底部は回転ヘラ切りである。

出土遺物から、遺構の時期は 13 世紀代と考える。

SB 7 (第 10・11 図、図版 12)

1 区北半の東寄り、SD 1 の南側に位置し、SB 3 と重複する。1 間×1 間の平面形が方形の建物で、



第12図 1区柱列実測図(1)

主軸方向はN 10°W、検出面での標高は12.46~12.54 mである。規模は、東西方向が2.56 m、南北方向が2.72 mで南北にやや長く、床面積は6.96㎡となる。構成柱穴の直径は24~40cm、深さは22~56cmで、埋土はSP631が炭混じりの黒褐色土である。

遺物は、29と30はSP560出土の土師器皿で、いずれも口縁が外傾し、底部が回転ヘラ切りである。前者は口径が6.6cmの薄手のつくりで、後者は復元径が8.0cmの厚手である。

出土遺物から、遺構の時期は13世紀代と考える。

②柱列

SA 1 (第 12・15・28 図、図版 8・12・27)

1 区北半の西寄り、SB 1 のすぐ南側に位置する。主軸方向は N 80° E で、SB 1 の南側桁行とはほぼ平行する。検出面での標高は 12.64 m である。4 個の柱穴から構成され、SB 5 の南側梁行とも柱筋をそろえている。西端の SP907 から東端の SP875 までの長さは 6.48 m で、柱間隔は、西から 2.08 m、2.20 m、2.20 m を測る。構成柱穴の直径は 32 ~ 38 cm、深さは 26 ~ 42 cm を測る。埋土は、いずれも炭混じりの黒褐色土や褐色土からなり、SP875 では焼土、SP929 では径 3 ~ 5 cm 程度の礫が混じる。

遺物は、31・32 が SP929 出土の土師器杯であり、いずれも薄手の平底から体部が外傾し、底部外面は回転系切りである。246 は SP875 出土の土師器皿で、体部が内湾気味に開き、底部外面は回転ヘラ切りする。

構成柱穴 SP929 から出土した炭化材の放射性炭素年代測定 (AMS 法) による暦年代範囲 (2 σ) は、1165-1261 calAD (95.4%) という結果が得られた。

出土遺物に対して、年代測定結果はやや古い年代を示すが、古木効果を加味して、遺構の時期は 14 世紀前半 ~ 中頃と考える。

SA 2 (第 12・15・27 図、図版 12・27)

1 区北半の西寄り、SB 5・6 から約 2 m 南側に位置する。主軸方向は N 80° E で、SA 1 と平行し、検出面での標高は 12.60 m である。4 個の柱穴から構成され、西端の SP933 から東端の SP851 までの長さは 5.60 m、柱間隔は西から 1.86 m、1.66 m、2.08 m を測る。構成柱穴の直径は 28 ~ 32 cm、深さは 26 ~ 54 cm を測る。埋土は、炭混じりの黒褐色土や褐色土を主体とし、SP852 では焼土が混じる。SP851 は径 3 cm 程度の礫が多く混じる。

遺物は、33 が SP852 出土の土師器皿で、復元径が 8.0 cm、口縁が内湾気味に開き、底部は回転ヘラ切りである。241 は SP851 出土の東播系須恵器の鉢で、口縁部外面が器壁に対して外傾し、丸みを帯び、暗色帯をもつ。

出土遺物から、遺構の時期は 13 世紀代と考える。

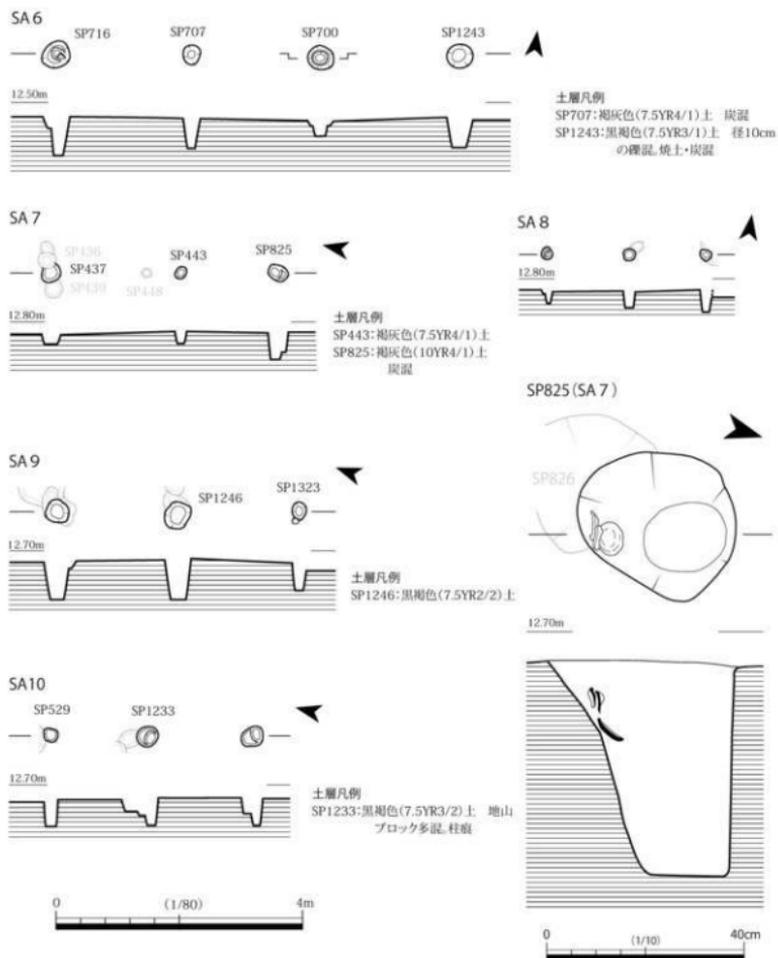
SA 3 (第 12 図)

1 区北半の西寄り、SA 2 から約 4 m 南側、SK223 のすぐ東側に位置する。主軸方向は N 83° E で、検出面での標高は 12.60 m である。5 個の柱穴から構成され、西端の SP969 から東端の SP1015 までの長さは 7.74 m、柱間隔は、西から 2.08 m、1.74 m、2.04 m、1.88 m を測る。構成柱穴の直径は 24 ~ 36 cm、深さは 18 ~ 40 cm を測る。埋土は、灰褐色土または褐色土を主体とし、SP1003 と SP1007 は炭が混じる。

遺物は、構成柱穴から土師器小片が出土しているが、図化できるものはなかった。

SA 4 (第 12 図)

1 区北半の西寄り、SA 3 から約 2 m 南側に位置する。主軸方向は N 86° E で、検出面での標高は 12.60 m である。3 個の柱穴から構成され、西端の SP995 から東端の SP1010 までの長さは 2.80 m、柱間隔は西から 1.40 m、1.40 m を測る。構成柱穴の直径はいずれも約 20 cm、深さは 18 ~ 30 cm



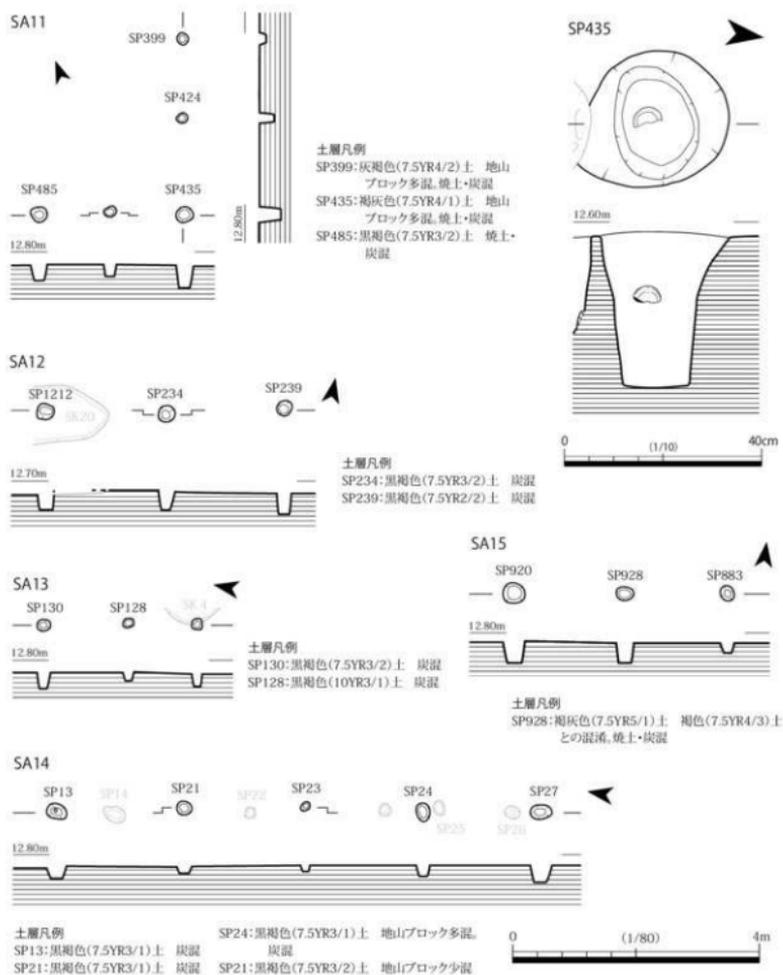
第13図 1区柱列実測図(2)

を測る。埋土は、灰褐色土または褐灰色土を主体とし、SP995とSP996は地山ブロック、SP1010は炭が混じる。

遺物は、SP995から土師器小片が出土しているが、図化できるものはなかった。

SA 5 (第12・15図、図版8・12)

1区北半の東寄りに位置し、北端の柱穴がSB 3から約3m南側にある。主軸方向はN 7°Wで、検出面での標高は12.54mである。4個の柱穴から構成され、北端のSP1229から南端のSP818



第14図 1区柱列実測図(3)

までの長さは6.28m、柱間隔は北から2.14m、2.00m、2.14mを測る。構成柱穴の直径は36～40cm、深さは28～42cmを測る。埋土は、灰褐色土や褐灰色土を主体とし、SP808は粘質で、SP818とSP1229は炭が混じる。

遺物は、34と35がSP808出土の土師器で、それぞれ杯と皿である。34の復元径は12.8cmで、やや厚手の体部が外傾する。35の復元径は6.4cmで、厚い底部から短く口縁が立ち上がる。36は

SP810 出土の土師器皿で、口径が 8.4cm、全体に厚手で、短く口縁が外傾気味に立ち上がる。いずれも底部は回転ヘラ切りである。

出土遺物から、遺構の時期は 14 世紀前半～中頃と考える。

SA 6 (第 13 図)

1 区北半の東壁付近に位置する。主軸方向は N 81° E で、検出面での標高は 12.20～12.26 m である。4 個の柱穴から構成され、西端の SP716 から東端の SP1213 までの長さは 6.54 m、柱間間隔は、西から 2.16 m、2.10 m、2.28 m を測る。構成柱穴の直径は 28～48cm、深さは 26～64cm を測る。埋土は、炭混じりの黒褐色土または褐灰色土を主体とし、SP1243 では焼土が混じる。

遺物は、構成柱穴から土師器小片が出土しているが、図化できるものはなかった。

SA 7 (第 13・15 図、図版 8・12)

1 区北半の中央付近、SB 5 のすぐ東側に位置する。主軸方向は N 15° W で、SB 3 や SB 5 の桁行とほぼ平行し、検出面での標高は 12.60 m である。3 個の柱穴から構成され、北端の SP437 から南端の SP825 までの長さは 3.66 m、柱間間隔は北から 2.12 m、1.54 m を測る。構成柱穴の直径は 20～30cm、深さは 16～44cm を測る。埋土は、褐灰色土を主体とし、SP825 は炭が混じる。

SP825 では、柱穴上方の壁面に貼りついた状態で、ほぼ完形に近い土師器皿 (37) が出土した。SP825 は SP826 を壊して掘られており、SP826 に伴う可能性もある。37 は、口径が 7.0cm、薄手で体部が内湾気味に開く。底部は回転ヘラ切りである。

出土遺物から、遺構の時期は 13 世紀～14 世紀中頃と考える。

SA 8 (第 13 図)

1 区北半の中央付近、SB 3 のすぐ南側に接するように位置する。主軸方向は N 80° E で、検出面での標高は 12.60 m である。3 個の柱穴から構成され、西端から東端までの長さは 2.58 m、柱間間隔は西から 1.32 m、1.26 m を測る。構成柱穴の直径はいずれも 20cm、深さは 24～38cm を測る。

SA 9 (第 13 図)

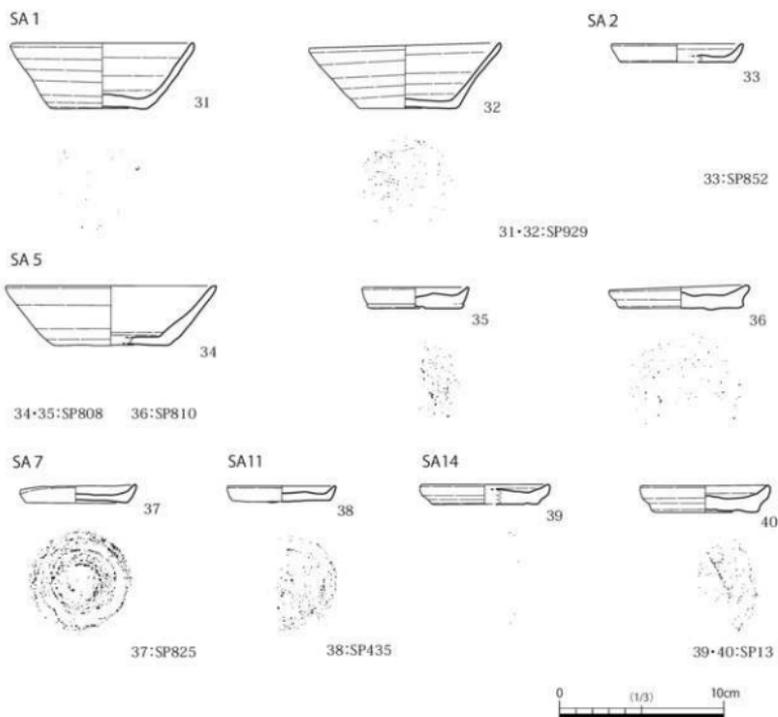
1 区北半の東寄り、SD 1 のすぐ南側に位置する。主軸方向は N 19° W で、検出面での標高は 12.36～12.50 m である。3 個の柱穴から構成され、北端から南端までの長さは 3.94 m、柱間間隔は北から 2.00 m、1.94 m を測る。構成柱穴の直径は 24～44cm、深さは 46～66cm を測る。埋土は、SP1246 で黒褐色土を主体とする。

遺物は、SP1323 から土師器鍋の小片が出土したが、図化できなかった。

SA10 (第 13 図)

1 区北半の東壁付近、SD 1 のすぐ南側に位置する。主軸方向は N 15° W で、検出面での標高は 12.42 m である。3 個の柱穴から構成され、北端から南端までの長さは 3.38 m、柱間間隔は北から 1.64 m、1.74 m を測る。構成柱穴の直径は 24～36cm、深さはいずれも 44cm を測る。埋土は、SP1233 で地山ブロックが多く混じる黒褐色土を主体とし、柱痕を残す。

遺物は、SP1233 から土師器や土製品の小片が出土したが、図化できなかった。



第 15 図 1 区柱列出土遺物実測図

SA11(第 14・15 図、図版 8・12)

1 区北半の中央付近、SD 1 のすぐ南側に位置し、SB 4 と重複する。逆 L 字状に柱穴が配されており、南北列と東西列での主軸方向は、それぞれ N 15° E と N 75° W で、直角に曲がる。検出面での標高は 12.58 m である。5 個の柱穴から構成され、SP399 から SP435 までの長さが 2.90 m、SP435 から SP485 までの長さが 2.36 m で、柱間隔は SP399 から時計回りに 1.30 m、1.60 m、1.18 m、1.18 m を測る。構成柱穴の直径は 16 ~ 28cm、深さは 16 ~ 40cm を測る。埋土は、焼土や炭混じりの黒褐色土や灰褐色土を主体とし、SP399 と SP435 では地山ブロックが多く混じる。

遺物は、SP435 の埋土中位から土師器皿 (38) が出土した。38 は口径が 6.6cm で、口縁が緩やかに外傾する。底部は回転ヘラ切りである。

構成柱穴 SP435 は、SP434 によって壊されるため、SP434 に先行するが、SA11 と SB 4 との先後関係は不明である。SA11 は、掘立柱建物を構成する可能性がある。

SA12 (第 14・22 図、図版 20)

1 区北半の東寄り、SD 1 のすぐ北側に位置し、SB 2 と重複する。SP1212 は SK20 埋土上から掘

り込まれる。主軸方向はN 75° Eで、検出面での標高は12.46～12.50 mである。3個の柱穴から構成され、SP1212からSP239までの長さが3.88 mで、柱間隔はSP1212から1.96 m、1.92 mを測る。構成柱穴の直径はいずれも28cm、深さは32～36cmを測る。埋土は、炭混じりの黒褐色土を主体とする。

遺物は、109がSP239出土の青磁椀である。高台は削り出しで、高台内側は露胎する。見込みには劃花文がみられる。龍泉窯系か。

出土遺物から、遺構の時期は13世紀代と考える。

SA13 (第14図)

1区北半の西寄り、SD 1の北側に位置する。主軸方向はN 15° Wで、検出面での標高は12.60 mである。3個の柱穴から構成され、北端から南端までの長さは2.48 m、柱間隔は北から1.40 m、1.08 mを測る。構成柱穴の直径はいずれも約20cm、深さは16～30cmを測る。埋土は炭混じりの黒褐色土を主体とする。

遺物は、土師器小片が出土したが、図化できなかった。

SA14 (第14・15図、図版12)

1区北半の西壁に接し、SD 1のすぐ北側に位置する。主軸方向はN 11° Wで、検出面での標高は12.58～12.62 mである。5個の柱穴から構成され、SP13からSP27までの長さが7.88 mで、柱間隔は北から2.08 m、1.98 m、1.92 m、1.90 mを測る。構成柱穴の直径は16～34cm、深さは14～30cmを測る。埋土は、炭混じりの黒褐色土を主体とし、SP24で地山ブロックが多く混じる。

遺物は、39・40がSP13出土の土師器皿である。いずれも復元径が7.8cm、全体に厚手で体部が内湾気味に開く。底部は回転系切りである。

出土遺物から、遺構の時期は14世紀前半～中頃と考える。

SA15 (第14図)

1区北半の西寄り、SA 1のすぐ南側に位置する。主軸方向はN 80° Eで、検出面での標高は12.62 mである。3個の柱穴から構成され、SP920からSP883までの長さは3.48 m、柱間隔は西から1.80 m、1.68 mを測る。構成柱穴の直径は24～36cm、深さは20～36cmを測る。埋土は、SP928で焼土・炭混じりの褐灰色土を主体とする。

遺物は、土師器小片が出土したが、図化できなかった。

③その他の柱穴

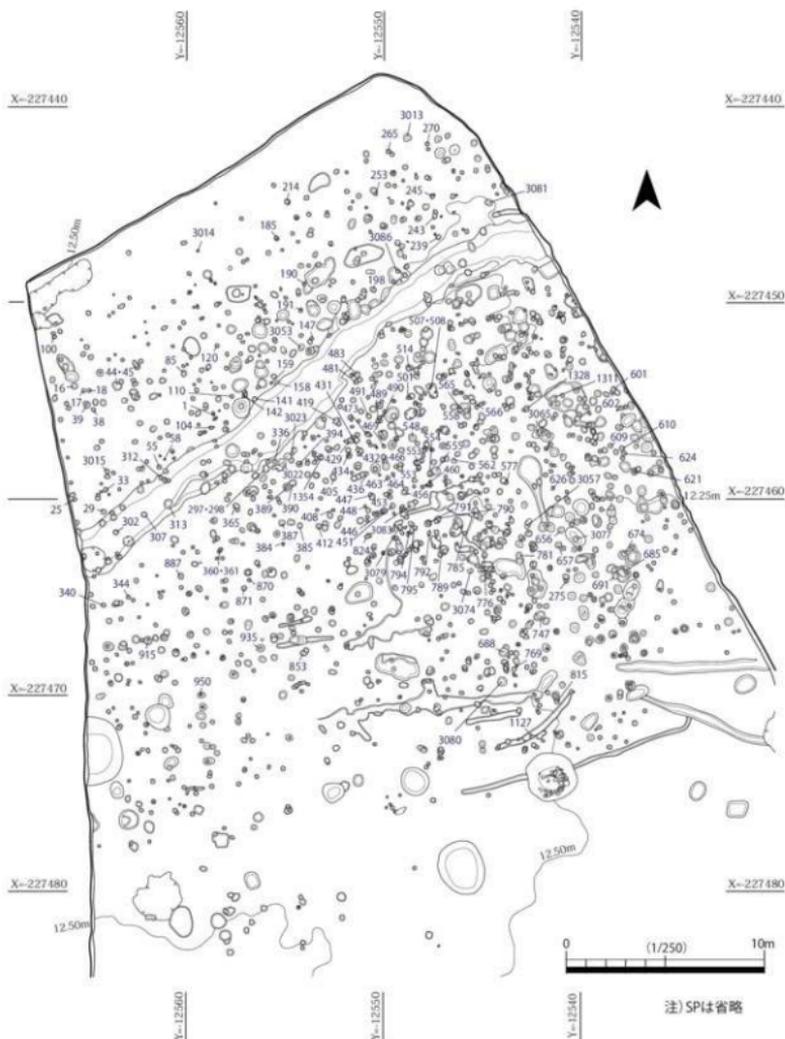
SP100 (第17・19図、図版8・13)

1区の北西隅付近に位置する。検出面での標高は12.59 mである。規模は、直径が最大で0.24 m、深さが0.08 mを測る。埋土は黒褐色土を主体とする。

41は、埋土上面から出土した青磁椀である。厚手で断面四角形の高台内と畳付は露胎である。外面に籩蓮弁文を入れる。龍泉窯系である。13世紀代に比定する。

SP110 (第17・19図、図版9・13)

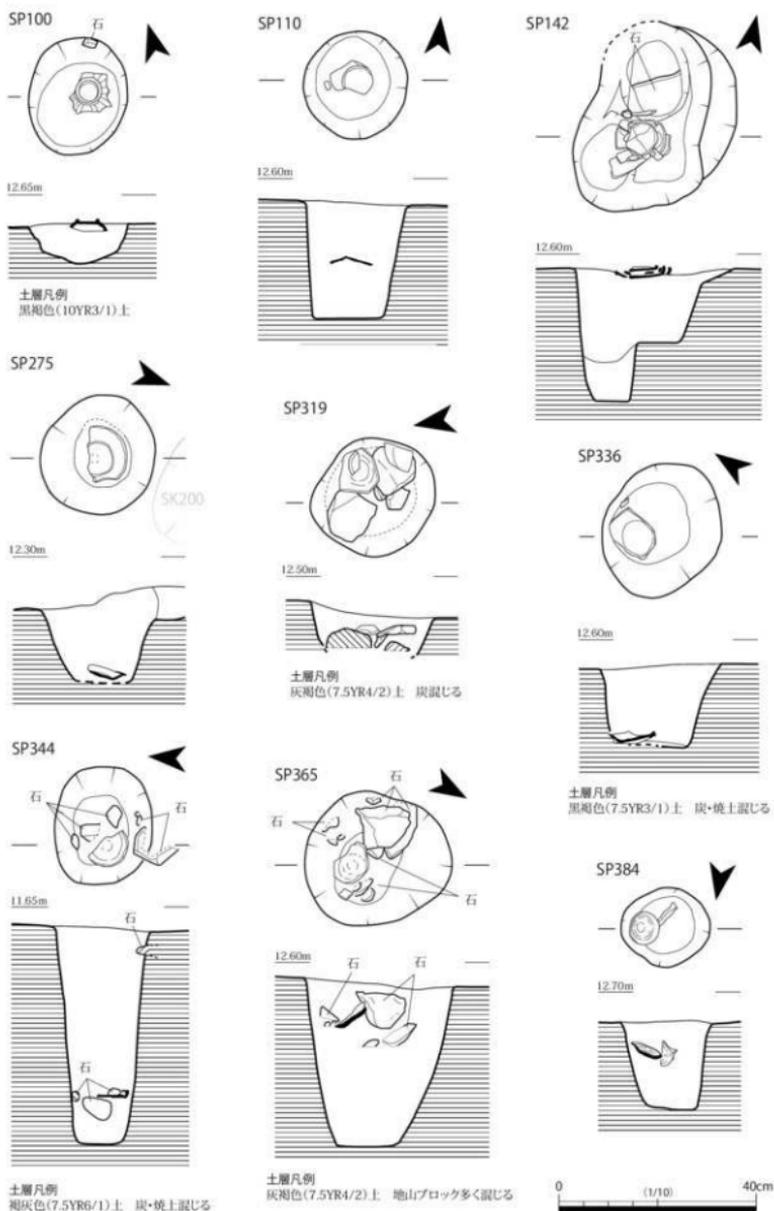
1区北半の東寄り、SK 1のすぐ北西側に位置する。検出面での標高は12.55～12.56 mである。



第16図 1区柱穴配置図

規模は、直径が最大で0.22 m、深さが0.24 mを測る。

42と43は、埋土中層から出土した土師器の杯である。42は口径が11.7cm、底部がやや高く、体部が外傾する。43は復元径が14.5cm、底部から体部に緩やかに湾曲し、体部は外反する。いずれも底部は回転糸切りである。14世紀前半～中頃に比定する。



第17図 1区柱穴実測図(1)

SP142 (第17・19図、図版9・13)

1区北半の東寄り、SK1の北側に接する。検出面での標高は12.57mである。3個の柱穴が重複するうち、南西側の最も深い柱穴がSP142であり、深さが0.27mを測る。

44は、埋土上面から出土した土師器の杯である。復元径は11.0cmで、体部が内湾気味に開く。底部は回転系切りである。13世紀代に比定する。

SP275 (第17・19図、図版9・13)

1区北半の南東寄り、東壁から約7m南側に位置する。検出面での標高は12.19～12.24mである。規模は、直径が最大で0.24m、深さが約0.20mを測る。

45は、底面付近から出土した白磁の皿である。底部は上げ底で、体部がやや外反する。外面底部は露胎で回転ヘラケズリ、口縁部は口禿である。46は土師器の杯で、底部は回転ヘラ切りである。13世紀中頃～14世紀初に比定する。

SP319 (第17・19図、図版9・13)

1区北半に位置する。検出面での標高は12.42～12.45mである。規模は、直径が最大で0.25m、深さは0.10m以上である。埋土は炭混じりの灰褐色土である。柱穴内に5～10cm大の角礫が詰められていた。

47・48は、いずれも礫の上面から出土した土師器の皿と杯である。47の口径は6.9cmで、体部が短く外傾する。底部は回転ヘラ切りである。48は体部が内湾気味に立ち上がり、底部は回転系切りである。13世紀～14世紀中頃に比定する。

SP336 (第17・19図、図版9・13・14)

1区北半の西寄り、SD1のすぐ南側に接する。検出面での標高は12.54～12.55mである。規模は、直径が最大で0.29m、深さは0.17mを測る。埋土は、焼土・炭混じりの黒褐色土である。

49は底面付近、50は埋土中から出土したいずれも土師器の杯である。49の復元径は11.8cm、体部が緩やかに外傾する。50の復元径は12.8cm、体部は内湾気味に開く。いずれも底部は回転系切りである。14世紀前半～中頃に比定する。

SP344 (第17・19図、図版9・14)

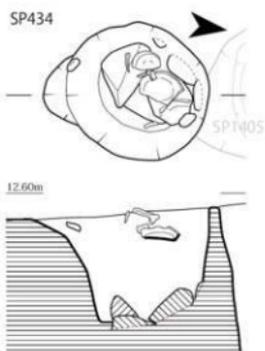
1区北半の西壁付近、SD1から約1.5m南側に位置する。検出面での標高は11.60～12.61mである。規模は、直径が最大で0.24m、深さは0.45mを測る。埋土は、焼土・炭が多く混じる褐色土である。底面からやや浮いた位置に5cm大の礫が数個埋まっていた。

51は礫と混じて出土した土師器の皿である。復元径は7.8cm、底部中央が盛り上がり、体部が外傾する。底部は回転ヘラ切りである。14世紀前半～中頃に比定する。

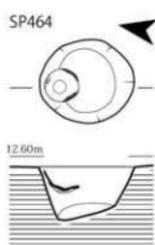
SP365 (第17・19図、図版9・14)

1区北半の西寄り、SD1のすぐ南側に位置する。検出面での標高は12.55～12.57mである。規模は、直径が最大で0.30m、深さは0.34mを測る。埋土は地山ブロックが多く混じる灰褐色土である。上層から5～10cm大の角礫が多く出土した。

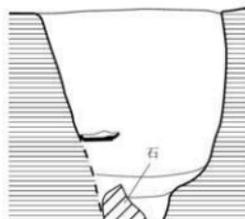
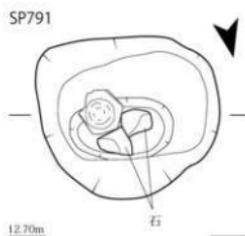
52は礫に混じて出土した土師器の杯である。復元径は12.2cm、体部は緩やかに外傾し、底部は回転系切りである。53は埋土中から出土した青白磁の合子である。天井部に菊花文、天井部～側面



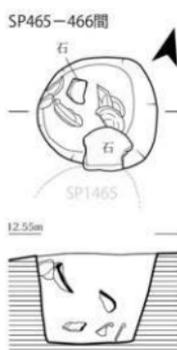
土層凡例
黒褐色(7.5YR3/2)土 炭・焼土混じる



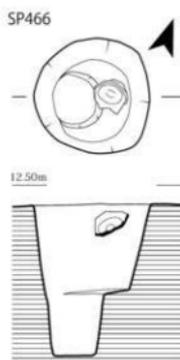
土層凡例
黒褐色(7.5YR3/2)土 炭混じる



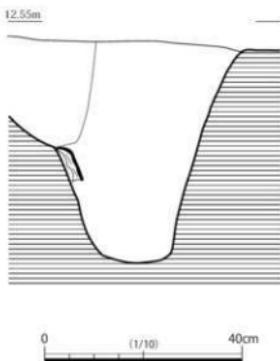
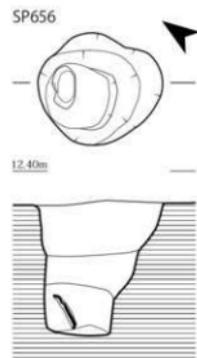
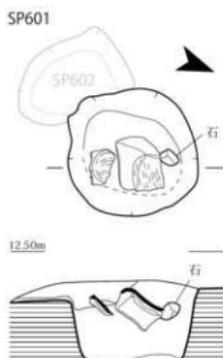
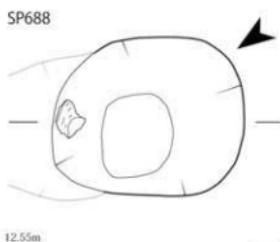
土層凡例
黒褐色(7.5YR3/1)土 炭混じる



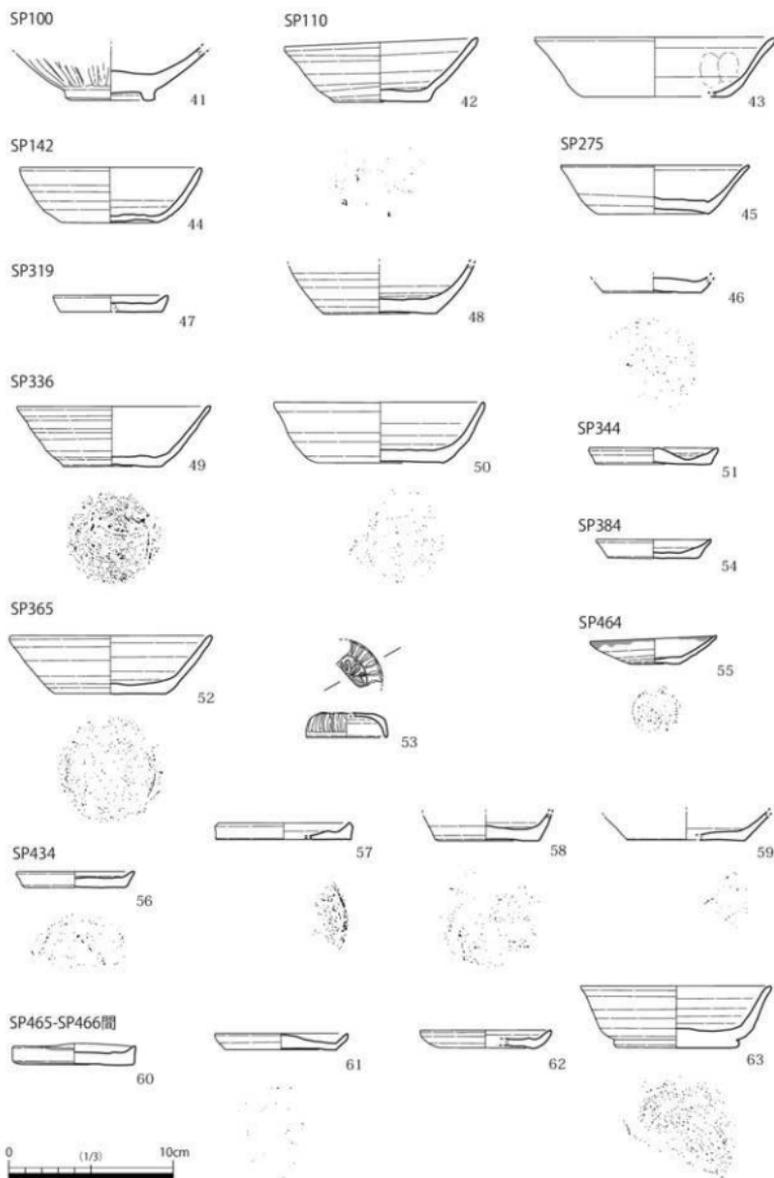
土層凡例
黒褐色(7.5YR3/1)土 炭混じる



土層凡例
黒褐色(7.5YR3/1)土 炭混じる



第18図 1区柱穴実測図(2)



第 19 图 1 区柱穴出土遺物実測図 (1)

に蓮弁文を浮き彫りする。14世紀前半～中頃に比定する。

SP384 (第17・19図、図版9・14)

1区北半の西寄り、SB1の東側梁行付近に位置する。検出面での標高は12.55～12.57mである。規模は、直径が最大で0.18m、深さは0.18mを測る。

54は埋土中層から出土した土師器の皿である。復元径は7.0cm、体部は外傾し、底部は回転ヘラ切りである。13世紀代に比定する。

SP434 (第18・19図、図版10・14)

1区北半の中央付近に位置し、SA11の構成柱穴SP435を壊す。検出面での標高は12.55～12.58mである。規模は、直径が最大で0.29m、深さは0.22mを測る。埋土は焼土・炭混じりの黒褐色土である。底面に10cm大の礫が埋まっていた。

56～59は埋土上層及び埋土中から出土した。56と57は土師器の皿で、56は復元径が7.2cmで、体部は短く外傾し、57は復元径が8.0cmで、体部が直立する。底部はいずれも回転ヘラ切りである。58と59は土師器の杯である。いずれも体部が外傾し、底部は前者が回転糸切り、後者が回転ヘラ切りである。14世紀前半～中頃に比定する。

SP464 (第18・19図、図版10・14)

1区北半の中央付近、SB3の西側桁行付近に位置する。検出面での標高は12.58mである。規模は、直径が最大で0.19m、深さは0.11mを測る。埋土は炭混じりの黒褐色土である。

55は埋土中から出土した土師器の皿である。口径が7.7cmで、底径が2.8cm、全体にかなり薄く、狭い底部から体部は外傾する。底部は回転糸切りである。色調は外面が明褐色、内面が灰白色で、口縁部に黒変する。燈明皿である。

SP465 - SP466間 (第18・19図、図版10・14・15)

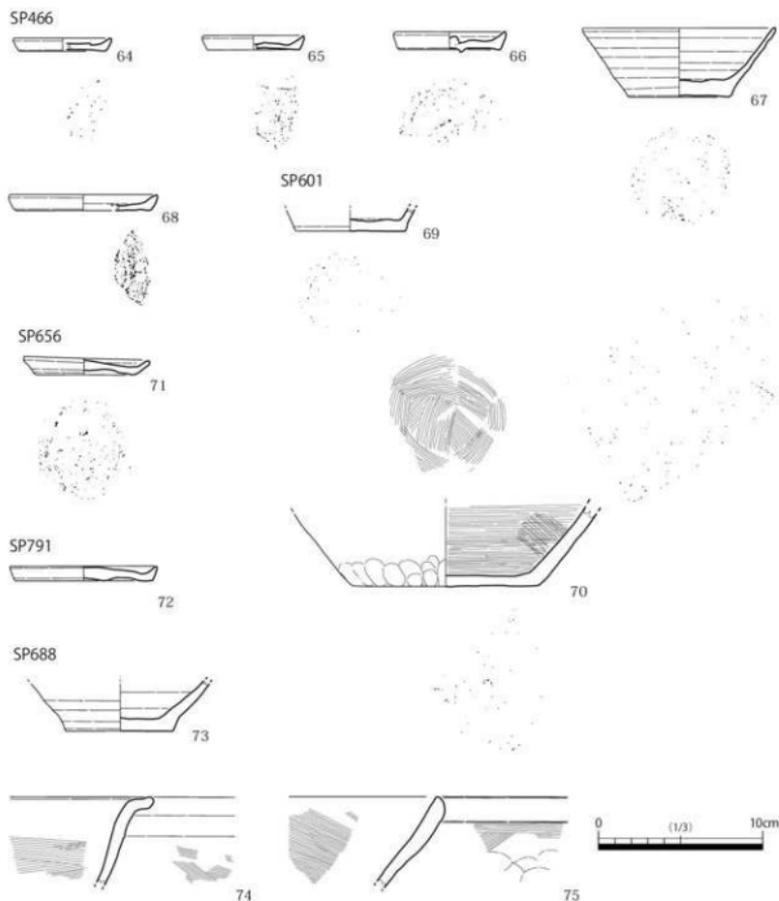
1区北半の中央付近に位置し、SB3の構成柱穴SP465に南壁を壊される。検出面での標高は12.58mである。規模は、直径が最大で0.24m、深さは0.18mを測る。埋土は炭混じりの黒褐色土である。

60～62はいずれも埋土から出土した土師器の皿である。60は口径が7.3cm、体部が直立する。61は口径が8.0cm、底部中央が盛り上がり、体部は外傾する。62は復元径が8.0cm、体部が緩やかに外傾する。いずれも底部は回転ヘラ切りである。63は底部が高く、体部が緩やかに外反する。14世紀前半～中頃に比定する。

SP466 (第18・20図、図版10・15)

1区北半の中央付近、SB3の構成柱穴SP465のすぐ北側に位置する。検出面での標高は12.46mである。規模は、直径が最大で0.24m、深さは最深で0.31mを測る。深さが0.18mの位置に直径が0.12mの柱抜き取り穴がある。埋土は炭混じりの黒褐色土である。

遺物はいずれも埋土中から出土した。64～66・68は土師器の皿である。64～66は復元径が6.0～7.0cm程度、68は復元径が11.8cmである。いずれも体部が外傾し、底部は回転ヘラ切りである。66はやや厚手で、底部中央に粘土巻き上げ時の凹凸が残る。69は土師器の杯で底部から屈曲した体部が強く外傾する。底部は回転糸切りである。14世紀代に比定する。



第20図 1区柱穴出土遺物実測図(2)

SP601 (第18・20図、図版10・15)

1区北半の東壁付近、SD1から約7m南東側に位置する。検出面での標高は12.40～12.42mである。規模は、直径が最大で0.26m、深さは0.18m以上である。

69・70はいずれも埋土上層から出土した。69は土師器の皿で、底部から屈曲した体部が外傾する。底部はヘラ切りである。70は瓦質土器の鉢で、底径が復元で11.2cm、体部外面は平行タタキ後、指オサエし、内面は体部をヨコ方向に、底部は不定方向にハケ目である。

SP656 (第18・20図、図版10・15)

1区北半の東南寄り、SK88の約1m南側に位置する。検出面での標高は12.33～12.34mである。

規模は、直径が最大で0.25 m、深さは0.28 mを測る。

71は底面付近の壁に貼り付いて出土した土師器の皿である。口径が7.7cm、底部は上底気味で内面が盛り上がる。体部は緩やかに外傾する。底部は回転ヘラ切りである。13世紀代か。

SP688 (第18・20図、図版10・15)

1区北半の南寄り、SA 5から約1 m東側に位置する。検出面での標高は12.49 mである。規模は、直径が最大で0.38 m、深さは0.45 mを測る。

73は、北壁の中位付近に貼り付いて出土した土師器の皿である。底部から屈曲した体部が開く。底部は回転系切りである。74・75はいずれも埋土中から出土した。74は土師器の鍋で、口縁部が「く」字状に折れ、内外面にハケ目をする。75は東播系須恵器の鉢で、外面の稜は緩やかである。内外面にハケ目を施す。14世紀前半～中頃に比定する。

SP791 (第18・20図、図版10・15)

1区北半の中央東寄り、SB 3内の南側に位置する。検出面での標高は12.59～12.61 mである。平面形は隅丸長方形に近く、規模は、長径が0.36 m、短径が0.33 mで、深さは0.43 m以上である。深さ0.37 mの位置に、長径が0.21 m、短径が0.13 mの平面形が楕円形の柱抜き取り穴があり、その底面付近には約5 cm大の角礫があった。埋土は炭混じりの黒褐色土である。

72は埋土中層から出土した土師器の皿である。復元径が9.0cmで、体部が短く直立する。底部は回転ヘラ切りである。13世紀代に比定する。

その他の柱穴出土遺物 (第21～31図、図版16～30)

76はSP 1出土の土師器の杯である。全体に薄手で、体部は外傾する。底部は回転系切りである。77と78はそれぞれSP16とSP17出土の土師器の皿である。復元径はそれぞれ7.8cmと8.8cmで、77は体部が内湾気味に開き、78は外傾する。底部はいずれも回転ヘラ切りである。

79と80はSP18出土の土師器の皿である。口径は7.5cm前後で、79は体部が内湾気味に開く。80は底部中央が盛り上がり、体部が開く。底部は回転ヘラ切りで、板目圧痕を残す。

81はSP25出土の土師器の杯である。体部は外傾し、底部は回転系切りである。

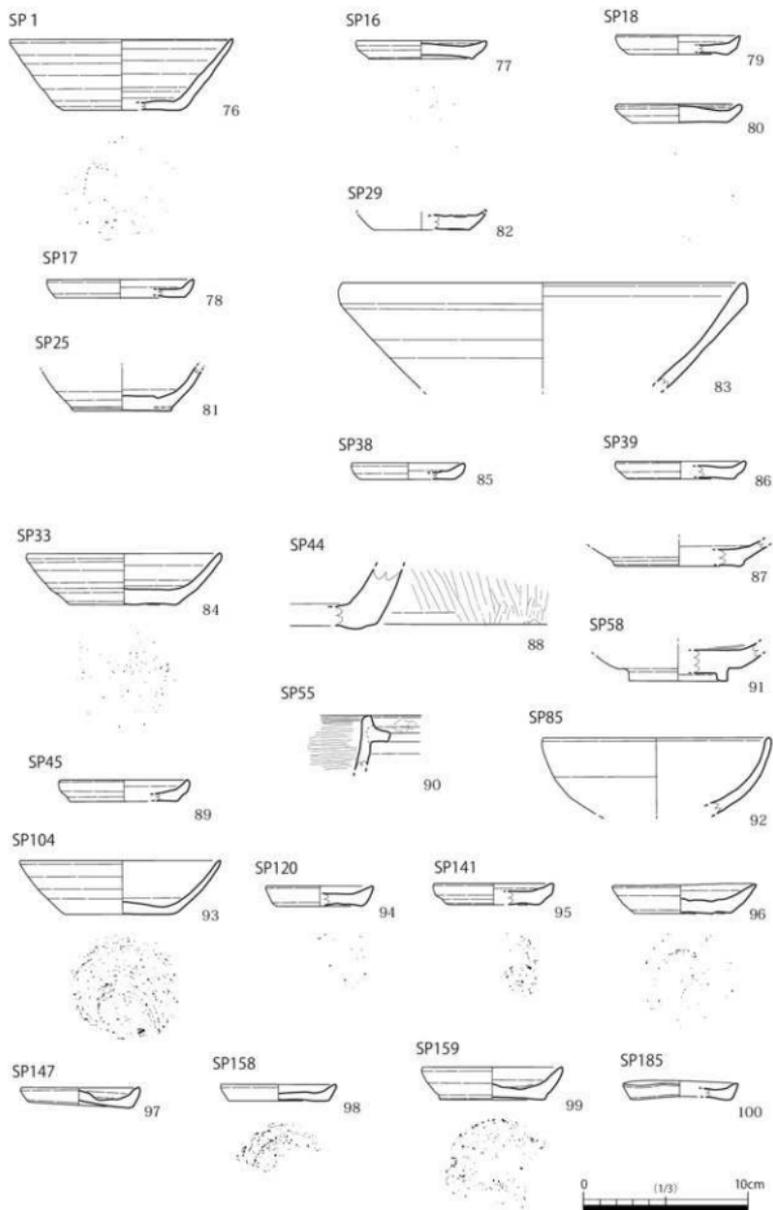
82と83はSP29出土である。82は土師器の皿で、底部は回転ヘラ切りである。83は東播系須恵器の鉢で、口縁部外面が稜をもちながら湾曲し、端部が黒変する。口縁部内面は短く凹む。13世紀代に比定する。

84はSP33出土の土師器の杯である。体部は内湾気味に開き、底部は回転系切りである。85はSP38出土の土師器の皿である。復元径が6.8cm、体部は内湾気味に開く。底部は回転系切りである。

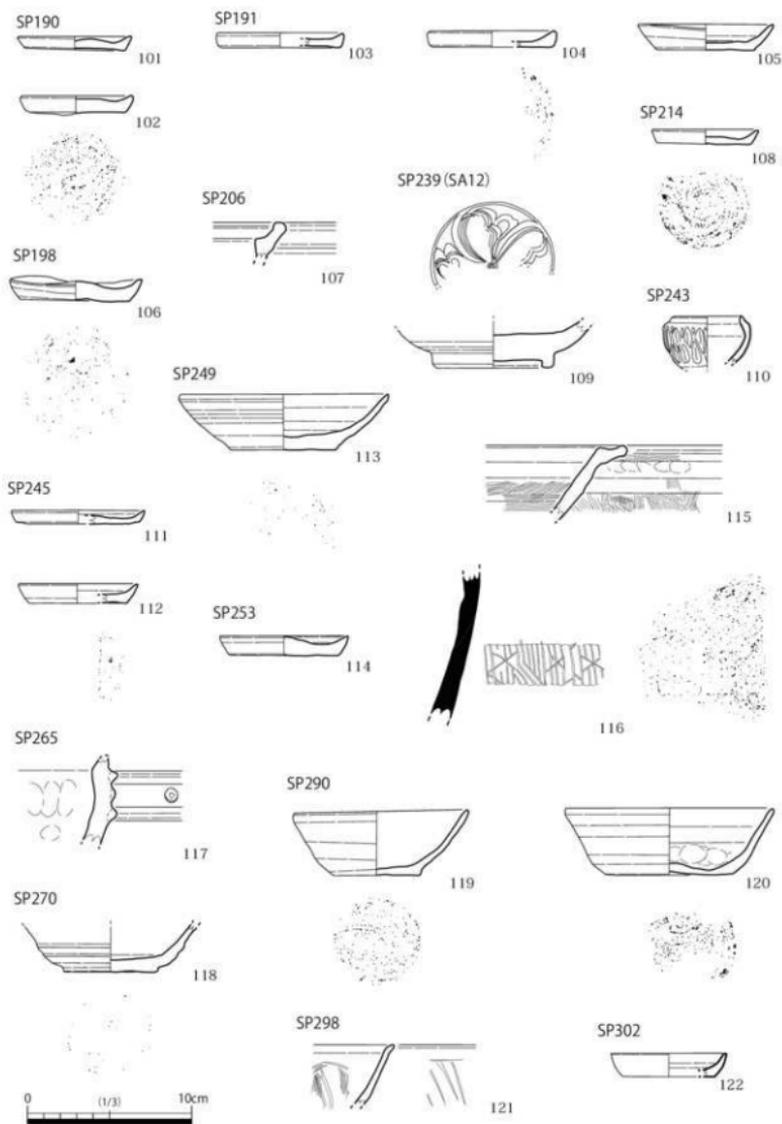
86と87はSP39出土である。86は土師器の皿で、復元径が7.8cm、体部が外反して外傾する。底部は回転ヘラ切りである。87は土師器の杯で、やや高い底部から体部が開く。底部は回転系切りである。

88はSP44出土の石鍋である。内外面は鑿によるケズリで、外面に煤が付着する。滑石裂である。89はSP45出土の土師器の皿である。復元径は7.8cmで、体部は底部から外反して直立する。

90はSP55出土の土師器の羽釜で、口縁部に突帯を貼り付ける。内面はハケ目を施し、外面に煤



第 21 图 1 区柱穴出土遗物实测图 (3)



第 22 图 1 区柱穴出土遗物实测图 (4)

が付着する。91はSP58出土の青磁碗である。高台内は露胎で、見込みに櫛目文を施す。龍泉窯系である。92はSP85出土の土師器の碗で、体部が内湾気味に開く。色調は内外面とも灰白色で、外面に白色の化粧土を塗布する。93はSP104出土の土師器の杯で、体部が内湾気味に開き、底部は回転系切りである。94はSP120出土の土師器の皿で、復元径は6.4cm、全体に厚手で、体部が短く外傾する。底部は回転ヘラ切りである。

95と96はSP141出土の土師器の皿である。95は復元径が7.2cm、体部は底部から外反して直立する。96は口径が8.6cm、全体に厚手で体部は外傾する。いずれも底部は回転ヘラ切りである。

97～100はそれぞれSP147、SP158、SP159、SP185から出土した土師器の皿である。97は復元径が7.1cm、底部中央が盛り上がり、体部はが内湾気味に開く。98は復元径が7.0cmで、体部が外傾する。99は復元径が8.5cm、やや深底で、体部が内湾気味に開く。100は復元径が7.0cm、体部が外傾し、全体に焼き歪みが著しい。いずれも底部は回転ヘラ切りである。

101と102はSP190出土の土師器の皿である。口径はそれぞれ6.9cmと6.7cmで、いずれも体部が外傾する。102は全体に厚手で、底部は回転ヘラ切りである。

103～105はSP191出土の土師器の皿である。103と104はいずれも復元径が7.6cmで、体部が短く直立する。105は復元径が8.2cmで、体部が外傾する。104は底部回転系切り、他は回転ヘラ切りである。

106はSP198出土の土師器の皿である。口径は8.0cmで、底部中央が盛り上がり、体部が内湾気味に開く。底部は回転ヘラ切りである。107はSP206出土の土師器の鍋で、口縁部内面は段をもち、口縁端部を丸く仕上げる。108はSP214出土の土師器の皿で、口径が6.4cm、体部は外傾し、底部は回転ヘラ切りである。

109はSA12の構成柱穴SP239出土の青磁碗である。削り出し高台で、高台内は露胎である。見込みに草花文を施す。12世紀中頃～後半に比定する。110はSP243出土の青白磁の合子である。体部は球状で、口縁に蓋受けをもつ。外面に上下2段の篋蓮弁文を施す。

111と112はSP245出土の土師器の皿である。復元径はそれぞれ8.1cmと7.2cmで、111は体部が短く直立する。112は体部が外傾し、底部は回転ヘラ切りである。

113はSP249出土の土師器の杯である。体部が内湾気味に開き、底部は回転系切りである。

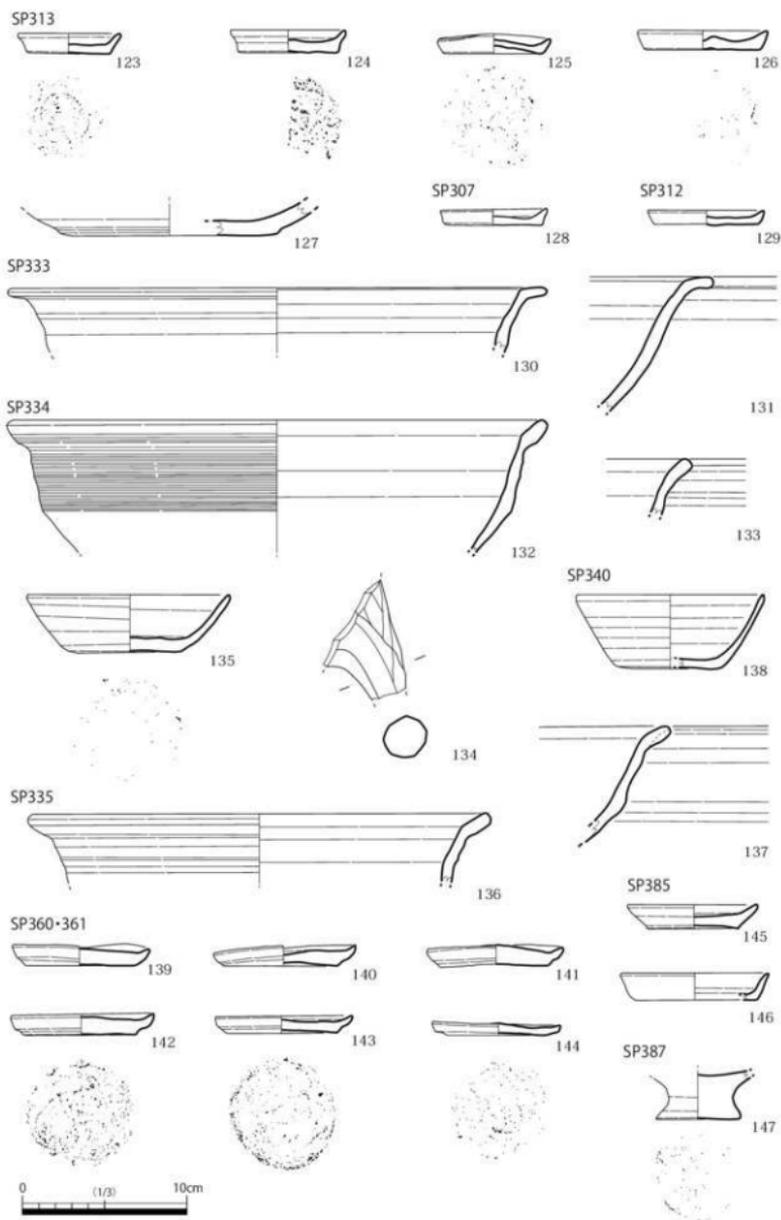
114～116はSP253出土である。114は土師器の皿である。復元径は7.8cm、底部が盛り上がり、体部は外傾する。底部は回転ヘラ切りである。115は土師器の鍋で、口縁部は外面が外反、内面は逆L字状に屈曲し、端部を丸くつくる。内外面ともハケ目を施す。

116は常滑焼の甕の胴部で、スタンプをもつ。全体に須恵質で、色調は内外面とも灰色を呈する。

117はSP265出土の瓦質土器の火鉢である。口縁部付近の破片で、断面三角形の2条の突帯に挟まれた間に円形浮文を入れる。118はSP270出土の土師器の杯である。やや高い底部から体部が湾曲して立ち上がり、外反する。体部が下半に段をもち、底部は回転系切りである。

119と120はSP290出土の土師器の杯である。119はやや高い底部から体部が内湾気味に開く。120は体部が底部から湾曲して外傾する。いずれも底部は回転系切りである。

121はSP298出土の青磁碗である。口縁部は外反し、体部内面に櫛目文を入れる。同安窯系か。



第 23 图 1 区柱穴出土文物实测图 (5)

12世紀中頃～後半に比定する。なお、出土炭化材の放射性炭素年代測定（AMS法）による暦年代範囲（2δ）は、1167-1261calAD（95.45%）であった。

122はSP302出土の土師器の皿である。復元径は7.0cm、体部は内湾気味に開く。

123～127はSP313出土である。123～126は土師器の皿である。123の口径は6.2cm、124の復元径は7.0cmで、どちらも底部が直立して体部が外反する。125は口径が6.7cm、底部は上げ底で、体部が外傾する。126は復元径が7.8cm、全体に厚手で体部が外傾する。いずれも底部は回転ヘラ切りである。127は瓦質土器の壺または甕である。

128と129はそれぞれSP307とSP312出土の土師器の皿である。口径はそれぞれ6.4cmと7.0cmで、いずれも体部が短く外傾し、底部は回転ヘラ切りである。130と131はSP333出土の土師器の鍋で、いずれも口縁が折れて平らになり、外面に煤が付着する。

132～135はSP334の上面付近からまとまって出土した（図版16）。132と133は土師器の鍋で、口縁部付近で「く」字状に曲がる。132は体部上半が工具による調整でカキ目状になる。133は外面に煤が付着する。134は土師器の足鍋の脚部で、外面に煤が付着する。135は土師器の杯で、体部が内湾気味に開き、底部は回転糸切りである。

136と137はSP335出土の土師器の鍋である。いずれも口縁部付近で「く」字状に曲がり、口縁端部は丸く仕上げる。136は外面に煤が付着する。137はSP340出土の土師器の杯である。やや深底で、体部が底部から内湾気味に開く。

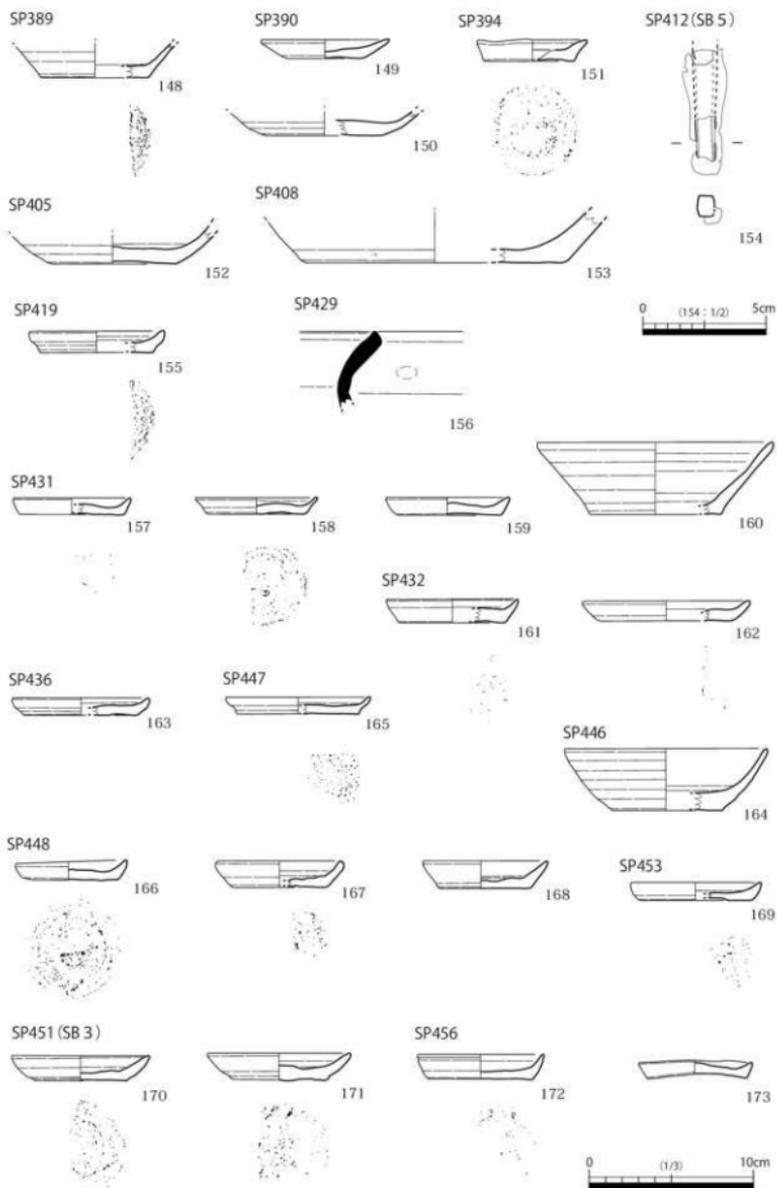
139～144はSP360とSP361の上面付近で一括出土した土師器の皿である（図版16）。口径は139～143が8.2～8.6cm、144が7.8cmである。139～143は厚手の底部から外反して体部となり、内湾気味に開くもので、143は全体に扁平である。144は体部の立ち上がりがなく、扁平である。いずれも底部は回転ヘラ切りで、煤や炭が付着する。地鎮等の祭祀を行った可能性がある。

145と146はSP385出土の土師器の皿である。145の口径は7.9cm、底部は上げ底気味で、体部は強く外傾する。146の復元径は9.0cm、体部は直立気味で短く外傾する。いずれも底部は回転ヘラ切りである。147はSP387出土の土師器の柱状高台杯で、底部は回転糸切りである。148はSP389出土の土師器の杯である。体部は外傾し、底部は回転糸切りである。149と150はSP390出土の土師器である。149は皿で、復元径が7.8cm、体部は強く外傾し、底部は回転ヘラ切りである。150は杯で、体部が内湾気味に開き、底部は回転糸切りである。

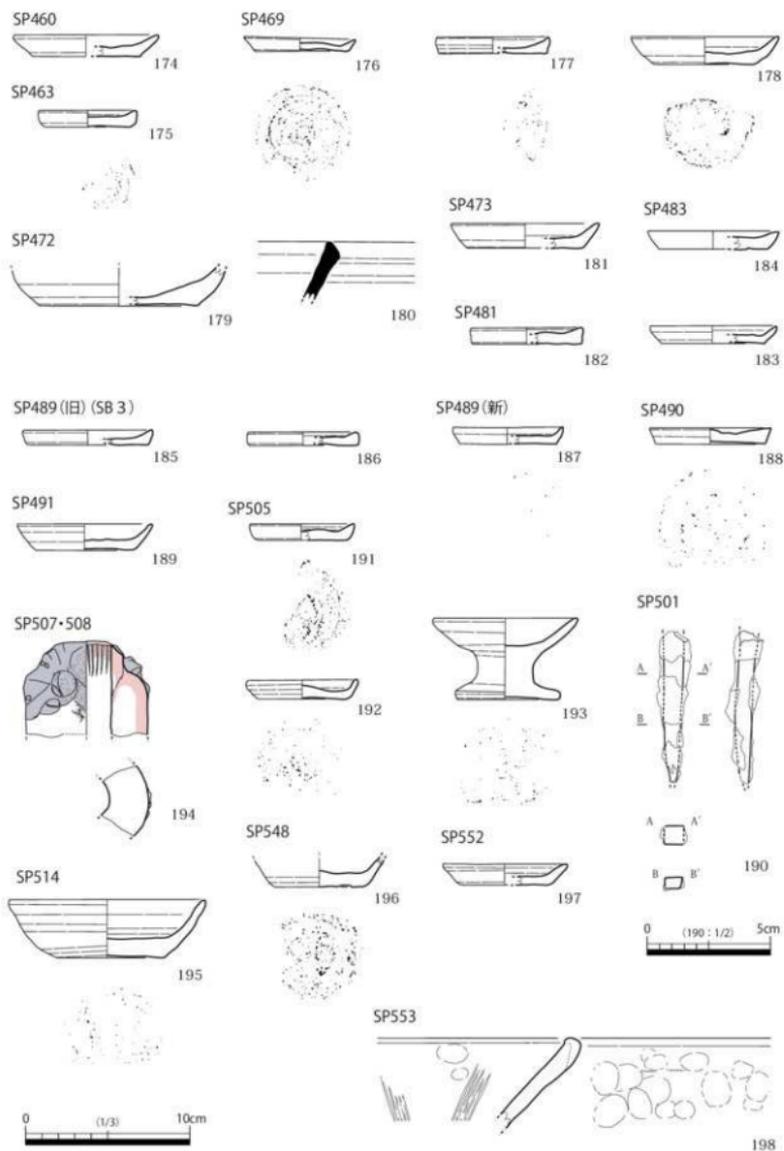
151はSP394の上面付近で出土した土師器の皿である（図版16）。口径は6.6cm、全体に厚手で、体部が外反する。底部中央付近は孔が開く。底部は回転ヘラ切りである。

152はSP405出土の土師器の杯である。体部が内湾気味に開き、底部は回転糸切りである。153はSP408出土の陶器の甕である。底径は復元で16.4cm、底部付近の体部外面は回転ヘラケズリを施す。154はSB5の構成柱穴SP412出土の不明鉄製品である。断面方形で、残存長が5.15cm、幅が0.95cm、厚さが0.85cmを測る。155はSP419出土の土師器の皿である。復元径が8.2cm、全体に厚手で、底部から外反した体部が直立する。底部は回転ヘラ切りである。156は須恵器の甕である。口縁部は外反し、端部を面取りする。

157～160はSP431の床面付近から出土した土師器である（図版16）。157～159は皿で、口



第 24 图 1 区柱穴出土遗物实测图 (6)



第 25 图 1 区柱穴出土遺物実測図 (7)

径は7.0～7.5cm、いずれも体部が外傾する。157と158は底部が回転系切りか。159は底部が回転ヘラ切りである。160は杯で、体部が外傾し、底部は回転系切りである。

161と162はSP432出土の土師器の皿である。161は復元径が8.0cm、162は9.8cmで、いずれも体部が緩やかに外傾し、底部は回転ヘラ切りである。163はSP436出土の土師器の皿で、復元径が8.3cm、体部が内湾気味に開き、底部は回転ヘラ切りである。164はSP446出土の土師器の杯で、体部は内湾気味に開き、底部は回転系切りである。165はSP447出土の土師器の皿で、復元径が8.7cm、高い底部から体部が外傾し、底部は回転ヘラ切りである。

166～168はSP448から出土した土師器の皿である（図版16）。166は口径が6.7cm、体部が内湾気味に開く。167は復元径が7.4cm、体部が外傾し、口縁付近で内湾する。168は復元径が7.5cm、体部は外傾する。いずれも底部は回転ヘラ切りである。

169はSP453出土の土師器の皿で、復元径が7.8cm、体部が内湾気味に開き、底部は回転ヘラ切りである。170と171はSB3の構成柱穴SP451出土の土師器の皿である。復元径は170が8.4cm、171が8.8cmで、いずれも体部が内湾気味に強く開き、底部は回転ヘラ切りである。172と173はSP456出土の土師器の皿である。172は復元径が7.6cm、体部が内湾気味に開く。173は口径が6.9cm、体部が短く外傾し、全体に焼き歪む。いずれも底部は回転ヘラ切りである。174はSP460出土の土師器の皿で、復元径は8.8cm、体部は強く外傾し、底部は回転ヘラ切りである。175はSP463出土の土師器の皿で、復元径が6.0cm、体部が短く直立し、底部は回転ヘラ切りである。

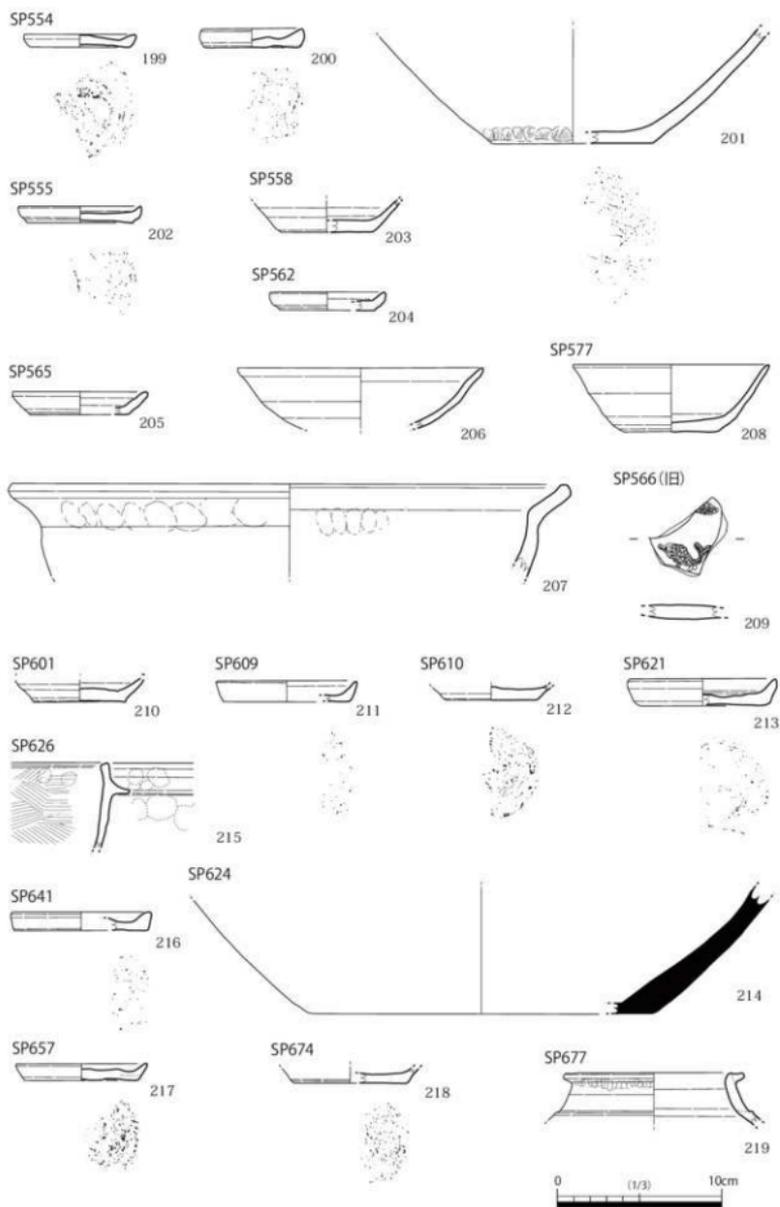
176～178はSP469出土の土師器の皿である。176は口径が6.8cm、体部が短く外傾する。177は復元径が6.8cm、体部は厚手で内傾気味に短く開く。178は復元径が9.0cm、体部は内湾気味に開く。いずれも底部は回転ヘラ切りである。

179と180はSP472出土である。179は土師器の杯で、体部が厚みをもちながら内湾気味に開く。底部は回転系切りである。180は東播系須恵器の鉢で、口縁部付近で屈曲して内傾し、黒変する。181はSP473出土の土師器の皿である。復元径が6.8cm、全体に厚手で、体部は外反する。底部は回転系切りである。

182と183はSP481出土の土師器の皿である。182の復元径は6.8cm、体部が短く直立する。183は復元径が7.6cm、体部は外傾する。いずれも底部は回転ヘラ切りである。184はSP483出土の土師器の皿で、復元径が8.0cm、全体に厚手で、体部が短く外傾する。底部は回転ヘラ切りである。

185と186はSB3の構成柱穴SP489(旧)から出土した土師器の皿である。185は復元径が7.8cm、体部が短く外傾する。186は復元径が6.6cm、体部が短く直立する。187はSP489(新)出土の土師器の皿で、復元径が6.6cm、体部が内湾気味に開く、底部は回転ヘラ切りである。188はSP490出土の土師器の皿で、口径が7.4cm、全体に扁平で体部をつくらない。底部は回転ヘラ切りである。189はSP491出土の土師器の皿で、復元径が8.2cm、体部が外傾し、底部は回転ヘラ切りである。

190はSP501出土の和釘である。断面方形で、残存長は7.2cm、幅が0.8cm、厚さが0.8cmを測る。191～193はSP505出土である。191と192は土師器の皿である。191は復元径が6.3cm、全体に厚手で、体部が短く外傾する。192は復元径が6.6cm、底部が盛り上がり、体部は外傾する。どちらも底部は回転ヘラ切りである。193は土師器の柱状高台杯で、体部が内湾気味に開き、脚部は直立し、



第 26 图 1 区柱穴出土遗物实测图 (8)

底部付近で平らになる。底面は回転糸切りである。

194 は SP507・508 出土の羅臼口である。残存長が 5.9cm、残存幅が 7.3cm、孔径は 2.9cm を測る。外面は黒変し、端部に自然釉がかかる。断面外側から内面端部にかけて赤変する。

195 は SP514 出土の土師器の杯である。体部が内湾気味に開き、底部は回転糸切りである。196 は SP548 出土の土師器の杯で、体部は底部から湾曲して外傾する。底部は回転ヘラ切りである。197 は SP552 出土の土師器の皿で、復元径が 7.6cm、体部は外傾し、底部は回転糸切りである。198 は SP553 出土の瓦質土器の摺鉢で、口縁端部の内面にわずかに段をつくる。内面に 5 条単位のおろし目を入れる。外面は丁寧に指オサエする。防長型で 14 世紀前半頃に比定する。

199～201 は SP554 出土である。199 と 200 は土師器の皿で、199 は復元径が 6.8cm、底部中央が盛り上がり、体部が短く外傾する。200 は復元径が 6.0cm、体部が内湾気味に短く立ち上がる。201 は瓦質土器の鉢で、体部外面と底部との境に指オサエ及びハケ目を施し、底部外面に板目圧痕を残す。

202 は SP555 出土の土師器の皿で、復元径が 7.4cm、体部は短く内湾し、底部は回転ヘラ切りである。203 は SP558 出土の土師器の杯で、体部が外傾し、底部は回転ヘラ切りである。204 は SP562 出土の土師器の皿、復元径が 7.0cm、体部が底部から外反して直立する。

205～207 は SP565 出土である。205 は土師器の皿で、復元径が 8.2cm、体部は外傾し、底部は回転ヘラ切りである。206 は土師器の杯で、薄手の体部が外傾し、中位から外反する。色調は内外面とも灰白色である。207 は土師器の鍋で、口縁部付近で「く」字状に曲がり、内湾気味に開く。復元径は 33.8cm である。

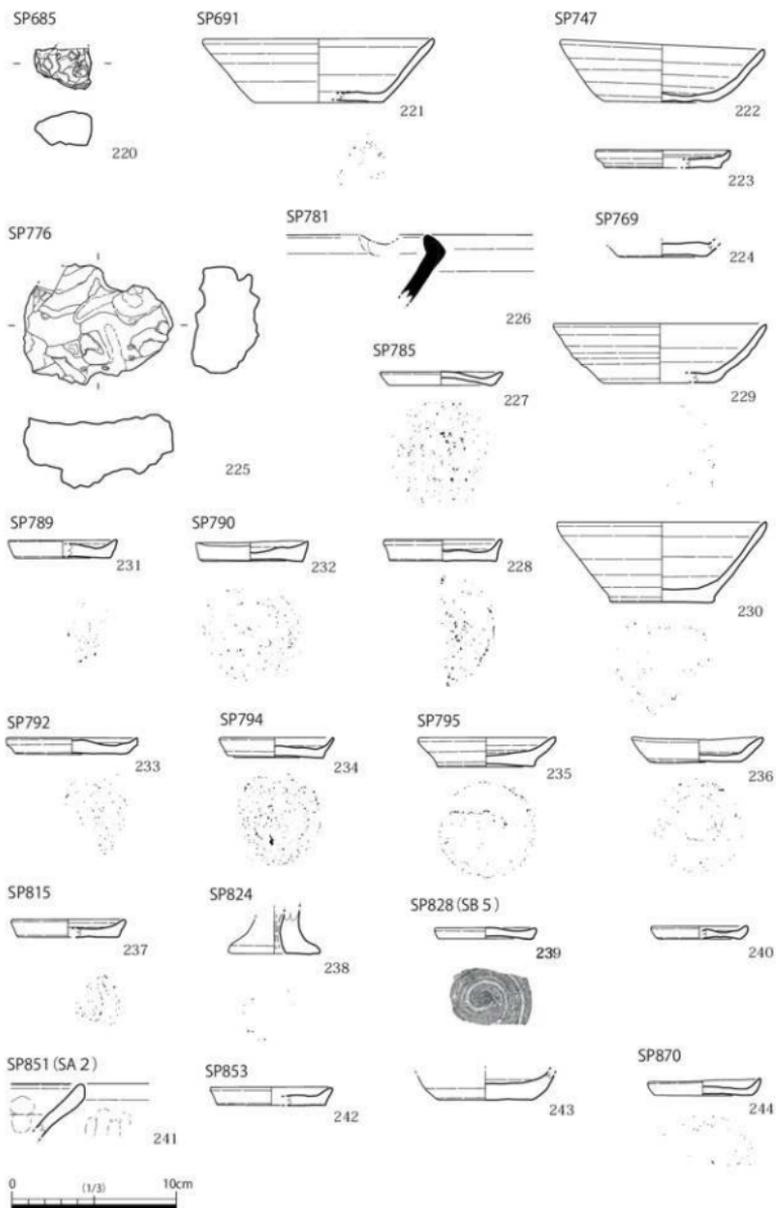
208 は SP577 上面のすぐ外側から出土した土師器の皿である（図版 17）。体部は底部から湾曲して外傾し、底部は回転糸切りである。

209 は SP566（旧）出土の青磁の鉢と考える。内面に双鱼文がみられる。龍泉窯系である。

210～213 はそれぞれ SP601、SP609、SP610、SP621 出土の土師器の皿である。210 は体部が外傾し、底部は回転糸切りである。211 は復元径が 8.4cm、体部は底部から緩やかに外傾する。212 は体部が外傾する。213 は復元径が 9.0cm、体部は底部から緩やかに外反し、口縁部付近で内傾する。いずれも底部は回転ヘラ切りである。

214 は SP624 出土の須恵器の壺または甕で、底部は平底になると推定する。体部外面に格子目タタキを施す。215 は SP626 出土の土師器の羽釜で、口縁部外面に長い突帯が付く。口縁端部は面取りしてわずかに内傾し、内面はハケ目を施す。内外面とも煤が付着する。216 は SP641 出土の土師器の皿で、復元径が 8.4cm、厚手で体部が短く直立する。217 は SP657 出土の土師器の皿で、復元径は 8.0cm、体部は外傾し、底部は回転ヘラ切りである。218 は SP674 出土の土師器の杯で、体部は外傾し、底部は回転糸切りである。

219 は SP677 出土の陶器の壺で、頸部は内傾し、口縁端部の外面に細い突帯を貼り付け、口縁を水平につくる。頸部と胴部の境には断面三角形の段がある。口縁部の突帯の直下には棒状工具によるオサエを連続的に施す。断面の色調は赤褐色である。福建省系の可能性がある。14 世紀中頃～後半に比定する。



第 27 图 1 区柱穴出土遺物実測図 (9)

220 は SP685 出土の鍛冶滓で、やや強い磁着があり、最大幅は 3.45cm、厚さが 2.05cm を測る。蛍光 X 線分析の結果、鉄の含有量が 90% で、チタン含有量が少ないことが判明した。

221 は SP691 出土の土師器の杯で、復元径が 14.0cm とやや大きく、体部は外傾し、底部は回転ヘラ切りである。

222 と 223 は SP747 の底面付近で出土した土師器である。222 は杯で、体部は底部から緩やかに外傾する。底部は回転系切りである。223 は皿で、復元径が 8.2cm、体部は底部から外反して短く直立する。底部は回転系切りである。224 は土師器の杯または皿で、底部は回転系切りである。

225 は SP776 出土の椀形鍛冶滓で、やや強い磁着があり、残存長が 7.4cm、最大幅が 9.1cm、厚さが 4.3cm を測る。蛍光 X 線分析の結果、鉄の含有量が 70% で、チタン含有量が少ないことが判明した。

226 は SP781 出土の東播系の鉢で、注口部付近である。口縁部は逆「く」字状に折れ、口縁部外面の色調は、やや暗灰色を呈する。13 世紀代に比定する。

227 ～ 230 は SP785 出土の土師器である。227 と 228 は皿で、227 の口径は 7.0cm、上げ底で、体部は外傾する。228 は復元径が 7.0cm、体部が外反気味に直立する。いずれも底部は回転ヘラ切りである。229 と 230 は杯で、229 は体部が内湾気味に開き、230 は外傾する。いずれも底部は回転系切りである。

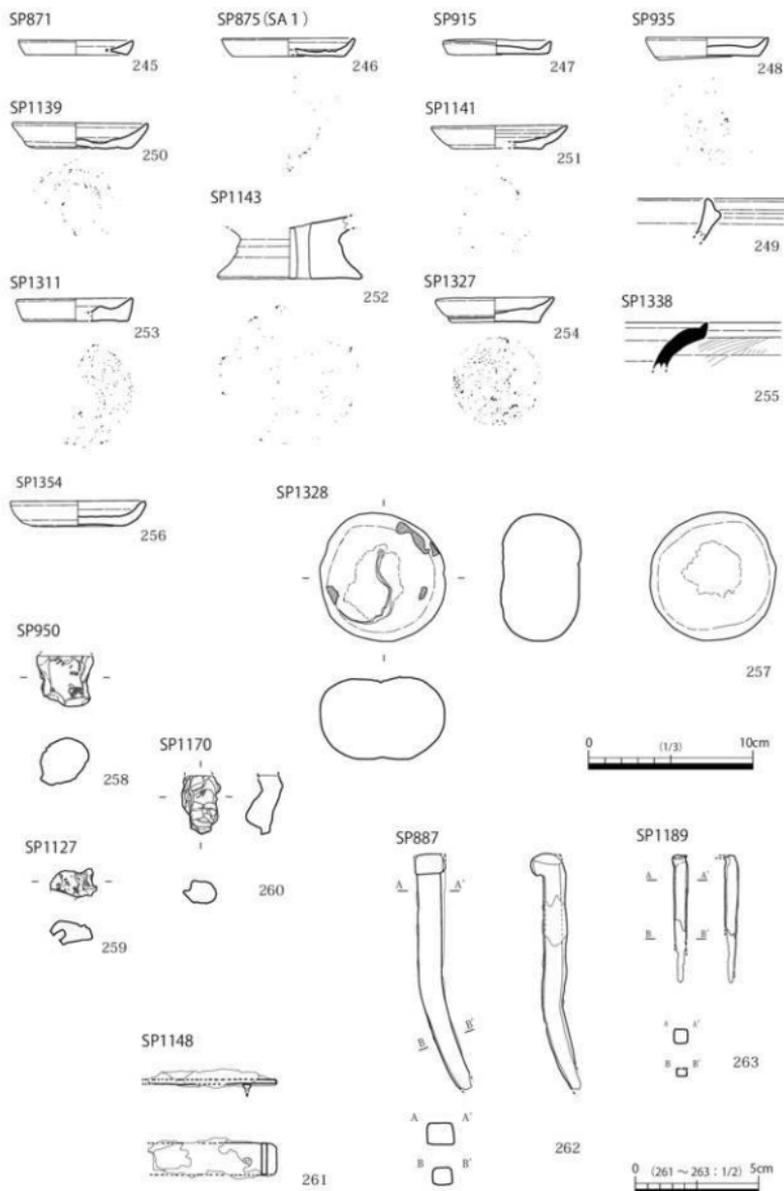
231 ～ 234 はそれぞれ SP789、SP790、SP792、SP794 出土の土師器の皿である。231 は復元径が 6.6cm、底部中央が盛り上がり、体部は外傾気味に立ち上がる。232 は口径が 6.8cm、底部中央が凹み、体部は外傾気味に短く立ち上がる。233 は復元径が 7.8cm、底部中央が盛り上がり、体部は内湾気味に開く。SP794 は口径が 6.8cm、体部は外傾する。いずれも底部は回転ヘラ切りである。

235 と 236 は SP795 出土である。235 は口径が 8.3cm、底部が高く、体部は外傾する。236 は口径が 7.9cm、体部が外傾する。底部は回転ヘラ切りである。237 は SP815 出土の土師器の皿で、復元径が 6.9cm、体部が短く外傾し、底部は回転ヘラ切りである。238 は SP824 出土の柱状高台杯である。脚部は八の字状に開き、中央に穿孔する。底部は回転系切りである。239 と 240 は SB 5 の構成柱穴 SP828 出土の土師器の皿で、口径は 6.0cm である。239 は底部が上げ底で、体部が短く外傾し、240 は体部が内湾気味に開く。いずれも底部は回転ヘラ切りである。

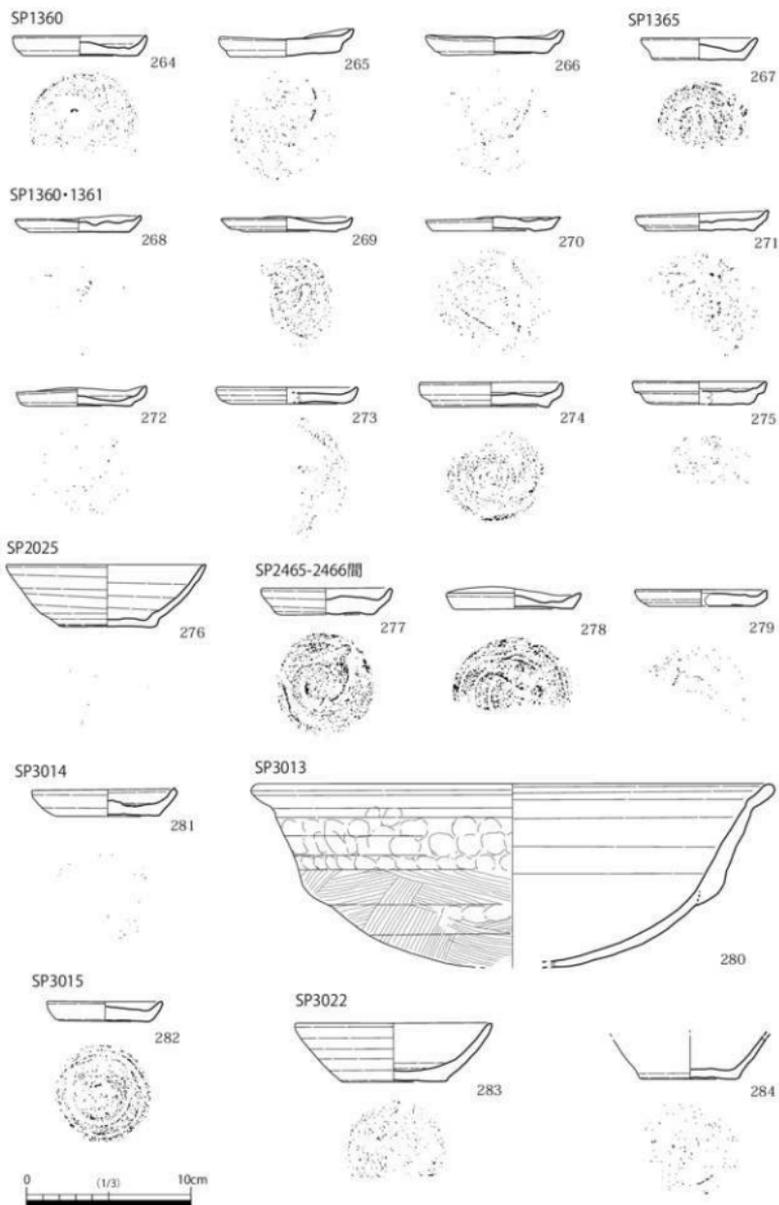
241 は SA 2 の構成柱穴 SP851 出土の東播系須恵器の鉢である。口縁部外面は内湾し、黒変する。13 世紀代に比定する。

242 と 243 は SP853 出土の土師器である。242 は皿で、復元径が 7.4cm、体部は短く外傾し、底部は回転ヘラ切りである。243 は杯で、体部が内湾気味に開き、底部は回転系切りである。244 は SP870 出土の土師器の皿である。口径が 6.7cm、体部は内湾気味に開く。245 は SP871 出土の土師器の皿で、復元径は 7.0cm、体部は短く内湾気味に開く。底部は回転ヘラ切りである。246 は SA 1 の構成柱穴 SP875 出土の土師器の皿で、復元径は 8.0cm、体部が内湾気味に開き、底部は回転ヘラ切りである。247 は SP915 出土の土師器の皿で、口径は 6.5cm、体部は短く直立し、底部は回転ヘラ切りである。

248 と 249 は SP935 出土の土師器である。248 は皿で、口径が 7.4cm、体部は外傾し、底部は回転系切りである。249 は杯の口縁部で、蓋受け部と考える。250 は SP1139 出土、251 は SP1141



第 28 图 1 区柱穴出土遗物实测图 (10)



第 29 图 1 区柱穴出土文物实测图 (11)

出土(図版17)の土師器の皿である。どちらも復元径が8.1cmで、体部が内湾気味に開き、底部は回転ヘラ切りである。252はSP1143出土の柱状高台杯で、脚部はハの字状に開き、径1.0cm程度の穿孔を中央からやや外れて入れる。底部は回転糸切りである。253と254はそれぞれSP1311、SP1327出土の土師器の皿である。253は復元径が6.8cm、全体に厚手で、体部が直立する。254は口径が6.9cm、体部が強くと外傾する。いずれも底部は回転ヘラ切りである。255はSP1338出土の須恵器の甕で、頸部は外反し、口縁端部をつまみ上げる。外面に斜線文を施す。256はSP1354出土の土師器の皿である。口径は8.1cmで、体部が内湾気味に開く。底部は回転糸切りである。

257はSP1328出土の敲石で、長さは7.70cm、幅が7.65cm、厚さが5.0cmで、重さは438gを測る。両面の中央部に敲打痕を残す。花崗岩製である。

258～260はそれぞれSP950、SP1127、SP1170出土の鋳滓である。258の幅は3.5cm、厚さが2.9cm、259の幅は2.8cm、厚さが1.45cm、260の幅は1.7cm、厚さが2.2cmを測る。いずれも磁着があり、258と260でやや強い。蛍光X線分析の結果、258はチタン含有量がやや多く、製錬または精錬鍛冶に伴う可能性があり、他はチタン含有量が少なく、鍛冶滓と判明した。

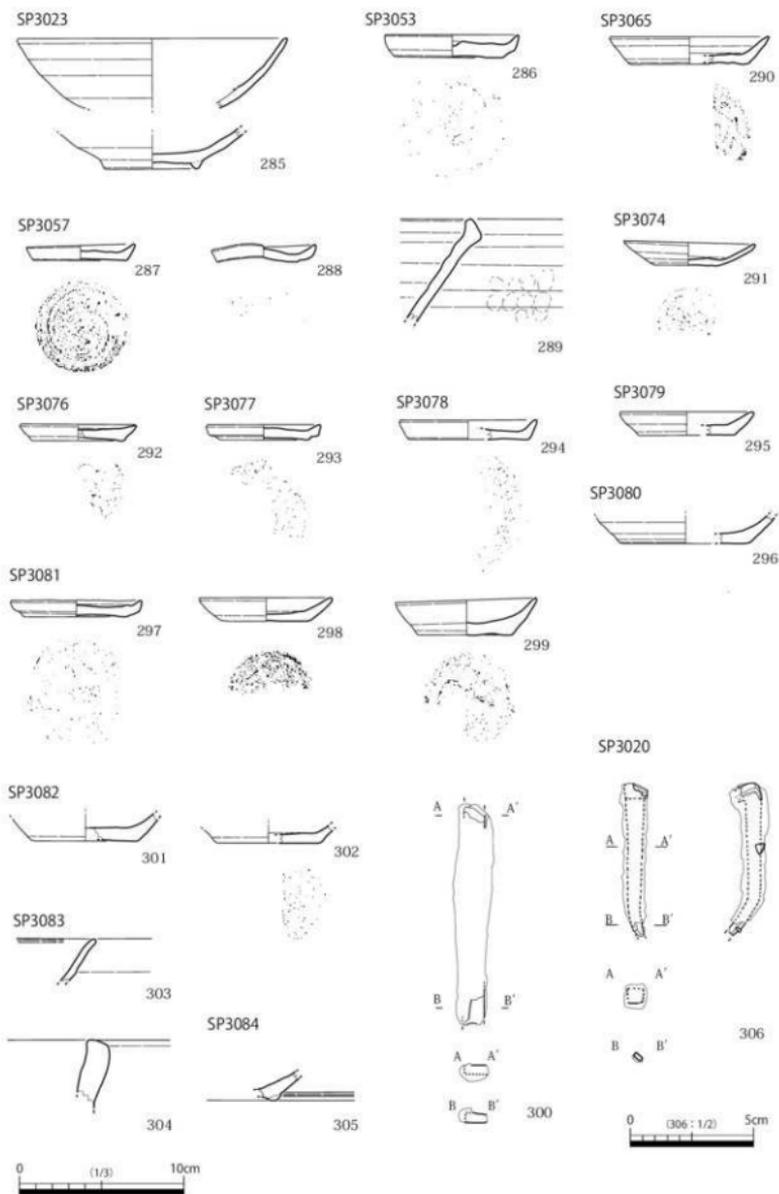
261はSP1148出土で、鉄刀子の茎部の破片と考える。平面長方形形状を呈し、目釘を残す。残存長が5.2cm、幅が1.3cm、厚さが0.2cmを測る。262と263はそれぞれSP887とSP1189出土の和釘で、いずれも頭部を直角に折る。262は残存長が9.6cm、幅が1.4cm、厚さが0.85cm、263は残存長が5.2cm、幅が0.6cm、厚さが0.6cmを測る。

264～266はSP1360、268～275はSP1360・1361から出土した土師器の皿である。口径は7.5～8.4cmの間におさまる。体部が内湾気味に開くもの(264・271～273)、底部が厚く体部が短くと外傾するもの(265・266)、体部が短くと外傾するもの(268)、底部中央が盛り上がり、全体に扁平で、体部が短くと外傾するもの(269・270)、体部が底部から外反して直立するもの(274・275)がある。265は底部が回転糸切りか。269が回転糸切り、他は回転ヘラ切りである。

267はSP1365出土の土師器の皿で、復元径が6.9cm、底部中央が盛り上がり、体部は外傾する。底部は回転ヘラ切りである。276はSP2025出土の土師器の杯である。体部が内湾気味に開き、底部は回転糸切りである。277～279はSP2465-2466間出土の土師器の皿である。いずれも口径が8.0cm前後で、底部は回転ヘラ切りである。277は厚手の底部から体部が内湾気味に開く。278は底部中央が盛り上がり、体部が短くと外傾する。279は体部が短くと内湾気味に開く。

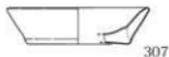
280はSP3013出土の土師器の鍋である。体部上半は厚手につくり、口縁部がやや外側に折れる。体部外面の上半は指オサエ、下半はハケ目を施す。外面に煤が付着する。281と282はそれぞれSP3014とSP3015出土の土師器の皿である。281は口径が8.6cm、体部が内湾気味に開き、282は口径が6.9cm、体部が短くと内湾気味に開く。いずれも回転ヘラ切りである。283と284はSP3022出土の土師器の杯である。283は体部が内湾気味に開き、284は外傾する。いずれも底部は回転糸切りである。

285はSP3023出土の土師器の椀である。体部は大きく開き、断面逆三角形の高台が付く。底部は回転ヘラ切りで、色調は内外面とも淡橙色を呈する。286は土師器の皿で、口径が8.1cm、体部が内湾気味に開き、底部内面の中央がくぼむ。底部は回転糸切りか。

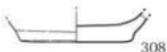


第 30 图 1 区柱穴出土遗物实测图 (12)

SP3085



307

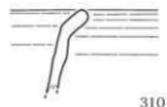


308



309

SP3086



310



311



312

第31図 1区柱穴出土遺物実測図(13)

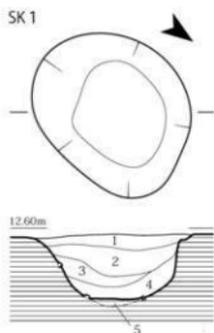
287～289はSP3057出土である。287と288は土師器の皿で、それぞれ口径が6.6cmと復元径が6.9cm、いずれも体部が短く外傾し、287の底部は回転糸切りか。他は回転回転ヘラ切りである。288は焼き歪みが著しい。289は東播系須恵器の鉢で、口縁部が内側に折れ、黒変する。13世紀代に比定する。

290～295はそれぞれSP3065、SP3074、SP3076～SP3079から出土した土師器の皿である。290は復元径が9.6cm、体部が外傾する。291は復元径が7.9cm、薄手で狭い底部から体部が強く外傾する。内外面とも灰白色を呈する。燈明皿と考える。292は復元径が7.0cm、全体に扁平で、体部が外傾する。293は復元径が6.9cm、全体に扁平で、底部がやや高く、体部は短く直立する。294は復元径が8.3cm、体部が外傾する。295は復元径が8.1cm、体部が強く外傾する。底部は291が回転糸切り、他は回転ヘラ切りである。

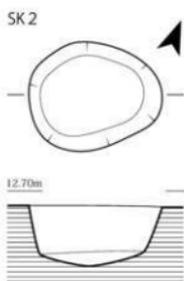
296はSP3080出土の土師器の杯で、体部が内湾気味に開き、底部は回転糸切りである。297～299はSP3081出土の土師器の皿、300は不明鉄製品である。口径は8.0～8.5cmである。297は全体に扁平で、底部から緩やかに開き、体部が短く直立する。298と299は体部が内湾気味に開き、299はやや深底である。いずれも底部は回転ヘラ切りである。300は全体に錆に覆われるが、断面は扁平で、残存長が13.6cm、幅が1.3cm、厚さが0.6cmを測る。

301と302はSP3082出土の土師器の杯である。301の体部は内湾気味に開く。302は体部が外傾し、底部は回転糸切りである。303と304はSP3083出土である。303が土師器の椀の口縁部で、体部は反外する。304は土師器の甕で、やや外傾し、口縁端部は緩やかに面取りする。305はSP3084出土の土師器の椀で、断面逆台形状の高台をもち、色調は内外面とも灰白色である。306はSP3020出土の和釘で、頭部を短く折り、先端は曲がる。断面方形で、残存長は6.3cm、幅が0.7cm、厚さが0.6cmを測る。

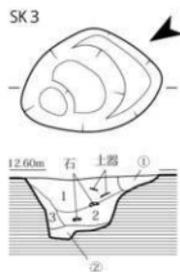
307～309はSP3085出土の土師器である。307は皿で、復元径が8.4cm、体部は外傾し、やや



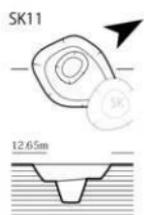
- 土層凡例
- 1 灰褐色(7.5YR5/2)土 地山ブロック多混
 - 2 灰褐色(7.5YR4/2)土 地山ブロック多混,炭混
 - 3 灰褐色(7.5YR4/2)土 地山ブロック,炭少混
 - 4 褐灰色(7.5YR6/1)土 地山ブロック,炭少混
 - 5 橙色(7.5YR6/6)地山



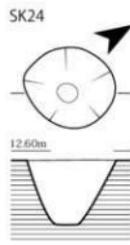
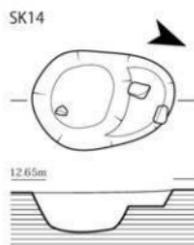
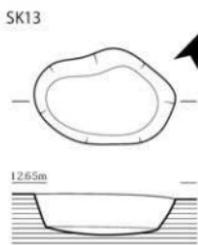
- 土層凡例
黒褐色(7.5YR3/1)土 炭混



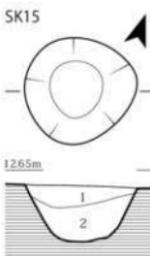
- 土層凡例
- 1 褐灰色(7.5YR4/1)土 地山ブロック・焼土・炭多混
 - 2 褐灰色(7.5YR4/1)土 焼土・炭少混
 - 3 黒褐色(7.5YR3/2)土 焼土・炭少混
- ① 褐灰色(7.5YR4/1)土 地山ブロック多混,SP118埋土
② 黒褐色(7.5YR3/2)砂質土 砂礫多混,柱穴埋土



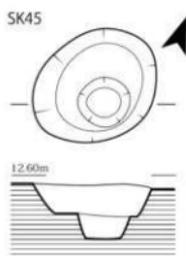
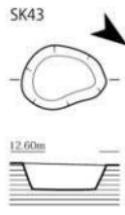
- 土層凡例
黒褐色(10YR3/1)土 炭混



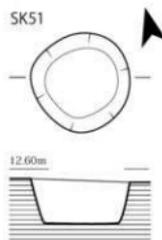
- 土層凡例
黒褐色(10YR3/1)土



- 土層凡例
- 1 灰褐色(7.5YR6/2)土 細砂と径1~2cmの礫混
 - 2 灰褐色(7.5YR4/2) 礫砂混。径2cm程度の礫と炭多混



- 土層凡例
灰褐色(7.5YR4/2)土 径5cm以下の礫少混,焼土・炭混



- 土層凡例
黒褐色(7.5YR3/1)土 径2cm程度の礫多混,炭混



第32図 1区土坑実測図(1)

底が深い。308と309は杯で、308の底部は高く、体部が外傾する。309の体部は内湾気味に開く。いずれも底部は回転糸切りである。

310～312はSP3086の上層から出土した土師器の足鍋である(図版17)。310は口縁部付近が外側に折れ、外面に煤が付着する。311と312はいずれも指オサエで成形し、311の内面はハケ目を施す。

④土坑

SK 1 (第32・34図、図版31・35)

1区北半の西寄り、SD 1のすぐ北側に接する。平面形は不整形円形、検出面での標高は12.54～12.56 mである。規模は、長さが最大で1.03 m、最小で0.87 m、深さが0.40 mを測る。埋土は4層からなり、灰褐色及び褐灰色土を主体とする皿状堆積である。1・2層で地山ブロックが多く混じり、2層以下で炭が混じる。2～3層と3層から出土した炭化材の樹種同定の結果は、それぞれコナラ属アカガシ亜属とツバキ属であり、いずれも広葉樹で堅硬であり、薪炭材として普通に利用される樹種であった。

遺物は、土師器の皿(313・314)と、杯(315)がある。313と314は、復元径がそれぞれ6.8cmと6.4cmで、いずれも体部を短く立ち上げ、底部は回転ヘラ切りである。315は薄手で、体部が緩やかに開き、底部は回転糸切りである。

4層から出土した炭化材の放射性炭素年代測定(AMS法)による暦年代範囲(2 σ)は、1279-1309calAD(58.08%)及び1362-1387calAD(37.37%)という結果が得られた。

出土遺物と年代測定結果から、遺構の時期は13世紀後半～14世紀中頃と考える。遺構の性格は不明である。

SK 2 (第32・34図、図版31・35)

1区北半の西寄り、SK 1のすぐ北側に位置する。平面形は楕円形、断面形は長方形で底面中央が緩やかに落ち込む。検出面での標高は12.60 mである。主軸方向はN 71° Eである。規模は、長径が0.82 m、短径が0.67 m、深さが0.37 mを測る。埋土は、炭混じりの黒褐色土を主体とする。

遺物はいずれも土師器の杯(316・317)である。316はやや底が高く、体部が内湾気味に開くもの、317は底部から体部が鋭く折れて外傾するもので、いずれも底部は回転糸切りである。

出土遺物から、遺構の時期は13世紀代と考える。遺構の性格は不明である。

SK 3 (第32・34図、図版31・35)

1区北半の西寄り、SK 2のすぐ北側に位置する。平面形は楕円形に近いと推定するが、南側をSP118が壊しており、本来の形状とは異なる。検出面での標高は12.55～12.57 mである。現状での規模は、長径が0.83 m、短径が0.63 m、深さが0.32 mを測る。埋土は3層からなり、1・2層が褐灰色土、3層が黒褐色土を主体とし、いずれも焼土と炭が混じり、1層で多い。3層下は柱穴及びその埋土が堆積しており、柱穴を壊したと推定する。

遺物は1層出土の土師器の杯(318)である。底部はやや底が高く、体部が内湾気味に開く。底部は回転糸切りである。

出土遺物から、遺構の時期は13世紀代か。遺構の性格は不明である。

SK11 (第32・34図、図版31・35)

1区北半の中央付近、SD1のすぐ北側に接する。平面形は不整形、断面形は逆台形状を呈する。東壁を別の土坑が壊している。底面には柱穴があるが、先後関係は不明である。検出面での標高は12.58mである。規模は、長さが最大で0.48m、最小で0.44m、深さが0.11mを測る。埋土は、炭混じりの黒褐色土を主体とする。

遺物は土師器の皿(319)で、復元径が8.0cm、底部中央がレンズ状に盛り上がり、体部は短く外傾する。底部は回転ヘラ切りである。

出土遺物から、遺構の時期は14世紀前半～中頃と考える。遺構の性格は不明である。

SK13 (第32・34図、図版31・35)

1区北半の中央付近、SD1のすぐ北側に位置する。平面形は楕円形、断面形は逆台形状を呈する。検出面での標高は12.55～12.58mで、主軸方向N67°Eである。規模は、長径が0.87m、短径が0.59m、深さが0.25mを測る。

遺物は、320が土師器の皿、321が土師器甕の底部である。320は口径が6.4cm、全体に厚手で、体部が短く直立する。底部は回転ヘラ切りである。321は底径が復元で9.1cm、底部は回転糸切りである。

出土遺物から、遺構の時期は13世紀代～14世紀中頃と考える。遺構の性格は不明である。

SK14 (第32・34図、図版32・35)

1区北半の中央付近、SK13のすぐ北側に位置する。遺構は北側テラス面を除く部分と推定する。平面形はほぼ円形で、断面形は逆台形状を呈する。検出面での標高は12.57～12.59mである。

遺物は土師器の皿(322)で、復元径が6.4cmで、体部が直立する。底部は回転ヘラ切りである。

出土遺物から、遺構の時期は14世紀前半～中頃か。遺構の性格は不明である。

SK15 (第32・34図、図版32・35)

1区北半の東寄り、SK14のすぐ東側に位置する。平面形はほぼ円形、断面形は逆台形状を呈する。検出面での標高は12.54～12.57mである。規模は、直径が0.69m、深さが0.35mを測る。埋土は2層からなる。いずれも礫混じりの灰褐色土で、2層で炭が多く混じる。炭化材の樹種同定の結果は、広葉樹のサクラ属で、薪炭材として普通に利用されるものであった。

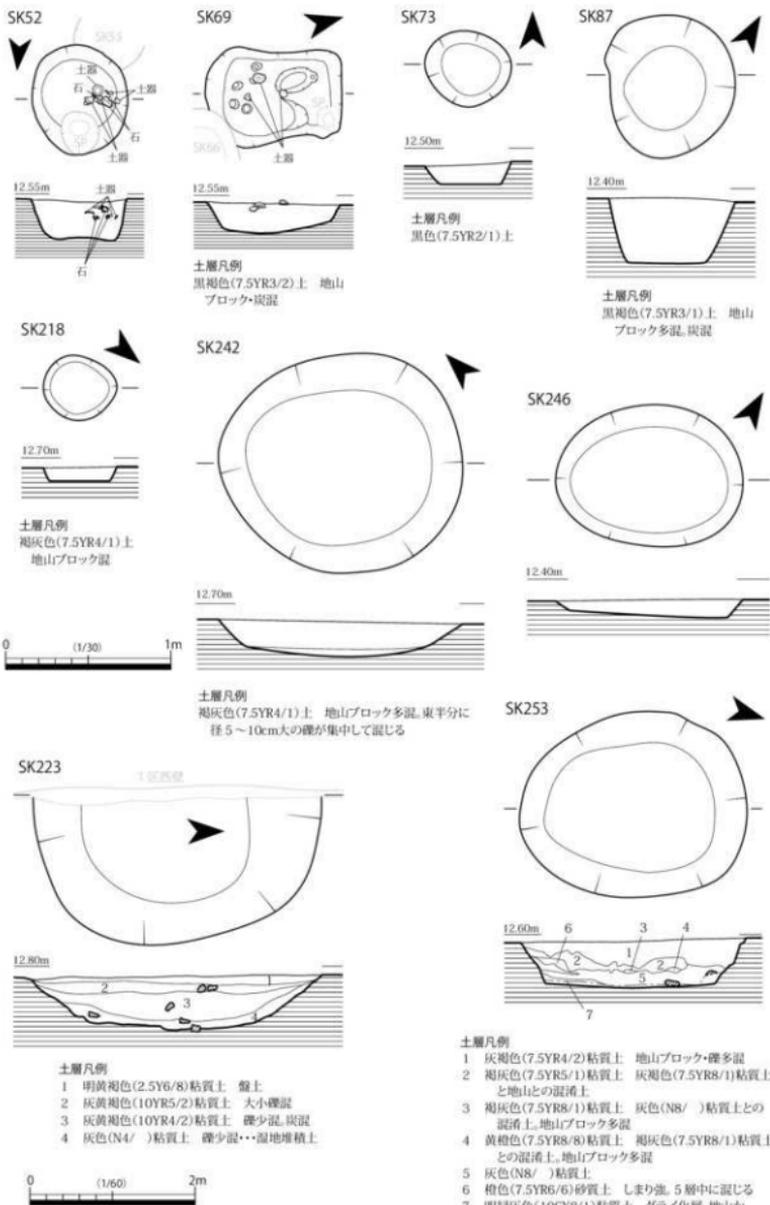
遺物は土師器の杯(323)で、復元径が12.0cm、全体に薄手で、底部から体部にかけて緩やかに外傾する。底部は回転糸切りである。

2層から出土した炭化材の放射性炭素年代測定(AMS法)による暦年代範囲(2 σ)は、1225-1276calAD(95.45%)という結果が得られた。

出土遺物に対して、年代測定結果はやや古い時期を示すが、古木効果を加味して、遺構の時期は14世紀前半～中頃と考える。遺構の性格は不明である。

SK24 (第32・34図、図版32・35・36)

1区北半の東壁付近、SD1の約4m北側に位置する。平面形はほぼ円形、断面形はすり鉢状を呈する。検出面での標高は12.55mである。規模は、直径が0.57m、深さが0.40mを測る。埋土は



第33図 1区土坑実測図(2)

黒褐色土を主体とする。

遺物は、いずれも土師器の皿(324・325)で、324の口径は7.8cmで、底部中央はレンズ状に盛り上がり、体部が短く外傾する。325の復元径は7.6cm、底部は内外面とも平らで、体部が短く直立する。いずれも底部は回転ヘラ切りである。

出土遺物から、遺構の時期は14世紀前半～中頃と考える。遺構の性格は不明である。

SK43 (第32・34図、図版32・36)

1区北半の中央付近、SD1の約3.5m南東側に位置し、SB3の範囲にある。平面形は不整楕円形、断面形は逆台形状を呈する。検出面での標高は12.52mである。規模は、長径が0.52m、短径が0.40m、深さが0.16mを測る。

遺物は、いずれも土師器の皿(326～328)である。326と328の口径は約8.0cmで、体部がしっかりと立ち上がり外傾するもの(326)と短く立ち上がるもの(327・328)がある。326と327の底部は回転ヘラ切りである。

出土遺物から、遺構の時期は13世紀代～14世紀中頃と考える。遺構の性格は不明である。

SK45 (第32・34図、図版32・36)

1区北半の中央付近、SK43のすぐ北側に位置する。平面形は楕円形、断面形は逆台形状を呈する。底面の柱穴との先後関係は不明である。検出面での標高は12.52～12.54mである。規模は、長径が0.82m、短径が0.66m、深さが0.20mを測る。

遺物は、330～332がいずれも土師器の皿で、333が土師器の鍋である。330と331の復元径は8.0cm前後で、底部を回転ヘラ切りし、332の復元径は9.2cmで、底部回転糸切りである。330は底部から屈曲した体部が外反し、331と332は内湾気味に開く。333は口縁の外反が弱く、外面に煤が付着する。

出土遺物から、遺構の時期は13世紀代～14世紀中頃と考える。遺構の性格は不明である。

SK51 (第32・34図、図版32・36)

1区北半の東寄り、SD1の約2m南東側に位置する。平面形は円形、断面形は逆台形状を呈する。検出面での標高は12.52～12.54mである。規模は、直径が0.61m、深さが0.28mを測る。埋土は、礫混じりの黒褐色土を主体とし、炭が混じる。

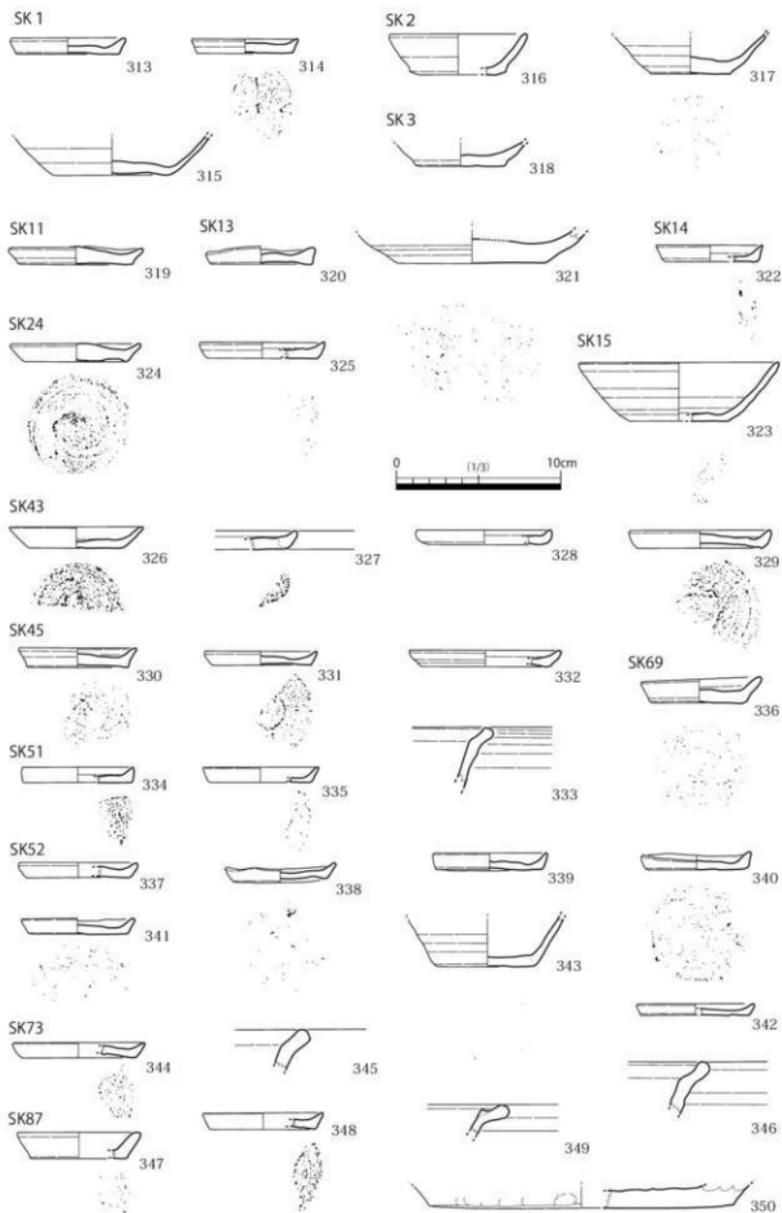
遺物は、土師器の皿(334・335)があり、口径はいずれも7.0cm弱で、底部は回転ヘラ切りである。334の体部は短く直立し、335の体部は外傾する。

出土遺物から、遺構の時期は13世紀代～14世紀中頃と考える。遺構の性格は不明である。

SK52 (第33・34図、図版32・33・36)

1区北半の東寄り、SD1の約1m南側に位置し、南側でSK53を壊し、北側の埋土を柱穴が掘り込む。平面形は円形、断面形は逆台形状を呈する。検出面での標高は12.52mである。規模は、直径が最大で0.67m、深さが0.24mを測る。

遺物は、埋土上層や埋土中から土師器が多く出土した。337～342は皿で、口径はいずれも7.0cm前後で、体部が外傾する。338は底部が回転糸切りか。他は回転ヘラ切りである。343は杯で、体部が緩やかに外傾し、底部は回転糸切りである。



第 34 图 1 区土坑出土文物实测图 (1)

出土遺物から、遺構の時期は14世紀前半～中頃と考える。遺構の性格は不明である。

SK69 (第33・34図、図版33・36)

1区北半の東壁付近、SD1の約2m南側に位置し、南東壁はSK66に壊され、北東隅の埋土を柱穴が掘り込む。平面形は円形、断面形は皿状を呈する。軸方向はN16°Eで、検出面での標高は12.50mである。規模は、長さが長軸で0.83m、短軸で0.62m、深さが0.19mを測る。埋土は、地山ブロックや炭混じりの黒褐色土を主体とする。

遺物は、埋土上面付近から土師器皿(336)が出土した。口径は7.2cm、厚手で、体部が外傾し、底部は回転ヘラ切りである。

出土遺物から、遺構の時期は13世紀代と考える。遺構の性格は不明である。

SK73 (第33・34図、図版33・36)

1区北半の東壁付近、SA10の最南端の柱穴から約2m南東側に位置する。平面形はほぼ円形で、断面形は逆台形状を呈する。検出面での標高は12.39～12.42mである。規模は、直径が0.53m、深さが0.13mを測る。埋土は黒色土を主体とする。

遺物は土師器皿(344)や鍋(345・346)が出土した。344の復元径は7.2cmで、体部が外傾し、底部は回転系切りである。345と346はともに口縁の外反が弱く、後者は内面を強く押さえる。

出土遺物から、遺構の時期は14世紀前半～中頃と考える。遺構の性格は不明である。

SK87 (第33・34図、図版33・37)

1区北半の東寄り、SB3の東側桁行から約5m東側に位置する。平面形はほぼ円形で、断面形は逆台形状を呈する。検出面での標高は12.31～12.34mである。規模は、直径が最大で0.88m、深さが0.41mを測る。埋土は、地山ブロックが多く混じる黒褐色土を主体とし、炭が混じる。出土した炭化材の樹種同定の結果は、広葉樹のウツギ属で、薪炭材として普通に利用される樹種であった。

遺物は、土師器の皿(347・348)、鍋(349)、甕(350)が出土した。347・348の復元径はそれぞれ7.5cmと7.2cmで、底部は回転ヘラ切りである。347は厚手で、体部が外傾し、348の体部は短く外傾しながら立ち上がる。349は口縁の外反が強く、内側に断面三角形の突帯を巡らせる。350は底径が復元で18.6cmあり、指オサエする。

出土炭化材の放射性炭素年代測定(AMS法)による暦年代範囲(2 σ)は、1304-1366calAD(75.31%)という結果が得られた。

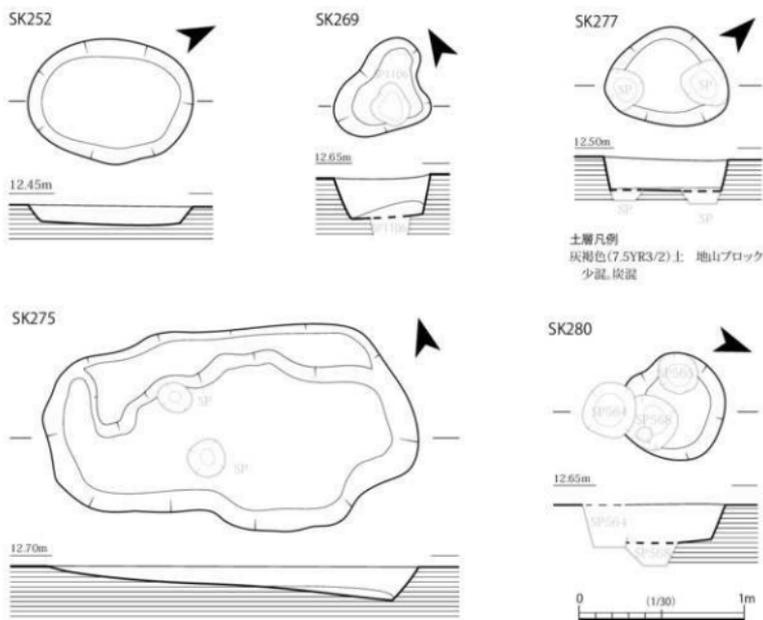
出土遺物と年代測定結果から、遺構の時期は13世紀代～14世紀中頃と考える。遺構の性格は不明である。

SK218 (第33・36図、図版34・37)

1区北半の西壁付近、SD1のから約5m南側に位置する。平面形は円形で、断面形は逆台形状を呈する。検出面での標高は12.10mである。規模は、直径が0.45m、深さが0.09mを測る。埋土は、地山ブロックが混じる褐色土を主体とする。

遺物は、土師器の杯(351)が出土した。底部から丸みをもちながら体部が開く。

出土遺物から、遺構の時期は13世紀代か。遺構の性格は不明である。



第35図 1区土坑実測図(3)

SK223 (第33・36図、図版33・37)

1区北半の西壁沿いにあり、SD 1 から約7 m南側に位置する。遺構の西半分は、調査区外のため確認していない。平面形は円形と推定され、断面形は皿状を呈する。検出面での標高は12.65～12.70 mである。規模は、最大径が検出面で3.50 m、底面で2.00 m、深さが0.70 mを測る。埋土は、1層(盤土)を除く3層からなる。2・3層はいずれも灰黄褐色粘質土で、2層は大小礫が混じる。4層は灰色粘質土で、湿地堆積土である。

遺物は、土師器の皿(352)と柱状高台杯(353)、瓦質土器の鉢(354)と陶器の甕(355)が出土した。352は体部が短く直立し、底部は回転ヘラ切りである。353は高台部に穿孔し、底面は回転糸切りする。354の外面の稜は緩やかである。355の底径は復元で12.8cmである。

出土遺物から、遺構の時期は13世紀代～14世紀中頃と考える。遺構の性格は不明である。

SK242 (第33・36図、図版34・37・38)

1区の中央付近に位置する。平面形は楕円形で、断面形は皿状を呈する。主軸方向はN 41°Wで、検出面での標高は12.57～12.60 mである。規模は、長径が1.48 m、短径が1.35 m、深さが0.22 mを測る。埋土は、地山ブロックが多く混じる褐灰色土を主体とし、東半分には、径5～10cmの礫が集中する。

遺物は、土師器の皿(358・359)と碗(360)、杯(361～363)が出土した。358と359の復

元径はそれぞれ 6.8cm と 7.6cm で、いずれも体部が短く外傾する。360 は薄手で、細い高台をもち、胎土は精良で、灰白色を呈する。361 は体部が外傾し、362 は体部が内湾気味に開くもので、361 と 363 の底部は回転系切りである。

出土遺物から、遺構の時期は 13 世紀代～ 14 世紀中頃と考える。遺構の性格は不明である。

SK246 (第 33・36 図、図版 34・37)

1 区中央付近の東寄り、東壁から約 1 m 離れて位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状を呈する。主軸方向は N 60° E で、検出面での標高は 12.27 m である。規模は、長径が 1.15 m、短径が 0.87 m で、深さが 0.12 m を測る。埋土中には木炭がぎっしり詰まっていた。出土炭化材の樹種同定の結果はマツ属複雑管束亜属であり、燃料材に適した樹種であった。

遺物は、土師器の杯 (356) と青磁椀 (357) が出土した。356 は体部が丸みをもちながら外傾し、底部は回転系切りである。357 は、外面に鎗蓮弁文がみられる。

出土炭化材の放射性炭素年代測定 (AMS 法) による暦年代範囲 (2 σ) は、1297-1327calAD (39.18%) 及び 1338-1396calAD (56.27%) という結果が得られた。

出土遺物と年代測定結果から、遺構の時期は 13 世紀末～ 14 世紀初で、遺構の性格は木炭焼成坑と考える。

SK252 (第 35・36 図、図版 34・38)

1 区中央付近の東寄り、SK246 から約 5 m 南西側に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状を呈する。主軸方向は N 27° E で、検出面での標高は 12.38 m である。規模は、長径が 1.00 m、短径が 0.77 m で、深さが 0.12 m を測る。

遺物は、土師器の皿 (364) が出土した。復元径が 6.4cm で、体部は緩やかに外傾し、底部は回転ヘラ切りである。

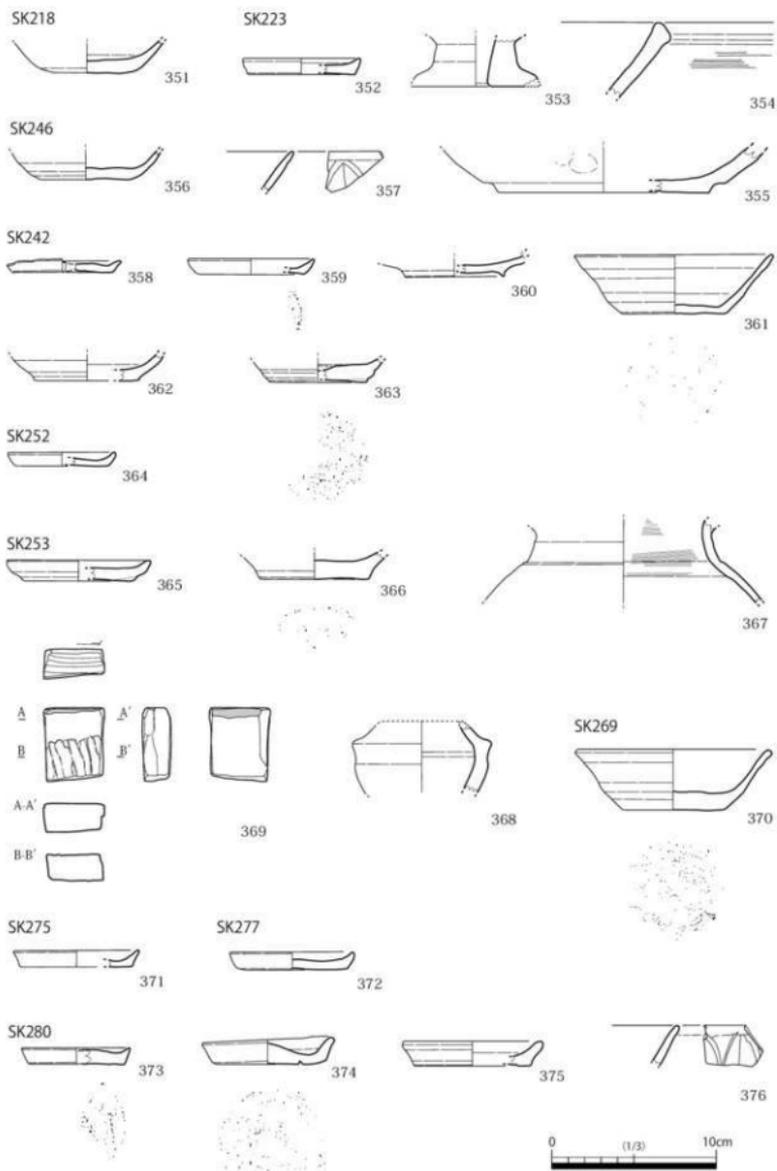
出土炭化材の放射性炭素年代測定 (AMS 法) による暦年代範囲 (2 σ) は、1218-1271calAD (95.45%) という結果が得られた。

出土遺物と年代測定結果から、遺構の時期は 13 世紀前半～後半と考える。

SK253 (第 33・36 図、図版 34・38)

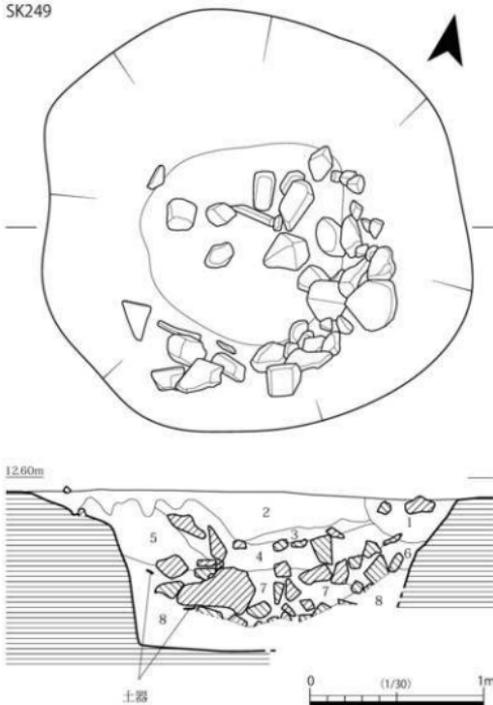
1 区の中央付近、SK242 から約 3 m 南東側に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状を呈する。主軸方向は N 15° W で、検出面での標高は 12.50～12.55 m である。規模は、長径が 2.75 m、短径が 2.25 m で、深さが 0.60 m を測る。埋土は 7 層に分けられ、1～3 層は灰褐色～褐色系の粘質土、4 層は黄褐色粘質土で、いずれも地山ブロックが多く混じる。5 層は混じりのない灰色の粘質土である。7 層は明緑灰色粘質土のグライ化層で、地山の可能性がある。

遺物は、土師器の皿 (365)、杯 (366) とミニチュア土器 (368)、陶器の壺 (367)、不明木製品 (369) が出土した。365 は復元径が 8.6cm で、365 は底部がやや高く、体部が内湾気味に開く。366 は、底部と体部の境が稜をもち、体部が外傾するもので、底部は回転系切りである。368 は、球状を呈する合子形で、外面上部は蓋受けと考える。367 は、頸部と胴部の接合部付近が突帯状になり、内外面は灰色系で、断面は赤味がかかる。福建省系の壺の可能性ある。369 は、残存長が 4.5cm、幅が 3.7cm、厚さが 1.75cm であり、表裏両面の上端部分を斜めに削り取る。柁目取りで、正面下半部には、



第 36 图 1 区土坑出土遺物実測図 (2)

SK249



土層凡例

- 1 褐灰色(7.5YR5/1)粘質土 大小礫多混、炭少混
- 2 灰褐色(7.5YR5/2)粘質土 大小礫多混、炭少混
- 3 灰色(N4/)粘質土
- 4 暗灰色(5PB4/)粘質土 明赤褐色(2.5YR5/8)砂の小ブロック多混、大小礫混、炭少混
- 5 青灰色(5B5/1)細砂混じり粘質土 明褐色(7.5YR5/6)砂質土との混漚土、炭少混
- 6 不明
- 7 暗青灰色(5B4/1)粘土 粘性強
- 8 暗青灰色(5B4/1)細砂混じり粘質土 明褐色(7.5YR5/6)砂質土ブロック混

第37図 1区SK249実測図

14世紀前半～中頃と考える。遺構の性格は不明である。

SK275 (第35・36図、図版35・38)

1区北半の中央付近、SA 5から約3.5 m西側に位置する。平面形は隅丸長方形に近く、底面は西から東に向かって深くなる。底面の中央付近に柱穴2個があるが、先後関係は不明である。主軸方向はN 75°Wで、検出面での標高は12.10 mである。規模は、長さが長軸で2.25 m、短軸で1.24 m、深さが東側の最深部で0.22 mを測る。

遺物は、土師器の皿(371)が出土した。復元径が7.6cm、底部と体部の境が稜をもち、体部が外傾する。底部は回転ヘラ切りである。

下方向の圧力による幅が0.4～0.7cm、深さが0.5mmの表皮剥落があり、それと呼応して、正面右側面の上半に長さが1.7cm、幅が0.55cm、高さが0.15cmの長方形の突起がみられる。この突起が下からの加圧を受け止めるとみて、建材のうち、楔状の用途品の可能性がある。

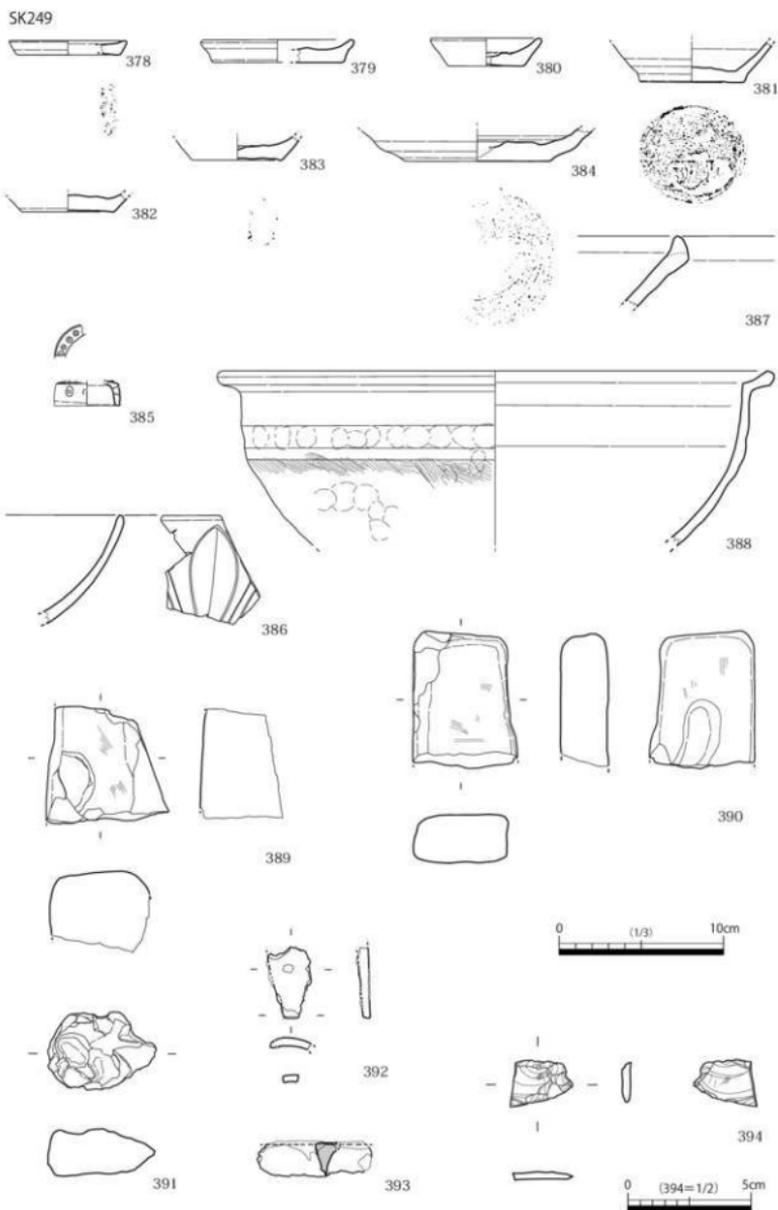
出土遺物から、遺構の時期は14世紀中頃～後半と考える。遺構の性格は不明である。

SK269 (第35・36図、図版34・38)

1区北半の中央付近にあり、SA 5から約2.5 m西側に位置する。平面形は不整形で、断面形は逆台形状を呈する。底面南側をSP1106が掘り込むが、先後関係は不明である。検出面での標高は12.57 mである。規模は、長さが最大で0.68 m、深さが0.26 mを測る。

遺物は、土師器の杯(370)が出土した。復元径が11.6cmで、底部と体部の境は緩やかで、体部が外反気味に開く。底部は回転糸切りである。

出土遺物から、遺構の時期は



第 38 图 1 区 SK249 出土遗物实测图

出土遺物から、遺構の時期は13世紀代と考える。遺構の性格は不明である。

SK277 (第35・36図、図版35・38)

1区北半の東寄り、SB3の範囲に位置する。平面形は隅丸三角形、断面は長方形を呈する。底面の東西両端にそれぞれ柱穴があるが、先後関係は不明である。検出面での標高は12.48mである。規模は、長さが長軸で0.76m、短軸で0.60m、深さが0.21mを測る。埋土は、炭混じりの灰褐色土を主体とする。

遺物は、土師器の皿(372)が出土した。復元径が7.4cmで、体部が内湾気味に開く。底部は回転ヘラ切りである。

出土遺物から、遺構の時期は14世紀前半～中頃と考える。遺構の性格は不明である。

SK280 (第35・36図、図版35・38)

1区北半の東寄り、SK44のすぐ南東側に位置し、SB3の範囲にある。平面形は不整形円形で、断面形は逆台形状を呈する。南壁をSP564が壊す。底面の東西にそれぞれSP568とSP565があるが、先後関係は不明である。検出面での標高は12.53mである。規模は、直径が最大で0.65m、深さが0.24mを測る。

遺物は、土師器の皿(373～375)と青磁椀(376)が出土した。373の復元径は6.5cmで、底部が厚手で、体部が短く立ち上がる。374と375は8.0cm前後、全体に厚手で体部が外反気味に開き、374は底部中央が盛り上がる。いずれも底部は回転ヘラ切りである。376は、外面に鋤蓮弁文があり、龍泉窯系である。

出土遺物から、遺構の時期は13世紀代～14世紀中頃と考える。遺構の性格は不明である。

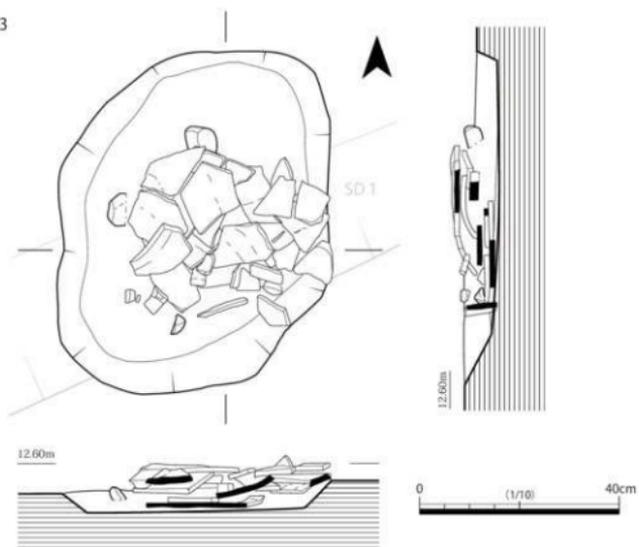
SK249 (第37・38図、図版39～41)

1区の中央やや東寄りに位置する。平面形は不整形円形で、断面は上部で緩やかに下部はほぼ垂直になる。検出面での標高は12.48～12.52mである。規模は、直径が2.56m、深さが0.98mを測る。土坑の中位付近には、10～30cm大の角礫が集積するが、組み合っていない。埋土は8層に分かれ、1～4層は、灰色～灰褐色系の粘質土を主体とし、5層以下は青灰色系の粘質土または粘土で、グライ化する。1・2・4層には大小礫が混じり、4・5・7層には明褐色系の砂質土がブロック状に混じる。

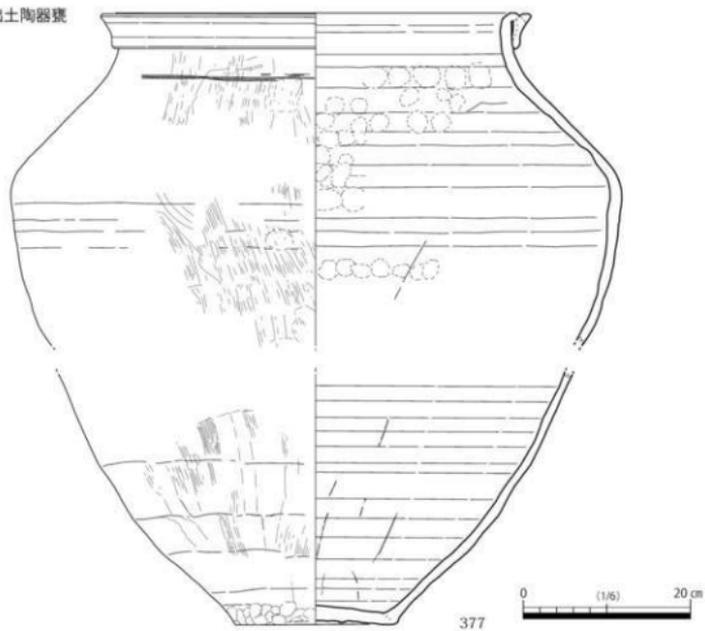
遺物は、378～380・382・383は土師器の皿である。378は復元径が7.1cmで、底部端を少しつまみ上げ体部とする。379は復元径が9.0cmで、底部は厚手で、体部は外反する。380は復元径が6.6cmで、狭い底部から内湾気味に体部が開く。381・384は土師器の杯である。381は底部と体部の境が屈曲し、体部が外傾する。384は底径が復元で8.8cm、体部が湾曲気味に開く。底部は378が回転ヘラ切り、他は回転系切りである。

385は青磁小壺の蓋である。復元径は4.0cm、側面に少なくとも2個の円孔があり、天井部には陽刻の連続珠文を入れる。口縁端部は軸を欠きとる。386は椀で、外面に鋤蓮弁文を入れる。龍泉窯系である。387は東播系須恵器の鉢である。口縁部外面は緩やかに曲がり、内面は短く折れ、端部ですばまる。388は土師器の鍋で、復元径が33.0cm、口縁部が「く」字状に折れる。外面はハケ目と指オサエで調整し、煤が付着する。389と390の砥石で、いずれも珪質片麻岩製である。394は黒

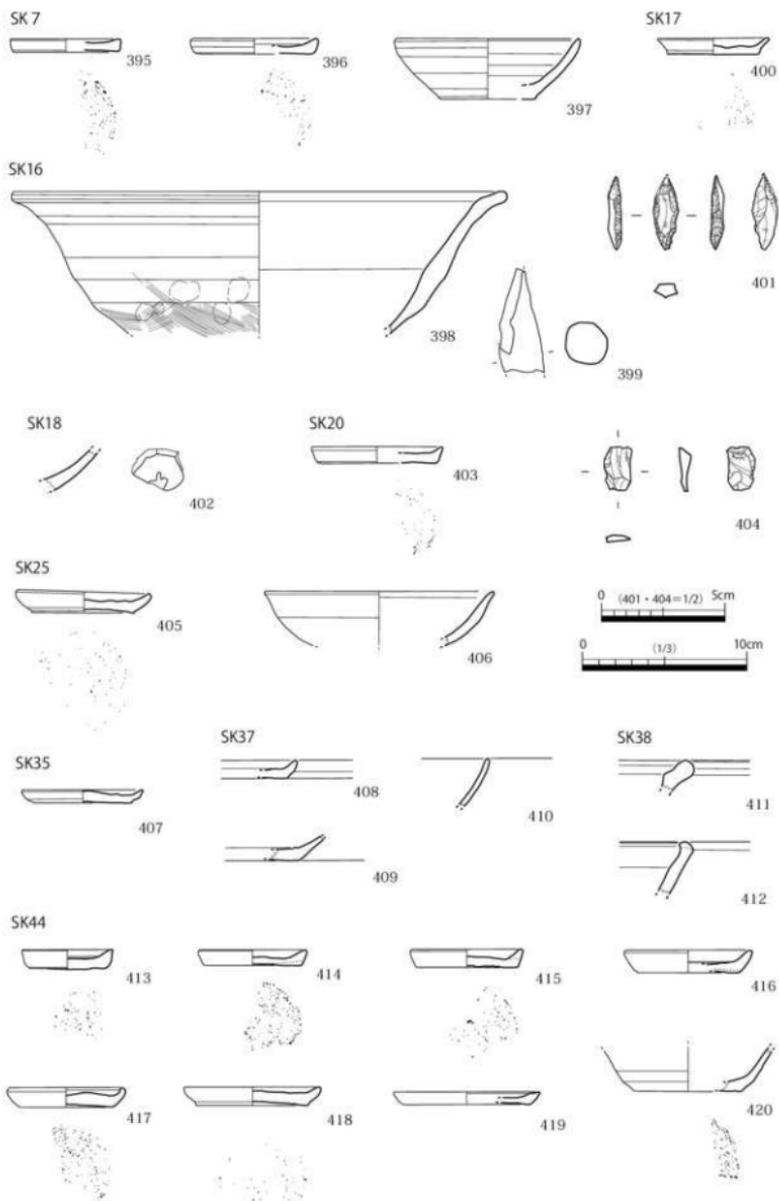
SK283



SK283出土陶器甕



第 39 图 1 区 SK283 实测图



第 40 图 1 区土坑出土文物实测图 (3)

曜石の剥片である。391は椀形滓である。392は不明鉄製品で、残存長が3.35cm、最大幅が2.7cm、厚さが0.6cmである。393は、鉄製刀子の可能性が有る。残存長が7.0cm、最大幅が2.2cmで、上部で厚さが1.3cm、下部ですばまり、断面三角形を呈する。

出土遺物から、遺構の時期は13世紀代～14世紀中頃と考える。遺構の性格は水溜遺構と考える。
SK283 (第39図、図版39・40)

1区北半の西寄り、SD1南端付近の埋土上に掘り込まれていた。平面形は不整形で、断面形は逆台形状を呈する。主軸方向は北である。検出面での標高は12.48～12.53mである。規模は、長さが長軸で1.34m、短軸で1.06m、深さが0.11mを測る。

遺物は、陶器の甕(377)の破片が積み重なった状態で出土した。甕の復元径は51.5cm、底径が20.0cm、胴部最大径が復元で73.6cmを測る。上半と下半の接点はないが、器高は約70.0cmと推定する。口縁部の外面に幅4.5cmの帯を貼り付けるほか、胴部上位に最大径があり、肩が張る形態である。色調は外面が橙色～赤褐色、内面が赤橙色～赤色を呈し、調整は全体にヨコナデやナデ、指オサエで、外面にハケ目がみられる。常滑焼である。

出土遺物から、遺構の時期は14世紀後半で、土器埋設土坑と考える。

土坑出土遺物 (第40～43図、図版42～47)

395～397はSK7出土で、395と396は土師器の皿で、395の復元径が6.6cm、396は7.6cmで、いずれも体部が短く直立させ、底部は回転ヘラ切りである。397は杯で、体部が内湾気味に開き、底部は回転糸切りである。

398と399はSK16出土である。398は銅で、口縁部が外反し、胴部外面の下半にハケ目を施す。外面に煤が付着する。399は足銅の脚部で、指オサエで調整し、一部被熱により赤変する。

400と401はSK17出土である。400は土師器の皿で、復元径が6.7cm、体部は外反する。底部は回転糸切りである。401はナイフ形石器で、残存長が3.0cm、幅が1.0cm、厚さは0.5cmを測る。横長剥片を素材とし、正面右側縁及び左側縁下半の二側縁加工である。安山岩製である。

402はSK18出土の青磁椀である。外面に鎗蓮弁文を施す。龍泉窯系である。

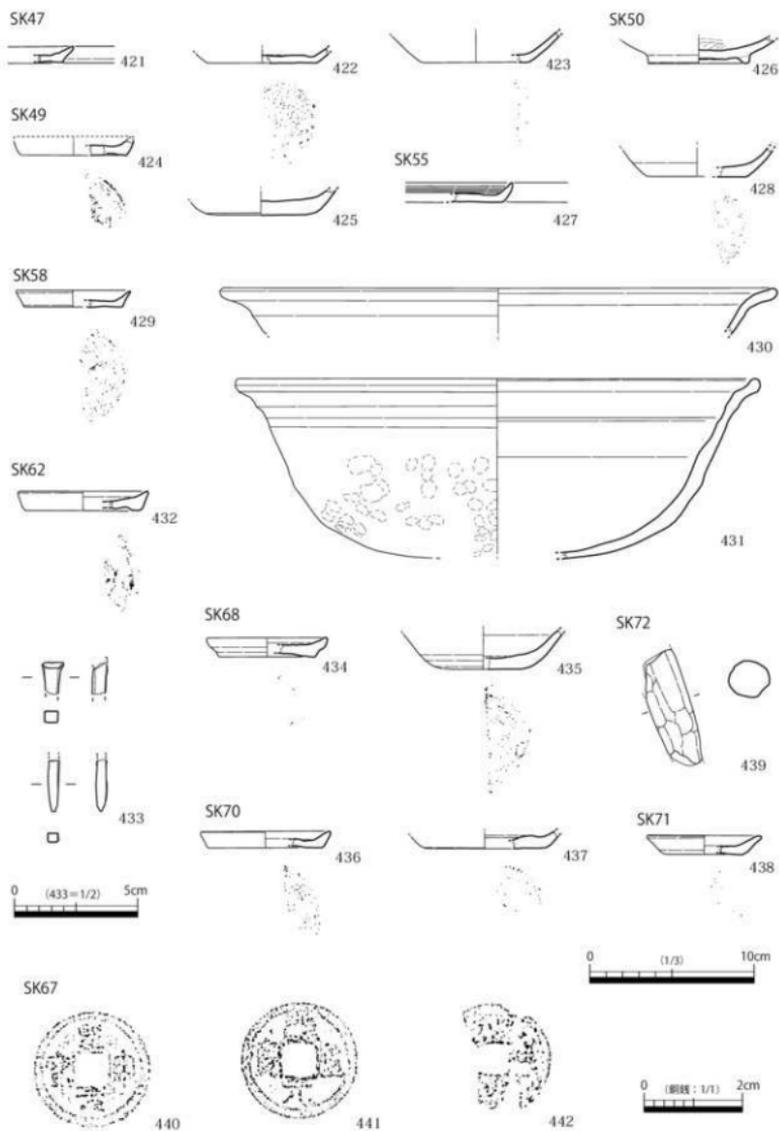
403と404はSK20出土である。403は土師器の皿で、復元径が8.0cm、体部は短く直立する。底部は回転ヘラ切りである。404は黒曜石の剥片である。残存長が1.75cm、幅が1.05cm、厚さが1.3cmを測る。

405と406はSK25出土である。405は土師器の皿で、口径が8.0cm、体部は内湾気味に開く。底部は回転糸切りである。406は土師器の杯である。体部中位でやや稜が入り、口縁部が外反する。

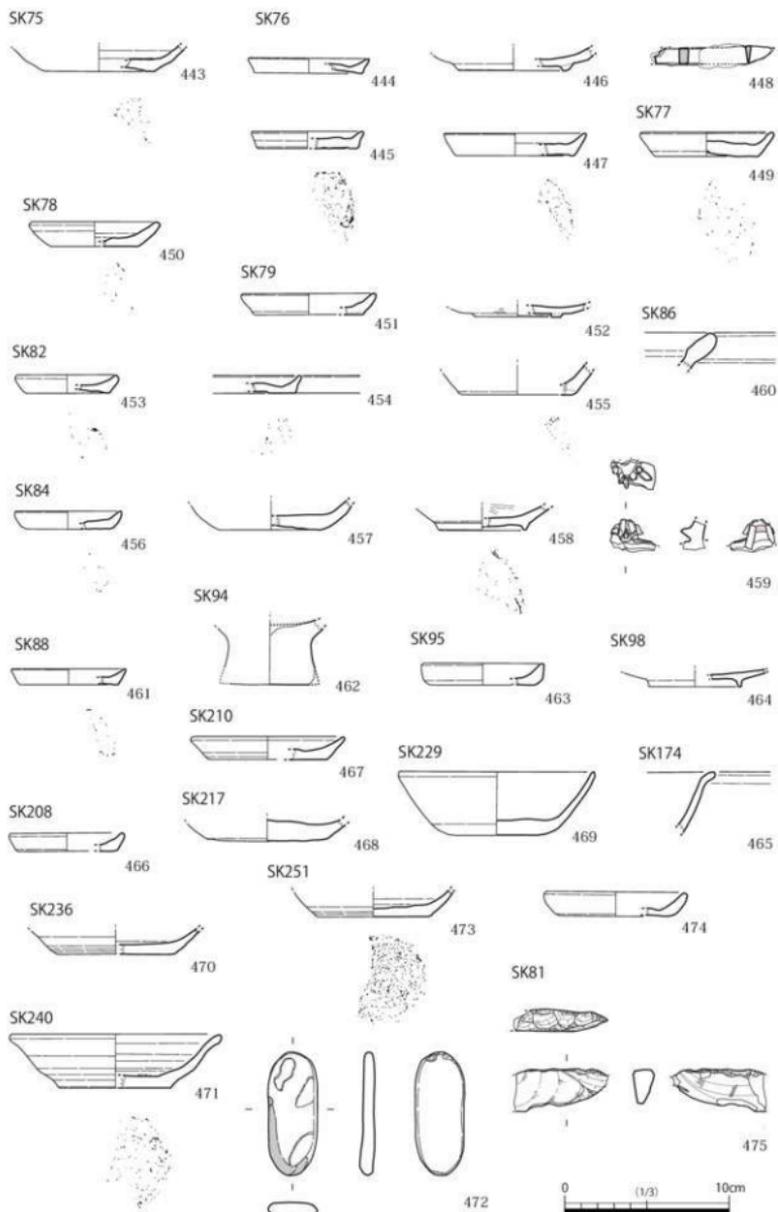
407はSK35出土の土師皿である。復元径は7.4cm、底部内面の中央が盛り上がり、体部は内湾気味に開く。底部は回転ヘラ切りか。

408～410はSK37出土である。408と409は土師器の皿で、408は体部が内湾気味に開き、409は外傾する。410は杯の口縁部で、体部が内湾気味に立ち上がるものである。

411と412はSK38出土の土師器の銅である。411は口縁端部が丸く肥厚し、412は口縁端部を短く内側に折る。いずれも口縁部内面は強い回転ナデによって凹む。



第 41 图 1 区土坑出土文物实测图 (4)



第 42 图 1 区土坑出土遗物实测图 (5)

413～420はSK44出土である。413～419は土師器の皿で、口径は、5.1～7.0cmと7.1～9.0cmに大きく分かれる。体部は、直立するもの(413～415)、外傾するもの(416・418・419)、内湾気味に開くもの(417)に大きく分かれる。底部は、413・417・418は回転糸切りの可能性があり、他は回転ヘラ切りである。420は土師器の杯で、体部が底部から緩やかに外傾する。底部は回転糸切りである。

421～423はSK47出土である。421は土師器の皿で、体部が外反気味である。422と423は土師器の杯で、体部が外傾すると考える。底部は回転糸切りである。

424と425はSK49出土である。424は土師器の皿で、体部が短く外反し、底部は回転糸切りか。425は土師器の杯で、体部が緩やかに開く。底部は回転糸切りである。

426はSK50出土の土師器の椀である。断面逆台形の高台をもち、内面はミガキを施す。

427と428はSK55出土である。427は土師器の皿で、体部は内湾気味に開き、内面体部に3条の沈線が入る。底部は回転糸切りである。428は体部が内湾気味に開き、底部は回転糸切りである。

429～431はSK58出土である。429は土師器の皿で、復元径が7.0cm、体部は外傾する。底部は回転ヘラ切りである。430と431は土師器の鍋で、いずれも口縁部が外反し、内面が凹む。431は口縁部の直下に数条の凹凸がみられ、体部外面は指オサエ及びナデで仕上げる。

432と433はSK62出土である。432は土師器の皿で、復元径が7.8cm、体部は短く外傾する。底部は回転ヘラ切りである。433は和釘である。断面方形で、残存長は頭部が1.3cm、先端部が2.1cmで、同様に幅が0.9cmと0.4cm、厚さが0.45cmと0.35cmを測る。

435と434はSK68出土である。434は土師器の皿で、復元径が6.7cm、体部が内湾気味に開き、底部は回転ヘラ切りである。435は土師器の杯で、体部が湾曲しながら開き、底部は回転糸切りである。

436と437はSK70出土である。436は土師器の皿で、復元径が7.7cm、体部は外傾し、底部は回転糸切りである。437は土師器の杯で、体部が底部から緩やかに開くと考える。底部は回転ヘラ切りである。

438はSK71出土の土師器の皿で、復元径が6.7cm、体部が外反する。底部は回転ヘラ切りである。

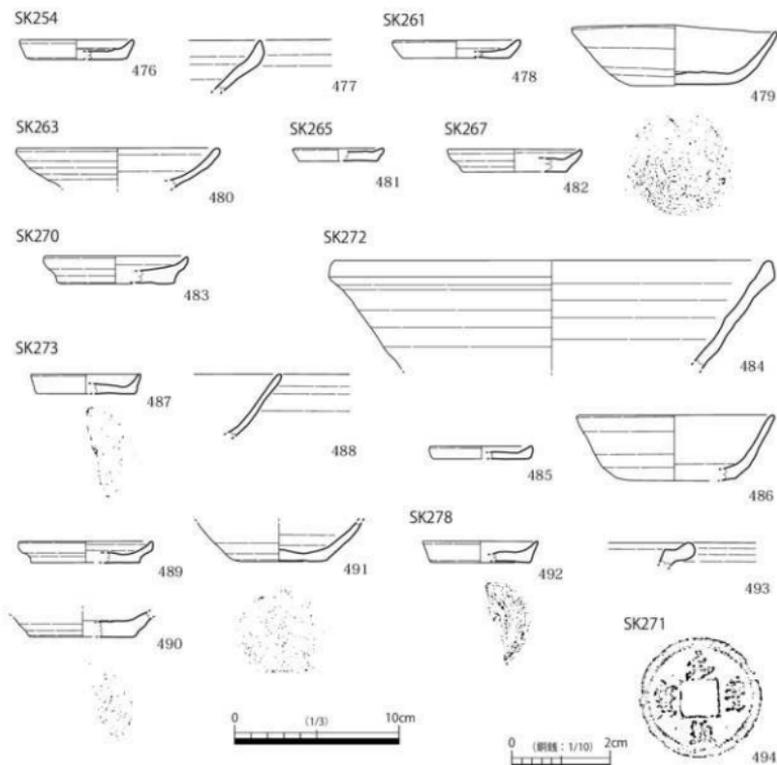
439はSK72出土の土師器足鍋の脚部である。指オサエで調整する。

440～442はSK67出土の銅銭である。いずれも円形方孔で、長径が約2.4cmである。440は篆書体で「皇宋元寶」(初鑄1253年)、441は真書体で「開元通寶」(初鑄621年)の銘がみられ、前者が南宋銭、後者が唐銭である。

443はSK75出土の土師器の杯である。体部は内湾気味に開き、底部は回転糸切りである。

444～448はSK76出土である。444・445・447はいずれも土師器の皿で、444と445は口径が7.0cm前後で、体部が短く外反する。447は復元径が8.5cmで、厚手の底部から体部が外傾する。底部は447が回転ヘラ切り、他は回転糸切りである。446は土師器の椀で、断面逆台形状の高台をもつ。色調は内外面とも灰白色を呈する。448は鉄製刀子で、関部を造り出さない。残存長が7.4cm、最大幅が1.0cm、厚さが0.55cmを測る。

449と450は、それぞれSK77とSK78出土の土師器の皿である。449は復元径が7.9cmで、体部は外傾する。450は復元径が7.6cmで、体部は内湾気味に開く。いずれも底部は回転糸切りである。



第43図 1区土坑出土遺物実測図(6)

451と452はいずれもSK79出土である。451土師器の皿で、復元径が8.0cm、体部は外形する。底部は回転糸切りである。452は瓦器碗で、低平な高台をもつ。外面に短くミガキが残る。

453～455はSK82出土である。453と454は土師器の皿で、453は復元径が6.0cm、体部は厚手で外傾し、454は体部がやや外反する。いずれも底部は回転ヘラ切りである。455は土師器の杯で、体部が外傾し、底部は回転糸切りである。

456～459はSK84出土である。456は土師器の皿で、復元径が6.0cm、体部が内湾気味に開く。底部は回転糸切りである。457は土師器の杯で、体部が内湾気味に開く。外面底部を板状工具でナデする。458は碗で、細い断面逆台形状の高台が付く。色調は内外面とも灰白色を呈し、内面はミガキ、底部は回転糸切りである。459は青磁の香炉または小壺の蓋である。中空のつまみで、「くたかけ」(筥)の意匠か。

461はSK88出土の土師器の皿である。復元径が7.0cmで、体部は外傾する。底部は回転糸切りで、板状圧痕がみられる。462はSK94出土の土師器の柱状高台杯である。463はSK95出土の土師器の

皿である。463は復元径が7.3cm、体部が底部から湾曲して直立する。464はSK98出土の白磁の皿である。狭小の高台をもち、畳付を施軸する。465はSK174出土の青磁碗である。口縁部は外反し、内外面とも貫入が著しい。

466と467はそれぞれSK208とSK210出土の土師器の皿である。466は復元径が6.8cm、体部は内湾気味に開き、底部は回転糸切りである。467は復元径が9.2cm、体部が外傾し、底部は回転ヘラ切りである。

468はSK217、469がSK229、470はSK236からそれぞれ出土した土師器の杯である。468は体部が底部から湾曲気味に開く。469は体部が底部から湾曲して外傾する。口縁部外面及び外底面に煤が付着する。いずれも底部は回転ヘラ切りである。470は体部が外傾し、底部は回転糸切りである。

471と472はSK240出土である。471は土師器の杯で、体部が口縁付近で外反する。底部は回転糸切りである。472はヘラ状石製品で、長さが7.55cm、幅が3.0cm、厚さが0.9cmを測る。正面左下半部と裏面を研磨する。塩基性片岩製である。

473と474はSK251出土である。473は土師器の杯で、体部が内湾気味に開く。底部は回転糸切りである。474は土師器の皿で、復元径が8.4cmである。

475はSK81出土の安山岩の剥片である。長さが2.6cm、残存幅が5.7cm、厚さが1.8cmを測る。

476と477はSK254出土である。476は土師器の皿で、復元径が6.8cm、体部は外傾する。底部は回転ヘラ切りである。477は東播系須恵器の鉢である。口縁部外面は内湾する。

478と479はSK261出土である。478は土師器の皿で、復元径が7.6cm、体部は外傾する。479は土師器の杯で、体部が底部から湾曲して外傾する。底部は回転糸切りである。

480はSK263出土の土師器の杯である。体部が内湾気味に強く開き、体部外面には強い回転ナデによる凹凸がみられる。

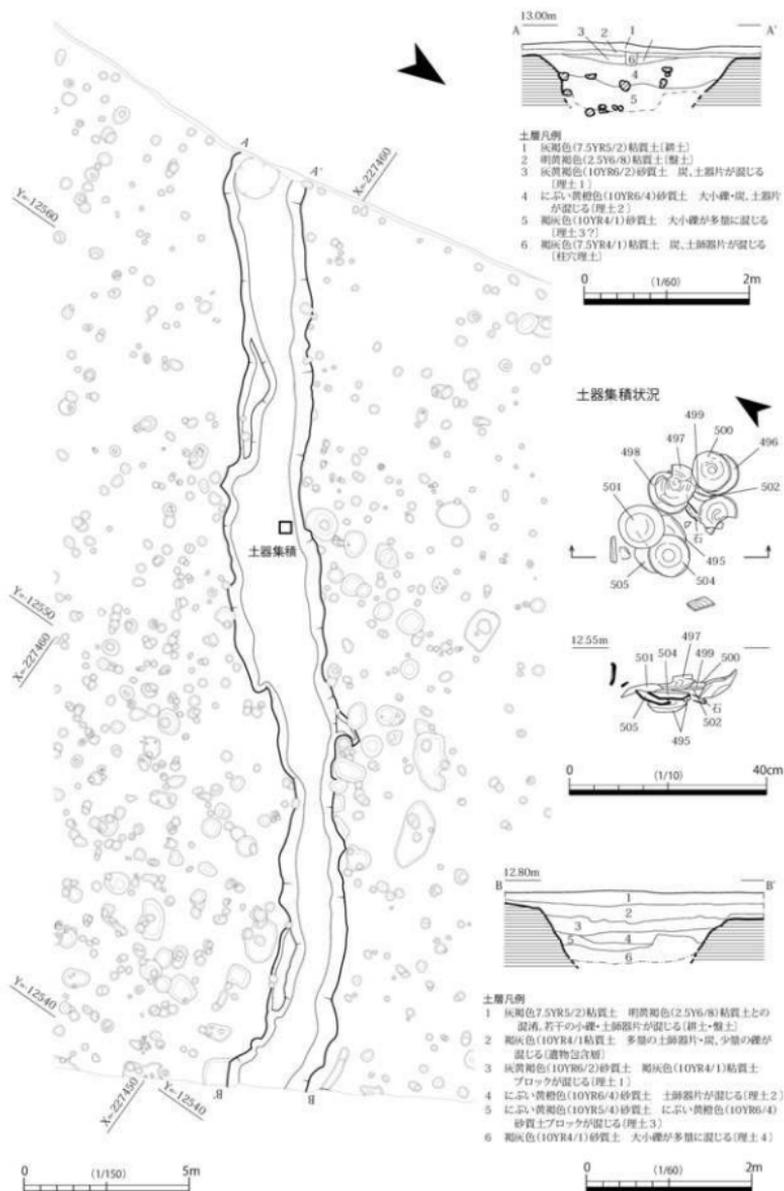
481～483はそれぞれSK265、SK267、SK270出土のいずれも土師器の皿である。481は復元径が5.4cmで、厚手の底部から体部が短く外反する。482と483はそれぞれ復元径が8.0cmと8.6cmで、いずれも厚手の底部から体部が外反しながら立ち上がり、内湾気味に開く。いずれも底部は回転ヘラ切りである。

484～486はSK272出土である。484は東播系須恵器の鉢で、復元径が26.2cm、口縁端部の外面に弱い稜をもち、黒変する。内外面とも回転ナデによる凹凸がみられる。485は土師器の皿で、復元径が6.2cm、体部が短く直立する。486は土師器の杯で、体部は底部から湾曲して外傾する。

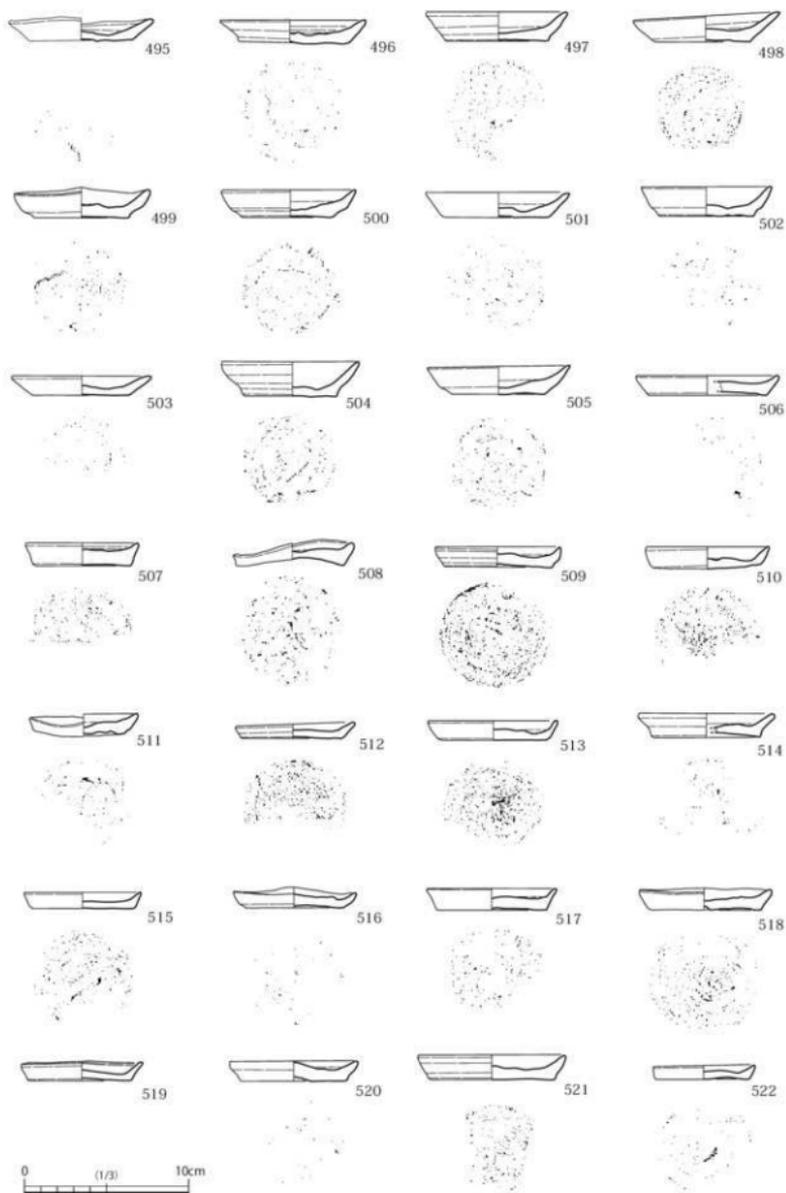
487～491はSK273出土である。487と489は土師器の皿で、復元径はそれぞれ6.7cmと8.0cmである。487は体部が直立し、底部は回転糸切りか。488は体部が外反しながら開き、短く直立する。488・490・491は土師器の杯で、490は体部が外傾し、491は体部が内湾気味に開く。どちらも底部は回転糸切りである。

492と493はSK278出土である。492は土師器の皿で、復元径が7.0cm、体部が外傾し、底部は回転糸切りである。口縁部外面の一部に炭化物が付着する。493は鍋の口縁部で、口縁は上向きに曲がり、内面が凹む。端部は丸みをもつ。

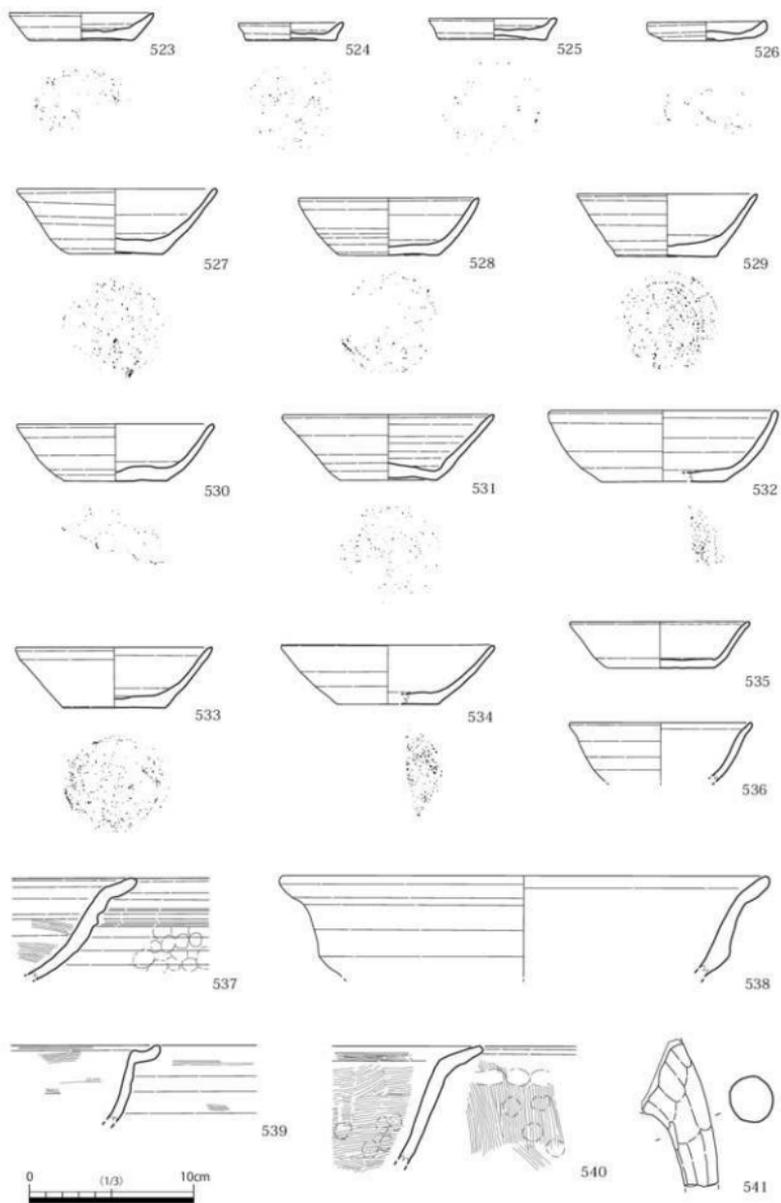
494はSK271出土の銅銭である。円形方孔で、直径が2.5cmである。行書体で「元豊通寶」（初鑄



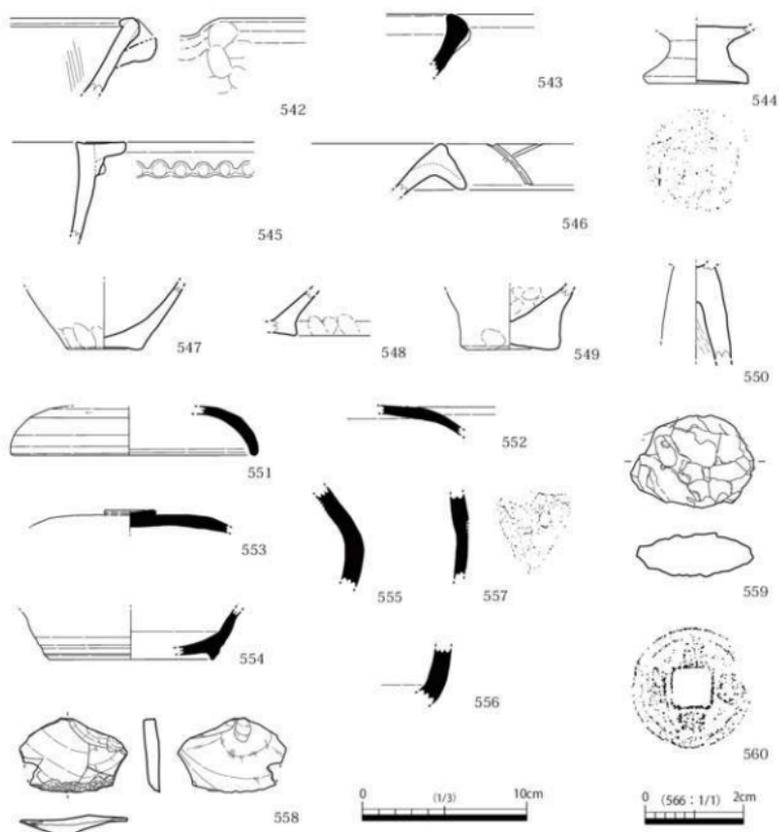
第44図 1区SD 1実測図



第45图 1区SD1出土遺物実測図(1)



第46图 1区SD1出土文物实测图(2)



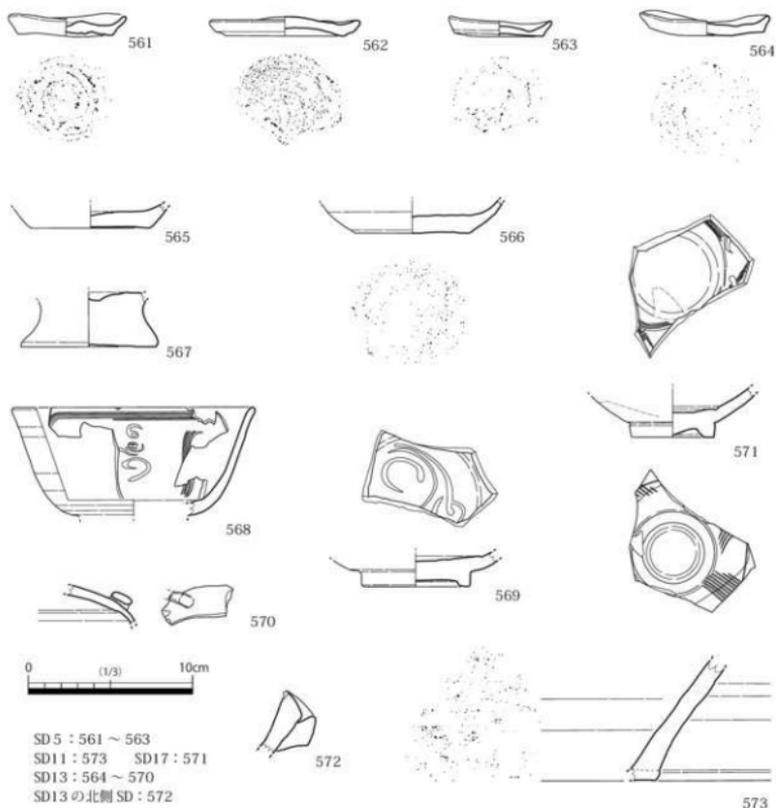
第47図 1区SD 1出土遺物実測図(3)

1078年)の銘がある。北宋銭である。

⑤溝

SD 1 (第44～47図、図版48～54)

1区北端付近を南西から北東にかけて延び、主軸方向はN 53° Eである。規模は、長さが28.20 m、上端と下端それぞれの幅が最大で2.65 mと2.00 m、最小で1.10 mと0.50 m、深さは最深で0.70 mを測る。底面の標高は、西壁付近で11.90 m、東壁付近で11.70 mであり、東壁側がやや低く、2区から1区に向けて水流したと考える。埋土は、西壁付近(A-A')では3層に分けられる。3・4層は黄褐色～黄褐色系の砂質土で、4層では大小礫が混じる。5層は大小の礫が多く混じる褐灰色



第 48 図 1 区溝出土遺物実測図

砂質土で、湧水がある。一方の東壁付近（B-B'）は 4 層に分けられる。3～5 層は黄褐色～黄橙色系の砂質土で、3 層では褐灰色粘質土ブロックが混じる。6 層は褐灰色砂質土で、大小礫が多く混じり、湧水がある。

遺物は、埋土中から多く出土したが、最上層～上層の遺物は、SD 1 埋土に伴うものか埋土上から掘り込んだ遺構に伴うものなのか判然としない。495～505 は、SD 1 の中央付近の北壁側、標高約 12.40 m の最上層からまとめて出土した土師器の皿である。埋土中に掘り込まれた別の土坑に伴うと考える。いずれも口径が 8.0～9.0cm で、底部は回転ヘラ切りである。形態は、浅底で体部が外傾するもの（495・496・498・501・503）とやや深底で体部が内湾気味に開くもの（497・499・500・502・504・505）に大きく分かれる。地鎮に使用された可能性がある。

506～519、523・524 は最上層～上層、521・522・525 は中層、526 は埋土からそれぞれ出土した土師器の皿である。口径は 6.9cm 以下、7.0～7.9cm、8.0cm 以上があり、7.0～7.9cm のものが

ほとんどである。体部は外傾または外反するもの(506・510・512～515・517～521・523～525)、内湾気味に開くもの(509・511・516・526)、短く外傾または直立するもの(507・508・522)がある。518と523は底部が回転系切りか。他は回転ヘラ切りである。また、焼き歪みが著しいもの(508・511)も含まれる。

527～529・531・533は最上層～上層、530は中層、532・534は埋土からそれぞれ出土した土師器の杯である。体部が外傾するもの(527・529・531・533・534)、体部が内湾気味に開くもの(528・530・532)がある。底部はいずれも回転系切りである。

535は最上層から出土した白磁の皿、536は白磁の椀である。前者は外面が一部露胎し、口禿しており、後者は口縁部が外反し、口禿する。537～540はいずれも最上層から出土した土師器の鍋、541は足鍋の足である。口縁部は「く」字状に折れるもの(537・540)、L字状に折れるもの(539)、外反するもの(538)がある。542は土師器摺鉢の注口部で、内面に5条単位のおろし目がみられる。543は東播系須恵器の鉢で、注口部付近の破片であり、口縁部外面の稜は緩やかである。544は柱状高台付の杯で、底部は回転系切りである。

545～549はいずれも弥生土器である。545は最下層出土の逆L字状の口縁をもつ甕で、直下に突帯を貼り付け、連続押圧文を入れる。546は垂下口縁をもつ甕で、斜格子文を入れる。547は下層出土の壺、548は中層、549は最下層からそれぞれ出土した甕の底部である。いずれも短く上げ底で、547は底部から胴部にかけて緩やかに開き、549は底部から直立後、胴部が開く。550は中層から出土した土師器の高杯の脚部である。

551～557は須恵器である。551は中層、552・553は下層から出土した杯蓋、554は杯身である。551と552は全体に丸みを持ち、古墳時代後期に比定する。553はつまみ、554は底端に高台を持ち、555と556は須恵器の壺または瓶の胴部である。553～556は8世紀代に比定する。557は器台の脚部で円形刺突文を施す。

558は最下層出土の削器で、安山岩製である。559は最下層出土の椀形滓である。560は銅銭で、真書体で「□(皇力)宋通寶」(初鑄1039年)とある。北宋銭と推定する。

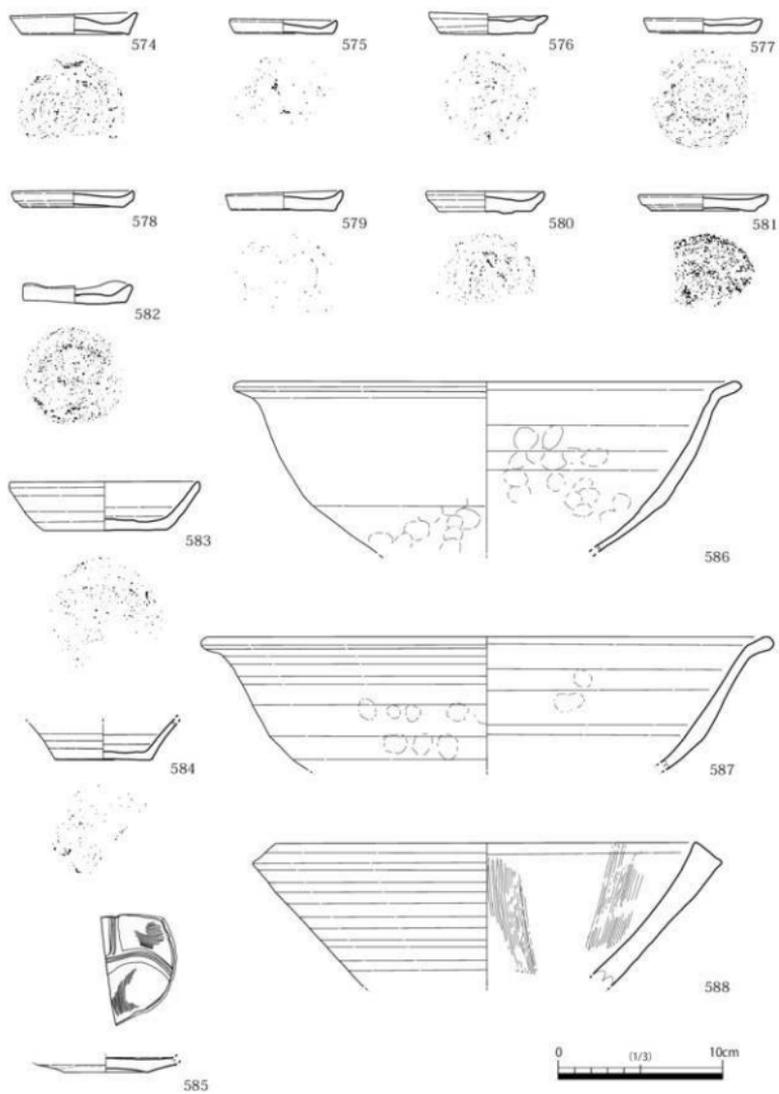
以上、SD 1の最下層～下層から出土した遺物の下限は8世紀代であり、13世紀代には埋没し、溝としての機能を失ったと考える。

溝出土遺物(第48図、図版54)

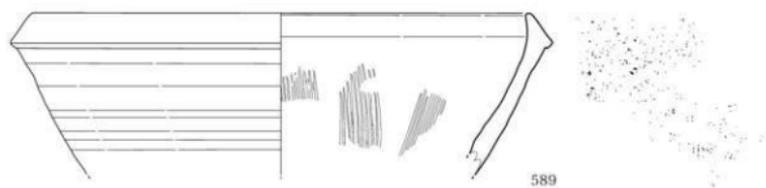
561～563はSD 5出土の土師器の皿である。561は口径が7.0cm、563は復元径が6.1cmで、体部が外傾し、底部は回転ヘラ切りである。562は復元径が8.9cmで、焼き歪みのため、底部はかなり盛り上がる。体部は短く内湾気味に開き、底部は回転系切りである。

564～570はSD13出土の遺物である。564は土師器の皿で、口径は7.9cm、体部は短く外反し、底部は回転ヘラ切りで、焼き歪みがある。565と566は土師器の杯で、いずれも体部が内湾気味に開き、底部は回転系切りである。567は土師器の柱状高台杯である。

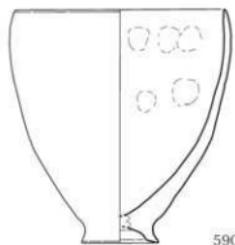
568・569は青磁碗である。568は内面の口縁部に4条の沈線、体部に飛雲文と縦位の櫛歯文を施す。569は畳付が露胎し、見込みに草花文を施す。いずれも龍泉窯系で、12世紀中頃～後半に比定する。



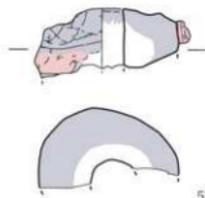
第49图 1区遗構外遺物実測図(1)



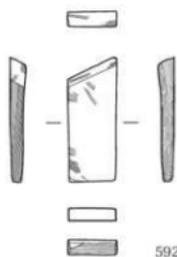
589



590



591



592



593



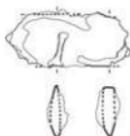
597



598



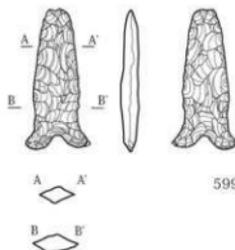
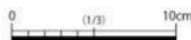
594



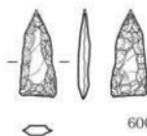
595



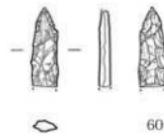
596



599



600



601



第50图 1区遺構外遺物実測図(2)

570 は青磁の壺の肩部片で、横方向の耳が貼付する。

571 はSD17 出土の青磁椀で、内面の体部下半にヘラ描きの草花文と櫛歯列点文、外面の体部下半に櫛歯文を施す。12 世紀中頃～後半に比定する。

572 はSD13 の北側SD から出土した陶器の摺鉢である。注口部の破片で、内面に3 条のおろし目が残存する。573 は陶器の摺鉢の底部付近の破片で、内面に10 条単位のおろし目を施す。いずれも備前焼である。

⑥遺構外遺物（第49・50 図、図版55～57）

574～582 は土師器の皿である。口径は、7.0cm以下と、7.1cm以上に大きく分けられる。体部は、外傾または短く外傾するもの（574・575・577・579・582）と、内湾気味に開くもの（578・580・581）、厚手の底部から短く外に開くもの（576）がある。いずれも底部は回転ヘラ切りである。583 と584 は土師器の杯である。583 は体部が緩やかに外傾する。いずれも底部は回転糸切りである。585 は青磁皿である。見込みに櫛歯による草花文を施す。底部外面は露胎で、回転ヘラ切りである。

586 と587 は鍋で、口縁が「く」字状に折れる。内外面とも回転ナデと指オサエで調整し、外面に煤が付着する。

588 と589 はいずれも備前焼の摺鉢である。588 は口縁部外面に鋭い稜が入り、断面四角形状を呈し、内面に9 条単位のおろし目を入れる。589 は口縁端部の幅が広く、段をもち、内面に9 条単位のおろし目を入れる。いずれも14 世紀後半～15 世紀前半に比定する。590 は弥生土器の鉢で、脚台が付く。底部内面は黒変する。

591 は鞆羽口で、残存長が4.3cm、幅が復元で8.8cm、孔径が2.7cmを測る。外面から断面の外半分にかけて被熱で黒変する。外面の一部に鉄滓が付着する。

592 は砥石で、長さが7.65cm、幅が3.0cm、厚さが1.0mを測る。研砥面は裏面を除く5面で、仕上砥に使用されたと考える。砂質片岩製である。593 は台座状石製品で、長さが13.25cm、残存幅が15.3cm、厚さが1.3cmを測る。上下両端面を研磨している。砂質片岩製である。

594 は鉄製刀子で、茎は断面長方形を呈する。残存長が7.3cm、幅は刃部で1.4cm、茎で0.8cm、厚さは0.35cmを測る。595・596 は不明鉄製品で、595 は、上面が凸状に湾曲する。残存長が7.6cm、残存幅が3.5cmで、厚さが0.7cmを測る。596 は矩形の板状品で、残存長が3.4cm、幅が3.3cm、厚さが0.9cmを測る。597 は銅銭で、楷書体で「景祐元寶」（初鑄1034年）とある。北宋銭である。

598 は管状土錘である。残存長が2.9cm、幅が1.1cm、孔径は0.4cmを測る。

599 はトトロ石器である。基部は外反し、長さが5.7cm、基部の幅が残存値で2.5cm、厚さは0.7cmを測る。チャート製で、長軸方向に沿って縦・横方向の縮模様がみられる。600 と601 はいずれも安山岩製の石鏃である。600 は平基式の剥片鏃で、残存長が3.4cm、最大幅が1.45cm、厚さは0.4cmを測る。601 は残存長が3.1cm、最大幅が1.1cm、厚さが0.4cmを測る。表裏両面の中央部に素材面を残す。

第1表 1区出土土器観察一覧表(1)

No	群	四角	出土場所	種類	器種	法量 (cm)				粘土	焼成	(内)		備考
						口径 (取元)	器高 (取元)	底径 (取元)	最大径 (取元)			色調 (%)	主な調整 (%)	
1	9	11	SB1 (SP356)	土師器	皿	(7.1)	1.0	(5.8)	—	やや 密	良	灰褐色 (5YR5/2) 灰褐色 (5YR4/2)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)
2	9	11	SB1 (SP356)	土師器	皿	(6.8)	0.8	(5.6)	—	やや 密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)
3	9	11	SB1 (SP386)	土師器	皿	(7.5)	1.1	(6.4)	—	やや 密	良	灰黄褐色 (10YR6/2) 灰黄褐色 (10YR6/2)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (回転方向不明)
4	9	11	SB1 (SP841)	土師器	皿	(6.0)	0.9	(5.2)	—	やや 密	良	にぶい褐色 (5YR7/4) にぶい褐色 (5YR7/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (回転方向不明)
5	9	11	SB1 (SP866)	土師器	皿	(7.0)	0.8	(6.6)	—	やや 密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	摩滅により不明 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)
6	9	11	SB1 (SP866)	土師器	皿	(9.4)	1.9	(7.0)	—	やや 密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/3) 褐色 (2.5YR6/6)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り か
7	9	11	SB1 (SP374)	土師器	杯	—	[1.7]	(5.8)	—	やや 密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
8	9	11	SB1 (SP374)	土師器	杯	—	[1.6]	(6.8)	—	密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
9	9	11	SB1 (SP386)	土師器	杯	—	[1.7]	(6.0)	—	密	良	褐色 (5YR6/6) にぶい褐色 (5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	外面に飯臼圧痕。底部回転糸切り
10	9	11	SB1 (SP351)	青磁	碗	—	[3.2]	—	—	密	良	黒紺? 灰白色 (7.5YR/1) 輪: 緑灰色 (5G5/1)	回転ナデ 回転へうケズリ	外面に露出片文様。龍泉窯系
11	9	11	SB1 (SP374)	須恵器	こね鉢 かみ鉢	—	[2.9]	—	—	密	良	灰色 (N6/) 灰色 (N6/)	ヨコナデ ヨコナデ	東濃系
13	9	11	SB3 (SP465)	土師器	皿	(5.5)	1.0	(4.6)	—	やや 密	良	にぶい褐色 (5YR6/4) にぶい褐色 (5YR6/4)	ヨコナデ、ナデ ヨコナデ	底部回転へう切り (回転方向不明)
14	9	11	SB3 (SP465)	土師器	皿	(6.2)	1.1	(5.4)	—	やや 密	良	にぶい褐色 (5YR7/4) にぶい褐色 (5YR7/4)	ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (回転方向不明)
15	9	11	SB3 (SP465)	土師器	皿	(6.4)	1.2	(5.9)	—	やや 密	良	褐色 (5YR7/6) 灰褐色 (5YR6/2)	ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)
16	9	11	SB3 (SP465)	土師器	皿	(7.0)	1.3	(6.5)	—	やや 密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)
17	9	11	SB3 (SP465)	土師器	皿	(6.8)	1.0	(5.6)	—	密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
18	9	11	SB3 (SP465)	土師器	皿	6.3	1.0	5.5	—	やや 密	良	にぶい黄褐色 (10YR6/3) 灰黄褐色 (10YR5/2)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)
19	9	11	SB3 (SP465)	土師器	皿	(8.0)	1.1	(6.8)	—	やや 密	良	にぶい褐色 (7.5YR7/3) 黄褐色 (7.5YR7/2)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)
20	9	11	SB3 (SP465)	土師器	皿	8.5	1.7	6.1	—	やや 密	良	にぶい褐色 (5YR7/4) にぶい褐色 (5YR6/4)	回転ナデ、回転 ナデ後ナデ	底部回転へう切り (左回転)
21	9	11	SB4 (SP426)	土師器	皿	(8.8)	1.0	(7.6)	—	やや 密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ後ナデ	底部回転へう切り (左回転)
22	9	11	SB4 (SP426)	土師器	杯	—	[3.0]	(7.0)	—	密	良	にぶい褐色 (7.5YR5/4) にぶい褐色 (7.5YR5/4)	回転ナデ後ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (回転方向不明)
23	11	11	SB5 (SP430)	土師器	皿	(8.1)	1.1	(6.8)	—	やや 密	良	明褐色 (7.5YR7/2) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)
24	11	11	SB5 (SP383)	土師器	皿	(7.0)	1.0	(6.4)	—	密	良	にぶい褐色 (5YR7/4) にぶい褐色 (5YR7/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)
25	11	11	SB5 (SP830)	土師器	杯	—	[1.6]	(5.4)	—	やや 密	良	にぶい黄褐色 (10YR6/4) にぶい黄褐色 (10YR6/4)	ヨコナデ、ナデ ヨコナデ	底部回転糸切り
26	11	11	SB5 (SP442)	土師器	杯	—	[1.7]	(8.3)	—	やや 密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ 摩滅により不明	底部回転へう切り (右回転)
27	11	12	SB5 (SP860)	土師器	皿	—	[1.7]	(6.8)	—	密	良	褐色 (5YR7/6) 褐色 (5YR7/6)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
28	11	12	SB6 (SP868)	土師器	皿	(8.9)	1.5	(6.9)	—	やや 密	良	にぶい褐色 (5YR6/4) にぶい褐色 (5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (回転方向不明)
29	11	12	SB7 (SP560)	土師器	皿	6.6	0.9	5.8	—	密	良	にぶい褐色 (5YR7/4) にぶい褐色 (5YR6/4)	回転ナデ、回転 ナデ後ヨコナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
30	11	12	SB7 (SP560)	土師器	皿	(8.0)	1.6	(6.0)	—	密	やや 良	にぶい褐色 (7.5YR7/4) にぶい褐色 (7.5YR7/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
31	15	12	SA1 (SP929)	土師器	杯	11.0	4.0	5.5	—	密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
32	15	12	SA1 (SP929)	土師器	杯	11.6	4.0	5.9	—	やや 密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、回転 ナデ後ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
33	15	12	SA2 (SP852)	土師器	皿	(8.0)	1.1	(6.8)	—	密	良	にぶい褐色 (5YR6/4) にぶい褐色 (5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
34	15	12	SA5 (SP808)	土師器	杯	(12.8)	3.6	(7.0)	—	やや 密	やや 良	にぶい黄褐色 (10YR7/3) にぶい黄褐色 (10YR7/4)	摩滅により不明 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)

第2表 1区出土土器観察一覧表(2)

No.	群別	図版	出土場所	種別	器種	寸法 (cm)				胎土	焼成	(内)		備考
						口径 (最大径)	器高 (取付高)	底径 (取付底)	最大径 (取付径)			色調 (外)	主な調整 (内)	
35	15	12	SA5 (SP808)	土師器	皿	(6.4)	1.3	(5.8)	—	密	良	褐色 (5YR6/6) 褐色 (5YR6/6)	ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
36	15	12	SA5 (SP810)	土師器	皿	8.4	1.4	7.2	—	やや密	良	にぶい黄褐色 (10YR7/4) にぶい黄褐色 (10YR7/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
37	15	12	SA7 (SP825)	土師器	皿	7.0	1.1	6.1	—	密	良	にぶい褐色 (7.5YR7/3) にぶい褐色 (7.5YR6/3)	回転ナデ、回転 ナデ後ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
38	15	12	SA11 (SP435)	土師器	皿	6.6	1.0	(6.0)	—	やや密	良	褐色 (5YR7/6) 明赤褐色 (5YR5/6)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)
39	15	12	SA14 (SP13)	土師器	皿	(7.8)	1.2	(6.4)	—	密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) 灰褐色 (7.5YR6/2)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転系切り
40	15	12	SA14 (SP13)	土師器	皿	(7.8)	1.6	(6.0)	—	密	良	にぶい褐色 (5YR6/4) 灰褐色 (7.5YR6/2)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転系切り
41	19	13	SP100	青磁	椀	—	[3.2]	(5.4)	—	密	良	露胎：灰白色 (5Y7/1) 軸：オリーブ灰色 (2.5GY6/1)	回転ナデ	外面に縞線弁文 様。高台内・費 付露胎
42	19	13	SP110	土師器	杯	11.7	3.9	5.5	—	密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) 褐色 (5YR6/6)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転系切り
43	19	13	SP110	土師器	杯	(14.5)	3.7	(8.8)	—	密	良	明赤褐色 (5YR5/6) にぶい黄褐色 (10YR6/4)	回転ナデ、ナデ、 指オサエ 摩滅により不明	底部回転系切り か
44	19	13	SP142	土師器	杯	(11.0)	3.5	(5.8)	—	密	良	褐色 (7.5YR6/6) 褐色 (7.5YR6/6)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転系切り
45	19	13	SP275	白磁	皿	11.4	3.0	6.8	—	密	良	露胎：灰白色 (N8/) 軸：灰白色 (2.5GY8/1)	回転ナデ 回転へうケズリ	口先が、外面底 露胎
46	19	13	SP275	土師器	皿	—	[1.0]	(5.9)	—	やや密	良	期灰色 (10YR5/1) 灰褐色 (10YR6/2)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)
47	19	13	SP319	土師器	皿	6.9	1.0	(6.1)	—	やや密	良	灰褐色 (7.5YR5/2) 灰褐色 (7.5YR6/2)	ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
48	19	13	SP319	土師器	杯	—	[3.0]	(6.8)	—	やや密	良	にぶい褐色 (7.5YR7/4) にぶい黄褐色 (10YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転系切り
49	19	13	SP336	土師器	杯	(11.8)	3.7	(6.0)	—	やや密	良	にぶい褐色 (5YR6/4) にぶい褐色 (5YR6/4)	摩滅により不明 回転ナデ	底部回転系切り
50	19	14	SP336	土師器	杯	(12.8)	3.7	(7.6)	—	やや密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転系切り
51	19	14	SP344	土師器	皿	(7.8)	1.0	(7.0)	—	密	良	にぶい褐色 (5YR7/4) にぶい褐色 (5YR7/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)
52	19	14	SP365	土師器	杯	(12.2)	3.6	(6.8)	—	密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/3) にぶい褐色 (7.5YR6/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転系切り
53	19	14	SP365	青白磁	合子 (蓋)	(4.8)	1.6	—	—	密	良	露胎：明黄褐色 (5P7/1) 軸：(内) 灰白色 (2.5GY8/1) (外) 明オリーブ灰色 (2.5GY7/1)	回転ナデ 回転ナデ、回転 へうケズリ	天井部に菊花文 様
54	19	14	SP384	土師器	皿	(7.0)	1.2	(5.6)	—	やや密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
55	19	14	SP464	土師器	皿	7.7	1.7	2.8	—	密	良	灰白色 (7.5YR8/2) 明期灰色 (7.5YR7/1)	回転ナデ 回転ナデ	灯明皿。底部回 転系切り
56	19	14	SP434	土師器	皿	(7.2)	1.0	(6.2)	—	やや密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
57	19	14	SP434	土師器	皿	(8.0)	1.0	(8.2)	—	やや密	良	にぶい褐色 (7.5YR7/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (回転方向不明)
58	19	14	SP434	土師器	皿	—	[1.7]	(6.1)	—	密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転系切り
59	19	14	SP434	土師器	杯	—	[1.7]	(7.2)	—	やや密	良	にぶい黄褐色 (10YR6/3) にぶい黄褐色 (10YR6/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
60	19	15	SP465-SP466 器	土師器	皿	7.3	1.4	7.2	—	やや密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/3)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (回転方向不明)
61	19	15	SP465-SP466 器	土師器	皿	8.0	1.0	6.8	—	やや密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	ヨコナデ、ヨコ ナデ後ナデ ヨコナデ	底部回転へう切り (左回転)
62	19	15	SP465-SP466 器	土師器	皿	(8.0)	1.1	(6.0)	—	やや密	良	褐色 (5YR6/6) にぶい黄褐色 (5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)
63	19	14	SP465-SP466 器	土師器	杯	(11.6)	3.8	(7.2)	—	やや密	良	にぶい黄褐色 (10YR6/3) にぶい黄褐色 (10YR6/3)	回転ナデ、回転 ナデ後ナデ 回転ナデ	底部回転系切り
64	20	15	SP466	土師器	皿	(6.0)	0.8	(5.2)	—	やや密	良	にぶい褐色 (5YR6/3) にぶい褐色 (5YR6/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
65	20	15	SP466	土師器	皿	(6.2)	0.9	(5.6)	—	密	良	にぶい褐色 (5YR6/4) にぶい褐色 (5YR6/4)	ヨコナデ、ナデ ヨコナデ	底部回転へう切り (左回転)
66	20	15	SP466	土師器	皿	(6.7)	1.1	(6.2)	—	やや密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)

第3表 1区出土土器観察一覧表(3)

No	種別	図版	出土場所	種類	器種	法量 (cm)				粘土	焼成	(内) 色調 (%)	(内) 主な調整 (%)	備考
						口径 (復元値)	高さ (復元値)	底径 (復元値)	最大径 (復元値)					
67	20	15	SP466	土師器	杯	(11.8)	4.2	(6.1)	—	やや 密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) にぶい-褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ	底部回転糸切り
68	20	15	SP466	土師器	皿	(9.0)	1.0	(8.2)	—	密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/3) 褐色 (2.5YR6/6)	回転ナデ、回転 ナデ後ナデ	底部回転へつ切り (右回転)
60	20	15	SP601	土師器	皿	—	[1.4]	(6.7)	—	やや 密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) にぶい-褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ後ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (右回転)
70	20	15	SP601	灰質 土器	楕鉢	—	[4.0]	(11.2)	—	やや 密	良	灰白色 (10YR8/1) 灰白色 (N7/1)	ハク目 平行タタキ、平 行タタキ後指オ サエ	
71	20	15	SP656	土師器	皿	7.7	1.1	6.0	—	密	良	褐色 (5YR6/6) 褐色 (5YR6/6)	回転ナデ、回転 ナデ後ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (右回転)
72	20	15	SP791	土師器	皿	(9.0)	0.9	(8.4)	—	密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) にぶい-褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (左回転)
73	20	15	SP688	土師器	杯	—	[3.1]	(6.4)	—	密	やや 良	にぶい-褐色 (7.5YR7/4) にぶい-褐色 (7.5YR7/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り か
74	20	15	SP688	土師器	鍋	—	[5.3]	—	—	やや 密	良	黄褐色 (10YR6/2) 褐色 (7.5YR4/3)	ヨコナデ、ハク 目後ヨコナデ、 ハク目 ヨコナデ、ハク 目後ヨコナデ、 ハク目	口縁部外面に覆 付着
75	20	15	SP688	築造器	鉢	—	[5.5]	—	—	やや 粗	やや 良	黄灰色 (2.5Y6/1) 灰色 (5Y5/1)	ハク目後ヨコナ デ、ハク目 ヨコナデ、ハク 目、ハク目後ナ デ、指オサエ	敷層系
76	21	18	SP1	土師器	杯	(13.6)	4.3	7.4	—	密	良	灰褐色 (5YR5/2) 灰黄褐色 (10YR6/2)	回転ナデ	底部回転糸切り
77	21	18	SP16	土師器	皿	(7.8)	1.1	(6.2)	—	密	良	灰褐色 (5YR5/2) 褐色 (5YR5/1)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (右回転)
78	21	18	SP17	土師器	皿	(8.8)	1.1	(7.8)	—	密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) 灰褐色 (7.5YR6/2)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (回転方向不明)
79	21	18	SP18	土師器	皿	(7.5)	1.2	(6.0)	—	密	良	褐色 (2.5YR6/6) 褐色 (2.5YR6/6)	ナデ 回転ナデ	
80	21	18	SP18	土師器	皿	(7.4)	1.1	(5.8)	—	密	良	にぶい-褐色 (5YR6/4) にぶい-褐色 (5YR6/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	外表面に灰白正 輪、底部回転へ つ切り (右回転)
81	21	18	SP25	土師器	杯	—	[2.7]	(6.0)	—	密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/3) にぶい-褐色 (7.5YR6/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
82	21	18	SP29	土師器	皿	—	[1.1]	(5.8)	—	密	良	褐色 (5YR6/6) にぶい-褐色 (5YR6/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (回転方向不明)
83	21	18	SP29	築造器	鉢	(24.4)	[6.5]	—	—	やや 密	良	黄灰色 (2.5Y5/1) 黄灰色 (2.5Y6/1)	ヨコナデ、ナデ ヨコナデ、一部 指オサエ	底部回転糸切り、 敷層系
84	21	18	SP33	土師器	杯	(11.8)	3.1	6.5	—	密	良	にぶい-赤褐色 (5YR5/3) にぶい-赤褐色 (5YR5/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
85	21	18	SP38	土師器	皿	(6.8)	1.0	(5.8)	—	密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) にぶい-褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り か
86	21	18	SP39	土師器	皿	(7.8)	1.1	(6.4)	—	密	良	にぶい-褐色 (5YR6/4) にぶい-褐色 (5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (回転方向不明)
87	21	18	SP39	土師器	杯	—	1.6	(7.6)	—	密	良	黄褐色 (7.5YR5/1) にぶい-褐色 (7.5YR5/3)	ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
89	21	19	SP45	土師器	皿	(7.8)	1.3	(6.6)	—	密	良	褐色 (2.5YR6/6) 褐色 (2.5YR6/6)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り か
90	21	19	SP55	土師器	羽釜	—	[3.2]	—	—	やや 密	良	暗赤褐色 (5YR3/2) 暗赤褐色 (5YR3/3)	ハク目 回転ナデ	外面に覆付着
91	21	19	SP58	青磁	碗	—	[2.3]	(6.0)	—	密	良	露胎：灰白色 (2.5Y7/1) 胎：厚緑灰色 (10CG7/1)	回転へラウズリ 回転へラウズリ	見込みに磨目文 様、高台部一高 台内露胎、龍泉 窯系
92	21	19	SP85	土師器	碗	(13.8)	[4.7]	—	—	やや 密	良	灰白色 (10YR8/2) 灰白色 (10YR8/2)	ナデ 摩滅により不明	外面に白色化層 土着布
93	21	19	SP104	土師器	杯	(12.2)	3.3	(6.7)	—	やや 密	良	黄褐色 (5YR4/1) にぶい-褐色 (5YR6/3)	ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
94	21	19	SP120	土師器	皿	(6.4)	1.2	(5.2)	—	密	良	黄褐色 (7.5YR4/1) 黄褐色 (7.5YR4/1)	摩滅により不明 回転ナデ	底部回転へつ切り (回転方向不明)
95	21	19	SP141	土師器	皿	(7.2)	1.3	(5.4)	—	やや 密	良	にぶい-褐色 (5YR6/4) にぶい-褐色 (5YR6/4)	ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (左回転)
96	21	19	SP141	土師器	皿	8.6	1.8	5.9	—	密	良	にぶい-黄褐色 (10YR7/3) にぶい-黄褐色 (10YR7/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (左回転)

第4表 1区出土土器観察一覧表(4)

No.	種別	図版	出土場所	種類	器種	法量 (cm)			出土	構成	(内)	(内)	備考
						口径 (最大値)	胎高 (実存値)	底径 (最大値)					
97	21	19	SP147 (B)	土師器	皿	(7.1)	1.2	(6.3)	—	やゆ 密	にぶい褐色 (7.5YR7/4) にぶい褐色 (7.5YR7/4)	ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り か
98	21	19	SP158	土師器	皿	(7.0)	1.0	(6.1)	—	密 良	にぶい褐色 (7.5YR7/4) にぶい褐色 (7.5YR7/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
99	21	19	SP159	土師器	皿	(8.5)	2.0	(6.3)	—	やゆ 密	灰褐色 (7.5YR6/2) 灰褐色 (5YR6/2)	回転ナデ、回転 ナデ後ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
100	21	19	SP185	土師器	皿	(7.0)	1.2	(5.9)	—	やゆ 密	褐色 (2.5YR6/6) 褐色 (2.5YR6/6)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)
101	22	19	SP190	土師器	皿	6.9	0.9	6.0	—	やゆ 密	褐色 (2.5YR6/6) にぶい褐色 (5YR7/4)	摩擦により不明 回転ナデ	摩擦により不明
102	22	19	SP190	土師器	皿	6.7	1.0	5.8	—	密 良	灰褐色 (5YR6/2) 灰褐色 (5YR6/2)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)
103	22	19	SP191	土師器	皿	(7.6)	0.9	(7.3)	—	やゆ 密	にぶい褐色 (5YR6/4) にぶい褐色 (5YR6/4)	ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (回転方向不明)
104	22	19	SP191	土師器	皿	(7.6)	1.0	(7.2)	—	密 良	灰褐色 (7.5YR6/2) 灰褐色 (7.5YR5/2)	ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り か
105	22	19	SP191	土師器	皿	(8.2)	1.6	(6.0)	—	やゆ 密	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)
106	22	20	SP198	土師器	皿	8.0	1.6	6.6	—	密 良	にぶい褐色 (5YR7/4) にぶい褐色 (5YR6/4)	回転ナデ、回転 ナデ後ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)
107	22	20	SP206	土師器	罎	—	[2.3]	—	—	密 良	褐色 (5YR7/6) 褐色 (5YR7/6)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	
108	22	20	SP214	土師器	皿	6.4	0.9	5.8	—	やゆ 密	にぶい褐色 (5YR6/4) にぶい褐色 (5YR6/4)	ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
109	22	20	SA12 (SP230)	青磁	椀	—	[2.8]	(7.0)	—	密 良	黄褐色：灰白色 (N7/) 軸：オリーブ灰色 (10YR6/2)	回転ナデ 回転ナデ、底部 回転へうケズリ	冠込みに草花文 様。高台附り出 し。高台内露胎
110	22	20	SP243	青白磁	合子 (舟)	(4.0)	[3.0]	—	—	密 良	黄褐色：灰白色 (5YR/1) 軸：緑灰色 (5G6/1)	回転へうケズリ 回転へうケズリ	外面上下段に 溝縁有文様
111	22	20	SP245	土師器	皿	(8.1)	0.8	(7.5)	—	密 良	にぶい褐色 (5YR6/4) にぶい褐色 (5YR6/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	
112	22	20	SP245	土師器	皿	(7.2)	1.2	(6.0)	—	やゆ 密	褐色 (2.5YR6/6) 褐色 (2.5YR6/6)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
113	22	20	SP249	土師器	杯	(12.6)	3.4	(6.4)	—	密 良	にぶい褐色 (7.5YR6/3) にぶい褐色 (7.5YR6/3)	回転ナデ、回転 ナデ後ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り か
114	22	20	SP253	土師器	皿	(7.8)	1.2	(6.4)	—	やゆ 密	灰褐色 (7.5YR6/3) 灰褐色 (7.5YR6/2)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
115	22	20	SP253	土師器	罎	—	[4.6]	—	—	やゆ 密	褐色 (7.5YR7/6) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、ハケ 目後ナデ 回転ナデ、ハケ 目、指オサエ	
116	22	20	SP253	陶器	甕	—	[9.0]	—	—	密 良	灰色 (5Y5/1) 灰色 (5Y6/1)	ナデ タタキ、ナデ	外面にスタンプ あり。露胎
117	22	20	SP265	瓦質 土器	火鉢	—	[5.2]	—	—	やゆ 粗	黄灰色 (10YR6/1) 灰白色 (2.5YR/1)	ナデ、指オサエ ココナデ	外面に円形浮文
118	22	20	SP270	土師器	杯	—	[2.9]	5.4	—	密 良	にぶい褐色 (5YR6/4) 灰褐色 (5YR6/2)	回転ナデ、回転 ナデ後ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り か
119	22	20	SP290	土師器	杯	10.5	4.0	5.2	—	やゆ 密	赤褐色 (10YR6/6) 赤褐色 (10YR5/3)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り か
120	22	20	SP290	土師器	杯	(12.6)	4.1	(7.8)	—	やゆ 密	にぶい褐色 (7.5YR7/3) にぶい褐色 (7.5YR7/4)	回転ナデ後ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り か
121	22	20	SP298	青磁	椀	—	[3.6]	—	—	密 良	黄褐色：灰色 (N6/) 軸：オリーブ灰色 (10YR6/2)	回転へうケズリ か 回転へうケズリ か	内面に帯目文様
122	22	20	SP302	土師器	皿	(7.0)	1.5	(5.6)	—	やゆ 密	明褐色 (5YR7/2) 黄灰色 (5YR6/2)	回転ナデ 回転ナデ	
123	23	21	SP313	土師器	皿	6.2	2.3	5.0	—	やゆ 密	灰白色 (7.5YR8/2) 灰白色 (7.5YR8/2)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)
124	23	21	SP313	土師器	皿	(7.0)	1.4	(6.2)	—	やゆ 密	褐色 (5YR7/8) 褐色 (5YR7/8)	摩擦により不明 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)
125	23	21	SP313	土師器	皿	6.7	1.2	5.9	—	やゆ 密	黄褐色 (7.5YR5/1) 黄褐色 (7.5YR4/1)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)
126	23	21	SP313	土師器	皿	(7.8)	1.2	(6.9)	—	やゆ 密	にぶい褐色 (7.5YR7/4) にぶい褐色 (7.5YR7/3)	ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)
127	23	21	SP313	瓦質 土器	直か覆	—	[2.0]	(13.3)	—	やゆ 密	灰白色 (10YR8/1) 灰白色 (10YR8/1)	ナデ 回転ナデ、ナデ	
128	23	21	SP307	土師器	皿	6.4	1.0	5.8	—	やゆ 密	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR5/4)	ナデ ココナデ	底部回転へう切り (右回転)

第5表 1区出土土器観察一覧表(5)

No	種別	図号	出土場所	種類	器種	法量 (cm)				粘土	構成	(内)		備考
						口径 (取元値)	高さ (取元値)	底径 (取元値)	最大径 (取元値)			色調 (%)	主な調整 (%)	
129	23	21	SP312	土師器	皿	7.0	1.0	6.4	—	密	良	褐色 (5YR7/8) 褐色 (5YR7/8)	ナデ 回転ナデ	底面回転へう切り (右回転)
130	23	21	SP333	土師器	鍋	(32.2)	(4.0)	—	—	やや粗	良	にぶい・褐色 (7.5YR7/4) 灰褐色 (7.5YR5/2)	ココナデ ココナデ	外面に炭付着
131	23	21	SP333	土師器	鍋	—	(8.3)	—	—	やや粗	良	にぶい・褐色 (7.5YR6/4) 灰褐色 (7.5YR5/2)	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	外面に炭付着
132	23	21	SP334	土師器	鍋	(32.0)	(8.2)	—	—	やや密	良	褐色 (5YR7/6) にぶい・赤褐色 (5YR5/4)	ココナデ ココナデ、カキ 口、ナデ	外面に炭付着
133	23	21	SP334	土師器	鍋	—	(3.4)	—	—	やや密	良	褐色 (5YR7/6) にぶい・黄褐色 (10YR5/3)	ココナデ ココナデ	外面に炭付着
134	23	21	SP334	土師器	足筒	—	(7.3)	—	—	密	良	褐色 (5YR7/6) にぶい・赤褐色 (5YR5/3)	ナデ ナデ	側面、外面に炭付着
135	23	21	SP334	土師器	杯	12.2	3.6	6.2	—	やや粗	良	褐色 (5YR6/6) にぶい・褐色 (7.5YR6/4)	摩滅により不明 回転ナデ	底面回転系切り
136	23	22	SP335	土師器	鍋	(27.8)	(4.3)	—	—	やや粗	良	にぶい・褐色 (7.5YR6/3) 暗赤褐色 (5YR3/2)	回転ナデ 回転ナデ	外面に炭付着
137	23	22	SP335	土師器	鍋	—	(7.1)	—	—	やや粗	良	にぶい・褐色 (7.5YR7/4) 暗灰色 (7.5YR4/1)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	
138	23	21	SP340	土師器	杯	(11.4)	4.5	(6.3)	—	やや密	良	褐色 (5YR7/6) にぶい・褐色 (5YR7/4)	回転ナデか 回転ナデか	
139	23	22	SP360-361	土師器	皿	8.2	1.3	6.5	—	密	良	にぶい・褐色 (7.5YR7/3) 褐色 (5YR6/6)	回転ナデ 回転ナデ	外面に炭・炭付着、 底面回転へう切り (左回転)
140	23	22	SP360-361	土師器	皿	8.6	1.3	7.0	—	密	良	にぶい・褐色 (5YR6/4) 灰褐色 (5YR6/2)	ナデ 回転ナデ	内外面に炭・炭付着、 底面回転へう切り (右回転)
141	23	22	SP360-361	土師器	皿	8.3	1.3	6.6	—	密	良	褐色 (5YR7/6) にぶい・褐色 (5YR6/4)	ナデ 回転ナデ	内外面に炭・炭付着、 底面回転へう切り (右回転)
142	23	22	SP360-361	土師器	皿	8.6	1.4	6.6	—	密	良	にぶい・赤褐色 (5YR5/4) にぶい・褐色 (5YR6/3)	回転ナデ 回転ナデ	内面に炭・炭付着、 底面回転へう切り (左回転)
143	23	22	SP360-361	土師器	皿	8.2	1.1	6.7	—	密	良	褐色 (2.5YR6/8) にぶい・褐色 (2.5YR6/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	内外面に炭・炭付着、 底面回転へう切り (左回転)
144	23	22	SP360-361	土師器	杯	7.8	0.9	6.0	—	密	良	褐色 (2.5YR6/6) 褐色 (2.5YR6/6)	ナデ 回転ナデ	口縁部内外面に炭・炭付着、 底面回転系切り
145	23	22	SP385	土師器	皿	7.9	1.5	5.5	—	密	良	にぶい・褐色 (7.5YR7/3) 明褐色 (7.5YR7/2)	回転ナデ 回転ナデ	底面回転へう切り (左回転)
146	23	22	SP385	土師器	皿	(9.0)	1.6	(7.5)	—	やや粗	良	褐色 (5YR7/6) 褐色 (5YR7/6)	摩滅により不明 回転ナデ	底面回転へう切り (左回転)
147	23	22	SP387	土師器	柱状高台杯	—	(3.0)	(5.1)	—	密	良	にぶい・褐色 (7.5YR6/4) にぶい・褐色 (7.5YR6/4)	摩滅により不明 ココナデ	底面回転系切り
148	24	22	SP389	土師器	杯	—	(2.1)	(6.6)	—	やや粗	良	にぶい・褐色 (5YR6/4) 灰褐色 (5YR6/2)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	外面に黒泥、底面 回転系切り
149	24	22	SP390	土師器	皿	(7.8)	1.2	(4.4)	—	やや粗	良	褐色 (5YR6/6) 褐色 (5YR6/6)	摩滅により不明 摩滅により不明	底面回転へう切り (回転方向不明)
150	24	22	SP390	土師器	杯	—	(1.5)	(7.0)	—	やや粗	良	にぶい・褐色 (5YR6/4) にぶい・褐色 (5YR6/4)	摩滅により不明 回転ナデ	底面回転系切り
151	24	22	SP394	土師器	皿	6.6	1.3	5.3	—	密	良	にぶい・褐色 (5YR6/4) にぶい・褐色 (5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底面回転へう切り (右回転)
152	24	23	SP405	土師器	杯	—	(2.4)	(7.2)	—	やや粗	良	にぶい・褐色 (5YR6/4) にぶい・褐色 (5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底面回転系切り
153	24	23	SP408	陶器	甕	—	(3.0)	(16.4)	—	密	良	にぶい・褐色 (7.5YR6/4) にぶい・褐色 (7.5YR7/4)	回転へうケズリ、 回転ナデ	
155	24	23	SP419	土師器	皿	(8.2)	1.3	(5.6)	—	密	良	褐色 (2.5YR6/6) にぶい・褐色 (2.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底面回転へう切り (左回転)
156	24	23	SP429	須恵器	甕	—	(4.6)	—	—	やや粗	粗	灰色 (6Y6/1) 灰色 (6Y5/1)	回転ナデ 回転ナデ	
157	24	23	SP431	土師器	皿	(7.0)	1.0	(6.4)	—	やや粗	良	にぶい・褐色 (7.5YR6/4) にぶい・褐色 (7.5YR7/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底面回転系切り か
158	24	23	SP431	土師器	皿	(7.4)	1.0	(5.8)	—	やや粗	良	にぶい・褐色 (7.5YR7/4) にぶい・褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ	底面回転系切り か
159	24	23	SP431	土師器	皿	7.5	1.1	6.4	—	やや粗	良	にぶい・褐色 (5YR6/4) にぶい・褐色 (5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底面回転へう切り (右回転)
160	24	23	SP431	土師器	杯	(14.3)	4.4	(8.0)	—	やや粗	良	にぶい・褐色 (7.5YR5/3) にぶい・褐色 (7.5YR5/4)	回転ナデ 回転ナデ	底面回転系切り
161	24	23	SP432	土師器	皿	(8.0)	1.4	(6.4)	—	やや粗	良	にぶい・黄褐色 (10YR6/4) にぶい・黄褐色 (10YR6/3)	回転ナデ 回転ナデ	底面回転へう切り (右回転)

第6表 1区出土土器観察一覧表(6)

No	種別	陶器	出土場所	種類	器種	寸法 (cm)				胎土	焼成	色調 (内)	主な調整 (外)	備考
						口径 (取元値)	器高 (取元値)	底径 (取元値)	最大径 (取元値)					
162	24	23	SP432	土師器	皿	(9.8)	1.2	(8.0)	—	やや密	良	灰褐色 (7.5YR5/2) 褐色 (7.5YR6/1)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)
163	24	23	SP436	土師器	皿	(8.3)	1.1	(7.0)	—	やや密	良	灰褐色 (5YR8/4) 灰褐色 (5YR8/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
164	24	23	SP446	土師器	杯	(12.3)	3.8	(6.6)	—	やや密	良	にぶい褐色 (2.5YR6/4) にぶい褐色 (2.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
165	24	23	SP447	土師器	皿	(8.7)	1.0	(7.4)	—	やや密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
166	24	23	SP448	土師器	皿	6.7	1.3	5.9	—	密	良	褐色 (5YR7/8) にぶい褐色 (5YR7/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
167	24	23	SP448	土師器	皿	(7.4)	1.6	(5.6)	—	やや密	良	にぶい褐色 (5YR7/4) 褐色 (5YR7/6)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
168	24	23	SP448	土師器	皿	(7.5)	1.7	(5.5)	—	密	良	にぶい褐色 (5YR7/3) にぶい褐色 (5YR7/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (回転方向不明)
169	24	23	SP453	土師器	皿	(7.8)	1.1	(6.8)	—	やや密	良	にぶい黄褐色 (10YR7/3) にぶい黄褐色 (10YR7/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
170	24	23	SB3 (SP451)	土師器	皿	(8.4)	1.5	(5.6)	—	やや密	良	褐色 (5YR7/6) 褐色 (5YR7/6)	ナデ ナデ	底部回転へう切り (左回転)
171	24	23	SB3 (SP451)	土師器	皿	(8.8)	1.7	(5.6)	—	密	良	にぶい褐色 (5YR6/4) 褐色 (5YR6/6)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)
172	24	23	SP456	土師器	皿	(7.6)	1.5	(6.2)	—	密	良	褐色 (5YR6/6) にぶい褐色 (5YR6/4)	ナデ ナデ	底部回転へう切り (左回転)
173	24	23	SP456	土師器	皿	6.9	1.1	5.9	—	やや密	良	褐色 (5YR6/6) 灰褐色 (5YR6/2)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)
174	25	24	SP460	土師器	皿	(8.8)	1.3	(6.6)	—	密	良	褐色 (5YR6/6) 褐色 (5YR6/6)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)
175	25	24	SP463	土師器	皿	(6.0)	1.0	(5.8)	—	密	良	にぶい褐色 (5YR6/3) にぶい褐色 (7.5YR5/3)	ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (回転方向不明)
176	25	24	SP469	土師器	皿	6.8	0.9	5.6	—	やや密	良	褐色 (5YR7/8) 褐色 (5YR7/6)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)
177	25	24	SP469	土師器	皿	(6.8)	1.0	(8.6)	—	やや密	良	にぶい褐色 (5YR6/4) にぶい褐色 (5YR6/4)	ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
178	25	24	SP469	土師器	皿	(9.0)	1.7	(6.2)	—	やや密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、回転 ナデ後ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
179	25	24	SP472	土師器	杯	-	[2.4]	(9.6)	—	密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
180	25	24	SP472	須古器	鉢	—	[3.5]	—	—	密	良	灰色 (N7/) 灰色 (N7/)	ココナデ後ナデ ココナデ	口縁部外面に重 ねぬき肌、東播 底
181	25	24	SP473	土師器	皿	(9.0)	1.5	(7.0)	—	密	良	にぶい褐色 (5YR6/4) にぶい褐色 (5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
182	25	24	SP481	土師器	皿	(6.8)	1.0	(6.4)	—	密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (回転方向不明)
183	25	24	SP481	土師器	皿	(7.6)	1.1	(6.2)	—	密	良	灰褐色 (5YR6/2) 灰褐色 (5YR6/2)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (回転方向不明)
184	25	24	SP483	土師器	皿	(8.0)	1.1	(6.6)	—	密	良	にぶい褐色 (2.5YR6/4) にぶい褐色 (2.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (回転方向不明)
185	25	24	SB3 (SP489 (III))	土師器	皿	(7.8)	0.9	(7.4)	—	密	良	にぶい褐色 (5YR6/4) にぶい褐色 (2.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)
186	25	24	SB3 (SP489 (III))	土師器	皿	(6.6)	0.8	(6.6)	—	やや密	良	褐色 (2.5YR6/8) 明赤褐色 (2.5YR5/6)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (回転方向不明)
187	25	24	SP489 (III)	土師器	皿	(6.6)	1.0	(5.9)	—	やや密	良	にぶい褐色 (5YR6/4) にぶい褐色 (5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (回転方向不明)
188	25	24	SP490	土師器	皿	7.4	1.0	6.6	—	密	良	にぶい褐色 (7.5YR7/3) にぶい褐色 (7.5YR7/3)	回転ナデ、回転 ナデ後ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
189	25	24	SP491	土師器	皿	(8.2)	1.6	(6.0)	—	密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/3)	回転ナデ、回転 ナデ後ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (回転方向不明)
191	25	24	SP905	土師器	皿	(6.3)	1.0	(5.4)	—	やや密	良	にぶい褐色 (2.5YR7/4) にぶい褐色 (2.5YR6/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
192	25	24	SP905	土師器	皿	(6.6)	1.2	(5.4)	—	やや密	良	にぶい黄褐色 (10YR5/4) にぶい黄褐色 (10YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
193	25	24	SP905	土師器	柱状高 台杯	8.7	5.0	6.0	—	密	良	灰褐色 (7.5YR5/2) 褐色 (7.5YR5/1)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
195	25	25	SP514	土師器	杯	(12.0)	3.6	(6.6)	—	やや密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/3) にぶい褐色 (7.5YR6/3)	回転ナデ、ココ ナデ後ナデ ココナデ	底部回転糸切り

第7表 1区出土土器観察一覧表(7)

No	種別	図版	出土場所	種類	器種	法量 (cm)				粘土	焼成	(内)		備考
						口径 (復元値)	高さ (復元値)	底径 (復元値)	最大径 (復元値)			色調 (%)	主な調整 (%)	
196	25	25	SP548	土師器	杯	—	[1.8]	(5.4)	—	やや密	良	にんい-褐色 (7.5YR6/4) にんい-褐色 (7.5YR6/4)	同転ナデ、ナデ 同転ナデ	底部同転へう切り (左回転)
197	25	25	SP552	土師器	皿	(7.6)	1.3	(5.0)	—	密	良	にんい-黄褐色 (10YR7/4) にんい-黄褐色 (10YR7/4)	ナデ ナデ	底部同転赤み切り
198	25	24	SP553	瓦葺土器	深鉢	—	[5.5]	—	—	やや粗	不貞	明褐色 (7.5YR7/1) 灰白色 (2.5YR8/1)	同転ナデ、指オサエ、ナデ 同転ナデ、指オサエナデ	内面に5条単位 のむろし目
199	26	25	SP554	土師器	皿	(6.8)	0.8	(6.0)	—	密	良	にんい-褐色 (7.5YR7/3) にんい-褐色 (7.5YR7/3)	ナデ 同転ナデ	底部同転へう切り (左回転)
200	26	25	SP554	土師器	皿	(6.0)	1.2	(5.9)	—	やや密	良	にんい-黄褐色 (10YR7/4) にんい-褐色 (7.5YR7/4)	ナデ 同転ナデ	底部同転へう切り (左回転)
201	26	25	SP554	瓦葺土器	深鉢	—	[7.0]	(9.7)	—	やや密	良	灰白色 (10YR7/1) 褐色 (10YR6/1)	摩滅により不明 ナデ、指オサエ 後ハケ目	外表面に横目正 振
202	26	25	SP555	土師器	皿	(7.4)	1.0	(6.4)	—	やや密	良	にんい-褐色 (5YR6/3) にんい-褐色 (5YR6/3)	同転ナデ、ナデ 同転ナデ	底部同転へう切り (左回転)
203	26	25	SP558	土師器	杯	—	[1.9]	(5.6)	—	粗	良	にんい-褐色 (7.5YR6/4) 褐色 (7.5YR6/6)	同転ナデ、ナデ 同転ナデ	底部同転へう切り (左回転)
204	26	25	SP562	土師器	皿	(7.0)	1.2	(5.8)	—	密	良	にんい-褐色 (5YR7/4) にんい-褐色 (5YR6/4)	同転ナデ 同転ナデ	底部同転へう切り (左回転)
205	26	25	SP565	土師器	皿	(8.2)	1.4	(6.0)	—	やや密	良	にんい-褐色 (5YR6/3) にんい-褐色 (5YR6/3)	同転ナデ 同転ナデ	底部同転へう切り (左回転)
206	26	25	SP565	土師器	杯	(15.0)	[3.7]	—	—	密	良	灰白色 (7.5YR8/2) 灰白色 (7.5YR8/2)	ココナデ、ナデ ココナデ	
207	26	25	SP565	土師器	鉢	(33.8)	[5.7]	—	—	やや密	良	にんい-赤褐色 (5YR5/4) 暗赤褐色 (5YR3/2)	ナデ、指オサエ ココナデ、指オサエ	外面に横目着
208	26	25	SP577	土師器	杯	(12.0)	4.1	(5.8)	—	やや密	良	にんい-褐色 (7.5YR6/4) にんい-黄褐色 (10YR6/4)	同転ナデ 同転ナデ	底部同転赤み切り
209	26	25	SP566 南側 SP	西磁	鉢カ	—	[0.8]	—	—	密	良	黄褐色 灰白色 (7.5Y7/1) 軸：緑灰色 (5G6/1)	同転ナデ 同転へうケズリ	内面に4条文様、 龍文雲系
210	26	25	SP601	土師器	皿	—	[1.4]	(5.6)	—	密	良	にんい-褐色 (5YR6/4) にんい-褐色 (5YR7/4)	同転ナデ、同転 ナデ後ナデ 同転ナデ	底部同転赤み切り
211	26	25	SP609	土師器	皿	(8.4)	1.3	(7.6)	—	やや密	良	にんい-黄褐色 (10YR5/3) にんい-褐色 (7.5YR6/3)	同転ナデ、ナデ 同転ナデ	底部同転へう切り (左回転)
212	26	25	SP610	土師器	皿	—	[0.9]	(5.5)	—	やや密	良	にんい-黄褐色 (10YR6/4) にんい-褐色 (7.5YR6/4)	同転ナデ、同転 ナデ後ナデ 同転ナデ	底部同転へう切り (左回転)
213	26	25	SP621	土師器	皿	(9.0)	1.7	(8.4)	—	やや密	良	にんい-褐色 (7.5YR6/4) にんい-褐色 (7.5YR6/4)	同転ナデ、ナデ 同転ナデ	底部同転へう切り (左回転)
214	26	25	SP624	須恵器	徳か甕	—	[7.8]	(20.6)	—	密	良	灰色 (N5/1) 灰色 (N5/1)	ナデ、指オサエ、 ココナデ 横目目タキ、 ナデ	
215	26	26	SP626	土師器	羽釜	—	[5.2]	—	—	やや密	良	赤灰色 (2.5YR4/1) 灰赤色 (2.5YR6/2)	ハケ目、指オサエ ナデ、指オサエ、 ココナデ	内外面に横目着
216	26	26	SP641	土師器	皿	(8.4)	1.2	(8.1)	—	やや密	良	にんい-褐色 (5YR6/4) にんい-褐色 (5YR6/4)	同転ナデ、ナデ 同転ナデ	底部同転へう切り (左回転)
217	26	26	SP657	土師器	皿	(8.0)	1.0	(6.9)	—	やや密	良	にんい-褐色 (7.5YR6/4) にんい-褐色 (7.5YR6/4)	同転ナデ、ナデ 同転ナデ	底部同転へう切り (左回転)
218	26	26	SP674	土師器	皿	—	[0.9]	(6.8)	—	やや密	良	にんい-褐色 (5YR7/4) にんい-褐色 (5YR6/4)	ナデ 同転ナデ	底部同転赤み切り
219	26	26	SP677	陶器	甕	(9.4)	2.8	—	—	密	良	灰褐色 (5YR6/2) 暗灰色 (5YR6/1)	同転ナデ 同転ナデ	外面に自然釉。 367と同様か
221	27	26	SP691	土師器	杯	(14.0)	3.9	(7.8)	—	やや密	やや密	にんい-褐色 (7.5YR6/4) にんい-褐色 (7.5YR6/4)	同転ナデ 同転ナデ	底部同転へう切り (左回転)
222	27	26	SP747	土師器	杯	(12.3)	3.8	(6.8)	—	密	良	にんい-褐色 (5YR6/4) にんい-褐色 (5YR6/4)	同転ナデ、ナデ 同転ナデ	底部同転赤み切り
223	27	26	SP747	土師器	皿	(8.2)	1.1	(7.0)	—	密	良	にんい-褐色 (5YR6/4) にんい-褐色 (5YR6/4)	同転ナデ、ナデ 同転ナデ	底部同転へう切り (左回転)
224	27	26	SP769	土師器	鉢カ皿	—	[0.9]	5.4	—	やや密	良	にんい-黄褐色 (10YR6/4) にんい-褐色 (7.5YR6/4)	同転ナデ、ナデ 同転ナデ	底部同転赤み切り
226	27	26	SP781	須恵器	鉢	—	[4.1]	—	—	密	良	灰色 (N6/) 灰色 (N6/)	ココナデ ココナデ、ナデ	注口部作目、東 橋系
227	27	26	SP785	土師器	皿	7.3	0.9	6.2	—	やや密	良	にんい-褐色 (5YR7/4) にんい-褐色 (5YR6/3)	ナデ 同転ナデ	底部同転へう切り (左回転)
228	27	26	SP785	土師器	皿	(7.0)	1.3	(6.4)	—	やや密	良	にんい-褐色 (7.5YR7/3) にんい-褐色 (7.5YR7/3)	同転ナデ、ナデ 同転ナデ	底部同転へう切り (左回転)
229	27	26	SP785	土師器	杯	(13.0)	3.6	(6.7)	—	やや密	良	にんい-褐色 (7.5YR6/4) にんい-褐色 (7.5YR6/4)	同転ナデ、ナデ 同転ナデ	底部同転赤み切り

第8表 1区出土土器観察一覧表(8)

No	種別	図版	出土場所	器種	器種	法量 (cm)				胎土	焼成	(内) 色調 (外)	(内) 主な調整 (外)	備考
						口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	最大径 (cm)					
230	27	26	SP785	土師瓶	杯	(12.7)	4.9	(6.1)	—	やや 密	良	にぶい褐色(5YR6/4) 灰褐色(7.5YR5/2)	回転ナデ、回転 ナデ後ナデ 回転ナデ	底部回転系切り
231	27	26	SP789	土師瓶	皿	(6.6)	1.1	(5.8)	—	密	良	褐色(2.5YR6/6) 褐色(2.5YR6/6)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)
232	27	26	SP790	土師瓶	皿	6.8	1.2	6.3	—	やや 密	良	にぶい黄褐色(10YR7/3) にぶい褐色(7.5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
233	27	26	SP792	土師瓶	皿	(7.8)	1.0	(7.0)	—	密	良	にぶい褐色(7.5YR6/4) にぶい褐色(7.5YR6/2)	ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (回転方向不明)
234	27	26	SP794	土師瓶	皿	6.8	1.2	5.8	—	やや 密	良	にぶい褐色(7.5YR6/4) にぶい褐色(7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
235	27	26	SP795	土師瓶	皿	8.3	1.8	5.7	—	密	良	褐色(5YR7/6) 褐色(5YR7/6)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
236	27	26	SP795	土師瓶	皿	7.9	1.6	5.6	—	密	良	にぶい褐色(5YR6/3) にぶい褐色(5YR6/3)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
237	27	26	SP815	土師瓶	皿	(6.9)	1.1	(6.0)	—	密	良	にぶい褐色(7.5YR6/3) にぶい褐色(7.5YR6/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
238	27	27	SP824	土師瓶	柱状高 台杯	—	[2.6]	(5.6)	—	密	良	褐色(5YR6/6) 褐色(5YR6/6)	シボリ 回転ナデ	底部回転系切り
239	27	27	SB5 (SP828)	土師瓶	皿	(6.2)	0.7	(5.8)	—	やや 密	良	にぶい褐色(5YR6/4) にぶい褐色(5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
240	27	27	SP828	土師瓶	皿	(5.8)	0.8	(4.8)	—	やや 密	良	にぶい褐色(5YR6/4) にぶい褐色(5YR6/4)	ヨコナデ、ナデ ヨコナデ	口縁部内面の一部 に有機物付着。 底部回転へう切り (回転方向不明)
241	27	27	SA2 (SP851)	須恵器	鉢	—	[3.3]	—	—	やや 密	良	灰白色(N7/?) 灰白色(N7/?)	ヨコナデ、ヨコ ナデ後ナデ ヨコナデ、ヨコ ナデ後ナデ	裏腰系
242	27	27	SP853	土師瓶	皿	(7.4)	1.1	(6.6)	—	やや 密	良	にぶい褐色(7.5YR7/3) にぶい褐色(7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (回転方向不明)
243	27	27	SP853	土師瓶	杯	—	[1.8]	(5.8)	—	やや 密	良	灰色(N4/?) 灰白色(N7/?)	回転ナデ、回転 ナデ後ナデ 回転ナデ	底部回転系切り
244	27	27	SP870	土師瓶	皿	6.7	1.0	6.0	—	密	良	にぶい褐色(7.5YR6/4) にぶい褐色(7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
245	28	27	SP871	土師瓶	皿	(7.0)	0.9	(6.2)	—	密	良	にぶい褐色(5YR6/3) にぶい褐色(5YR6/3)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (回転方向不明)
246	28	27	SP875	土師瓶	皿	(8.0)	1.1	(6.8)	—	密	良	にぶい褐色(7.5YR6/4) にぶい褐色(7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
247	28	27	SP915	土師瓶	皿	6.5	1.0	6.2	—	やや 密	良	褐色(2.5YR6/6) 褐色(2.5YR6/6)	摩滅により不明 摩滅により不明	底部回転へう切り (右回転)
248	28	27	SP935	土師瓶	皿	7.4	1.4	6.1	—	密	良	にぶい褐色(5YR7/3) にぶい褐色(7.5YR6/3)	回転ナデ、回転 ナデ後ナデ 回転ナデ	底部回転系切り か
249	28	27	SP935	土師瓶	杯 (身)	—	[2.5]	—	—	やや 密	良	にぶい褐色(5YR6/4) にぶい褐色(5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ	
250	28	27	SP1139	土師瓶	皿	(8.1)	1.5	(6.1)	—	密	良	にぶい褐色(7.5YR6/4) にぶい褐色(7.5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
251	28	27	SP1141	土師瓶	皿	(8.1)	1.4	(5.6)	—	やや 密	良	にぶい黄褐色(10YR6/3) にぶい黄褐色(10YR6/3)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
252	28	27	SP1143	土師瓶	柱状高 台杯	—	[3.8]	(8.6)	—	やや 密	良	にぶい褐色(7.5YR7/4) にぶい褐色(7.5YR6/4)	摩滅により不明 回転ナデ	底部回転系切り
253	28	27	SP1311	土師瓶	皿	(6.8)	1.4	(6.4)	—	密	良	にぶい黄褐色(10YR6/3) にぶい黄褐色(10YR6/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
254	28	27	SP1327	土師瓶	皿	6.9	1.5	5.2	—	密	良	褐色(5YR7/8) 褐色(5YR7/8)	回転ナデ、回転 ナデ後ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
255	28	27	SP1338	須恵器	甕	—	[2.8]	—	—	密	良	灰色(N5/?) 灰色(N5/?)	ヨコナデ ヨコナデ	外面に斜線文
256	28	27	SP1354	土師瓶	皿	8.1	1.6	5.3	—	密	良	にぶい褐色(7.5YR6/4) にぶい褐色(7.5YR6/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転系切り
264	29	28	SP1360	土師瓶	皿	8.0	1.2	6.9	—	密	良	にぶい褐色(7.5YR7/4) にぶい褐色(7.5YR7/6)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り
265	29	28	SP1360	土師瓶	皿	8.0	1.7	6.7	—	密	良	にぶい褐色(7.5YR7/4) にぶい褐色(7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転系切り か
266	29	28	SP1360	土師瓶	皿	8.2	1.5	6.5	—	密	良	にぶい褐色(7.5YR6/3) にぶい褐色(7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	内面に炭付着。底 部回転へう切り (左回転)
267	29	28	SP1365	土師瓶	皿	(6.9)	1.3	(5.6)	—	密	良	にぶい黄褐色(10YR7/3) にぶい黄褐色(10YR7/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)

第9表 1区出土土器観察一覧表(9)

No	種別	図号	出土場所	種類	器種	法量 (cm)				粘土	焼成	(内) 色調 (%)	(内) 主な調整 (%)	備考
						口径 (復元値)	高さ (復元値)	底径 (復元値)	最大径 (復元値)					
268	29	28	SP1360-1361	土師器	皿	7.5	1.0	6.1	—	密	良	褐色 (5YR7/6) 褐色 (5YR7/6)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (左回転)
269	29	28	SP1360-1361	土師器	皿	7.9	0.9	5.7	—	密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) にぶい-褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り
270	29	28	SP1360-1361	土師器	皿	8.1	0.9	7.3	—	密	良	灰褐色 (7.5YR5/2) にぶい-褐色 (7.5YR5/4)	ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (左回転)
271	29	28	SP1360-1361	土師器	皿	7.9	1.2	6.6	—	密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) にぶい-褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、回転 ナデ後ナデ 回転ナデ	内面、外底面に 厚付着。底部回 転へつ切り(左 回転)
272	29	28	SP1360-1361	土師器	皿	7.8	1.2	6.3	—	密	良	にぶい-褐色 (7.5YR7/4) にぶい-褐色 (7.5YR7/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り
273	29	28	SP1360-1361	土師器	皿	(8.4)	1.0	(7.0)	—	密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) にぶい-褐色 (7.5YR7/4)	ナデ 回転ナデ	内面、外底面に 厚付着。底部回 転へつ切り(右 回転)
274	29	28	SP1360-1361	土師器	皿	(7.6)	1.5	(6.0)	—	密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) にぶい-褐色 (7.5YR7/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (左回転)
275	29	28	SP1360-1361	土師器	皿	(8.0)	1.4	(6.4)	—	密	良	にぶい-黄褐色 (10YR7/3) にぶい-黄褐色 (10YR7/4)	ナデ 回転ナデ	外底面に厚付着。 底部回転へつ切り (左回転)
276	29	29	SP2025	土師器	杯	12.0	3.8	5.9	—	やや 密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) にぶい-黄褐色 (10YR6/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (左回転)
277	29	28	SP2465-2466 皿	土師器	皿	7.8	1.6	5.7	—	密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) にぶい-褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (左回転)
278	29	28	SP2465-2466 皿	土師器	皿	(8.1)	1.4	(7.3)	—	やや 密	良	褐色 (2.5YR6/6) 褐色 (2.5YR6/6)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (左回転)
279	29	29	SP2465-2466 皿	土師器	皿	(8.0)	1.0	(6.4)	—	密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) にぶい-褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部中央に穿孔。 底部回転へつ切り (左回転)
280	29	29	SP3013	土師器	鍋	(31.0)	[11.3]	—	—	やや 密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) 灰褐色 (5YR4/2)	ナデ ナデ、指オサエ、 ハケ目	外面に厚付着
281	29	29	SP3014	土師器	皿	8.6	1.7	6.3	—	やや 密	良	にぶい-黄褐色 (10YR6/3) にぶい-黄褐色 (10YR6/3)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (左回転)
282	29	29	SP3015	土師器	皿	6.9	1.2	5.4	—	やや 密	良	にぶい-褐色 (7.5YR7/3) にぶい-褐色 (7.5YR7/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (左回転)
283	29	29	SP3022	土師器	杯	(12.0)	3.6	(6.1)	—	密	良	にぶい-褐色 (5YR6/4) にぶい-褐色 (7.5YR6/4)	ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り
284	29	29	SP3022	土師器	杯	—	[2.7]	—	—	密	良	にぶい-褐色 (5YR6/4) にぶい-褐色 (5YR6/4)	ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り
285	30	29	SP3023	土師器	碗	(16.4)	口径 [4.2] 体底 [2.5]	(5.5)	—	やや 密	良	黄褐色 (5YR8/3) 淡褐色 (5YR8/3)	ナデ 回転ナデ、ナデ、 へつ切り後ナデ	底部回転へつ切り (左回転)
286	30	29	SP3053	土師器	皿	8.1	1.4	6.5	—	やや 密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) にぶい-褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り か
287	30	29	SP3057	土師器	皿	6.6	1.0	5.6	—	やや 密	良	褐色 (5YR7/4) にぶい-褐色 (5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り か
288	30	29	SP3057	土師器	皿	(6.2)	1.1	(5.7)	—	やや 密	良	にぶい-褐色 (5YR6/4) にぶい-褐色 (5YR6/4)	ナデ 回転ナデ、一部 指オサエ	底部回転へつ切り (右回転)
289	30	29	SP3057	築造器	鉢鉢	—	[6.3]	—	—	やや 密	良	灰色 (N8/) 灰色 (N8/)	ヨコナデ、指オ サエ ヨコナデ、ヨコ ナデ後指オサエ	口縁部外面に重 ね焼き。築造 系
290	30	30	SP3065	土師器	皿	(9.6)	1.7	(7.0)	—	やや 密	良	にぶい-褐色 (5YR6/4) にぶい-褐色 (5YR6/4)	ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (左回転)
291	30	30	SP3074	土師器	皿	(7.9)	1.5	(3.8)	—	密	良	灰白色 (7.5YR8/2) 灰白色 (7.5YR8/2)	ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り
292	30	30	SP3076	土師器	皿	(7.0)	1.0	(5.6)	—	密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) にぶい-褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、回転 系切り後ナデ	底部回転へつ切り
293	30	30	SP3077	土師器	皿	(6.9)	1.0	(5.2)	—	やや 密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/3) にぶい-褐色 (7.5YR6/3)	ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (右回転)
294	30	30	SP3078	土師器	皿	(8.3)	1.2	(7.2)	—	やや 密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) にぶい-褐色 (7.5YR6/3)	回転ナデ後ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (右回転)
295	30	30	SP3079	土師器	皿	(8.1)	1.8	(5.8)	—	やや 密	良	褐色 (5YR6/6) 褐色 (5YR6/6)	回転ナデ ナデ	底部回転へつ切り (右回転)
296	30	30	SP3080	土師器	杯	—	[1.7]	(7.6)	—	やや 密	やや 良	黄褐色 (7.5YR5/1) 黄褐色 (10YR5/1)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り
297	30	30	SP3081	土師器	皿	8.0	1.0	6.3	—	やや 密	良	にぶい-褐色 (5YR6/4) にぶい-褐色 (5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (左回転)
298	30	30	SP3081	土師器	皿	(8.1)	1.5	(5.5)	—	やや 密	良	にぶい-褐色 (5YR6/4) にぶい-褐色 (5YR7/4)	回転ナデ後ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (左回転)

第10表 1区出土土器観察一覧表(10)

No	探洞	国庫	出土場所	器種	器形	寸法 (cm)				胎土	焼成	(内)色調 (外)	(内)主な調整 (外)	備考	
						口径 (取元値)	器高 (取元値)	底径 (取元値)	最大径 (取元値)						
299	30	30	SP3081	土師器	皿	8.5	2.3	5.7	—	中々	良	にぶい褐色 (7.5YR5/4) にぶい褐色 (7.5YR5/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)	
301	30	30	SP3082	土師器	杯	—	[1.7]	(6.2)	—	中々	良	褐色 (5YR6/6) 褐色 (5YR6/6)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ		
302	30	30	SP3082	土師器	杯	—	[1.1]	(6.2)	—	悪	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り	
303	30	30	SP3083	土師器	椀	—	[2.6]	—	—	悪	中々	灰白色 (10YR8/1) 灰白色 (10YR8/1)	ミガキ ココナデ		
304	30	30	SP3083	土師器	皿	—	[4.2]	—	—	中々	良	灰黄褐色 (10YR5/2) にぶい黄褐色 (10YR6/4)	ココナデ ココナデ		
305	30	30	SP3084	土師器	椀	—	[1.8]	—	—	中々	悪	灰白色 (10YR8/2) 灰白色 (10YR8/2)	ナデ 回転ナデ		
307	31	30	SP3085	土師器	皿	(8.4)	2.2	(6.2)	—	悪	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ、回転 糸切り後ナデ	底部回転糸切り	
308	31	30	SP3085	土師器	杯	—	[1.8]	6.8	—	中々	良	にぶい褐色 (7.5YR6/3) にぶい褐色 (7.5YR6/3)	摩滅により不明 回転ナデ	底部回転糸切り	
309	31	30	SP3085	土師器	杯	—	[1.9]	(8.6)	—	中々	悪	にぶい褐色 (7.5YR5/3) 灰黄褐色 (10YR4/2)	摩滅により不明 回転ナデ	底部回転糸切り	
310	31	30	SP3086	土師器	皿	—	[5.1]	—	—	中々	良	褐色 (2.5YR6/8) 赤灰色 (2.5YR5/1)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	外面に縦付着	
311	31	30	SP3086	土師器	足皿	—	[9.5]	—	—	悪	良	にぶい褐色 (5YR6/3) 灰褐色 (5YR6/2)	ハヤシ・指オサ 工後ナデ ナデ	脚部、外面に縦 付着	
312	31	30	SP3086	土師器	足皿	—	[11.5]	—	—	悪	良	にぶい褐色 (5YR6/3) 灰褐色 (5YR6/2)	指オサ工後ナデ ナデ	脚部、外面に縦 付着	
313	34	35	SK1	土師器	皿	(6.8)	1.0	(6.2)	—	悪	中々	良	にぶい褐色 (7.5YR7/4) にぶい褐色 (7.5YR7/4)	回転ナデ、回転 ナデ後ココナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
314	34	35	SK1 第3層	土師器	皿	(6.4)	0.9	(5.9)	—	悪	良	にぶい褐色 (7.5YR7/3) 褐色 (7.5YR6/6)	ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)	
315	34	35	SK1	土師器	杯	—	[2.4]	(7.0)	—	悪	良	にぶい褐色 (5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR7/4)	回転ナデ 摩滅により不明	底部回転糸切り	
316	34	35	SK2	土師器	皿	(8.3)	2.5	(5.8)	—	悪	中々	良	にぶい褐色 (7.5YR7/4) 褐色 (5YR7/6)	摩滅により不明 摩滅により不明	底部回転糸切り
317	34	35	SK2	土師器	杯	—	[2.5]	(4.8)	—	悪	中々	良	褐色 (7.5YR7/6) 褐色 (5YR6/6)	回転ナデ、ココ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
318	34	35	SK3 第1層	土師器	杯	—	[1.5]	(5.4)	—	悪	中々	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR7/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
319	34	35	SK11	土師器	皿	(8.0)	1.1	(6.8)	—	悪	中々	良	にぶい褐色 (7.5YR7/3) にぶい褐色 (7.5YR7/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)
320	34	35	SK13 北側	土師器	皿	6.4	1.1	6.2	—	悪	中々	良	褐色 (5YR7/6) にぶい褐色 (5YR7/4)	回転ナデ、ココ ナデ 摩滅により不明	底部回転へう切り (左回転)
321	34	35	SK13	土師器	皿	—	[2.0]	(9.0)	—	悪	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい黄褐色 (10YR6/4)	ココナデ後ナデ ココナデ	底部回転へう切り	
322	34	35	SK14	土師器	皿	(6.4)	1.0	(5.5)	—	悪	良	明赤褐色 (2.5YR5/6) 褐色 (2.5YR6/6)	ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (回転方向不明)	
323	34	35	SK15	土師器	杯	(12.0)	3.6	(6.0)	—	悪	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り	
324	34	36	SK24	土師器	皿	7.8	1.1	6.3	—	悪	中々	良	にぶい褐色 (7.5YR7/4) 褐色 (5YR7/6)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)
325	34	36	SK24	土師器	皿	(7.6)	1.0	(6.8)	—	悪	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)	
326	34	36	SK43	土師器	皿	(8.0)	1.3	(5.8)	—	中々	悪	良	灰黄褐色 (2.5YR6/2) 灰黄褐色 (2.5YR6/2)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)
327	34	36	SK43	土師器	皿	—	1.2	—	—	悪	良	灰黄褐色 (10YR5/2) 褐色 (5YR6/6)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り か	
328	34	36	SK43	土師器	皿	(8.2)	0.9	(6.8)	—	悪	良	灰黄褐色 (10YR5/2) 灰黄褐色 (10YR5/2)	回転ナデ 回転ナデ		
329	34	36	SK43	土師器	皿	(8.5)	1.1	(7.6)	—	悪	良	にぶい黄褐色 (10YR6/3) にぶい黄褐色 (10YR6/3)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)	
330	34	36	SK45	土師器	皿	(7.2)	1.2	(6.2)	—	悪	良	にぶい褐色 (5YR6/3) にぶい褐色 (5YR6/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)	
331	34	36	SK45	土師器	皿	(6.8)	0.8	(6.0)	—	悪	良	褐色 (7.5YR6/6) にぶい褐色 (7.5YR6/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)	
332	34	36	SK45	土師器	皿	(9.2)	1.0	(7.8)	—	中々	悪	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り か
333	34	36	SK45	土師器	皿	—	[3.8]	—	—	中々	悪	良	褐色 (5YR6/6) 灰褐色 (5YR6/2)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	外面に縦付着

第11表 1区出土土器観察一覧表(11)

No.	種別	図版	出土場所	種類	器種	法量 (cm)				胎土	焼成	(内)		備考
						口径 (復元値)	高さ (復元値)	底径 (復元値)	最大径 (復元値)			色調 (%)	主な調整 (%)	
334	34	36	SK51	土師器	皿	(6.8)	1.0	(6.6)	—	密	良	にぶい・黄褐色(10YR7/3) にぶい・褐色(7.5YR6/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り
335	34	36	SK51	土師器	皿	(6.9)	1.0	(6.2)	—	密	良	にぶい・黄褐色(10YR6/4) にぶい・黄褐色(10YR5/3)	回転ナデ 回転ナデ、回転 糸切り後ナデ	底部回転へつ切り
336	34	36	SK69	土師器	皿	7.2	1.6	5.6	—	密	良	にぶい・褐色(2.5YR6/4) にぶい・褐色(5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (左回転)
337	34	36	SK52	土師器	皿	(7.2)	0.9	(6.2)	—	密	良	にぶい・褐色(5YR6/6) にぶい・褐色(5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り りか
338	34	36	SK52	土師器	皿	6.6	1.2	5.7	—	密	やや 良	にぶい・褐色(7.5YR7/4) にぶい・褐色(7.5YR7/4)	回転ナデ、ヨコ ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り りか
339	34	36	SK52	土師器	皿	(6.8)	1.1	(6.5)	—	密	やや 良	にぶい・褐色(5YR6/4) にぶい・褐色(7.5YR7/4)	回転ナデ、ヨコ ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (左回転)
340	34	36	SK52	土師器	皿	6.5	1.1	6.0	—	密	良	にぶい・褐色(7.5YR7/4) にぶい・褐色(7.5YR7/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (左回転)
341	34	36	SK52	土師器	皿	(6.8)	1.0	(5.7)	—	密	良	にぶい・褐色(7.5YR7/4) にぶい・褐色(7.5YR7/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (左回転)
342	34	36	SK52	土師器	皿	(7.0)	0.7	(6.6)	—	密	良	にぶい・褐色(7.5YR7/4) にぶい・褐色(7.5YR7/4)	回転ナデ、ヨコ ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (右回転)
343	34	36	SK52	土師器	杯	—	[3.1]	(6.0)	—	密	やや 良	にぶい・褐色(7.5YR7/4) にぶい・褐色(5YR7/4)	回転ナデ、回転 ナデ後ヨコナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
344	34	36	SK73	土師器	皿	(7.9)	1.0	(6.8)	—	密	良	にぶい・黄褐色(10YR7/3) にぶい・黄褐色(10YR6/3)	回転ナデ 回転ナデ、回転 糸切り後ナデ	底部回転糸切り りか
345	34	36	SK73	土師器	皿	—	[2.5]	—	—	やや 粗	良	にぶい・褐色(7.5YR5/4) にぶい・褐色(7.5YR6/4)	ヨコナデ ヨコナデ	
346	34	36	SK73	土師器	皿	—	[3.2]	—	—	やや 粗	良	にぶい・黄褐色(10YR6/3) 黄褐色(10YR4/1)	ヨコナデ ヨコナデ	外面に煤付着
347	34	37	SK87	土師器	皿	(7.5)	1.6	(5.9)	—	密	良	にぶい・赤褐色 (2.5YR5/4) にぶい・赤褐色 (2.5YR5/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り
348	34	37	SK87	土師器	皿	(7.2)	1.0	(6.4)	—	やや 粗	良	にぶい・褐色(7.5YR6/4) にぶい・褐色(7.5YR7/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り
349	34	37	SK87	土師器	皿	—	[1.9]	—	—	やや 粗	良	にぶい・黄褐色(10YR7/3) にぶい・褐色(7.5YR5/4)	ヨコナデ ヨコナデ	口縁部内面に土 受け用三角突起 貼付。外面に煤 付着
350	34	37	SK87	瓦葺 土器	壺分費	—	[1.4]	(18.6)	—	やや 粗	やや 良	にぶい・褐色(7.5YR7/4) 黄灰色(2.5Y5/1)	指オサエ 指オサエ、ナデ	
351	36	37	SK218	土師器	杯	—	[2.0]	(5.2)	—	密	良	にぶい・褐色(5YR7/4) にぶい・褐色(7.5YR7/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
352	36	37	SK223	土師器	皿	(6.8)	1.1	(6.5)	—	密	やや 良	褐色(5YR6/8) にぶい・褐色(7.5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (回転方向不明)
353	36	37	SK223	土師器	柱状高 台杯	—	[3.1]	—	—	密	不 良	にぶい・黄褐色(10YR6/4) にぶい・黄褐色(10YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
354	36	37	SK223	築造器	鉢	—	[4.6]	—	—	やや 粗	良	灰色(N5/) 灰色(N5/)	ヨコナデ、ハッ ク日後ナデ	東郷系
355	36	37	SK223	陶器	甕	—	[2.8]	(12.8)	—	やや 粗	不 良	にぶい・褐色(7.5YR7/3) 黄褐色(2.5Y3/1)	摩滅により不明 ナデ	
356	36	37	SK246	土師器	杯	—	[1.8]	(5.4)	—	密	やや 良	にぶい・褐色(7.5YR7/4) 褐色(5YR7/6)	回転ナデ、回転 ナデ後ヨコナデ 回転ナデ、回転 糸切り後ヨコナ デ	底部回転糸切り
357	36	37	SK246上期	青磁	碗	—	[2.5]	—	—	密	良	露胎：灰白色(N8/) 胎：オリーブ灰白 (5GY5/1)	回転ナデ 回転ナデ	外面に露胎文様
358	36	38	SK242	土師器	皿	(6.8)	0.8	(6.0)	—	密	やや 良	にぶい・褐色(5YR7/4) 褐色(5YR6/6)	回転ナデ 摩滅により不明	底部中央に燒成 前穿孔。底部回 転へつ切り(左 回転)
359	36	38	SK242	土師器	皿	(7.6)	[1.0]	(6.4)	—	やや 粗	良	にぶい・褐色(7.5YR5/4) にぶい・褐色(7.5YR5/4)	回転ナデ 回転ナデ	
360	36	38	SK242	土師器	碗	—	[1.2]	(6.0)	—	密	不 良	灰白色(5Y8/1) 灰白色(5Y8/1)	摩滅により不明 摩滅により不明	

第12表 1区出土土器観察一覧表(12)

No	棟号	国名	出土場所	種類	器種	寸法 (cm)				胎土	焼成	(内) 色調 (外)	主な調整 (外)	備考
						口径 (復元値)	高さ (復元値)	底径 (復元値)	最大径 (復元値)					
361	36	37	SK242	土師器	杯	12.0)	3.6	(6.3)	—	密	やや良 にふい・褐色 (7.5YR7/4) 褐色 (7.5YR7/6)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り	
362	36	38	SK242	土師器	杯	—	[1.6]	(6.4)	—	密	やや良 にふい・褐色 (7.5YR7/4) にふい・褐色 (5YR7/4)	回転ナデ 回転ナデ		
363	36	38	SK242	土師器	皿	—	[1.5]	(5.8)	—	やや密	にふい・褐色 (7.5YR6/4) 褐色 (2.5YR6/6)	回転ナデ、指オ サエ 回転ナデ	底部回転糸切り	
364	36	38	SK252	土師器	皿	(6.4)	0.9	(5.6)	—	密	やや良 にふい・褐色 (7.5YR6/4) にふい・褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、回転 ナデ後ココナデ 回転ナデ	底部回転へら切り (左回転)	
365	36	38	SK253 灰色粘 質土	土師器	皿	(8.6)	[1.3]	(6.6)	—	やや密	良 にふい・褐色 (7.5YR7/4) にふい・褐色 (7.5YR7/4)	回転ナデ、ナデ		
366	36	38	SK253 第2層	土師器	杯	—	[1.7]	(6.6)	—	密	良 黄灰色 (2.5YB/1) にふい・黄褐色 (10YR7/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り	
367	36	38	SK253	陶器	甕	—	[5.0]	—	—	密	良 黄灰色 (2.5YB/1) 褐色 (10YR6/1)	回転ナデ 回転ナデ	219と同種か	
368	36	38	SK253	土師器	ミニ チュア 土器	—	[4.0]	—	—	密	良 にふい・褐色 (7.5YR6/4) にふい・褐色 (7.5YR6/4)	ココナデ ココナデ、指オ サエ状のナデ	合子形	
370	36	37	SK260	土師器	杯	(11.6)	3.7	(6.0)	—	密	やや良 にふい・黄褐色 (10YR7/4) にふい・黄褐色 (7.5YR7/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り	
371	36	38	SK275	土師器	皿	(7.6)	1.0	(6.8)	—	密	やや良 褐色 (5YR7/6) にふい・褐色 (5YR7/4)	回転ナデ 回転ナデ、回転 へら切り後ココ ナデ	底部回転へら切り (回転方向不明)	
372	36	38	SK277	土師器	皿	(7.4)	1.1	6.8	—	密	やや良 褐色 (5YR6/6) 明赤褐色 (5YR5/8)	回転ナデ、回転 ナデ後ココナデ 回転ナデ	底部回転へら切り (左回転)	
373	36	38	SK280	土師器	皿	(6.5)	1.0	(5.8)	—	密	良 黄褐色 (2.5Y7/4) 黄褐色 (2.5Y7/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へら切り (左回転)	
374	36	38	SK280	土師器	皿	7.8	1.7	6.9	—	密	やや良 にふい・褐色 (7.5YR7/3) にふい・褐色 (10YR7/3)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へら切り (左回転)	
375	36	38	SK280	土師器	皿	(8.4)	1.5	(7.0)	—	密	良 にふい・褐色 (7.5YR7/4) にふい・褐色 (7.5YR7/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へら切り (右回転)	
376	36	38	SK280	青磁	碗	—	[2.5]	—	—	密	良 露胎：灰白色 (N8/) 軸：オリーブ灰色 (5GY6/1)	回転ナデ 回転ナデ	外面に編蓮付文 様	
377	37	40	SK283	陶器	甕	(51.5)	[134 40.4 製底 30.0]	20.0	(73.6)	密	良 赤褐色 (10B6/8) ~ 赤 褐色 (10R5/8) 褐色 (5YR6/6) ~ 赤褐 色 (10R5/4)	ナデ、ココナデ、 指オサエ ナデ、ハケ目、 指オサエ	常滑焼	
378	39	40	SK249 7 暗青灰色粘 質土	土師器	皿	(7.1)	0.9	(6.2)	—	密	良 にふい・黄褐色 (10YR7/4) にふい・黄褐色 (10YR7/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へら切り	
379	39	40	SK249 第2層	土師器	皿	(9.0)	1.4	(7.8)	—	密	やや良 にふい・褐色 (7.5YR7/4) 灰褐色 (7.5YR6/2)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へら切り (回転方向不明)	
380	39	40	SK249 7 暗青灰色粘 質土	土師器	皿	(6.6)	1.7	(4.6)	—	密	良 黄灰色 (2.5YB/1) にふい・黄褐色 (10YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ	内面の一部に丹 塗。底部回転 糸切り	
381	39	40	SK249 土器No 2	土師器	杯	—	[2.5]	6.2	—	密	良 にふい・黄褐色 (10YR7/3) にふい・黄褐色 (10YR6/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	内面の一部に丹 塗。底部回転 糸切り	
382	39	41	SK249 南側埋 土	土師器	皿	—	[1.1]	(5.6)	—	密	やや良 にふい・褐色 (7.5YR7/4) にふい・褐色 (7.5YR7/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り	
383	39	41	SK249 7 暗青灰色粘 質土	土師器	皿	—	[1.5]	(5.4)	—	やや密	やや良 にふい・黄褐色 (10YR6/3) にふい・褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り	
384	39	41	SK249	土師器	杯	—	[2.0]	(8.8)	—	密	やや良 黄灰色 (10YR4/1) にふい・黄褐色 (10YR5/3)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り	
385	39	41	SK249 北側埋 土	青磁	小壺 (蓋)	(4.0)	[1.5]	—	—	密	良 露胎：灰白色 (N8/) 軸：明緑灰色 (10GY8/1)	回転ナデ 回転ナデ	天开部外面に透 彫陶出文様。体 部少なくとも2 部の円孔。口縁端 部、内面無胎輪	
386	39	41	SK249	青磁	碗	—	[6.7]	—	—	密	良 露胎：灰白色 (N7/) 軸：暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1)	回転ナデ 回転ナデ	外面に編蓮付文 様	
387	39	41	SK249 7 暗青灰色粘 質土	須恵器	こむす びか跡	—	[4.4]	—	—	やや密	良 灰色 (N6/) 灰色 (N6/)	ココナデ、ナデ ココナデ	東隣系	

第13表 1区出土土器観察一覧表(13)

No	種別	図号	出土場所	種類	器種	法量 (㎏)				粘土	焼成	(内) 色調 (%)	(内) 主な調整 (%)	備考
						1丁 (復元額)	高さ (復元額)	底径 (復元額)	最大径 (復元額)					
388	39	41	SK249	土師器	罎	(33.0)	[10.7]	—	—	やや 密	良	褐色 (5YR7/8) 明赤褐色 (5YR5/6)	ヨコナデ ヨコナデ、ハケ 目後ナデ、一部 指オサエ	外面に塚付着
395	40	42	SK7	土師器	皿	(6.6)	0.8	(6.4)	—	密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) にぶい-褐色 (7.5YR6/4)	ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (左回転)
396	40	42	SK7	土師器	皿	(7.6)	0.9	(7.0)	—	密	良	褐色 (2.5YR6/6) 褐色 (2.5YR6/6)	ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (回転方向不明)
397	40	42	SK7	土師器	杯	(11.1)	3.7	(5.8)	—	密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) にぶい-褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転系切り
398	40	42	SK16	土師器	罎	(30.0)	[8.7]	—	—	やや 密	良	褐色 (5YR7/6) 黒褐色 (5YR2/1)	回転ナデ 回転ナデ、ハケ 目	外面に塚付着
399	40	42	SK16	土師器	足罎	—	[6.6]	—	—	粗	やや 良	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) 褐色 (7.5YR4/3)	— 手掘指オサエ	脚部、一部大熱 により赤変
400	40	42	SK17	土師器	皿	(6.7)	1.0	(5.4)	—	密	良	褐色 (5YR7/8) 褐色 (5YR7/8)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転系切り
402	40	42	SK18	青磁	碗	—	[2.5]	—	—	密	良	黒褐色; 灰白色 (5Y7/1) 軸: オリーブ灰色 (2.5GY5/1)	回転ナデ 回転ナデ	外面に黒塗付文様
403	40	42	SK20 北西埋土	土師器	皿	(8.0)	1.0	(7.0)	—	密	良	にぶい-褐色 (5YR6/4) にぶい-褐色 (5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (左回転)
405	40	42	SK25	土師器	皿	8.0	1.4	6.3	—	密	良	浅黄褐色 (7.5YR8/4) にぶい-褐色 (7.5YR7/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転系切り
406	40	42	SK25	土師器	杯	(14.0)	[3.3]	—	—	密	やや 良	にぶい-褐色 (7.5YR7/4) 褐色 (5YR6/6)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り りか
407	40	42	SK35	土師器	皿	(7.4)	0.8	(6.0)	—	密	やや 良	にぶい-褐色 (7.5YR7/4) 褐色 (5YR6/6)	回転ナデ 摩滅により不明	底部回転へつ切り りか
408	40	43	SK37	土師器	皿	—	[1.1]	—	—	やや 密	良	にぶい-黄褐色 (10YR6/3) にぶい-黄褐色 (10YR6/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転系切り
409	40	42	SK37	土師器	皿	—	[1.5]	—	—	密	不良	褐色 (7.5YR7/6) 褐色 (7.5YR7/6)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転系切り
410	40	43	SK37	土師器	碗	—	[2.9]	—	—	密	良	褐色 (5YR6/6) 褐色 (5YR6/6)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転系切り
411	40	43	SK38 2層	土師器	罎	—	[1.9]	—	—	やや 密	良	にぶい-黄褐色 (10YR6/3) にぶい-黄褐色 (10YR5/2)	ヨコナデ ヨコナデ	外面に塚付着
412	40	43	SK38	土師器	罎	—	[3.2]	—	—	粗	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) にぶい-褐色 (7.5YR6/4)	ヨコナデ ヨコナデ	底部回転系切り
413	40	43	SK44	土師器	皿	(5.4)	1.2	(4.8)	—	密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/3) にぶい-褐色 (7.5YR6/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転系切り りか
414	40	43	SK44	土師器	皿	(6.3)	1.0	(5.9)	—	密	良	にぶい-黄褐色 (10YR5/2) にぶい-黄褐色 (10YR5/2)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転へつ切り (回転方向不明)
415	40	43	SK44	土師器	皿	(6.6)	1.1	(6.2)	—	密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) にぶい-黄褐色 (5YR5/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (左回転)
416	40	43	SK44	土師器	皿	(7.4)	1.4	(6.2)	—	密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) にぶい-褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転系切り
417	40	43	SK44	土師器	皿	(6.8)	1.2	(5.6)	—	やや 密	良	にぶい-黄褐色 (10YR6/3) にぶい-褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、指オ サエ 回転ナデ、回転 系切り後ナデ	外底面の一部に 丹塗彩。底部回 転系切りりか
418	40	43	SK44	土師器	皿	(8.2)	1.2	(6.7)	—	密	良	にぶい-黄褐色 (10YR6/3) にぶい-黄褐色 (10YR6/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、回転 系切り後ナデ	底部回転系切り りか
419	40	43	SK44	土師器	皿	(8.9)	0.8	(7.6)	—	密	良	にぶい-黄褐色 (10YR6/3) にぶい-黄褐色 (10YR6/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転系切り りか
420	40	43	SK44	土師器	杯	—	[2.7]	(6.4)	—	密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) 明赤褐色 (5YR5/6)	摩滅により不明 回転ナデ	底部回転系切り
421	41	43	SK47	土師器	皿	—	1.0	—	—	やや 密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) にぶい-褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転系切り
422	41	43	SK47	土師器	杯	—	[0.9]	(6.6)	—	密	良	にぶい-黄褐色 (10YR7/4) にぶい-褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転系切り
423	41	43	SK47	土師器	杯	—	[1.9]	(6.4)	—	やや 密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) にぶい-褐色 (7.5YR6/4)	摩滅により不明 回転ナデ	底部回転系切り りか
424	41	43	SK49	土師器	皿	—	[0.9]	(6.4)	—	やや 密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) にぶい-褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ、回転 系切り後ナデ	底部回転系切り
425	41	43	SK49	土師器	杯	—	[1.5]	(6.8)	—	やや 密	良	にぶい-黄褐色 (10YR6/3) 灰黄褐色 (10YR6/2)	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転系切り
426	41	43	SK50	土師器	碗	—	[1.6]	(6.0)	—	密	やや 良	浅黄褐色 (10YR8/3) 浅黄褐色 (10YR8/3)	ミカホ、ナデ 回転ナデ、ナデ	口縁部内面に3 条沈線。底部回 転系切り
427	41	43	SK55	土師器	皿	—	[1.2]	—	—	密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) にぶい-褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	口縁部内面に3 条沈線。底部回 転系切り

第14表 1区出土土器観察一覧表(14)

No	棟号	図版	出土場所	種類	器種	寸法 (cm)				出土	焼成	(内) 色調 (外)	(内) 主な調整 (外)	備考
						口径 (復元値)	器高 (残存値)	底径 (復元値)	最大径 (復元値)					
428	41	43	SK55	土師器	杯	—	[1.8]	(6.2)	—	密	灰白・褐色 (7.5YR7/4) 灰白・褐色 (7.5YR7/4)	摩滅により不明	底部回転糸切り	
429	41	44	SK58	土師器	皿	(7.0)	1.0	(6.0)	—	密	灰褐色 (7.5YR5/2) 灰褐色 (7.5YR5/2)	ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (右回転)	
430	41	44	SK58	土師器	皿	(33.6)	[2.9]	—	—	やや粗	灰白・褐色 (7.5YR7/4) 灰白・褐色 (7.5YR7/4)	回転ナデ	回転ナデ	
431	41	44	SK58	土師器	皿	(31.6)	[11.0]	—	—	密	灰白・褐色 (7.5YR5/3) 灰白・黄褐色 (10YR5/3)	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、面オサエ、ナデ	
432	41	44	SK62	土師器	皿	(7.8)	1.2	(7.0)	—	密	褐色 (2.5YR6/6) 褐色 (2.5YR6/4)	ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り (左回転)	
434	41	44	SK68	土師器	皿	(7.2)	1.2	(5.8)	—	やや粗	灰白・黄褐色 (10YR6/3) 褐色 (5YR6/6)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り	
435	41	44	SK68	土師器	杯	—	[2.4]	(5.8)	—	密	褐色 (7.5YR7/6) 灰白・黄褐色 (10YR5/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り	
436	41	44	SK70	土師器	皿	(7.7)	1.0	(7.0)	—	密	灰白・褐色 (7.5YR6/4) 灰白・褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り	
437	41	44	SK70	土師器	杯	—	[1.1]	(7.5)	—	密	灰白・黄褐色 (10YR7/4) 灰白・黄褐色 (10YR7/2)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り	
438	41	44	SK71	土師器	皿	(6.7)	1.2	(4.6)	—	やや密	灰黄褐色 (10YR6/2) 灰黄褐色 (10YR6/2)	回転ナデ、回転 糸切り後ナデ	底部回転へう切り	
439	41	45	SK72	土師器	足罎	—	[7.1]	—	—	やや密	—	—	脚部	
443	42	45	SK75	土師器	杯	—	[1.6]	(6.6)	—	密	灰白・黄褐色 (10YR5/3) 灰白・黄褐色 (10YR7/4) 灰白・黄褐色 (10YR6/3)	手振器オサエ 回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り	
444	42	45	SK76	土師器	皿	(7.2)	0.9	(6.6)	—	密	灰白・黄褐色 (10YR7/3) 灰白・黄褐色 (10YR6/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、回転 糸切り後ナデ	底部回転糸切り	
445	42	45	SK76	土師器	皿	(6.7)	1.1	(6.0)	—	密	灰白・褐色 (7.5YR6/4) 灰白・褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、回転 糸切り後ナデ	底部回転糸切り	
446	42	45	SK76	土師器	椀	—	[1.5]	(6.8)	—	やや密	灰白色 (10YR8/1) 灰白色 (10YR8/1)	ナデ 回転ナデ		
447	42	45	SK76	土師器	皿	(8.5)	1.4	(7.2)	—	やや密	灰白・黄褐色 (10YR6/3) 灰白・黄褐色 (10YR7/2)	回転ナデ 回転ナデ、回転 糸切り後ナデ	底部回転へう切り	
449	42	45	SK77	土師器	皿	(7.9)	1.5	(6.2)	—	密	灰白・黄褐色 (10YR7/4) 灰白・黄褐色 (10YR7/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り	
450	42	45	SK78	土師器	皿	(7.6)	1.5	(5.2)	—	やや密	褐色 (5YR6/6) 褐色 (5YR6/6)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り	
451	42	45	SK79	土師器	皿	(8.0)	1.3	(6.6)	—	密	灰白・褐色 (7.5YR6/3) 灰黄褐色 (10YR5/2)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、回転 糸切り後ナデ	底部回転糸切り	
452	42	45	SK79	瓦器	椀	—	[0.8]	(5.2)	—	密	灰色 (N4/) 灰色 (N4/)	ナデ		
453	42	45	SK82	土師器	皿	(6.0)	1.2	(5.1)	—	密	灰白・褐色 (7.5YR7/4) 灰白・褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転へう切り	
454	42	45	SK82	土師器	皿	—	[1.1]	—	—	やや密	灰白・黄褐色 (10YR6/3) 灰白・黄褐色 (10YR6/3)	摩滅により不明 回転ナデ	底部回転へう切り	
455	42	45	SK82	土師器	杯	—	[1.9]	(6.8)	—	やや密	灰白・黄褐色 (10YR7/3) 灰白・黄褐色 (10YR7/3)	摩滅により不明 回転ナデ	底部回転糸切り	
456	42	45	SK84	土師器	皿	(6.3)	1.1	(5.0)	—	密	灰白・褐色 (7.5YR6/4) 灰白・褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り	
457	42	45	SK84	土師器	杯	—	[1.8]	(6.0)	—	やや密	灰白・黄褐色 (10YR7/3) 灰白・黄褐色 (10YR6/4)	回転ナデ	外底 面形状・工具によるナデ	
458	42	45	SK84	土師器	椀	—	[1.7]	(5.0)	—	密	灰白色 (10YR7/1) 灰白色 (10YR7/1)	ナデ 回転ナデ		
459	42	45	SK84	青磁	香炉・小 香蓋	—	[2.0]	—	—	密	黄緑：灰白色 (N8/ 輪：明緑灰色 (5G7/1)	摩滅により不明 回転ナデ	中空の把手。「く たかけ」の意か	
460	42	45	SK86	土師器	皿	—	[2.2]	—	—	やや密	灰白・黄褐色 (10YR6/3) 灰白・黄褐色 (10YR6/3)	ヨコナデ 回転ナデ		
461	42	46	SK88	土師器	皿	(7.0)	1.0	(6.0)	—	密	褐色 (5YR6/6) 褐色 (5YR6/6)	回転ナデ 回転ナデ	外底面 に数日状 圧痕。底部回転 糸切り	
462	42	46	SK94	土師器	柱状高 台杯	—	[4.0]	—	—	やや粗	灰白・黄褐色 (10YR6/3) 灰白・褐色 (7.5YR5/4)	摩滅により不明 回転ナデ	摩滅により不明	
463	42	46	SK95	土師器	皿	(7.3)	1.3	(6.3)	—	密	灰黄褐色 (10YR5/2) 灰白・黄褐色 (10YR5/3)	回転ナデ 回転ナデ		

第15表 1区出土土器観察一覧表(15)

No	種別	図号	出土場所	種類	器種	法量 (cm)				粘土	焼成	(内) 色調 (%)	(内) 主な調整 (%)	備考
						口径 (復元値)	高さ (復元値)	底径 (復元値)	最大径 (復元値)					
464	42	46	SK98	白磁	皿	—	[1.1]	(5.6)	—	密	良	黒褐色: 灰白色 (2.5YR8/1) 軸: 灰白色 (N8/7)	回転ナデ 回転ナデ、回転 ヘラケズリ	付付産物
465	42	46	SK174	青磁	椀	—	[3.7]	—	—	密	良	黒褐色: 灰白色 (5Y6/1) 軸: オリーブ灰色 (2.5GY5/1)	回転ナデ 回転ナデ	内外面貫入著しい
466	42	46	SK208	土師器	皿	(6.8)	1.1	(6.0)	—	やや	やや	にぶい黄褐色 (7.5YR6/3) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	摩面により不明 回転ナデ	底部回転糸切り
467	42	46	SK210	土師器	皿	(9.2)	1.4	(7.2)	—	密	やや	にぶい黄褐色 (7.5YR7/4) にぶい褐色 (7.5YR7/3)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り (左回転)
468	42	46	SK217	土師器	杯	—	[1.3]	(7.4)	—	やや	やや	褐色 (5YR6/6) にぶい褐色 (5YR6/4)	回転ナデか 摩面により不明	底部回転糸切り (左回転)
469	42	46	SK229	土師器	杯	(11.8)	3.9	(5.0)	—	密	やや	にぶい黄褐色 (10YR7/3) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	摩面により不明 摩面により不明	口縁部外面、外 底面に附着物か、 底部回転糸切り (左回転)
470	42	46	SK236	土師器	杯	—	[1.6]	(6.2)	—	密	やや	にぶい褐色 (5YR7/4) にぶい褐色 (7.5YR7/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
471	42	46	SK240	土師器	杯	(12.6)	3.3	(6.8)	—	密	不貞	黒灰色 (10YR6/1) 灰白色 (10YR7/1)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
473	42	46	SK251	土師器	杯	—	[1.6]	(6.8)	—	密	やや	にぶい黄褐色 (7.5YR7/4) にぶい褐色 (5YR7/4)	ヨココテ 回転ナデ	底部回転糸切り
474	42	46	SK251	土師器	皿	(8.4)	1.5	(6.4)	—	密	やや	にぶい黄褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデか 回転ナデか	
476	43	47	SK254	土師器	皿	(6.8)	1.2	(6.2)	—	密	やや	にぶい褐色 (5YR6/4) にぶい褐色 (5YR6/4)	回転ナデ後ヨコ コテ 回転ナデ、回転 ヘラ切り後ヨコ コテ	底部回転糸切り (回転方向不明)
477	43	47	SK254	黄褐色	鉢	—	[3.1]	—	—	やや	粗	灰白色 (5YR8/1) 灰白色 (5YR8/1)	回転ナデ 回転ナデ	東邊系
478	43	47	SK261	土師器	皿	(7.6)	1.1	(6.4)	—	密	やや	にぶい黄褐色 (10YR7/3) にぶい黄褐色 (10YR7/3)	摩面により不明 回転ナデ	
479	43	47	SK261	土師器	杯	12.4	3.7	6.4	—	やや	密	褐色 (7.5YR7/6) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
480	43	47	SK263	土師器	杯	(12.2)	[2.4]	—	—	密	やや	にぶい黄褐色 (10YR7/3) にぶい褐色 (7.5YR7/3)	回転ナデ 回転ナデ	
481	43	47	SK265	土師器	皿	(5.4)	0.8	(4.8)	—	密	やや	にぶい褐色 (7.5YR6/4) 褐色 (2.5YR6/6)	回転ナデか 回転ナデ、回転 ヘラ切り後ナデ か	底部回転糸切り (回転方向不明)
482	43	47	SK267	土師器	皿	(8.0)	1.4	(6.3)	—	密	良	褐色 (5YR6/6) にぶい褐色 (5YR6/4)	ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り (右回転)
483	43	47	SK270	土師器	皿	(8.6)	1.7	(7.2)	—	密	やや	にぶい褐色 (7.5YR7/4) にぶい褐色 (7.5YR7/4)	回転ナデ 回転ヘラ切り後 ヨココテか	底部回転糸切り (左回転)
484	43	47	SK272	黄褐色	鉢	(26.6)	[6.6]	—	—	やや	粗	灰白色 (N7/7) 灰白色 (10YR7/1)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	口縁部磨面付録 まり。東邊系
485	43	47	SK272	土師器	皿	(6.2)	0.8	(5.8)	—	密	やや	にぶい黄褐色 (5YR6/4) にぶい褐色 (5YR6/4)	回転ナデ、ヨコ コテ 回転ナデ	底部回転糸切り
486	43	47	SK272	土師器	杯	(11.9)	[4.0]	(7.2)	—	密	やや	褐色 (2.5YR6/6) にぶい褐色 (2.5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
487	43	47	SK273	土師器	皿	(6.7)	1.2	(6.0)	—	密	やや	にぶい黄褐色 (10YR7/3) にぶい黄褐色 (10YR7/3)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り か
488	43	47	SK273	土師器	皿	—	[3.8]	—	—	密	良	にぶい黄褐色 (5YR5/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ	
489	43	47	SK273	土師器	皿	(8.0)	1.3	(6.6)	—	密	やや	にぶい黄褐色 (5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ 摩面により不明	底部回転糸切り (右回転)
490	43	47	SK273	土師器	杯	—	[1.5]	(6.3)	—	密	良	にぶい黄褐色 (10YR6/3) にぶい褐色 (7.5YR5/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
491	43	47	SK273	土師器	杯	—	[2.4]	(5.6)	—	密	やや	にぶい黄褐色 (7.5YR7/3) にぶい褐色 (7.5YR7/3)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
492	43	47	SK278	土師器	皿	(7.0)	1.3	(6.0)	—	やや	粗	灰黄褐色 (10YR5/2) 灰黄褐色 (10YR5/2)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	口縁部外面の一 部に灰化物付着、 底部回転糸切り
493	43	47	SK278	土師器	皿	—	[1.4]	—	—	やや	粗	にぶい黄褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ	外面に附着物
495	45	50	SD1中央付近 最上層土器部 №6	土師器	皿	8.8	1.6	6.2	—	密	やや	灰黄色 (2.5Y6/2) にぶい黄褐色 (10YR6/3)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り (右回転)
496	45	50	SD1中央最上 層土器部 11	土師器	皿	8.8	1.5	6.6	—	密	良	にぶい黄褐色 (7.5YR6/4) 褐色 (5YR6/6)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り (右回転)
497	45	50	SD1中央最上 層土器部 8	土師器	皿	8.6	1.8	6.1	—	密	良	灰黄褐色 (10YR6/2) 灰黄褐色 (10YR6/2)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り (右回転)

第16表 1区出土土器観察一覧表(16)

No	探洞	図版	出土場所	種類	器種	法量 (cm)				胎土	焼成	(内) 色調 (外)	(内) 主な調整 (外)	備考
						口径 (最大径)	器高 (取付高)	底径 (取付径)	最大径 (取付径)					
498	45	50	SD1中央付近 最上層土器部 No.9	土師器	皿	8.9	1.8	5.7	—	赤良	にぶい褐色(7.5YR6/4) にぶい褐色(7.5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ	底面回転へう切り (右回転)	
499	45	50	SD1中央付近 最上層土器部 No.12	土師器	皿	8.2	1.9	5.8	—	赤良	にぶい黄褐色(10YR6/4) にぶい褐色(7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底面回転へう切り (左回転)	
500	45	50	SD1中央最上 層土器部10	土師器	皿	8.1	1.7	5.5	—	赤良	にぶい赤褐色(5YR5/4) 褐色(5YR6/6)	回転ナデ 回転ナデ	底面回転へう切り	
501	45	50	SD1中央最上 層土器部3	土師器	皿	8.8	1.6	6.3	—	赤良	にぶい褐色(5YR6/4) にぶい褐色(5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ、回転 へう切り後ナデ	底面回転へう切り (右回転)	
502	45	50	SD1中央付近 土器部13	土師器	皿	(7.9)	1.8	(5.7)	—	赤良	灰黄褐色(10YR5/2) 灰黄褐色(10YR5/2)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底面回転へう切り (右回転)	
503	45	50	SD1中央付近 最上層土器部	土師器	皿	8.4	1.2	5.8	—	赤良	にぶい褐色(7.5YR7/3) にぶい褐色(7.5YR6/4)	摩滅により不明 回転ナデ	底面回転へう切り	
504	45	50	SD1中央付近 最上層土器部 No.4	土師器	皿	8.3	2.1	5.5	—	赤良	にぶい褐色(7.5YR7/4) 暗灰色(7.5YR5/1)～ 褐色(7.5YR6/6)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底面回転へう切り (右回転)	
505	45	50	SD1中央付近 最上層土器部 No.5	土師器	皿	8.6	1.8	5.7	—	赤良	暗灰黄色(2.5Y5/2) にぶい黄褐色(10YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ、回転 へう切り後回転 ナデ	底面回転へう切り (左回転)	
506	45	50	SD1最上層(褐 灰色土)	土師器	皿	(8.6)	1.2	(7.2)	—	赤良	にぶい黄褐色(10YR6/4) にぶい黄褐色(10YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ	底面回転へう切り	
507	45	50	SD1坑5付近 最上層	土師器	皿	(6.8)	1.4	(5.8)	—	赤良	にぶい褐色(5YR7/3) 灰黄褐色(10YR6/2)	回転ナデ 回転ナデ	底面回転へう切り (右回転)	
508	45	50	SD101坑5付 近か	土師器	皿	7.2	1.6	6.4	—	赤良	にぶい褐色(2.5YR6/4) にぶい褐色(2.5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ	底面回転へう切り (右回転)	
509	45	50	SD1(坑5付近) 最上層	土師器	皿	7.5	1.3	6.5	—	赤良	褐色(2.5YR6/6) にぶい褐色(7.5YR5/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底面回転へう切り (左回転)	
510	45	50	SD1(坑5付近) 最上層	土師器	皿	7.3	1.4	6.6	—	やや 赤良	にぶい褐色(7.5YR6/4) にぶい褐色(7.5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ	底面回転へう切り	
511	45	51	SD1最上層 (灰褐色土)	土師器	皿	6.6	1.4	5.8	—	赤良	にぶい褐色(5YR7/4) にぶい褐色(5YR7/4)	回転ナデ、微少 サマ 回転ナデ	外周面に数口目 施。底面回転へ う切り(右回転)	
512	45	51	SD1最上層坑 5付近	土師器	皿	7.2	1.0	6.1	—	赤良	褐色(2.5YR6/6) 褐色(2.5YR6/6)	ナデ 回転ナデ	底面回転へう切り (右回転)	
513	45	51	SD1最上層 (褐灰色土)	土師器	皿	(7.8)	1.2	(6.2)	—	赤良	にぶい褐色(2.5YR6/4) 灰黄褐色(10YR6/2)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底面回転へう切り (右回転)	
514	45	51	SD1最上層 褐色土	土師器	皿	(8.2)	1.5	(6.4)	—	赤良	にぶい褐色(7.5YR6/4) にぶい褐色(7.5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ	外周面に有機物付 着。底面回転へ う切り(右回転)	
515	45	51	SD1(坑5付近) 最上層	土師器	皿	(7.0)	1.0	6.2	—	赤良	にぶい褐色(5YR7/4) にぶい褐色(5YR7/4)	回転ナデ、回転 ナデ後ナデ 回転ナデ	底面回転へう切り か	
516	45	51	SD1中央付近 最上層(褐灰 色土)	土師器	皿	7.4	1.3	5.8	—	赤良	にぶい黄褐色(10YR6/4) にぶい黄褐色(10YR7/4)	回転ナデ 回転ナデ	底面回転へう切り (右回転)	
517	45	51	SD1中央付近 最上層(褐灰 色土)+濃黒	土師器	皿	(7.8)	1.3	(6.6)	—	やや 赤良	にぶい黄褐色(10YR7/3) にぶい黄褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ	底面回転へう切り (右回転)	
518	45	51	SD1中央付近 最上層(褐灰 色土)	土師器	皿	7.8	1.4	6.6	—	赤良	にぶい黄褐色(10YR6/3) にぶい黄褐色(10YR6/3)	回転ナデ 回転ナデ	底面回転へう切り	
519	45	51	SD1最上層	土師器	皿	(7.4)	1.2	(6.2)	—	赤良	にぶい褐色(5YR7/4) 明褐色(5YR7/1)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ		
520	45	51	SD1中央付近 中層	土師器	皿	(7.8)	1.3	(6.4)	—	やや 赤良	褐色(5YR6/6) 褐色(7.5YR7/6)	回転ナデ 回転ナデ	底面回転へう切り (右回転)	
521	45	51	SD1中層	土師器	皿	(9.0)	1.5	(7.2)	—	赤良	にぶい褐色(7.5YR7/3) にぶい褐色(7.5YR7/3)	回転ナデ、回転 ナデ後ナデ 回転ナデ	底面回転へう切り (右回転)	
522	45	51	SD1中層	土師器	皿	6.1	0.9	5.8	—	赤良	にぶい褐色(7.5YR7/3) にぶい褐色(7.5YR6/4)	回転ナデ後ナデ 回転ナデ	底面回転へう切り (左回転)	
523	46	51	SD1西側上層	土師器	皿	(8.7)	1.7	(6.2)	—	赤良	にぶい褐色(5YR7/4) にぶい褐色(5YR7/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底面回転へう切り か	
524	46	51	SD1西側上層	土師器	皿	6.4	1.1	5.4	—	赤良	褐色(5YR6/6) 褐色(5YR6/6)	ナデ 回転ナデ	底面回転へう切り (右回転)	
525	46	51	SD1中央付近 中層 灰白色土	土師器	皿	7.7	1.3	6.5	—	赤良	にぶい褐色(7.5YR6/3) にぶい褐色(7.5YR6/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底面回転へう切り (右回転)	
526	46	51	SD1	土師器	皿	7.2	1.2	5.6	—	やや 赤良	にぶい黄褐色(10YR6/4) にぶい黄褐色(10YR6/3)	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	底面回転へう切り	
527	46	52	SD1中央付近 最上層	土師器	杯	12.0	4.0	5.7	—	赤良	褐色(5YR7/6) にぶい褐色(5YR7/4)	回転ナデ、回転 ナデ後ナデ 回転ナデ	底面回転へう切り	
528	46	52	SD1最上層	土師器	杯	(12.0)	3.5	(7.0)	—	赤良	にぶい褐色(7.5YR6/4) にぶい褐色(7.5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ	底面回転へう切り	

第17表 1区出土土器観察一覧表(17)

No.	棟号	図版	出土場所	種類	器種	寸法 (cm)				粘土	焼成	(内)		備考
						口径 (復元値)	高さ (取付値)	底径 (復元値)	最大径 (復元値)			色調 (%)	主な調整 (%)	
529	46	52	SD1 最上層	土師器	杯	(10.0)	3.8	6.2	—	やや 密	良	にぶい褐色 (5YR7/4) にぶい褐色 (5YR7/4)	回転ナデ 回転ナデ	底面回転糸切り
530	46	52	SD1 中央付近 中層 灰白色土	土師器	杯	(12.0)	3.5	(6.2)	—	密	良	にぶい褐色 (5YR6/4) にぶい褐色 (5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底面回転糸切り
531	46	52	SD1 西側上層	土師器	杯	(12.8)	4.0	(6.0)	—	密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ	底面回転糸切り
532	46	52	SD1 (東より 調査区端の埋 土)	土師器	杯	(13.6)	4.4	(7.4)	—	やや 密	不 良	褐色 (2.5YR6/6) 褐色 (2.5YR6/6)	回転ナデ 回転ナデ	底面回転糸切り
533	46	52	SD1 机5付近 最上層	土師器	杯	(12.0)	3.7	(6.2)	—	密	良	褐色 (5YR6/6) 褐色 (5YR6/6)	ナデ 回転ナデ	底面回転糸切り
534	46	52	SD1 (東より 埋土)	土師器	杯	(12.8)	3.7	(6.0)	—	密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ	底面回転糸切り
535	46	52	SD1 (机5付近) 最上層 (陶灰 色土)	白磁	皿	10.8	2.9	6.4	—	密	良	露胎: 灰白色 (N8/) 胎: 灰白色 (10Y7/1)	回転ナデ 回転ナデ	口先外。外底面 一部露胎
536	46	52	SD1 中央付近 埋土	白磁	碗	(10.0)	3.6	—	—	密	良	露胎: 灰白色 (5YR/1) 胎: 灰白色 (5G/R/1)	回転ナデ 回転ナデ	口先外
537	46	53	SD1 (机5付近) 最上層	土師器	皿	—	[6.2]	—	—	密	良	にぶい褐色 (2.5YR6/4) 褐色 (7.5YR4/4)	回転ナデ、ハケ 目後ナデ 回転ナデ	外面に隈付着
538	46	53	SD1 東端最上 層	土師器	皿	(29.4)	[6.1]	—	—	密	良	褐色 (5YR6/6) 褐色 (10YR4/1)	回転ナデ 回転ナデ	外面に隈付着
539	46	53	SD1 最上層 (陶 灰色土)	土師器	皿	—	[4.7]	—	—	やや 密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR5/3)	ハケ目後ヨコナ デ ヨコナデ、ハケ 目後ヨコナデ	
540	46	53	SD1 (机5付近) 最上層	土師器	皿	—	[7.2]	—	—	密	良	褐色 (5YR6/6) にぶい褐色 (7.5YR5/4)	回転ナデ、ハケ 目	
541	46	53	SD1 (東より 調査区端の埋 土)	土師器	足罎	—	[8.5]	—	—	やや 粗	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	ナデ 手取指オサエ	胴部
542	47	53	SD1 中層	土師器	鉢鉢	—	[4.5]	—	—	やや 密	良	浅黄褐色 (7.5YR8/4) 浅黄褐色 (7.5YR8/4)	ナデ 指オサエ、指オ サエ後ナデ	内面に5象単位 のおろし目。注 口部凸出
543	47	53	SD1 西側土層	須恵器	鉢	—	[3.75]	—	—	やや 密	良	灰色 (N6/) 灰色 (N6/)	回転ナデ 回転ナデ	東蓮系
544	47	53	SD1 中層	土師器	柱状高台杯	—	[3.5]	—	—	密	良	にぶい褐色 (5YR6/4) にぶい褐色 (5YR6/4)	ナデ ヨコナデ	底面回転糸切り
545	47	53	SD1 中央付近 最下層 (砂礫)	弥生 土器	甕	—	[6.0]	—	—	粗	不 良	にぶい黄褐色 (10YR5/3) にぶい黄褐色 (10YR6/4)	摩滅により不明 摩滅により不明	頸部外面の帯に 指目による連続 線状文
546	47	53	SD1 西側上層	弥生 土器	甕	—	[3.1]	—	—	やや 密	良	褐色 (5YR7/8) 褐色 (2.5YR6/8)	摩滅により不明 摩滅により不明	垂下口縁。外面 に斜格子文
547	47	53	SD1 SK1 付 近 下層	弥生 土器	甕	—	[4.2]	(4.4)	—	やや 密	良	赤色 (10R5/6) 赤褐色 (10R5/3)	ナデ ナデ、指オサエ	外面に隈付着
548	47	53	SD1 SK1 付 近 中層	弥生 土器	甕	—	[2.7]	—	—	やや 密	良	赤褐色 (10R6/6) 赤褐色 (10R6/6)	摩滅により不明 ナデ、指オサエ	ミニチュア土器 か
549	47	53	SD1 東埋付近 最下層	弥生 土器	甕	—	[3.8]	(6.0)	—	やや 密	良	灰赤色 (2.5YR5/2) 褐色 (2.5YR6/6)	ナデ、指オサエ ナデ	
550	47	53	SD1 東端中層	土師器	高杯	—	[5.8]	—	—	やや 密	不 良	浅褐色 (5YR8/4) 浅褐色 (5YR8/4)	摩滅により不明 摩滅により不明	
551	47	53	SD1 SK137 付 近 中層	須恵器	杯蓋	(14.6)	[3.0]	—	—	やや 密	不 良	明褐色 (7.5YR7/2) 明褐色 (7.5YR7/2)	回転ヘラケズ リ、回転ヘラケ ズリ後ヨコナデ	
552	47	53	SD1 SK1 付近 下層	須恵器	杯 (蓋)	—	[1.8]	—	—	やや 粗	良	青灰色 (5PB6/1) 青灰色 (5PB6/1)	回転ナデ 回転ナデ、回転 ヘラ切り後ナデ	
553	47	53	SD1 SK1 付近 下層	須恵器	杯 (蓋)	—	[1.4]	—	—	やや 密	不 良	灰白色 (5Y7/1) 灰白色 (2.5Y8/1)	回転ナデ後ナデ 回転ナデ、握み 部: ナデ	大冨部に中窪み の扁平窪状つま み取付
554	47	53	SD1 (西埋付 近) 最上層～ 中層	須恵器	杯 (蓋)	—	[3.1]	—	—	やや 密	良	灰色 (N4/) 灰色 (N5/)	回転ナデ 回転ナデ	内面に積 きぶくれ
555	47	53	SD1 SK1 付近 上層	須恵器	磨か瓶	—	[4.6]	—	—	やや 密	良	灰色 (N6/) 暗赤褐色 (5YR3/4)	回転ナデ 回転ナデ	外面に自然釉が 残る
556	47	53	SD1 SK1 付近 中層	須恵器	磨か瓶	—	[3.4]	—	—	密	良	灰色 (N6/) 灰白色 (5Y7/1)	回転ナデ 回転ナデ	外面に自然釉が 残る
557	47	53	SD1	須恵器	磨か台	—	[5.1]	—	—	密	やや 粗	灰色 (N6/) 灰色 (N5/)	回転ナデ カキ目	外面不定位置に 円形刺状文

第18表 1区出土土器観察一覧表(18)

No.	探洞	図版	出土場所	種別	器種	寸法 (cm)				胎土	焼成	色調 (内) (外)	主な調整 (内)	備考
						口径 (最大径)	器高 (最大径)	底径 (最大径)	最大径 (最大径)					
561	48	54	SD5	土師器	皿	7.0	1.9	5.7	—	密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、胎オサエ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り (左回転)
562	48	54	SD5	土師器	皿	(8.9)	1.0	(7.2)	—	密	良	にぶい黄褐色 (10YR6/4) にぶい赤褐色 (5YR5/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転系切り
563	48	54	SD5	土師器	皿	(6.1)	1.3	(5.4)	—	やや密	良	にぶい黄褐色 (10YR6/4) にぶい黄褐色 (10YR6/3)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り (左回転)
564	48	54	SD13	土師器	皿	7.9	1.6	7.0	—	密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転系切り
565	48	54	SD13	土師器	杯	—	[1.5]	7.2	—	密	不良	褐色 (7.5YR7/6) 褐色 (7.5YR7/6)	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転系切り
566	48	54	SD13	土師器	杯	—	[2.0]	6.8	—	密	良	にぶい黄褐色 (10YR5/3) にぶい黄褐色 (10YR6/3)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転系切り
567	48	54	SD13	土師器	柱状器 台杯	—	[3.3]	8.2	—	密	良	褐色 (5YR7/6) 褐色 (5YR7/6)	摩滅により不明 回転ナデ	
568	48	54	SD13	青磁	椀	(14.4)	[6.7]	—	—	密	良	露胎：にぶい黄褐色 (10YR7/2) 胎：オリーブ色 (5Y5/4)	回転ナデ 回転ナデ	内面に4条沈線、 横直文様、4条縦 位華文文様部分 割線。龍泉窯系。 569と同一個体
569	48	54	SD13	青磁	椀	—	[2.1]	(6.3)	—	密	良	露胎：にぶい黄褐色 (10YR7/2) 胎：オリーブ色 (5Y5/4)	回転ナデ、回転 ヘラケズリ	足込に草花文様。 外底面・背付露 胎。龍泉窯系。 568と同一個体
570	48	54	SD13	青磁	耳付 盃	—	[2.4]	—	—	密	良	露胎：灰白色 (5Y7/1) 胎：灰オリーブ色 (5Y6/2)	回転ナデ 回転ナデ	横方向の耳取付
571	48	54	SD17	青磁	椀	—	[3.0]	(5.0)	—	密	良	露胎：灰白色 (N7/1) 胎：灰オリーブ色 (7.5Y6/2)	回転ナデ 回転ナデ	内面体部下に ヘラ描草花文様。 華南列文点。外 面体部下に9 条単位華南文
572	48	54	SD13の北側 SD	陶器	部鉢	—	3.7	—	—	やや粗	良	褐灰色 (10YR4/1) 灰褐色 (5YR4/2)	回転ナデ、ナデ (口内面) 回転ナデ	内面に3条のお ろし目残存。注 口部作凸
573	48	54	SD11	陶器	部鉢	—	[7.4]	—	—	やや粗	良	褐灰色 (10YR5/1) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	ハケ目後ヨコナ デ、ハケ目後ナ デ ヨコナデ	内面に10条単位 のおろし目
574	49	55	調査区北側東 遺物包含層	土師器	皿	7.7	1.4	6.4	—	やや密	良	褐色 (2.5YR7/6) ~赤 灰色 (2.5YR6/1) 褐色 (2.5YR7/6) ~赤 灰色 (2.5YR6/1)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り (左回転)
575	49	55	調査区北側東 遺物包含層	土師器	皿	6.4	0.9	5.8	—	やや密	良	灰褐色 (7.5YR6/2) にぶい褐色 (7.5YR6/3)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り (右回転)
576	49	55	調査区北側 遺物焼出面	土師器	皿	7.0	1.4	5.7	—	やや密	良	明褐色 (7.5YR7/2) にぶい褐色 (7.5YR7/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り (左回転)
577	49	55	調査区北側 遺物焼出面	土師器	皿	7.1	0.9	6.5	—	密	良	にぶい褐色 (5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り (左回転)
578	49	55	調査区北側 遺物焼出面	土師器	皿	7.3	1.0	6.1	—	密	良	淡赤褐色 (2.5YR7/3) 褐色 (2.5YR6/6)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り (左回転)
579	49	55	調査区北側 遺物焼出面	土師器	皿	7.0	1.2	6.3	—	密	良	にぶい褐色 (5YR6/4) 褐色 (2.5YR7/6)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り (左回転)
580	49	55	調査区北側 遺物焼出面	土師器	皿	(7.0)	1.2	(5.6)	—	やや密	良	灰黄褐色 (10YR6/2) 灰褐色 (5YR6/2)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り (左回転)
581	49	55	調査区北側 遺物焼出面	土師器	皿	(7.8)	1.0	(6.3)	—	やや密	良	褐色 (5YR7/6) 褐色 (5YR7/6)	摩滅により不明 回転ナデ	底部回転ヘラ切り (左回転)
582	49	55	記載なし	土師器	皿	6.4	1.4	6.2	—	密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい黄褐色 (10YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、回転 ヘラ切り後ナデ	底部回転ヘラ切り (左回転)
583	49	55	SD13北側含智	土師器	杯	(11.6)	3.0	(7.5)	—	やや密	良	にぶい褐色 (5YR6/4) 褐色 (5YR6/6)	回転ナデ、回転 ナデ後ナデ 回転ナデ	底部回転系切り
584	49	55	出土地点不明	土師器	杯	—	[2.5]	(6.0)	—	やや密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/3) にぶい褐色 (7.5YR6/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転系切り
585	49	55	SD不明	青磁	椀	—	[0.9]	(5.0)	—	密	良	露胎：灰色 (N6/3) 胎：オリーブ灰色 G5Y5/1)	回転ヘラケズリ 回転ヘラケズリ	足込みにヘラ、華 南による草花文 様。底部回転ヘ ラ切り (右回転)
586	49	56	調査区北側東 埋付遺 遺物包含層	土師器	罎	(28.0)	[10.2]	—	—	やや密	良	にぶい褐色 (5YR6/4) 褐灰色 (5YR4/1)	回転ナデ、胎オ サエ 回転ナデ、胎オ サエ	外面に埋付蓋。積 熱により割線

第19表 1区出土土器観察一覧表(19)

No.	探区	図版	出土場所	種類	器種	法量 (cm)				粘土	焼成	(内) 色調 (%)	(内) 主な調整 (%)	備考
						口径 [復元値]	器高 [現存値]	底径 [復元値]	最大径 [復元値]					
587	49	56	調査区北東部 遺物包含層	土師器	罎	(34.0)	[8.2]	—	—	やや粗	良	褐色 (2.5YR6/6) 灰褐色 (7.5YR4/1)	回転ナデ、指オ サエ 回転ナデ、指オ サエ	外面に塚付着
588	49	56	調査区北側東 塚付近 遺物包含層	陶器	罎鉢	(25.8)	[8.8]	—	—	密	良	灰褐色 (5YR6/1) 灰褐色 (10YR6/1)	回転ナデ	内面に9染単位 のおろし目。欄 前後
589	50	56	調査区南～西 塚付近	陶器	罎鉢	(30.2)	[10.0]	—	—	密	良	灰褐色 (7.5YR6/1) 灰色 (5Y6/1)	回転ナデ 回転ナデ	内面に9染単位 のおろし目。欄 前後
590	50	57	調査区北側 遺物包含層	赤土 土器	鉢	(12.8)	14.3	(4.6)	(13.6)	やや粗	良	明赤褐色 (5YR5/6) 明赤褐色 (2.5YR5/6)	ヘラケズリ後ナ デ、指オサエ ナデ、一部指オ サエ	底部内面に黒変

第20表 1区出土石器・石製品等観察一覧表

No.	探区	図版	出土場所	器種	法量 (cm)			重さ (g) [現存値]	石材	備考
					長さ [現存値]	幅 [現存値]	厚さ [現存値]			
88	21	18	SP44	石鏃	器高 [3.7]	—	2.0	[153.0]	滑石	内外面型によるケズリ、外面塚付着
257	28	28	SP1328	磨石	7.7	7.65	5.0	438	花崗岩	正裏面中央部に敲打痕
389	39	41	SK249之層	砥石	[7.2]	[7.5]	[5.0]	[398]	珪質片麻岩	現存砥石面は正面1面
390	39	41	SK249 1層	砥石	[8.4]	[6.35]	[2.9]	[295]	珪質片麻岩	砥石面は正裏2面
394	39	41	SK249 北部	削片	1.9	2.5	0.3	2.1	黒曜石	
401	40	42	SK17	ナイフ形石器	[3.0]	1.0	0.5	[1.4]	安山岩	横長削片素材、正面右側縁及び左側縁下部の二側縁加工
404	40	42	SK20 北西部	削片	1.75	1.05	0.45	0.8	黒曜石	調整削片
472	42	46	SK240	ヘラ状石製品	7.55	3.0	0.9	33.5	塩基性片岩	正面左下平部、裏面を研削
475	42	46	SK81	削片	2.6	[5.7]	1.3	[21.8]	安山岩	
558	47	53	SD1 中央付近 給下層	附器	4.55	6.5	0.95	[28.0]	安山岩	横長削片素材
592	50	57	遺構検出面	砥石	7.65	3.0	1.0	34.4	砂質片岩	仕上げ。砥石面は裏面除く5面
593	50	57	調査区北側 遺構検出面	台座状石製品	13.25	[15.3]	1.3	[352]	砂質片岩	上下両端面を研削
599	50	57	遺構検出面	トロトロ石器	5.7	[2.5]	0.7	8.9	チャートカ	石鏃形状、脚部外反、長軸方向に向かって縦・横方 向の黒色の組紋様を伴う褐色系石材
600	50	57	掛土塚場	石鏃	[3.4]	1.45	0.4	[1.9]	安山岩	平基式、削片鏃
601	50	57	表塚	石鏃	[3.1]	1.1	0.4	[1.7]	安山岩	正裏面中央部に素材面を残す

第 21 表 1 区出土金属製品観察一覧表

No.	種別	採取	出土場所	種類	器種	法量 (cm)			重さ (g) [現存値]	備考
						長さ [現存値]	幅 [現存値]	厚さ [現存値]		
12	9	11	SB1 (SP351)	鉄器	鉄釘	[3.1]	0.7	0.4	[0.9]	和釘
154	24	22	SBS (SP412)	鉄製品	不明	[5.15]	0.95	0.85	[13.0]	
190	25	25	SP501	鉄器	鉄釘	[7.2]	0.8	0.8	[9.2]	
220	27	26	SP685	鍍洋	鍍洋	[2.55]	3.45	2.05	[16.2]	鍍洋洋
225	27	26	SP776	鍍洋	鍍洋	[7.4]	9.1	4.3	[288]	鍍洋洋
258	28	28	SP950	鍍洋	鍍洋	[3.1]	3.5	2.9	[46.2]	鍍洋洋か鍍洋鍍洋
259	28	28	SP1127	鍍洋	鍍洋	[1.8]	2.8	1.45	[9.5]	鍍洋洋
260	28	28	SP1170	鍍洋	鍍洋	[3.6]	1.7	2.2	[17.4]	鍍洋洋
261	28	28	SP1148	鉄器	鉄刀子か	[5.2]	1.3	0.2	[6.5]	葉部、目釘現存
262	28	28	SP887	鉄器	鉄釘	[9.6]	1.4	0.85	[22.0]	和釘
263	28	28	SP1189	鉄器	鉄釘	[5.2]	0.6	0.6	[2.7]	和釘
300	30	30	SP3081	鉄製品	不明	[13.6]	1.3	0.6	[126.0]	
306	30	30	SP3020	鉄器	鉄釘	[6.3]	0.7	0.6	[9.8]	和釘
391	39	41	SK249	鍍洋	鍍洋	4.75	6.0	2.9	96.4	鍍洋洋
392	39	41	SK249 1 層	鉄製品	不明	[3.35]	[2.7]	0.6	[17.8]	
393	39	41	SK249 1 層	鉄器	鉄刀子か	[7.0]	[2.2]	[1.3]	[22.5]	
433	41	44	SK62	鉄器	鉄釘	頭部 [1.3] 先端部 [2.1]	頭部 0.9 先端部 0.4	頭部 0.45 尾部 0.35	[1.2] [0.9]	和釘
440	41	45	SK67	銭貨	銅銭	直径 2.45	方孔一辺 0.7	0.15	2.5	「空宋元貨」(初鑄 1253 年)、葉書体
441	41	45	SK67	銭貨	銅銭	直径 2.4	方孔一辺 0.7	0.1	1.6	「開元通寶」(初鑄 621 年)、真書体
442	41	45	SK67	銭貨	銅銭	-	-	-	[0.8]	銭貨不明
448	42	45	SK76	鉄器	鉄刀子	[7.4]	1.0	0.55	[9.0]	葉部不遺出
494	43	47	SK271	銭貨	銅銭	直径 2.5	方孔一辺 0.7	0.1	3.1	「元豊通寶」(初鑄 1078 年)、行書体
559	47	54	SD1 中央付近 層下層	鍍洋	鍍洋	5.65	7.6	2.65	119.7	鍍洋洋
560	47	54	SD1	銭貨	銅銭	直径 2.5	方孔一辺 0.75	0.05	1.2	「□宋通寶」、真書体
594	50	57	調査区北東側 遺物包付層	鉄器	鉄刀子	[7.3]	葉 0.8 刃部 1.4	0.35	[16.2]	
595	50	57	調査区北東側 遺物包付層	鉄製品	不明	[7.6]	[3.5]	0.7	[38.7]	上面凸状に消曲
596	50	57	出土位置不明	鉄製品	不明	[3.4]	3.3	0.9	[25.5]	箱形の板状品
597	50	57	遺構検出面	銭貨	銅銭	直径 2.6	方孔一辺 0.75	0.15	1.3	「景祐元寶」(初鑄 1034 年)、真書体

第 22 表 1 区出土土製品観察一覧表

No.	種別	採取	出土場所	器種	法量 (cm)				重さ (g) [現存値]	胎土	焼成	色調 (内) (外)	主な調整 (内) (外)	備考
					長さ [現存値]	幅 [現存値]	厚さ [現存値]	孔径						
194	25		SP507-508	陶器口	[5.9]	[7.3]	2.2	2.9	[63.7]	やや粗	良	褐色 (2.5YR7/8) 赤灰色 (2.5YR5/1)	ヘラケズリか 不明	
591	50		調査区北東側 遺物包付層	陶器口	[4.3]	[8.8]	3.4	2.7	[118.3]	やや密	良	褐色 (2.5YR6/6) 黄灰色 (2.5Y6/1)	ナデ ナデ、胎せせエ	鍍洋付着
598	50		調査区北東側 遺物包付層	土葬	[2.9]	[1.1]	0.4	0.4	[3.3]	やや密	良	灰白色 (10YR8/1)	ナデ	管状土葬

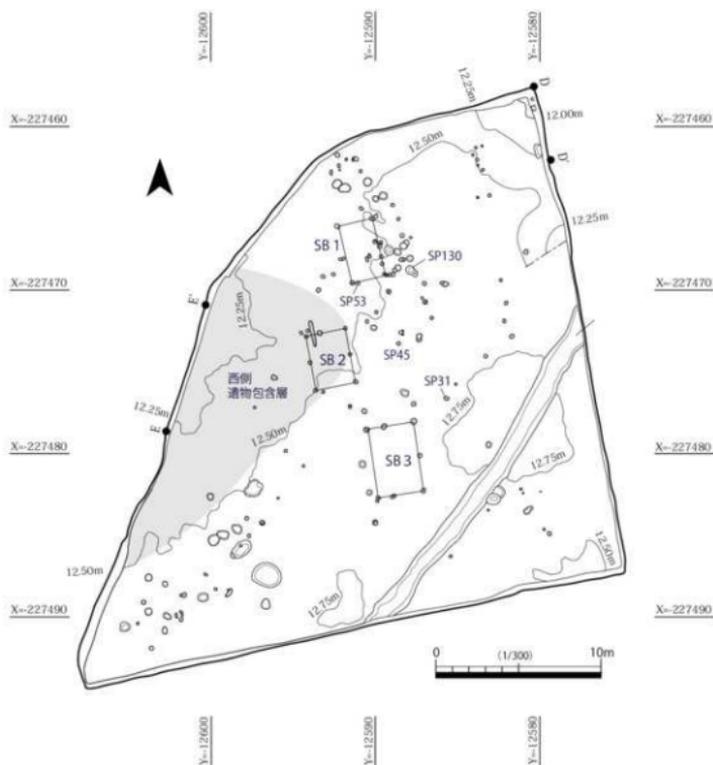
2 2区の成果

(1) 概要 (第51図、図版4・58)

2区は、1区から続く台地上にあり、大部分は平坦面をなすが、全体に後世の削平を受けている。調査区の北側から西側にかけてと北東隅は緩やかに落ち込んでおり、その部分に遺物包含層が堆積していた。標高は、平坦面が12.50～12.75 m、北側～西側斜面が12.25～12.50 m、北東隅が12.00～12.50 mを測る。

遺構は、1区に続く北東～南西方向の流路のほか、掘立柱建物3棟、その他の柱穴約70個、土坑19基、溝2条を確認した。

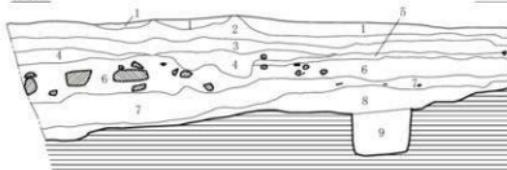
出土遺物は、中世の土師器、須恵器、瓦質土器、銅銭のほか、遺物包含層から古墳時代の土師器が出土した。



第51図 2区遺構配置図

2区北東壁(D-D')

13.20m

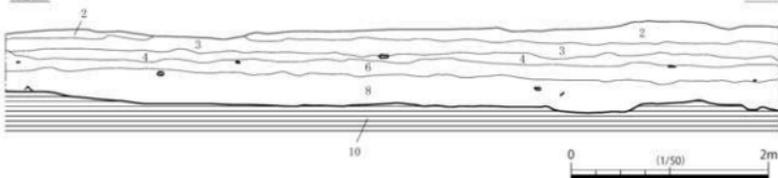


土層凡例

- 1 客土：明黄褐色 (10YR6/8) 粘質土
地山ブロックを含む
- 2 耕作土
- 3 盤土①：黄褐色 (10YR7/8) 粘質土
- 4 盤土②：明黄褐色 (10YR6/8)
- 5 客土：黄褐色 (10YR5/6) 粘質土
- 6 遺物包含層：褐色 (7.5YR4/3) 粘質土
大小礫が多く混じる。炭を含む
- 7 遺物包含層：暗褐色 (7.5YR3/4) 粘質土
所々に明黄褐色 (10YR6/8) 粘質土ブロックを含む
- 8 遺物包含層：黒褐色 (10YR2/2) 粘質土
小礫が若干混じる。炭を含む
- 9 遺構埋土：にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土
所々に明黄褐色 (10YR6/8) 粘質土ブロックが混じる
- 10 地山：明黄褐色 (10YR6/8) 粘質土
所々に3~5cm程度の小円・角礫が混じる

2区北西～西壁(E-E')

13.20m



第52図 2区土層断面図

(2) 基本層序 (第52図、図版59)

2区の土層は、北東壁(D-D')と北西～西壁(E-E')でそれぞれ確認した。

東壁(D-D')は、1層が客土、2層が耕作土で、3・4層の盤土は2層に分かれており、4層の盤土層には本来は旧耕地があり、削平を受けたと考える。5層は客土で、6～8層はいずれも褐色～黒褐色の粘質土からなる遺物包含層である。9層は遺構(土坑)埋土で、10層は明黄褐色の小礫混じり粘質土からなる地山である。

北西～西壁(E-E')は、2層が耕作土、3・4層が盤土、6・8層が遺物包含層、10層が地山で、北東壁の土層とほぼ対応する。

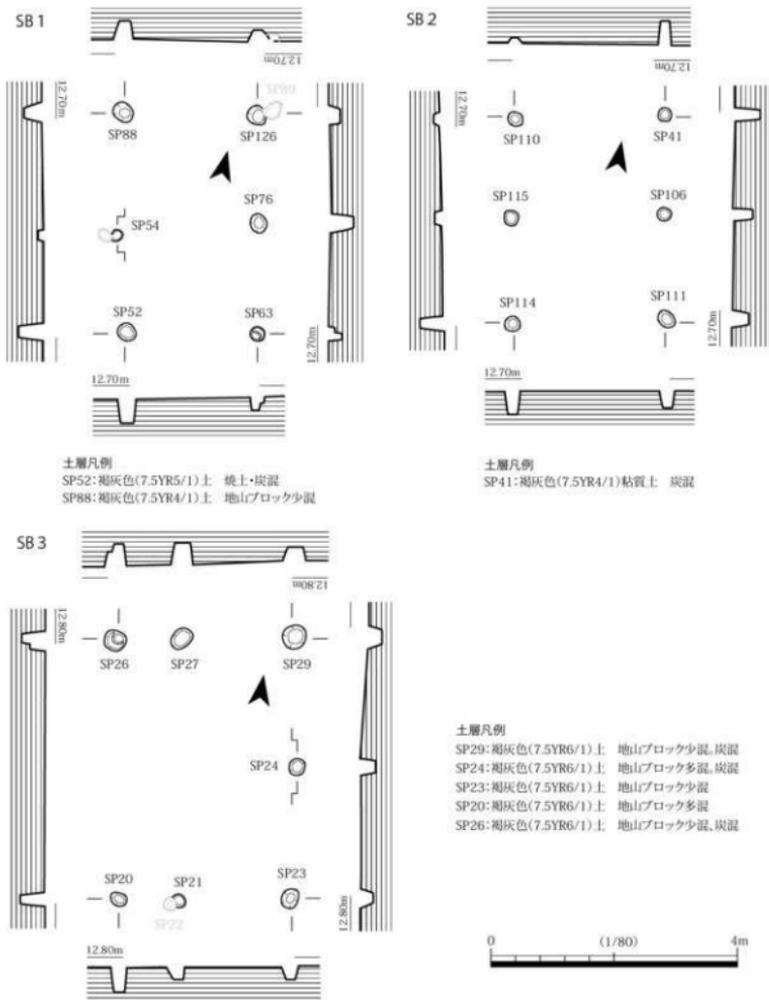
以上から基本層序は、I区とほぼ同様に、Ⅱ：耕作土及び盤土、Ⅲ：遺物包含層、Ⅳ：地山となるが、旧耕地はほとんど削平されて残存しない。地山は、小礫混じりの明黄褐色粘質土層であり、I区北半の地山と対応する。

(3) 遺構と遺物

① 掘立柱建物

SB 1 (第53・54図、図版63)

2区の北側に位置する、桁行2間、梁行1間の建物で、主軸方向はN13°W、検出面での標高は12.44～12.50mである。規模は、桁行が3.60m、梁行が2.16mを測り、床面積は7.78㎡となる。桁行の西側中央のSP54は、柱筋からやや外側に外れる。柱間隔は、桁行の東側が北から1.80m、1.80m、西側が北から2.00m、1.60mを測る。構成柱穴の直径は20～38cm、深さは12～40cm



第 53 図 2区掘立柱建物実測図

で、埋土は、褐灰色土を主体とし、SP52で焼土と炭、SP88で地山ブロックが混じる。

遺物は、ほとんどの柱穴から土師器小片が出土したほか、SP52から鉄釘の小片が出土した。606は、SP63出土の土師器の杯で、復元径が10.0cmで、体部が内湾気味に短く開きながら立ち上がる。底部は回転ヘラ切りである。

構成柱穴 SP52 から出土した炭化材の放射性炭素年代測定 (AMS 法) による暦年代範囲 (2 δ) は、1273-1304calAD (81.3%) の結果が得られた。

出土遺物や年代測定結果から、遺構の時期は 14 世紀前半～中頃と考える。

SB 2 (第 53 図)

2 区中央やや西寄りに位置する、桁行が東側で 2 間、西側で 1 間、梁行が 2 間の建物で、主軸方向は N 11°W、検出面での標高は 12.42～12.50 m である。規模は、桁行が 3.38 m、梁行が 2.48 m を測り、床面積は 8.38㎡となる。柱間間隔は、桁行の東側が北から 1.60 m、1.78 m、西側が北から 1.68 m、1.70 m を測る。構成柱穴の直径は 22～30cm、深さは 10～42cm で、埋土は、SP41 で炭混じりの褐色土を主体とする。

遺物は、すべての柱穴から土師器小片や炭が出土したが、図化できるものはなかった。

構成柱穴 SP110 から出土した炭化材の放射性炭素年代測定 (AMS 法) による暦年代範囲 (2 δ) は、1220-1273calAD (95.4%) の結果が得られた。

年代測定の結果から、遺構の時期は 13 世紀中頃～後半と考える。

SB 3 (第 53・54 図、図版 63)

2 区中央やや南寄りに位置する、桁行 2 間、梁行 1 間の建物で、主軸方向は N 9°W、検出面での標高は 12.50～12.66 m である。規模は、桁行が 4.28 m、梁行が 2.80 m を測り、床面積は 11.98㎡となる。桁行の東側中央の SP24 は、柱筋からやや外側に外れ、梁行の中央の柱穴は南北両側とも西側に寄る。柱間間隔は、桁行の東側が北から 2.10 m、2.18 m で、梁行の北側が東から 1.74 m、1.06 m、南側が東から 1.82 m、0.98 m を測る。構成柱穴の直径は 22～38cm、深さは 22～44cm で、埋土は、褐色土を主体とし地山ブロックが混じる。SP24・SP26・SP29 では炭が混じる。

遺物は、ほとんどの柱穴から土師器小片が出土したほか、SP27 から青磁椀が出土したが、いずれも図化できなかった。602 は、SP20 から出土した弥生土器の壺または甕の底部片で、底面に板目状圧痕を残す。弥生時代中期に比定するが、混入と考える。

明確な時期を決定できる遺物は出土しなかったが、土師器や青磁片、周辺遺構との関係から、遺構の時期は 13～14 世紀と考える。

②柱穴出土遺物 (第 54 図、図版 63)

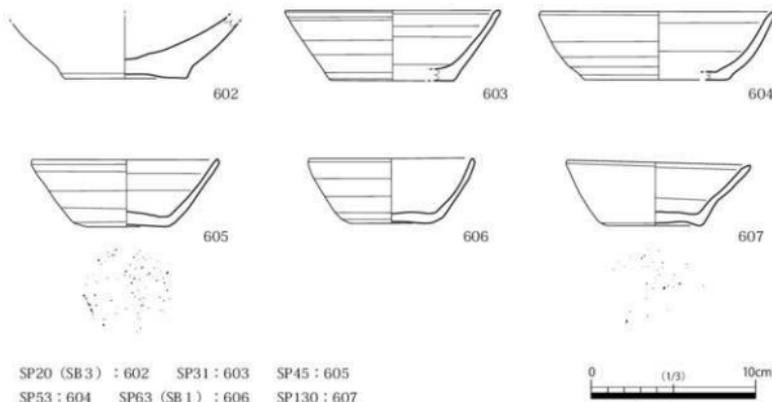
603 は SP31、604 は SP53、605 は SP45、607 は SP130 からそれぞれ出土した土師器の杯である。口径は、603 と 604 が 13.0～14.0cm 程度、605 と 607 が 11.0cm 程度に大きく分けられる。前者のうち、603 は体部が外傾するもの、604 は体部が内湾気味に開くもので、後者はいずれも底部から緩やかに体部が開くものである。底部は、607 が回転ヘラ切りのほかは、いずれも回転糸切りである。

遺物の年代は、13 世紀代～14 世紀中頃に比定できる。

③溝

SD 1 (第 55 図、図版 60)

2 区の南壁中央から東壁中央にかけて延びる溝で、1 区の SD 1 に続くと考えられる。主軸方向は N



第54図 2区柱穴出土遺物実測図

36° Eである。規模は、長さが21.50 m、上端と下端それぞれの幅が最大で2.40 mと2.10 m、最小で1.00 mと0.50 mを測る。深さは最深で0.36 mである。底面の標高は、南壁付近で12.50 m、東壁付近で12.45 mであり、東壁側がやや低い。埋土は、東壁付近(A-A')では4層に分けられ、上から3層(5~7層)が礫混じりの砂質土で、下層になるにつれ橙色から灰色に変わり、南壁面に沿って堆積する8層は径5 cm大の礫が多く混じる灰オリーブ色土である。一方の南壁付近(B-B')は、褐灰色砂礫土の単層からなる。

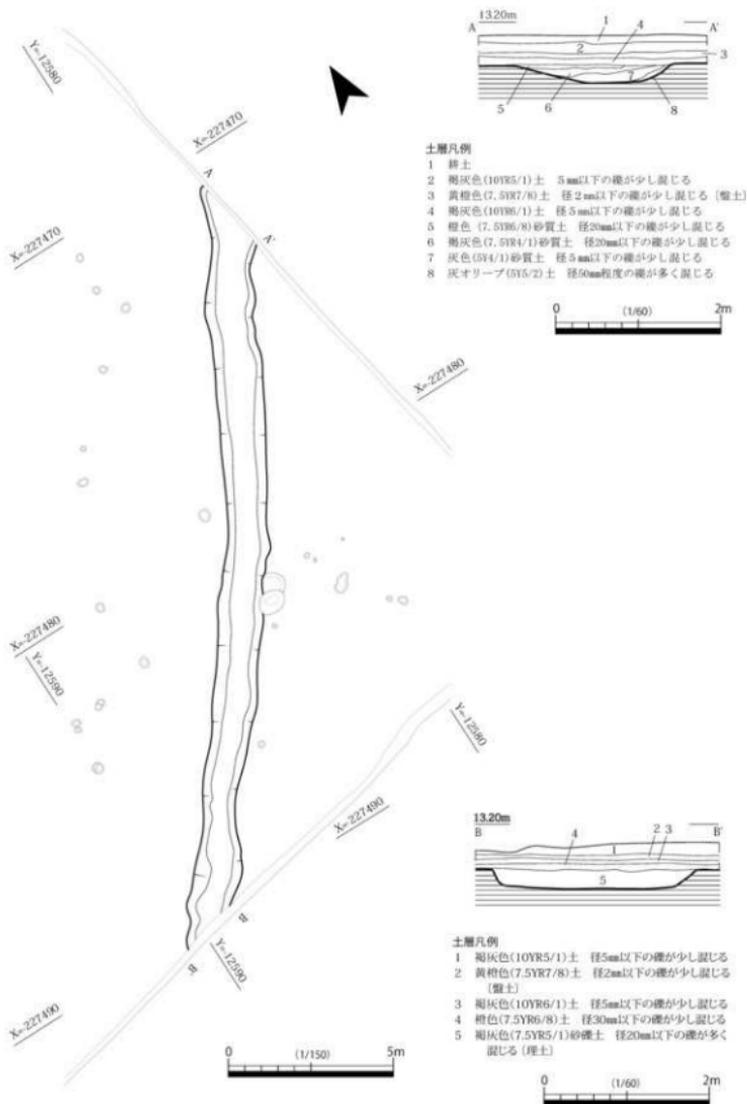
遺物は、埋土中から土師器をはじめ、弥生土器、須恵器、陶器、青磁等が出土したが、いずれも小片のため図化できなかった。

明確な時期を決定できる遺物は出土しなかったが、周辺遺構との関係から、遺構の時期は13~14世紀と考える。

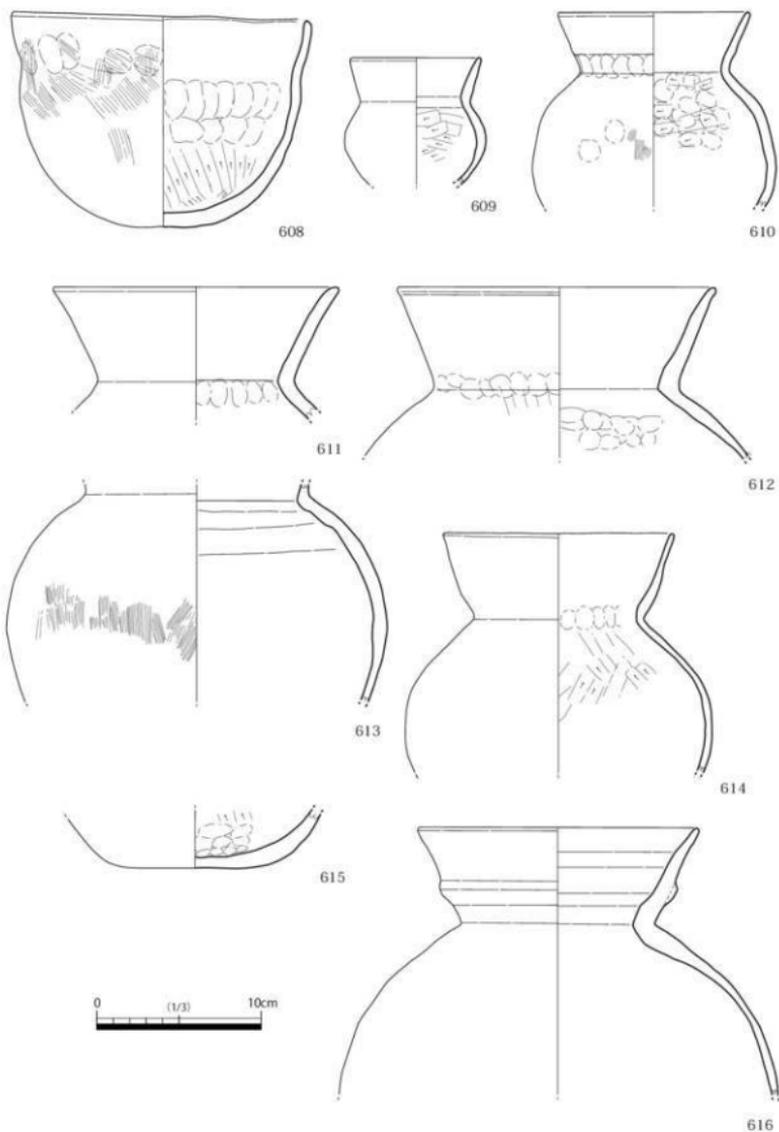
④西側遺物包含層出土遺物(第51・56~59図、図版61~69)

2区の西壁付近、標高12.25~12.50 mの緩斜面上に、南北に約20 m、東西に最大約9 mの範囲で、約0.2~0.3 mの厚さの遺物包含層が堆積していた。遺物包含層中からは、古墳時代の土師器を主体とする、多くの土器が出土した。

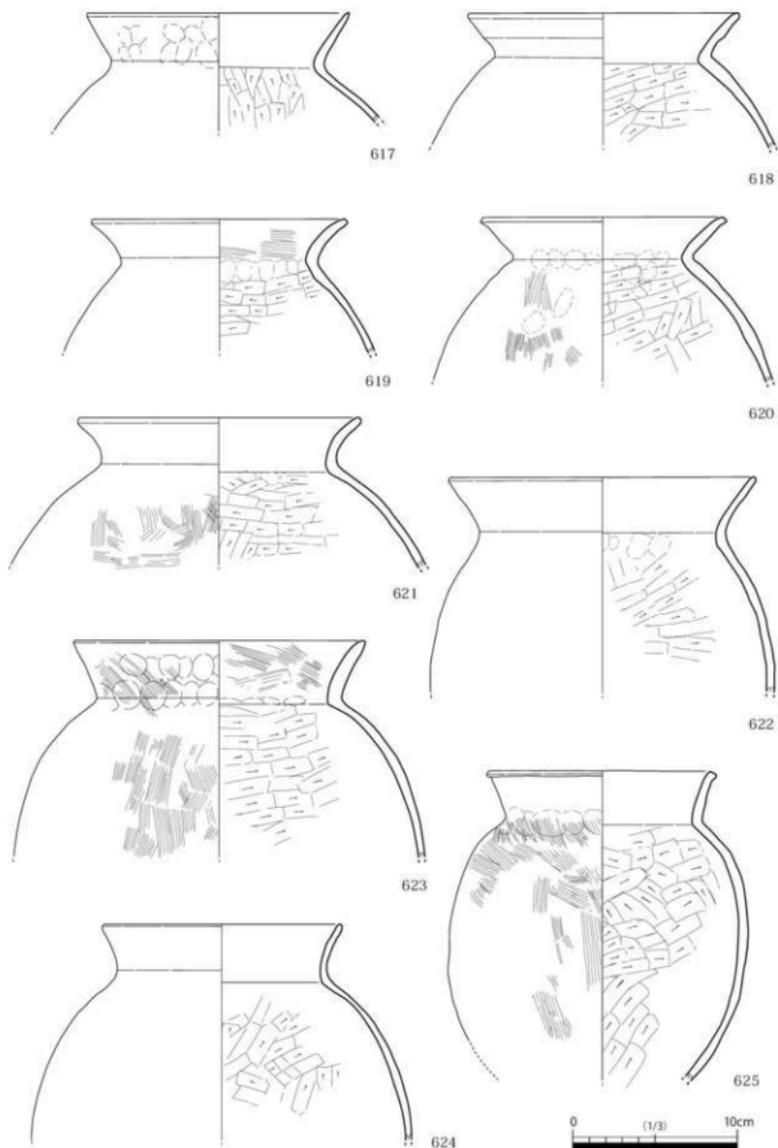
608~614・616は土師器の壺である。608は胴部と頸部の境のくびれが少なく、頸部が内湾気味に直立する。外面はハケ目と指オサエ、内面底部付近をケズリ、胴部上半を指オサエする。609と610はいずれも頸部が外傾する丸底の壺で、609は復元口径が7.7 cmの小型のもので、口径と胴部最大径がほぼ同じである。610は口径が胴部最大径よりも小さい。いずれも胴部内面にヨコ方向のケズリを施す。611と612は口径が17.0~19.0 cm程度のもので、頸部が厚手で外反する。胴部と頸部との境付近を指オサエする。613は胴部で、球状を呈し、最大径が23.2 cmである。外面はハケ目で、胴部内面上半に接合痕がみられる。614は全体に薄手で、頸部が内湾気味に開く。胴



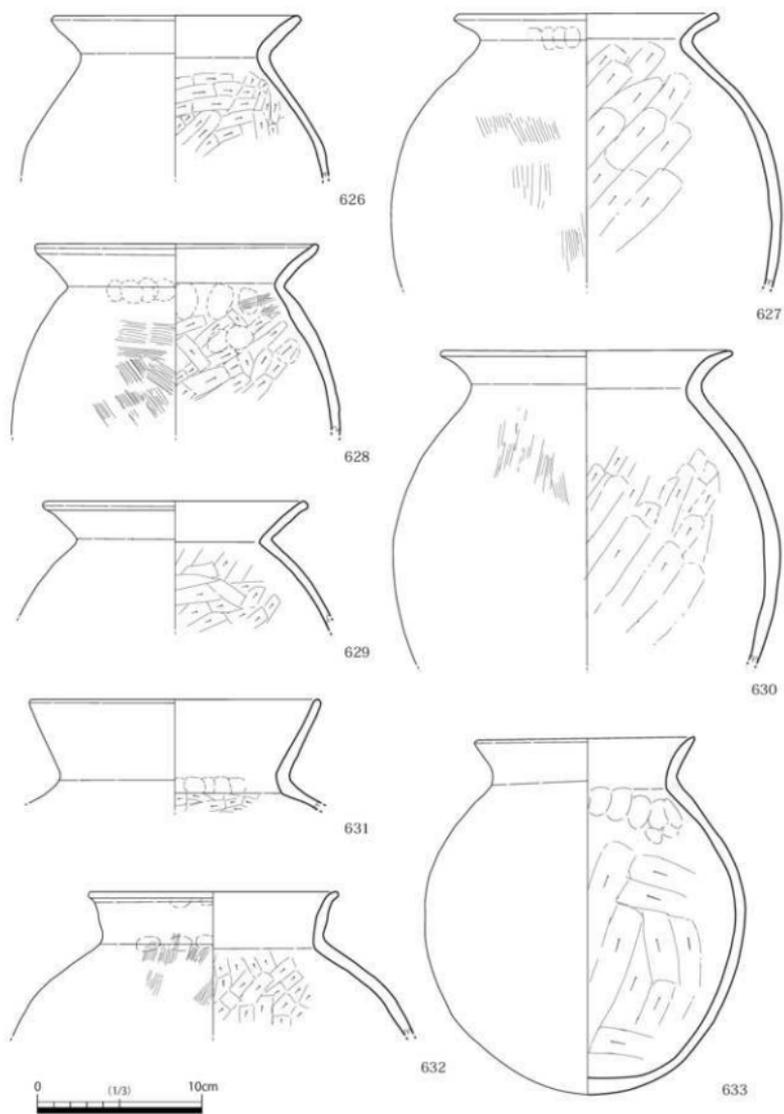
第55図 2区SD1実測図



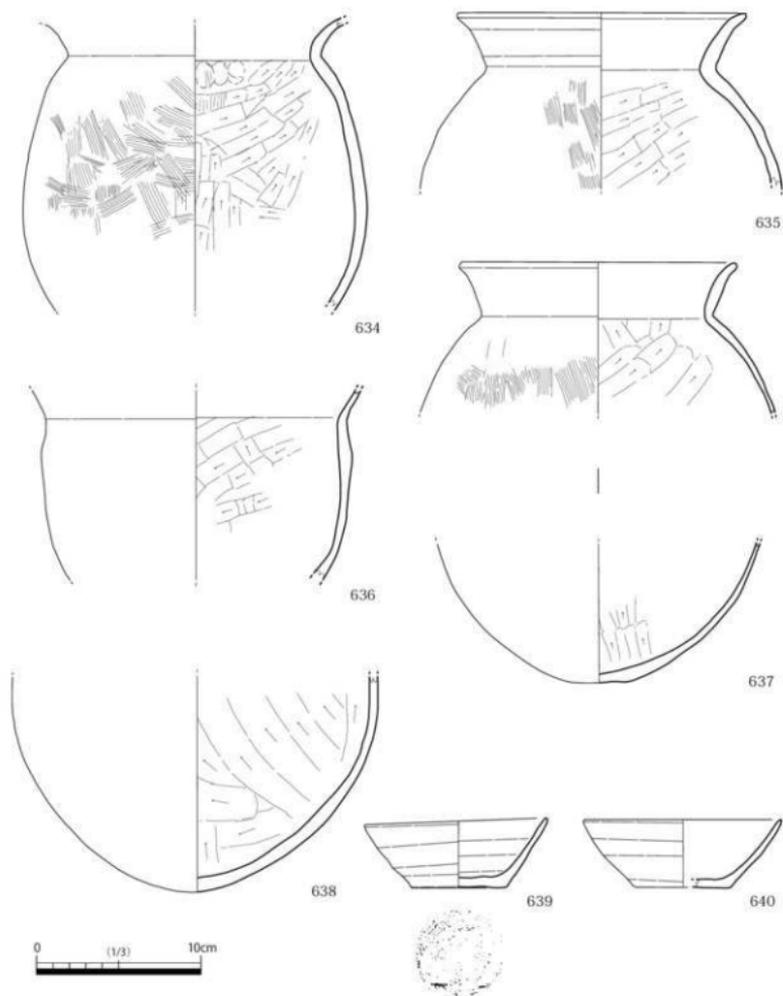
第56图 2区西侧遗物包含层出土遗物实测图(1)



第 57 图 2 区西侧遗物包含层出土遗物实测图 (2)



第 58 图 2 区西侧遺物包含層出土遺物実測図 (3)



第59図 2区西側遺物包含層出土遺物実測図(4)

部内面はケズリ、頸部との境を指オサエする。616は胴部上半～頸部が厚手で、頸部が外傾し、下半に突帯を貼り付ける。615は壺または椀の底部である。厚手で内面は指オサエとケズリである。

617～638は土師器の甕である。頸部が、胴部との境から強く外傾するもの(617・618・620・626～629・635・637)、胴部との境から外反するもの(619・621・630・634)、胴部から緩やかに外反するもの(622・624)、胴部との境から直立気味に立ち上がり、短く開くもの(623・

625・631～633)がある。いずれも胴部内面をヘラケズリし、外面は多くがハケ目である。617は内面が黒変する。618は頸部中位付近が短く膨らんで稜が入る。620は口縁端部を面取りする。619は頸部内面にヨコ方向のハケ目を施す。621は外面に煤が付着する。623は、頸部が肥厚し、頸部内外面に斜め方向のハケ目を施す。胴部外面に短く煤が付着する。624は全体に薄手である。625は底部を除き残存し、口径が13.4cm、残存高が19.0cm、胴部最大径は18.3cmを測る。口縁端部は面取りし、短く外側につまみ出す。626は頸部が肥厚し、口縁端部を面取りする。627は胴部と頸部の屈曲が大きく、口縁端部を面取りし、口径に対して胴部最大径がかなり大きい。628は口縁端部を面取りし、端部付近の内面を短く凹ませる。胴部外面に煤が付着する。629は口縁端部を面取りする。630は口径に対して胴部最大径が大きい。631は頸部が他に比べて長い。633はほぼ完形で、口径が13.2cm、器高が21.9cm、胴部最大径が19.5cmを測る。634は口縁端部を残さない。胴部外面に煤が付着する。635は口縁端部付近を短く外側に折る。636は胴部と頸部の境のくびれがほとんどなく、口縁が胴部最大径よりも大きい。637は頸部～胴部上半と胴部下半との接点がないが、同一個体である。器高は25.0cm以上と推定する。638は胴部下半～底部片であり、丸底で内面はヘラケズリする。

639と640は土師器の杯である。口径はそれぞれ11.1cm、12.0cmで、いずれも体部が外傾する。639の底部は回転糸切りである。

608～638は古墳時代中期前半、639・640は14世紀前半～中頃に比定する。

⑤遺構外遺物(第60・61図、図版70・71)

641～649は土師器の皿である。口径は6.5～7.0cmと7.1～8.3cmに大きく分かれる。体部は、短く外傾するもの(641～643・645・647・649)と内湾気味に開くもの(646・646)、厚手の底部から外傾きするもの(648)がある。いずれも底部回転ヘラ切りである。

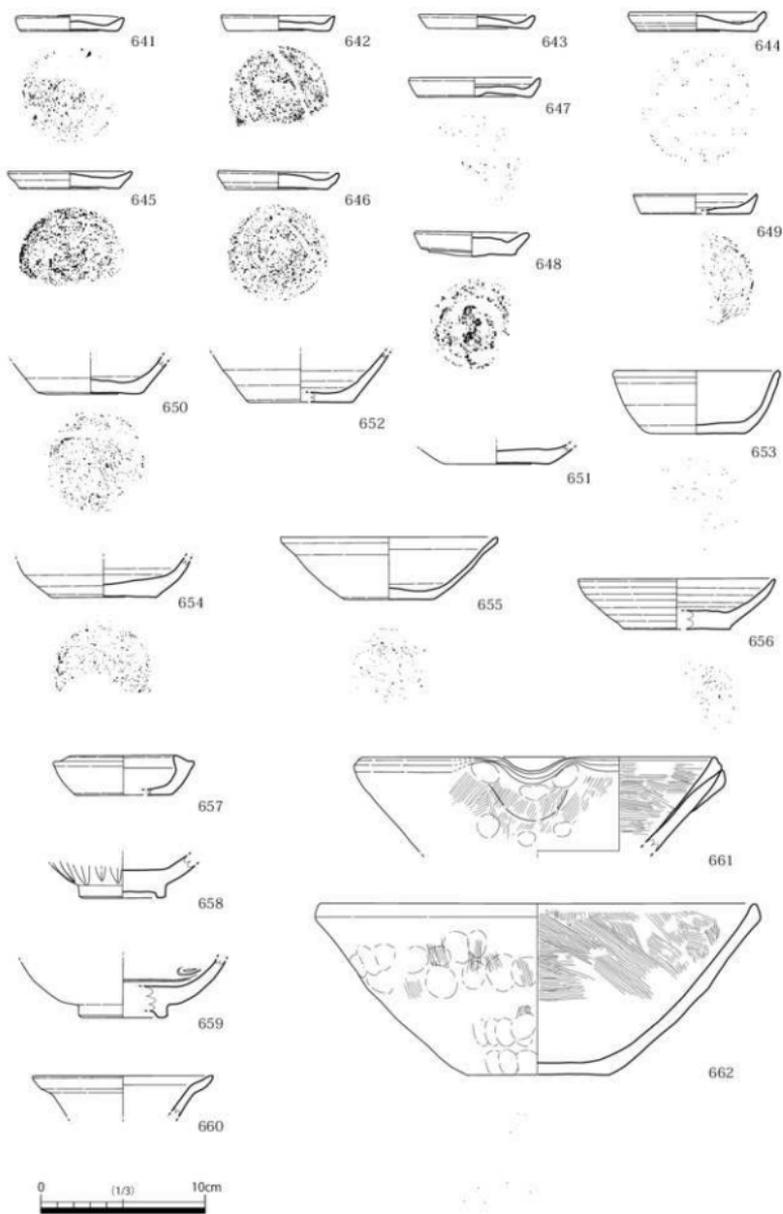
650～656は土師器の杯で、体部が外傾するもの(650・652・655)、緩やかに直立するもの(653)、内湾気味に開くもの(654)、外傾して口縁付近が内湾するもの(656)がある。ほとんどが底部回転糸切りである。

657は土師器の合子形土器で、口縁外面に蓋受けをつくる。復元径が6.2cmを測る。

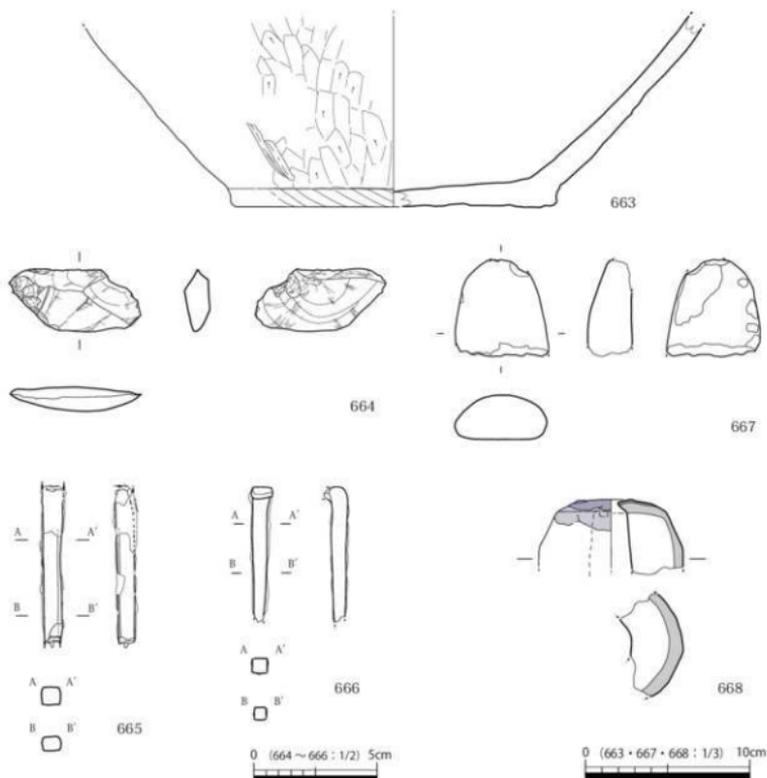
658と659はいずれも青磁の椀で、龍泉窯系である。658は断面方形の高台をもち、畳付～高台内側は露胎である。外面に鎊蓮弁文を施す。13世紀代に比定する。659は断面方形の高台が短く開き、畳付～高台内側は露胎である。内面に刻劃文を施す。660は青磁の唾壺か。頸部が喇叭状に開き、口縁で折れ、内湾状に開く。龍泉窯系で、13世紀代に比定する。

661と662は瓦質土器の鉢である。いずれも口縁端部に稜が入り内傾する。661は復元径が21.4cmで、指オサエにより注口をつくる。内外面ともハケ目を施す。13～14世紀代に比定する。662は復元径が26.4cmで、内外面はハケ目で、外面はその後丁寧に指オサエ及びナデを施す。底部外面に板状圧痕を残す。14世紀前半に比定する。

663は陶器の壺または甕で、底径は復元で19.3cmを測る。体部外面はヘラケズリ、底部付近は棒状工具で斜めにオサエを施し、一部工具痕が体部に及ぶ。底部外面は圧痕を残す。



第60图 2区遗構外遺物実測図(1)



第61図 2区遺構外遺物実測図(2)

664は剥片で、正面左側縁に二次加工を施す。長さは2.55cm、幅が5.35cm、厚さが1.0cmを測る。安山岩製である。667は磨製石斧の頭部片である。残存長が5.9cm、幅が5.7cmで、厚さは2.7cmを測る。花崗岩製である。

665と666は和釘である。いずれも断面方形で、665の残存長は6.65cm、幅が0.8cm、厚さが0.7cmを測る。666は残存長が5.5cm、幅が0.7cm、厚さが0.6cmを測る。

668は輪羽口である。残存長は4.6cm、最大幅が8.8cm、厚さが4.4cmで、孔径は2.5cmを測る。外面は暗灰色に変色し、先端部に自然軸がみられる。

第23表 2区出土土器観察一覧表(1)

No	棟号	図号	出土場所	種類	器種	寸法 (cm)				胎土	焼成	(内) 色調 (外)	(内) 主な調整 (外)	備考
						口径 (底元径)	取高 (残存部)	取径 (底元径)	最大径 (底元径)					
602	54	63	S83 (SP20)	養生土器	壺・方槽	—	[3.8]	(7.4)	—	やや密	良	褐色 (7.5YR6/6) 黒褐色 (2.5YR3/3)	ナデ? ナデ	内面黒変
603	54	63	SP31	土師器	杯	(13.0)	4.3	(7.4)	—	やや密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	黒転ナデ、ナデ 黒転ナデ	底面黒転系切り
604	54	63	SP53	土師器	杯	(14.2)	3.7	(8.7)	—	やや密	良	褐色 (5YR6/6) 褐色 (5YR6/6)	摩滅により不明 黒転ナデ	底面黒転系切り
605	54	63	SP45	土師器	杯	(11.3)	4.1	(5.1)	—	やや密	良	にぶい褐色 (5YR6/4) にぶい褐色 (5YR6/3)	黒転ナデ 黒転ナデ	底面黒転系切り
606	54	63	S81 (SP63)	土師器	杯	(10.0)	4.0	(4.6)	—	密	良	褐色 (5YR6/6) 褐色 (5YR6/6)	ナデ 黒転ナデ後、一部指オサエ	底面黒転系切り、 赤み大
607	54	63	SP30	土師器	杯	11.1	4.0	6.0	—	やや密	良	にぶい褐色 (5YR6/3) にぶい褐色 (5YR6/3)	ナデ 黒転ナデ	底面黒転系切り
608	56	63	調査区西側 遺物总倉層	土師器	壺	17.8	13.2	18.3	—	やや密	良	にぶい黄褐色 (10YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/5)	ケズリ、ナデ、 指オサエ	ハケ目、指オサエ
609	56	63	調査区西側 遺物总倉層	土師器	壺	(7.7)	[7.8]	—	(8.6)	やや密	良	明赤褐色 (2.5YR5/6) にぶい褐色 (7.5YR5/4)	頸部ケズリ 摩滅により不明	ケズリ、指オサエ
610	56	64	調査区西側 遺物总倉層	土師器	壺	(11.6)	[11.9]	—	(14.8)	やや密	良	褐色 (2.5YR6/6) にぶい褐色 (5YR6/4)	指オサエ	指オサエ、ナデ
611	56	64	調査区西側 遺物总倉層	土師器	壺	(17.4)	[8.1]	—	—	やや密	良	褐色 (2.5YR7/6) 褐色 (2.5YR7/6)	ナデ? 指オサエ ナデ?	
612	56	64	調査区西側 遺物总倉層	土師器	壺	(19.4)	[10.5]	—	—	やや密	良	褐色 (2.5YR6/6) 褐色 (2.5YR6/8)	ナデ、指オサエ 指オサエ、頸部 ハケ目	
613	56	65	調査区西側 遺物总倉層	土師器	壺	—	[13.3]	—	(23.2)	やや密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/3) 褐色 (5YR6/6)	摩滅により不明 ハケ目	内面に黒付着
614	56	64	調査区西側 遺物总倉層	土師器	壺	(14.0)	[14.7]	—	(18.8)	やや密	良	褐色 (2.5YR7/6) 褐色 (2.5YR7/6)	ケズリ、指オサエ、 ナデ ナデ	
615	56	65	調査区西側 遺物总倉層	土師器	壺・方槽	—	[3.6]	(8.0)	—	やや密	良	褐色 (7.5YR7/6) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	ケズリ、指オサエ ナデ	
616	56	65	調査区西側 遺物总倉層	土師器	壺	(16.8)	[16.4]	—	—	やや密	良	にぶい黄褐色 (10YR7/3) にぶい黄褐色 (10YR7/3)	ヨコナデ、ナデ ヨコナデ、ハケ 目	
617	57	65	調査区西側 遺物总倉層	土師器	甕	(16.0)	[7.2]	—	—	やや密	良	褐灰色 (10YR4/1) 褐色 (2.5YR7/6)	ケズリ、ナデ、 ナデ、指オサエ	
618	57	66	調査区西側 遺物总倉層	土師器	甕	(16.4)	[8.3]	—	—	やや密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	ケズリ、ヨコナ デ 口縁ヨコナデ	
619	57	66	調査区西側 遺物总倉層	土師器	甕	(15.3)	[8.2]	—	—	やや密	良	にぶい褐色 (5YR6/4) にぶい褐色 (5YR6/4)	口縁ハケ目、ケ ズリ、指オサエ 摩滅により不明	
620	57	66	調査区西側 遺物总倉層	土師器	甕	(14.6)	[10.1]	—	—	やや密	良	灰黄褐色 (10YR5/2) にぶい褐色 (5YR6/3)	ヨコナデ、ケズ リ、指オサエ ヨコナデ、ハケ 目、指オサエ	
621	57	66	調査区西側 遺物总倉層	土師器	甕	(17.0)	[9.2]	—	—	やや密	良	褐色 (5YR7/6) にぶい褐色 (7.5YR7/4)	ケズリ ハケ目後ナデ	外面に黒付着
622	57	66	調査区西側 遺物总倉層	土師器	甕	(18.6)	[13.2]	—	—	やや粗	良	褐色 (7.5YR7/6) 褐色 (7.5YR7/6)	指オサエ、ケズ リ 摩滅により不明	
623	57	67	調査区西側 遺物总倉層	土師器	甕	(17.6)	[13.3]	—	—	やや密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/3) にぶい褐色 (7.5YR6/3)	口縁ハケ目、ケ ズリ、指オサエ ハケ目、指オサ エ	
624	57	67	調査区西側 遺物总倉層	土師器	甕	(14.4)	[13.2]	—	—	やや密	良	にぶい黄褐色 (10YR6/3) にぶい黄褐色 (10YR6/4)	ケズリ 摩滅により不明	
625	57	67	調査区西側 遺物总倉層	土師器	甕	13.4	[19.0]	—	(18.3)	やや密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/3) 褐色 (5YR6/6)	ケズリ、ナデ ハケ目後ナデ、 指オサエ	
626	58	67	調査区西側 遺物总倉層	土師器	甕	(14.8)	[9.9]	—	—	やや密	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	ケズリ、ヨコナ デ ヨコナデ、ナデ	
627	58	68	調査区西側 遺物总倉層	土師器	甕	(15.6)	[16.8]	—	(23.8)	やや密	良	褐色 (5YR7/6) 灰褐色 (5YR5/2)	ケズリ、ナデ ハケ目、ナデ	
628	58	68	調査区西側 遺物总倉層	土師器	甕	(17.0)	[11.7]	—	—	やや密	良	にぶい黄褐色 (10YR6/3) にぶい褐色 (7.5YR5/4)	ケズリ、指オサ エ ヨコナデ、指オ サエ、ハケ目	外面に黒付着

第24表 2区出土土器観察一覧表(2)

No	種別	図例	出土場所	種類	器種	法量 (cm)				土質	焼成	(内)		備考
						口径 (取付)	器高 (取付)	底径 (取付)	最大径 (取付)			色調 (外)	主な調整 (外)	
629	58	68	調査区西側 遺物包含層	土師器	甕	(15.6)	[7.9]	—	—	中 密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) にぶい-褐色 (7.5YR6/4)	ケズリ、ヨコナ デ ヨコナデ、ナデ	
630	58	68	調査区西側 遺物包含層	土師器	甕	(17.6)	[19.2]	—	(23.6)	中 密	良	褐色 (2.5YR6/8) にぶい-褐色 (2.5YR6/4)	ケズリ、ナデ ハケ目?ナデ?	
631	58	68	調査区西側 遺物包含層	土師器	甕	(17.4)	[6.8]	—	—	中 密	良	にぶい-褐色 (5YR6/3) にぶい-褐色 (2.5YR6/4)	ケズリ、指オサ エ 摩滅により不明	
632	58	68	調査区西側 遺物包含層	土師器	甕	(15.0)	[8.7]	—	—	中 密	良	褐色 (7.5YR5/1) にぶい-褐色 (7.5YR6/4)	ケズリ、ヨコナ デ ナデ、指オサエ、 ハケ目	内面黒変
633	58	69	調査区西側 遺物包含層	土師器	甕	13.2	21.9	—	19.5	中 密	良	褐色 (2.5YR6/6) 褐色 (2.5YR6/6)	ケズリ、指オサ エ ナデ?	
634	59	68	調査区西側 遺物包含層	土師器	甕	—	[17.9]	—	—	中 密	良	にぶい-褐色 (7.5YR7/4) にぶい-褐色 (7.5YR7/4)	ケズリ、ハケ目 指オサエ ヨコナデ、ハケ 目	外面に厚付着
635	59	68	調査区北東 ～ 南西側 8 層	土師器	甕	(17.6)	[10.9]	—	—	中 密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) 明褐色 (7.5YR7/2)	ケズリ ヨコナデ、ハケ 目厚ナデ	
636	59	69	調査区西側 遺物包含層	土師器	甕	—	[11.6]	—	(19.0)	中 密	良	にぶい-褐色 (5YR7/4) にぶい-褐色 (5YR7/4)	ケズリ、ナデ 摩滅により不明	
637	59	69	調査区西側 遺物包含層	土師器	甕	(16.6)	13.1 [9.3] 脚底 [8.6]	—	—	中 密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) ～ 褐色 (5YR6/6) にぶい-黄褐色 (10YR6/4) ～ にぶい-褐色 (5YR6/4)	ケズリ、ケズ リ、指オサエ ヨコナデ、ハケ 目厚ナデ	
638	59	69	調査区西側 遺物包含層	土師器	甕	—	[13.2]	—	—	中 密	粗	にぶい-褐色 (7.5YR5/3) にぶい-黄褐色 (10YR5/3)	ケズリ ナデ	
639	59	69	調査区西側 遺物包含層	土師器	杯	11.1	4.3	5.7	—	中 密	良	褐色 (5YR4/1) 褐色 (7.5YR5/1)	ハケ目 回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
640	59	69	調査区西側 遺物包含層	土師器	杯	12.0	4.2	5.8	—	中 密	粗	にぶい-黄褐色 (10YR6/3) にぶい-黄褐色 (10YR6/3)	回転ナデ 回転ナデ	
641	60	69	調査区北側 遺物包含層	土師器	皿	6.5	1.0	5.9	—	中 密	良	明赤褐色 (5YR5/6) にぶい-褐色 (7.5YR6/4)	ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (右回転)
642	60	70	調査区北側 遺物包含層	土師器	皿	6.9	0.9	6.1	—	中 密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) にぶい-褐色 (7.5YR6/4)	ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (右回転)
643	60	70	調査区北側 遺物包含層	土師器	皿	7.0	0.9	6.1	—	中 密	粗	褐色 (7.5YR6/6) にぶい-褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (右回転)
644	60	70	調査区北側 遺物包含層	土師器	皿	(8.3)	1.2	(7.1)	—	密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) にぶい-黄褐色 (10YR5/3)	ナデ 回転ナデ	内面に厚付着。底 部回転へつ切り (右回転)
645	60	70	調査区北側 遺物包含層	土師器	皿	(7.5)	1.1	(6.0)	—	中 密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) にぶい-褐色 (7.5YR6/4)	ナデか 回転ナデ	底部回転へつ切り (右回転)
646	60	70	調査区北東隅 T ₁ 遺物包含層	土師器	皿	7.2	1.2	6.1	—	中 密	良	にぶい-褐色 (5YR6/4) にぶい-褐色 (5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (右回転)
647	60	70	調査区北東隅 T ₂ 遺物包含層	土師器	皿	(7.9)	1.2	(7.0)	—	中 密	粗	褐色 (7.5YR7/6) にぶい-褐色 (7.5YR6/4)	ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (右回転)
648	60	70	遺構面上層 (中央)	土師器	皿	6.9	1.5	5.6	—	中 密	粗	褐色 (2.5YR6/6) にぶい-褐色 (7.5YR6/4)	ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (右回転)
649	60	70	SP204 埋土 (遺物包含層)	土師器	皿	(7.4)	1.2	(6.6)	—	中 密	粗	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) にぶい-褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (右回転)
650	60	70	調査区北側 遺物包含層	土師器	杯	—	[2.2]	(6.5)	—	中 密	粗	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) にぶい-褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
651	60	70	調査区北側 遺物包含層	土師器	杯か	—	[1.2]	(6.4)	—	中 密	粗	褐色 (7.5YR6/6) にぶい-黄褐色 (10YR6/4)	摩滅により不明 摩滅により不明	
652	60	70	遺構面上層	土師器	杯	—	[3.0]	(6.3)	—	中 密	粗	灰黄褐色 (10YR6/2) にぶい-黄褐色 (10YR6/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	
653	60	70	調査区北側 遺物包含層	土師器	杯	(10.0)	3.9	(5.9)	—	中 密	良	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) にぶい-褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
654	60	70	調査区北側 遺物包含層	土師器	杯	—	[2.4]	(6.4)	—	中 密	粗	にぶい-褐色 (7.5YR6/4) にぶい-褐色 (7.5YR6/4)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転へつ切り (右回転)
655	60	70	遺構面上層 (中央付近)	土師器	杯	(13.1)	3.8	(5.6)	—	中 密	粗	褐色 (5YR6/6) にぶい-褐色 (7.5YR7/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
656	60	70	調査区北東側 遺物包含層	土師器	杯	(12.0)	3.1	(6.4)	—	密	良	にぶい-褐色 (2.5YR6/4) にぶい-褐色 (2.5YR6/4)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
657	60	71	調査区北東隅 遺物包含層	土師器	合子か	(6.2)	2.4	(5.8)	—	中 密	粗	褐色 (5YR6/8) 褐色 (5YR6/8)	ヨコナデ、ナデ ヨコナデ、底部 へつケズリか	

第25表 2区出土土器観察一覧表(3)

No.	種別	国産	出土場所	種類	器種	法量 (cm)				胎土	焼成	(内) 色調 (外)	(内) 主な調整 (外)	備考
						口径 [現存値]	器高 [現存値]	底径 [復元値]	最大径 [復元値]					
658	60	71	調査区北側 遺物包含層	青磁	椀	—	[2.6]	[5.2]	—	密	良	露胎：灰白色 (N7/7) 釉：オリーブ灰色 (2.5GY6/1)	ケズリ	高台内と指付は 無釉。外面に黒通 片文。龍泉窯系
659	60	71	調査区北側 遺物包含層	青磁	椀	—	[3.6]	[5.0]	—	密	良	露胎：灰白色 (N7/7) 釉：黄褐色 (2.5Y5/4)	ケズリ	貫入あり。内面 に劃花文。龍泉 窯系
660	60	71	調査区北側 遺物包含層	青磁	唾壺か	[11.0]	[2.5]	—	—	やや 密	良	露胎：灰白色 (N7/7) 釉：オリーブ灰色 (5GY6/1)	ケズリ ケズリ	青磁釉を厚く生 掛ける。龍泉 窯系
661	60	71	遺構検出面	瓦質土 器	鉢	[21.4]	[5.8]	—	—	やや 密	良	黄灰色 (2.5Y6/2) 黄灰色 (2.5Y6/2)	ハツ目 ハツ目後指オサ エ、ナデ	
662	60	71	調査区北側 遺物包含層	瓦質土 器	鉢	[26.4]	[10.5]	[8.8]	—	やや 密	良	にぶい褐色 (7.5YR7/4) にぶい黄褐色 (10YR7/2)	ハツ目 ハツ目後指オサ エ	底部外面に飯目 圧痕
663	61	71	調査区北東側 遺物包含層北 壁下層	陶器	壺か甕	—	[11.7]	[19.3]	—	密	良	浅黄色 (2.5Y7/3) 浅黄色 (2.5Y7/3)	ナデ ケズリ、棒状工 具によるオサエ	底部外面に飯目 圧痕

第26表 2区出土石器観察一覧表

No.	種別	国産	出土場所	器種	法量 (cm)			重さ (g) [現存値]	石材	備考
					長さ [現存値]	幅 [現存値]	厚さ [現存値]			
664	61	71	遺構面上層	二次加工のある 刮片	2.55	5.35	1.0	11.7	安山岩	正面左側縁に二次加工
667	61	71	壁面	磨製石斧	[5.9]	5.7	2.7	[124.8]	花崗岩	断面

第27表 2区出土鉄器観察一覧表

No.	種別	国産	出土場所	種類	器種	法量 (cm)			重さ (g) [現存値]	備考
						長さ [現存値]	幅 [現存値]	厚さ [現存値]		
665	61	71	調査区北側 遺物包含層	鉄器	鉄釘	[6.65]	0.8	0.7	[9.6]	和釘
666	61	71	遺構検出面	鉄器	鉄釘	[5.5]	0.7	0.6	[5.8]	和釘

第28表 2区出土土製品観察一覧表

No.	種別	国産	出土場所	器種	法量 (cm)				重さ (g) [現存値]	胎土	焼成	(内) 色調 (外)	(内) 主な調整 (外)	備考
					長さ [現存値]	幅 [現存値]	厚さ [現存値]	孔径						
668	61	71	調査区北側 遺物包含層	編織口	[4.6]	[8.8]	4.4	2.5	[86.6]	やや 粗	良	褐色 (5YR7/6) 褐色 (5YR7/6)	指オサエ 手製・指オサエ	

IV 自然科学分析

1 放射性炭素年代測定〔令和4年度委託分〕

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・加藤和浩・廣田正史・佐藤正教・

山形秀樹・Zaur Lomtadze・黒沼保子・小林克也

(1) はじめに

山口県田布施町の下平野遺跡で出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

(2) 試料と方法

試料はいずれも1区から出土した炭化材で、SK1から出土した試料No.1（PLD-49032）、SK246から出土した試料No.2（PLD-49033）、SP351から出土した試料No.3（PLD-49034）、SP386から出土した試料No.4（PLD-49035）、SP557から出土した試料No.5（PLD-49036）、SP298から出土した試料No.6（PLD-49037）、SP144から出土した試料No.7（PLD-49038）、SK252から出土した試料No.8（PLD-49039）、SK15から出土した試料No.9（PLD-49040）、SK87から出土した試料No.10（PLD-49041）の、計10点である。いずれの遺構も、発掘調査所見では鎌倉時代頃と考えられている。またいずれの試料も、最終形成年輪は残っていなかった。測定試料の情報、調製データは第29表のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

(3) 結果

第30表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代を、第62図にマルチプロット図を、第63・64図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過

第 29 表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-49032	試料 No.1 調査区：1 区 遺構：SK 1 層位：埋土 5 層	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 状態：dry 部位不明	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-49033	試料 No.2 調査区：1 区 遺構：SK246 層位：埋土	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 状態：dry 部位不明	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-49034	試料 No.3 調査区：1 区 遺構：SP351	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 状態：dry 部位不明	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-49035	試料 No.4 調査区：1 区 遺構：SP386	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 状態：dry 部位不明	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-49036	試料 No.5 調査区：1 区 遺構：SP557	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 状態：dry 部位不明	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-49037	試料 No.6 調査区：1 区 遺構：SP298	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 状態：dry 部位不明	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-49038	試料 No.7 調査区：1 区 遺構：SP144	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 状態：dry 部位不明	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-49039	試料 No.8 調査区：1 区 遺構：SK252	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 状態：dry 部位不明	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-49040	試料 No.9 調査区：1 区 遺構：SK15 層位：第 2 層	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 状態：dry 部位不明	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-49041	試料 No.10 調査区：1 区 遺構：SK87	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 状態：dry 部位不明	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)

去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を校正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.4(較正曲線データ: IntCal20) を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.27% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.45% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

(4) 考察

以下、各試料の暦年代のうち、2 σ 暦年代範囲 (確率 95.45%) に着目して、暦年代の古い順に結

第30表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

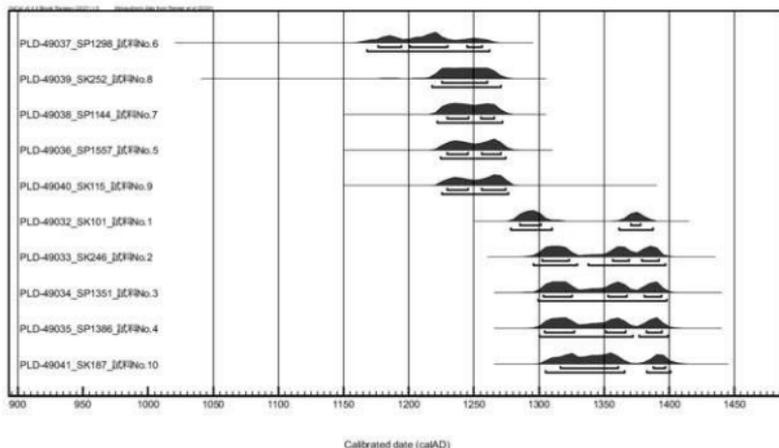
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C年代を暦年年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-49032 試料 No.1 SK1	-24.15 \pm 0.28	676 \pm 20	675 \pm 20	1284-1301 cal AD (45.63%) 1369-1378 cal AD (22.64%)	1279-1309 cal AD (58.08%) 1362-1387 cal AD (37.37%)
PLD-49033 試料 No.2 SK246	-27.48 \pm 0.29	629 \pm 21	630 \pm 20	1302-1322 cal AD (32.05%) 1356-1368 cal AD (17.76%) 1379-1391 cal AD (18.46%)	1297-1327 cal AD (39.18%) 1338-1396 cal AD (56.27%)
PLD-49034 試料 No.3 SP351	-26.12 \pm 0.28	621 \pm 21	620 \pm 20	1303-1325 cal AD (32.35%) 1354-1367 cal AD (18.23%) 1381-1393 cal AD (17.69%)	1299-1372 cal AD (72.80%) 1376-1397 cal AD (22.65%)
PLD-49035 試料 No.4 SP386	-24.35 \pm 0.27	617 \pm 21	615 \pm 20	1304-1326 cal AD (31.93%) 1352-1366 cal AD (18.86%) 1381-1394 cal AD (17.48%)	1301-1370 cal AD (73.77%) 1378-1397 cal AD (21.68%)
PLD-49036 試料 No.5 SP557	-27.71 \pm 0.28	785 \pm 18	785 \pm 20	1229-1245 cal AD (33.36%) 1255-1271 cal AD (34.91%)	1224-1274 cal AD (95.45%)
PLD-49037 試料 No.6 SP298	-31.48 \pm 0.31	841 \pm 23	840 \pm 25	1177-1193 cal AD (20.33%) 1201-1228 cal AD (39.60%) 1246-1254 cal AD (8.34%)	1167-1261 cal AD (95.45%)
PLD-49038 試料 No.7 SP144	-24.38 \pm 0.27	795 \pm 18	795 \pm 20	1228-1247 cal AD (41.84%) 1253-1266 cal AD (26.43%)	1222-1271 cal AD (95.45%)
PLD-49039 試料 No.8 SK252	-26.45 \pm 0.28	805 \pm 21	805 \pm 20	1224-1261 cal AD (68.27%)	1218-1271 cal AD (95.45%)
PLD-49040 試料 No.9 SK15	-26.42 \pm 0.27	779 \pm 21	780 \pm 20	1230-1244 cal AD (28.46%) 1257-1274 cal AD (39.81%)	1225-1276 cal AD (95.45%)
PLD-49041 試料 No.10 SK87	-24.43 \pm 0.27	603 \pm 20	605 \pm 20	1313-1330 cal AD (20.44%) 1333-1361 cal AD (35.95%) 1388-1396 cal AD (11.88%)	1304-1366 cal AD (75.31%) 1382-1402 cal AD (20.14%)

果を整理する。なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料はいずれも最終形成年輪が残存しておらず、残存する最外年輪のさらに外側にも年輪が存在していたはずである。したがって、試料の木が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果よりもやや新しい年代であったと考えられる。

SP298の試料No.6(PLD-49037)は、1167-1261 cal AD (95.45%)で、12世紀後半～13世紀後半の暦年代を示した。これは、平安時代後期～鎌倉時代に相当する。

SK252の試料No.8(PLD-49039)は1218-1271 cal AD (95.45%)、SP144の試料No.7(PLD-49038)は1222-1271 cal AD (95.45%)、SP1557の試料No.5(PLD-49036)は1224-1274 cal AD (95.45%)、SK15の試料No.9(PLD-49040)は1225-1276 cal AD (95.45%)で、いずれも13世紀前半～後半の暦年代を示した。これは、鎌倉時代に相当する。

SK1の試料No.1(PLD-49032)は1279-1309 cal AD (58.08%)および1362-1387 cal AD (37.37%)で13世紀後半～14世紀後半、SK246の試料No.2(PLD-49033)は1297-1327 cal AD (39.18%)および1338-1396 cal AD (56.27%)、SP351の試料No.3(PLD-49034)は1299-1372 cal AD (72.80%)



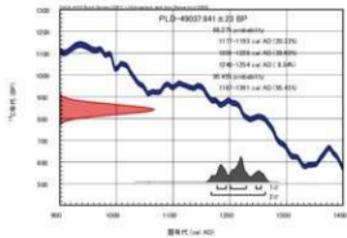
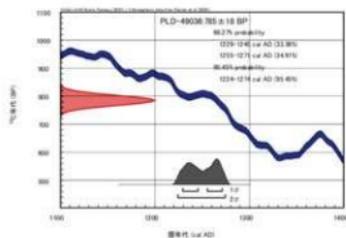
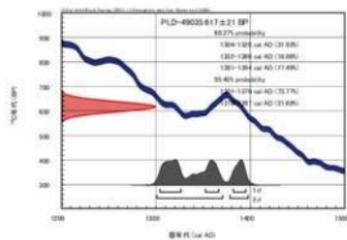
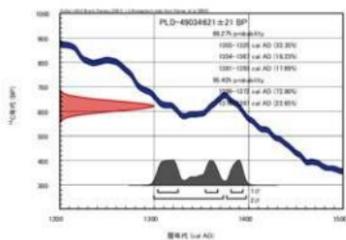
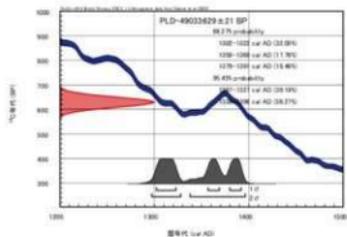
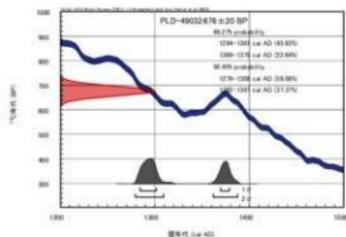
第 62 図 マルチプロット図

および 1376-1397 cal AD (22.65%) でどちらも 13 世紀末～14 世紀末 SP386 の試料 No.4 (PLD-49035) は 1301-1370 cal AD (73.77%) および 1378-1397 cal AD (21.68%) で 14 世紀初頭～14 世紀末、SK87 の試料 No.10 (PLD-49041) は 1304-1366 cal AD (75.31%) および 1382-1402 cal AD (20.14%) で 14 世紀初頭～15 世紀初頭の暦年代を示した。この 5 点の暦年代は、いずれも鎌倉時代～室町時代に相当する。

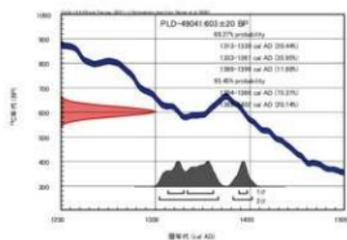
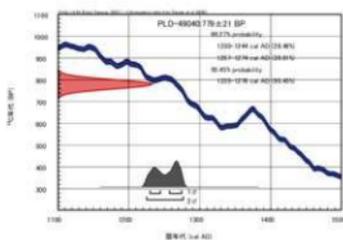
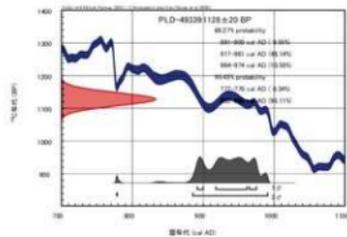
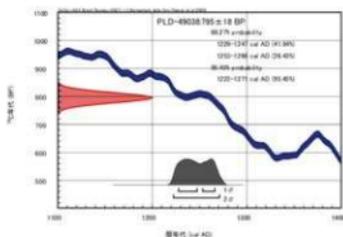
今回の測定結果では、1160～1276 年におさまるグループ (試料 No.5、6、7、8、9) と、1279～1402 年におさまるグループ (試料 No.1、2、3、4、10) に分かれており、試料 No.6 と試料 No.1 が、それぞれのグループの中でもやや古い年代を示した。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrmi, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)



第 63 図 曆年較正結果 (1)



第 64 図 暦年較正結果 (2)

2 下平野遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）〔令和5年度委託〕

（株）加速器分析研究所

（1）測定対象試料

下平野遺跡は、山口県熊毛郡田布施町下田布施（北緯 33° 56′ 57″、東経 132° 01′ 48″）に所在し、台地上に立地する。測定対象試料は、柱穴から出土した木炭 6 点である（第 31 表）。試料が出土した遺構は 13～14 世紀（鎌倉～室町時代前半）と推定されている。

（2）測定の意義

遺構および遺跡の年代を明らかにする。

（3）化学処理工程

- ① メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。
- ② 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と第 31 表に記載する。
- ③ 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させる。
- ④ 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- ⑤ 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- ⑥ グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

（4）測定方法

加速器をベースとした ¹⁴C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、¹⁴C の計数、¹³C 濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C 濃度（¹⁴C/¹²C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

（5）算出方法

- ① δ ¹³C は、試料炭素の ¹³C 濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第 31 表）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- ② ¹⁴C 年代（Libby Age:yrBP、第 31 表）は、過去の大気中 ¹⁴C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（OyrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568 年）を使用し、δ ¹³C によって同位体効果を補正する（Stuiver and Polach 1977）。¹⁴C 年代と誤差は、

下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- ③ pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい(^{14}C が少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(14Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正されている(第31表)。
- ④ 暦年較正年代(または単に較正年代)とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.3\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である(第32表の「暦年較正用(yrBP)」。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20 較正曲線(Reimer et al. 2020)を用い、OxCalv4.4 較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正の結果を第32表($1\sigma \cdot 2\sigma$ 暦年代範囲)に示す。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。今後、較正曲線やプログラムが更新された場合、「暦年較正用(yrBP)」の年代値を用いて較正し直すことが可能である。

(6) 測定結果

測定結果を第31・32表に示す。

試料6点の ^{14}C 年代は、 $840 \pm 20\text{yrBP}$ (試料4)から $700 \pm 20\text{yrBP}$ (試料5)の間にまとまる。暦年較正年代(1σ)は、最も古い試料4が1175～1228cal ADの範囲、最も新しい試料5が1279～1297cal ADの範囲で示される。いずれも推定と一致する年代値である。

今回測定された試料については、すべて木炭と見られるが、樹皮は確認されないことから、以下に記述する古木効果を考慮する必要がある。

樹木の年輪の放射性炭素年代は、その年輪が成長した年の年代を示す。したがって樹皮直下の最外年輪の年代が、樹木が伐採され死んだ年代を示し、内側の年輪は、最外年輪からの年輪数の分、古い年代値を示すことになる(古木効果)。今回測定された試料は樹皮が認められず、最外年輪が確認されていないことから、試料となった木が死んだ年代は測定された年代値よりも新しい可能性がある。

試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP), Radiocarbon 62(4), 725-757

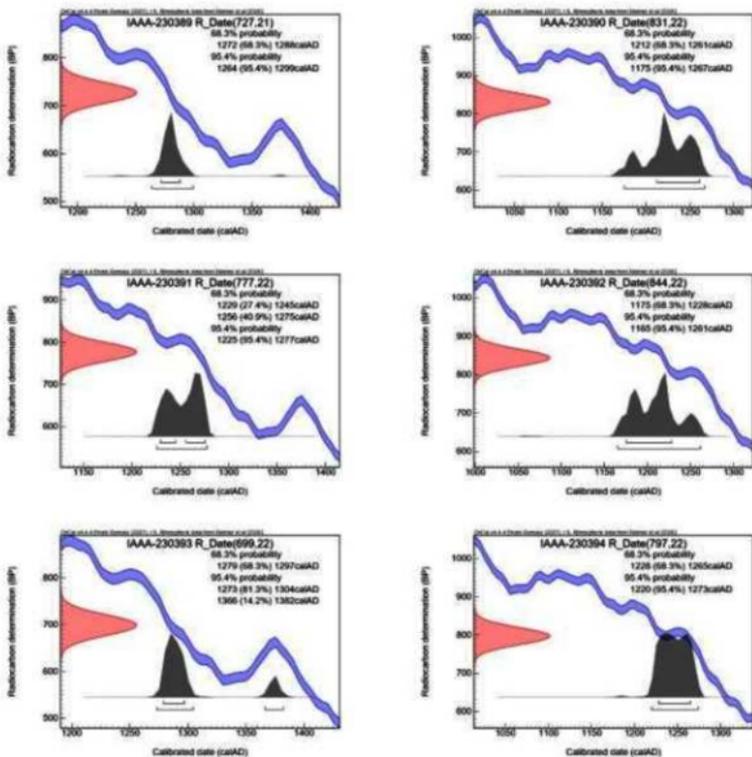
第 31 表 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 、 ^{14}C 年代 (Libby Age)、pMC)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-230389	1	1 区 SP383(SB 5 構成柱穴) 埋土	木炭	AAA	-23.96 ± 0.19	730 ± 20	91.35 ± 0.25
IAAA-230390	2	1 区 SP405(SB 4 構成柱穴) 埋土	木炭	AAA	-25.52 ± 0.19	830 ± 20	90.17 ± 0.25
IAAA-230391	3	1 区 SP828(SB 5 構成柱穴)	木炭	AAA	-25.84 ± 0.19	780 ± 20	90.78 ± 0.25
IAAA-230392	4	1 区 SP929 埋土	木炭	AAA	-27.14 ± 0.19	840 ± 20	90.02 ± 0.25
IAAA-230393	5	2 区 SP52(SB 2 構成柱穴) 埋土	木炭	AAA	-28.55 ± 0.20	700 ± 20	91.66 ± 0.26
IAAA-230394	6	2 区 SP110(SB 1 構成柱穴)	木炭	AAA	-23.75 ± 0.19	800 ± 20	90.56 ± 0.25

[IAA 登録番号：#C040]

第 32 表 放射性炭素年代測定結果 (暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	試料名	暦年較正用 (yrBP)	較正条件	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
IAAA-230389	1	727 ± 21	OxCal v4.4 IntCal20	1272calAD - 1288calAD (68.3%)	1264calAD - 1299calAD (95.4%)
IAAA-230390	2	831 ± 22	OxCal v4.4 IntCal20	1212calAD - 1261calAD (68.3%)	1175calAD - 1267calAD (95.4%)
IAAA-230391	3	777 ± 22	OxCal v4.4 IntCal20	1229calAD - 1245calAD (27.4%) 1256calAD - 1275calAD (40.9%)	1225calAD - 1277calAD (95.4%)
IAAA-230392	4	844 ± 22	OxCal v4.4 IntCal20	1175calAD - 1228calAD (68.3%)	1165calAD - 1261calAD (95.4%)
IAAA-230393	5	699 ± 22	OxCal v4.4 IntCal20	1279calAD - 1297calAD (68.3%)	1273calAD - 1304calAD (81.3%) 1366calAD - 1382calAD (14.2%)
IAAA-230394	6	797 ± 22	OxCal v4.4 IntCal20	1228calAD - 1265calAD (68.3%)	1220calAD - 1273calAD (95.4%)



第 65 図 暦年較正年代グラフ

3 下平野遺跡出土炭化材の樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

(1) はじめに

山口県田布施町の下平野遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

(2) 試料と方法

試料は、1区のSK1の埋土2～3層と埋土3層、SK246、SP351、SP386、SP161、SP144、SK15、SK87、SK19から出土した炭化材各1点（試料No.1～10）の、計10点である。発掘調査所見によれば、遺構の時期はいずれも鎌倉時代と考えられている。

樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柁目）について、カミソリと手で切断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製 JSM-IT200）にて鏡像および写真撮影を行なった。

(3) 結果

同定の結果、針葉樹ではマツ属複雑管束亜属1分類群、広葉樹ではサクラ属、コナラ属アカガシ亜属（以下、アカガシ亜属）、カバノキ属、ウツギ属、ツバキ属の5分類群の、計6分類群がみられた。ツバキ属が3点で最も多く、サクラ属とアカガシ亜属が各2点、マツ属複雑管束亜属とカバノキ属、ウツギ属が各1点であった。同定結果を第33表に示す。

第33表 下平野遺跡出土炭化材の樹種同定結果

試料 No.	地区	出土位置	種類	樹種	時期
1	1区	SK1 埋土2～3層	炭化材	コナラ属アカガシ亜属	鎌倉時代
2	1区	SK1 埋土3層	炭化材	ツバキ属	鎌倉時代
3	1区	SK246 埋土	炭化材	マツ属複雑管束亜属	鎌倉時代
4	1区	SP351	炭化材	サクラ属	鎌倉時代
5	1区	SP386	炭化材	ツバキ属	鎌倉時代
6	1区	SP161 埋土	炭化材	カバノキ属	鎌倉時代
7	1区	SP144	炭化材	コナラ属アカガシ亜属	鎌倉時代
8	1区	SK15	炭化材	サクラ属	鎌倉時代
9	1区	SK87	炭化材	ウツギ属	鎌倉時代
10	1区	SK19	炭化材	ツバキ属	鎌倉時代

以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡写真を示す。

①マツ属複雑管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylo* マツ科 第66図 1a-1c(No.3)

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射柔細胞および放射仮道管で構成される針葉樹である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管によって構成される。放射仮道管の内壁の肥厚は鋸歯状であり、分野壁孔は窓状となる。

マツ属複雑管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育しやすい。材質は類似し、重硬だが、切削等の加工は容易である。

②サクラ属(広義) *Prunus* s.l.バラ科 第66図 2a-2c(No.4)

小型の道管が単独ないし数個、放射方向または斜め方向に複合してやや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1列が直立する異性で、1～5列幅である。

広義のサクラ属には、モモ属とスモモ属、アンズ属、サクラ属、ウワミズザクラ属、バクチノキ属がある。樹種同定では、モモ属とバクチノキ属以外は他のサクラ属と識別できないため、広義のサクラ属とはモモ属とバクチノキ属を除くサクラ属を指す。

③コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 第66図 3a-3c(No.1)

厚壁で丸い大型の道管が、放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属アカガシ亜属は、材組織の観察では、道管の大きなイチイガシ以外は種までの同定ができない。したがって、本試料はイチイガシ以外のアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬かつ強韌で、耐水性があり、切削加工は困難である。

④カバノキ属 *Betula* カバノキ科 第67図 4a-4c(No.6)

中型の道管が単独または2～4個放射方向に複合してやや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は10～20段程度の階段穿孔を有する。放射組織は同性で、幅1～4列である。

カバノキ属にはマカンバやダケカンバ、ウダイカンバなどがあり、代表的なマカンバは北海道から本州北中部の温帯の、日当たりの良い場所に生育する落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で強韌だが、切削加工は容易である

⑤ウツギ属 *Deutzia* アジサイ科 第67図 5a-5c(No.9)

小型の道管がほぼ単独で、やや密に散在する散孔材である。道管は40段以上の階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1～3列が直立する異性で、幅1～4列である。また、放射組織は鞘細胞を有する。

ウツギ属にはウツギ、マルバウツギなどがあり、日当たりの良い小川付近などに分布する落葉低木である。代表的なウツギの材は重硬で、切削加工は中庸である。

⑥ツバキ属 *Camellia* ツバキ科 第67図 6a-6c(No.2)

角張った小型の道管がほぼ単独でやや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端1～3列が直立する異性で、幅1～3列となる。

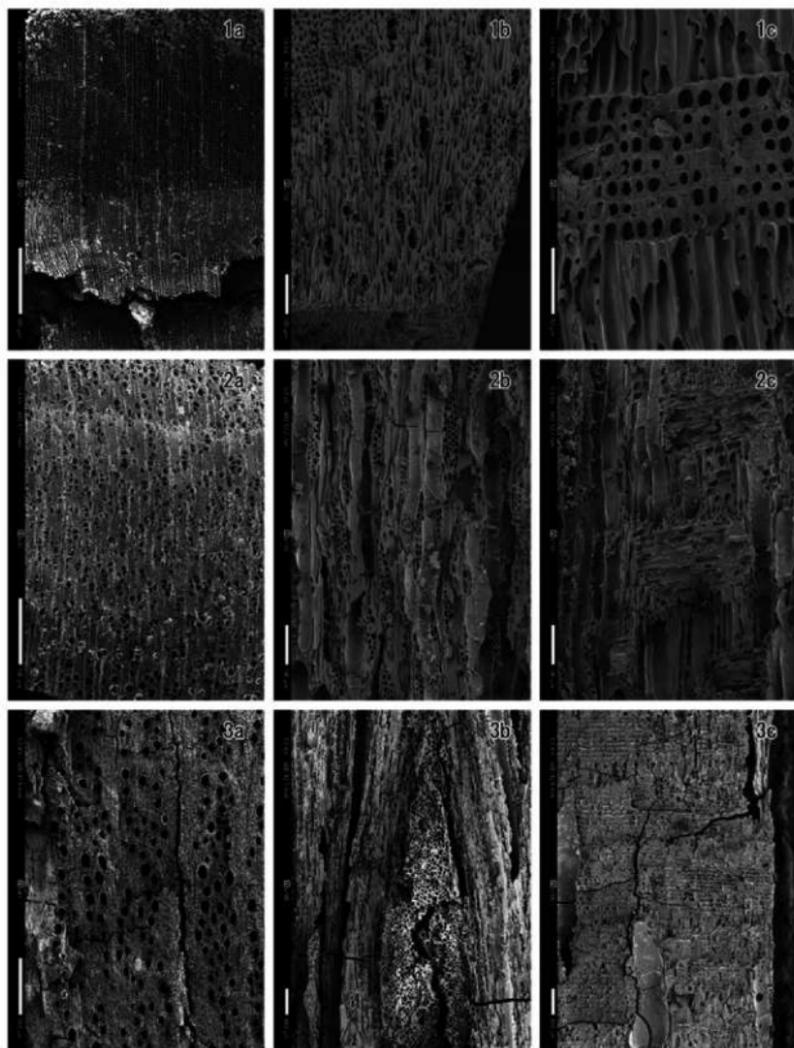
ツバキ属にはヤブツバキやサザンカなどがあり、ヤブツバキは本州、四国、九州の温帯に、サザンカは山口県以南の温帯南部から亜熱帯に分布する常緑小高木の広葉樹である。材は重硬で、切削加工は困難である。

(4) 考察

鎌倉時代の各遺構から出土した炭化材は、マツ属複雑維管束亜属とサクラ属、アカガシ亜属、カバノキ属、ウツギ属、ツバキ属であった。針葉樹であるマツ属複雑維管束亜属は木理通直でまっすぐに生育する、加工性の良い樹種であり、広葉樹のサクラ属とアカガシ亜属、カバノキ属、ウツギ属、ツバキ属は堅硬な樹種である。また、燃料材としてみると、マツ属複雑維管束亜属は油分が多くて燃焼性が高い樹種であり、今回産出した広葉樹はいずれも薪炭材として普通に利用される樹種である（伊東ほか、2011）。また、いずれも遺跡周辺に生育可能な樹種であり、周辺の樹木が伐採利用されていたと考えられる。

引用文献

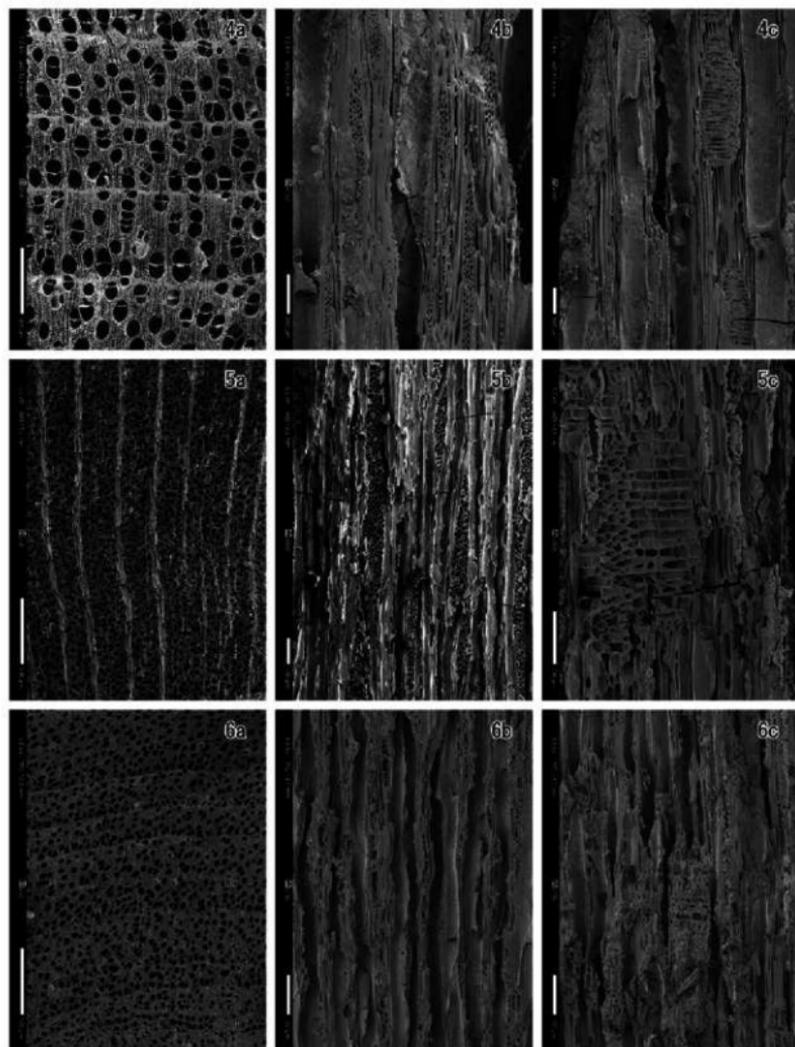
伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌、238p、海青社。



第66図 下平野遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(1)

1a-1c. マツ属複雑管束亜属(No.3)、2a-2c. サクラ属(No.4)、3a-3c. コナラ属アカガシ亜属(No.1)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面



第67図 下平野遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(2)
 4a-4c.カバノキ属(No.6)、5a-5c.ウツギ属(No.9)、6a-6c.ツバキ属(No.2)
 a.横断面、b.接線断面、c.放射断面

4 下平野遺跡出土鉄関連遺物の自然科学分析〔令和4年度委託分〕

竹原弘展（パレオ・ラボ）

(1) はじめに

熊毛郡田布施町下田布施に所在する下平野遺跡の発掘調査では、1,000m程度の範囲に1,000個以上の柱穴が切り合いながら密集して検出された。青磁や白磁等も少数ながら出土しており、地元の有力者が居住した集落跡と考えられている。ここでは、遺構より出土した鉄関連遺物について、遺跡で行われた金属生産活動の調査を目的として、断面観察およびX線分析を行い、材質を検討した。

(2) 試料と方法

分析対象は、1区の柱穴や土坑より出土した鉄関連遺物7点である（第34表）。時期は、出土する土師器等から鎌倉時代（13世紀～14世紀初頭）とみられている。いずれも磁着が認められ、観察・測定面は比較的磁着の強い箇所を選び、断面試料を作製して観察、分析を行った。

まず、各試料の一部を岩石カッターで切り取り、超音波洗浄後、断面の蛍光X線分析（エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製SEA1200VX、照射径8mm）を行い、採取部位のノンスタンダードFP法による半定量分析を行った。分析後、採取試料を注型用高透明エポキシ樹脂で包埋した。第68～71図の遺物写真に採取部位を示す。包埋試料は、ディスクブラシで研磨した後、超精密研磨フィルムの#1000、4000、8000の順で研磨し、観察、分析面とした。観察、分析には、走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製JSM-IT200）による反射電子像の観察と、電子顕微鏡に装着したエネルギー分散型X線分析装置（オックスフォード・インストゥルメンツ株式会社製AZtecOneシステム）を使用して電子線照射による鉱物組織の微小部X線分析を行った。

第34表 分析対象一覧

分析No.	地区	出土位置	出土年月日
1	1区	SP776 埋土	221218
2	1区	SP1127 埋土	221209
3	1区	SK248 埋土	221025
4	1区	SP950	221207
5	1区	SP685	221209
6	1区	SP1170 埋土	221208
7	1区	SP349 埋土	221104

(3) 分析結果および考察

蛍光X線分析による半定量値を、第35表に酸化物に換算した形で示す。また、走査型電子顕微鏡観察による反射電子像を第68～71図に、顕微鏡画像に示したa～dの箇所の鉱物組織の電子線による微小部X線分析結果を第36表に示す。

[分析No.1] 梔形鍛冶滓

断面梔形で、やや強い磁着のある鉄滓である。

蛍光X線分析では、鉄が酸化物(Fe_2O_3)換算で約70%以上と高い割合で検出された。チタン(TiO_2)含有量は少ない。電子顕微鏡観察および鉱物組織のX線分析では、ウスタイト（第68図1Dのa）、ファイヤライト（同b）、基質のガラス質（同c）が確認された。

第 35 表 蛍光 X 線分析による半定量分析結果 (mass%)

分析 No.	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Cr ₂ O ₃	MnO	Fe ₂ O ₃	CuO	Ga ₂ O ₃	Rb ₂ O	SrO	ZrO ₂	MnO ₂	BaO
1	0.61	6.91	17.90	0.40	0.15	0.79	0.90	0.23	—	0.11	71.91	0.00	0.00	0.01	0.01	0.02	—	0.04
2	—	4.20	12.20	0.43	0.18	0.54	1.12	0.52	0.05	0.20	80.37	—	—	—	0.01	0.17	—	0.01
3	—	4.68	10.44	0.30	—	0.20	0.37	0.36	—	0.05	83.58	0.01	—	—	—	0.01	0.01	0.01
4	—	2.65	9.79	0.36	0.16	0.21	0.44	1.81	0.03	0.26	84.20	—	0.01	—	—	0.05	0.01	0.01
5	—	2.85	6.17	0.47	—	—	0.26	0.47	—	0.04	89.71	0.03	—	—	—	0.01	0.01	0.01
6	—	3.73	9.31	0.69	—	0.50	0.39	0.16	—	0.08	85.10	0.02	—	—	0.01	—	0.01	0.01
7	—	0.57	2.26	0.56	1.55	—	0.17	—	—	—	94.88	—	—	—	—	—	—	—

以上の結果より、分析 No.1 は楕形鍛冶滓と考えられる。

[分析 No.2] 鍛冶滓

不定形の磁着のある鉄滓である。

蛍光 X 線分析では、鉄が酸化物 (Fe₂O₃) 換算で約 80% と高い割合で検出された。チタン (TiO₂) 含有量は少ない。電子顕微鏡観察および鉱物組織の X 線分析では、ウスタイト (第 68 図 2D の a)、ファイヤライト (同 b)、基質のガラス質 (同 c) が確認された。

以上の結果より、分析 No.2 は鍛冶滓と考えられる。

[分析 No.3] 鍛冶滓

扁平で、やや強い磁着のある鉄滓である。

蛍光 X 線分析では、鉄が酸化物 (Fe₂O₃) 換算で約 80% 以上と高い割合で検出された。チタン (TiO₂) 含有量は少ない。電子顕微鏡観察および鉱物組織の X 線分析では、ウスタイト (第 69 図 3D の a)、ファイヤライト (同 b)、基質のガラス質 (同 c) が確認された。

以上の結果より、分析 No.3 は鍛冶滓と考えられる。

[分析 No.4] 鍛冶滓?

やや強い磁着のある塊状の鉄滓である。

蛍光 X 線分析では、鉄が酸化物 (Fe₂O₃) 換算で約 85% と高い割合で検出された。チタン (TiO₂) 含有量がやや多いのが特徴的であった。電子顕微鏡観察および鉱物組織の X 線分析においても、ウスタイト (第 69 図 4D の a)、ファイヤライト (同 c)、基質のガラス質 (同 d) に加えて、ウルボスピネル (同 b) とみられる鉱物が観察された。

分析 No.4 は、他試料と比較してチタンがやや多いのが特徴的であった。製錬や精錬鍛冶など、他試料よりも前の段階の工程で発生した鉄滓である可能性が考えられる。

[分析 No.5] 鍛冶滓

やや強い磁着のある塊状の鉄滓である。

蛍光 X 線分析では、鉄が酸化物 (Fe_2O_3) 換算で約 90% と高い割合で検出された。チタン (TiO_2) 含有量は少ない。電子顕微鏡観察および鉱物組織の X 線分析では、ウスタイト (第 70 図 5D の a)、ファイヤライト (同 b)、基質のガラス質 (同 c) が確認された。

以上の結果より、分析 No.5 は鍛冶滓と考えられる。

[分析 No.6] 鍛冶滓

やや強い磁着のある棒状の鉄滓である。

蛍光 X 線分析では、鉄が酸化物 (Fe_2O_3) 換算で約 85% と高い割合で検出された。チタン (TiO_2) 含有量は少ない。電子顕微鏡観察および鉱物組織の X 線分析では、ウスタイト (第 70 図 6D の a)、ファイヤライト (同 b)、基質のガラス質 (同 c) が確認された。

以上の結果より、分析 No.6 は鍛冶滓と考えられる。

[分析 No.7] 鉄製品

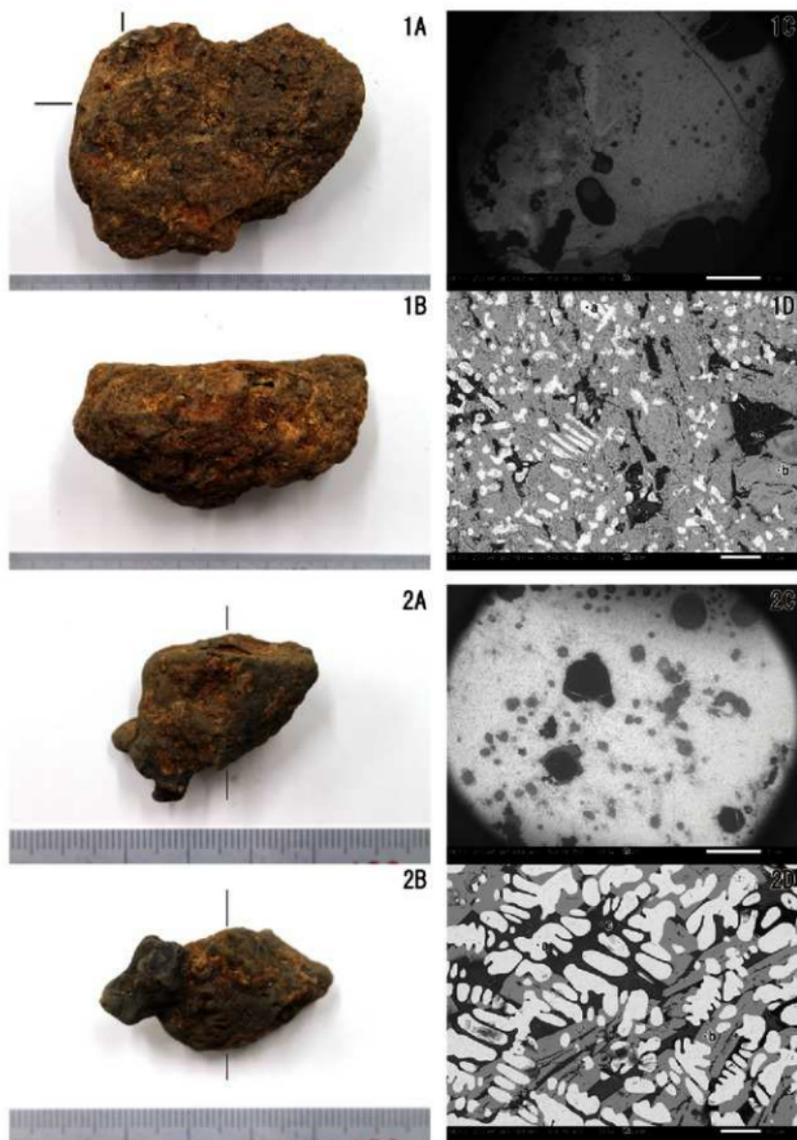
やや強い磁着のある塊状の物質である。

蛍光 X 線分析では、鉄が酸化物 (Fe_2O_3) 換算で約 95% と極めて高い割合で検出された。電子顕微鏡観察では、鉄滓にみられる鉱物組織は認められず、鉄滓ではない可能性が高い。中心部は鉄の含有量が少なく、腐食による内部の空洞化が発生し、腐食生成物で充填されている状態と考えられる。腐食が進んでおり、金属組織は観察できなかった。

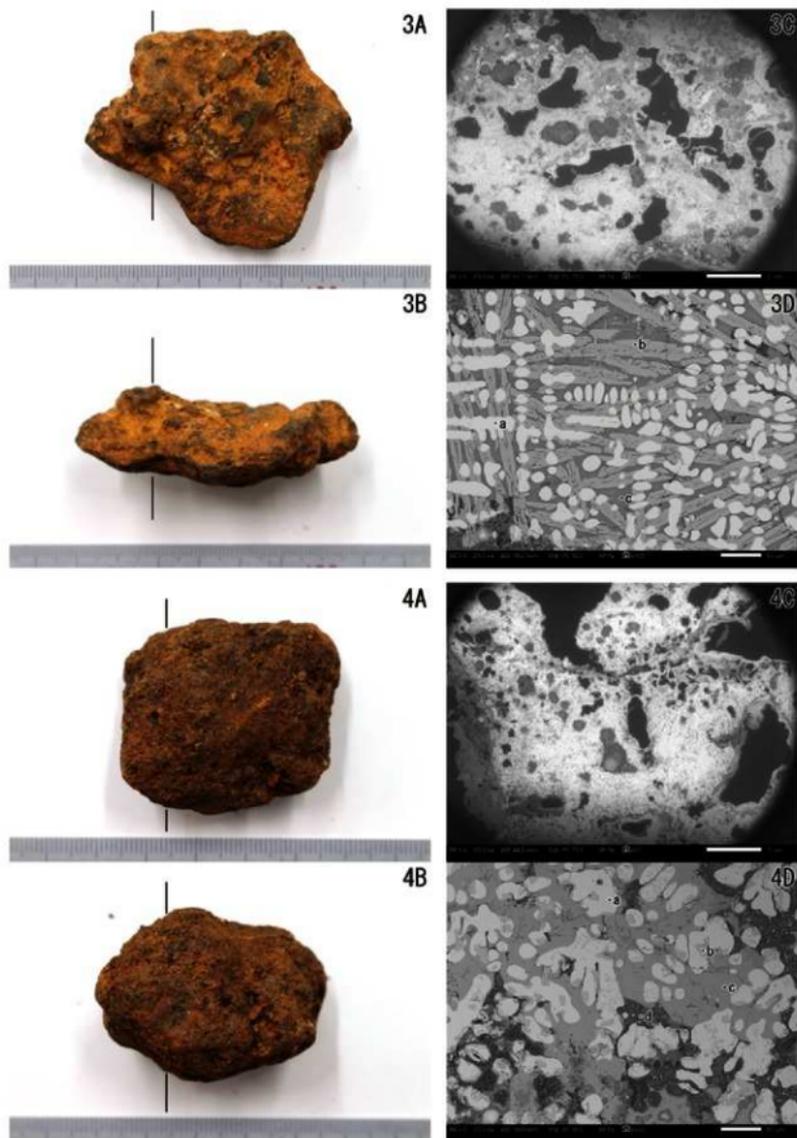
今回分析した鉄滓は、全体的にチタンの含有量が少なく、鉄の含有量が多く、鍛冶滓と考えられる。精錬鍛冶や鍛錬鍛冶などの鍛冶作業が行われていたと推定される。

第 36 表 鉱物組成の X 線分析結果

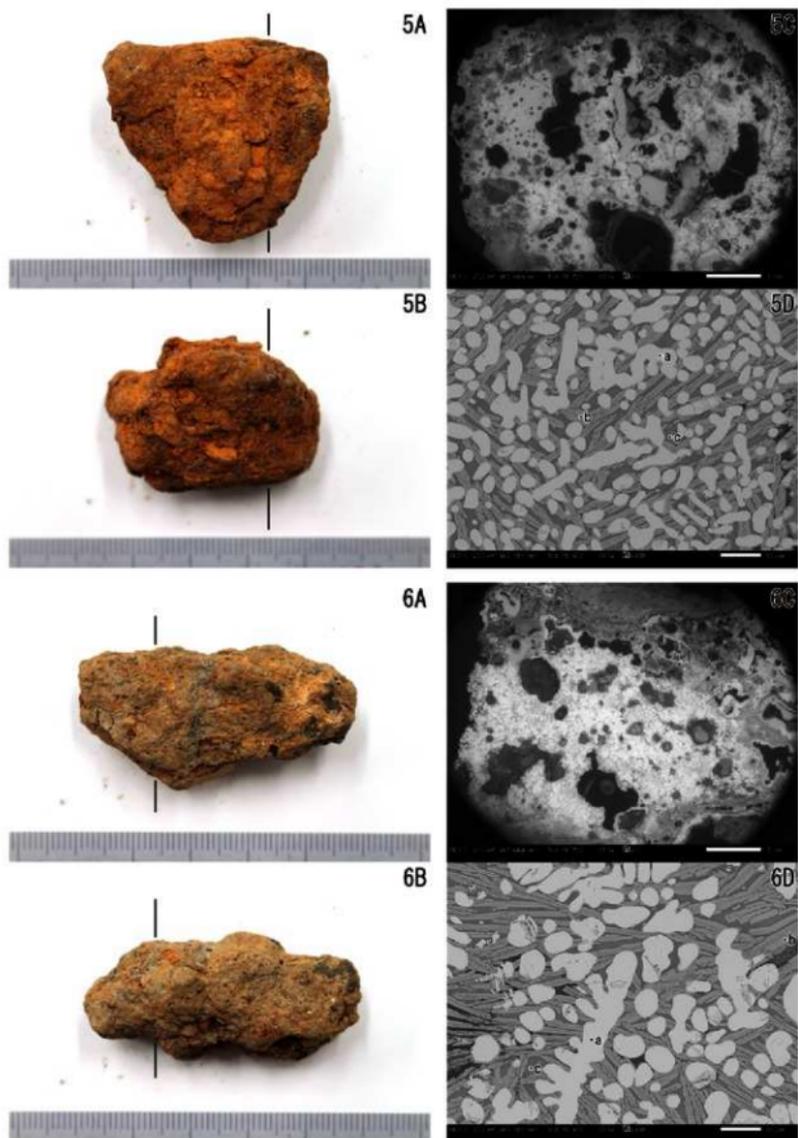
分析 No.	ポイント	主な検出元素	組織	所見
1	a	O,Fe	ウスタイト	椀形鍛冶滓
	b	O,Si,Fe	ファイヤライト	
	c	O,Al,Si,K,Fe	ガラス質	
2	a	O,Fe	ウスタイト	鍛冶滓
	b	O,Si,Fe	ファイヤライト	
	c	O,Al,Si,K,Ca,Fe	ガラス質	
3	a	O,Fe	ウスタイト	鍛冶滓
	b	O,Si,Fe	ファイヤライト	
	c	O,Al,Si,Ca,Fe	ガラス質	
4	a	O,Fe	ウスタイト	鍛冶滓? (Ti やや多い)
	b	O,Ti,Fe	ウルボスピネル	
	c	O,Si,Fe	ファイヤライト	
	d	O,Al,Si,K,Fe	ガラス質	
5	a	O,Fe	ウスタイト	鍛冶滓
	b	O,Si,Fe	ファイヤライト	
	c	O,Al,Ca,Fe	ガラス質	
6	a	O,Fe	ウスタイト	鍛冶滓
	b	O,Si,Fe	ファイヤライト	
	c	O,Al,Si,K,Ca,Fe	ガラス質	
7	a	O,Fe	錆化鉄	鉄製品か
	b	O,Al,Si,Fe	錆化鉄	
	c	O,Al,Si,Fe	土	



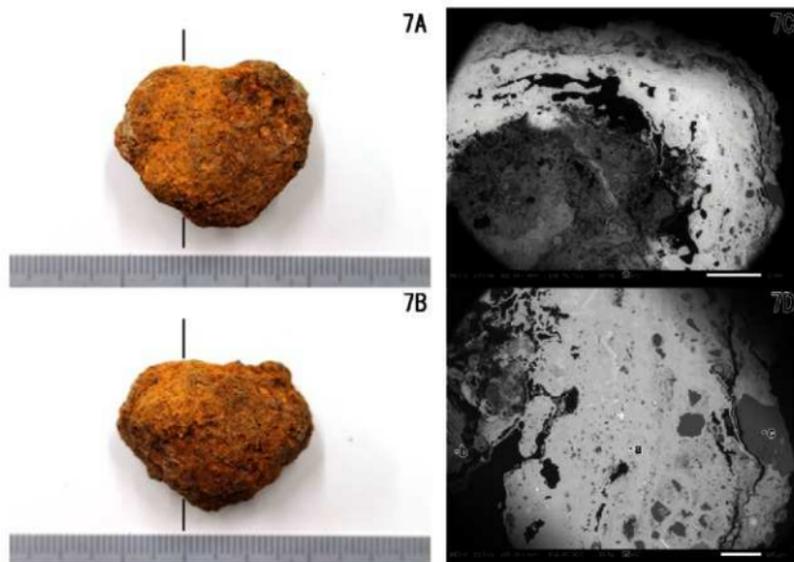
第 68 図 鉄関連遺物の遺物写真 (A、B) と断面組織の走査型電子顕微鏡反射電子像 (C、D) (1)
 (右上数字は分析 No.)



第 69 図 鉄関連遺物の遺物写真 (A、B) と断面組織の走査型電子顕微鏡反射電子像 (C、D) (2)
 (右上数字は分析 No.)



第70図 鉄関連遺物の遺物写真 (A、B) と断面組織の走査型電子顕微鏡反射電子像 (C、D) (3)
 (右上数字は分析 No.)



第 71 図 鉄関連遺物の遺物写真 (A、B) と断面組織の走査型電子顕微鏡反射電子像 (C、D) (4)
(右上数字は分析 No.)

参考文献

- 中井 泉編 (2005) 蛍光 X 線分析の実際, 242p, 朝倉書店.
- 村上 隆 (2003) 金工技術, 日本の美術, 443, 98p, 至文堂.
- 大澤正己・鈴木瑞穂 (2005) 中道東山西山遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査, 鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センター編「中道東山西山遺跡」: 149-173, 鳥取県教育文化財団.
- 大澤正己・鈴木瑞穂 (2013) 石塚遺跡 (第 2 次) の鍛冶滓等の自然科学分析, 萩原義彦・伊藤裕博編「石塚遺跡 (第 1・2 次)・高橋遺跡 (第 1・2 次) 発掘調査報告」: 49-65, 三重県埋蔵文化財センター.
- 材料技術教育研究会編 (2008) 組織検査用試料のつくり方, 226p, 大河出版.
- 材料技術教育研究会編 (2015) 標準顕微鏡組織 第 1 類 (炭素鋼・鋳鉄編) 改定 8 版, 128p, 山本科学工具研究社.

5 下平野遺跡出土鉄関連遺物の自然科学分析〔令和5年度委託分〕

竹原弘展（パレオ・ラボ）

（1）はじめに

熊毛郡田布施町下田布施に所在する下平野遺跡の発掘調査では、1,000㎡程度の範囲に1,000個以上の柱穴が切り合いながら密集して検出された。青磁や白磁等も少数ながら出土しており、地元の有力者が居住した集落跡と考えられている。ここでは、遺構より出土した鉄関連遺物について、遺跡で行われた金属生産活動の調査を目的として、断面観察およびX線分析を行い、材質を検討した。

（2）試料と方法

分析対象は、1区および2区の柱穴や土坑等より出土した鉄関連遺物7点である（第37表）。時期は、出土する土師器等から鎌倉時代～室町時代前期（13世紀～14世紀中頃）とみられている。いずれも磁着が認められ、観察・測定面は比較的磁着の強い箇所を選び、断面試料を製作して観察、分析を行った。

まず、各試料の一部を岩石カッターで切り取り、超音波洗浄後、断面の蛍光X線分析（エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製 SEA1200VX、照射径8mm）を行い、採取部位のノンスタンダードFP法による半定量分析を行った。分析後、採取試料を注型用高透明エポキシ樹脂で包埋した。第72～75図の遺物写真に採取部位を示す。包埋試料は、ディスコブランドで断面を切り出した後、超精密研磨フィルムの#1000、4000、8000の順で研磨し、観察、分析面とした。観察、分析には、走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製 JSM-IT200）による反射電子像の観察と、電子顕微鏡に装着したエネルギー分散型X線分析装置（オックスフォード・インストルメンツ株式会社製 AZtecOne システム）を使用して電子線照射による鉱物組織の微小部X線分析を行った。

第37表 分析対象一覧

分析No.	地区	出土位置	出土年月日
1	1区	SD 1 中央付近 第2層	230105
2	1区	SP564	221203
3	1区	SP1291	230221
4	1区	SK20 南東埋土	221018
5	1区	SK242 埋土	221028
6	2区	SP25 埋土	230208
7	2区	SP71 埋土	230208

（3）分析結果および考察

蛍光X線分析による半定量値を、酸化物に換算した形で第38表に示す。また、走査型電子顕微鏡観察による反射電子像を第72～75図に、顕微鏡画像に示したa～cの箇所の鉱物組織の電子線による微小部X線分析結果を第39表に示す。

〔分析 No.1〕鉄製品（鉄釘）

一部強い磁着のある塊状の物質である。

蛍光X線分析では、鉄が酸化物（ Fe_2O_3 ）換算で約96%と極めて高い割合で検出された。電子顕

第 38 表 蛍光 X 線分析による半定量分析結果 (mass%)

分析 No.	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Cr ₂ O ₃	MnO	Fe ₂ O ₃	CuO	Ga ₂ O ₃	As ₂ O ₃	SrO	ZrO ₂	MoO ₃	SnO ₂	BaO
1	—	0.31	2.72	0.46	—	0.07	0.08	0.19	0.02	0.03	96.05	0.02	0.01	—	—	0.02	0.01	0.01	—
2	—	1.07	2.04	0.81	0.62	0.06	0.11	0.17	0.01	0.01	94.97	0.05	—	0.01	—	0.01	0.06	0.01	—
3	0.33	3.98	11.81	0.81	0.14	0.22	0.77	0.21	0.02	0.06	81.58	0.01	—	—	0.01	0.01	—	—	0.03
4	0.51	5.08	16.02	0.36	0.12	0.72	1.02	0.15	0.01	0.10	75.87	—	—	—	0.01	0.01	—	—	0.02
5	0.36	5.08	22.52	0.34	0.08	0.15	1.23	0.49	0.03	0.37	69.20	0.01	—	—	0.02	0.08	—	—	0.04
6	—	3.00	7.26	0.38	—	0.09	0.13	0.59	0.08	0.08	88.37	0.01	—	—	—	0.01	0.01	—	—
7	—	1.13	7.26	0.33	0.13	—	0.22	0.30	0.02	0.14	90.42	—	—	—	—	0.04	—	—	—

顕微鏡観察では、鉄滓にみられる鉱物組織は認められず、鉄滓ではない。中心部は鉄の含有量が少なく、腐食による内部の空洞化が発生し、腐食生成物で充填されている状態と考えられる。腐食が進んでおり、金属組織は観察できなかった。

遺物を観察すると、錆で固まった土塊の中に、断面方形で片側端部を折り返した棒状の鉄製品が確認された。鉄釘と考えられる。

[分析 No.2] 鉄製品

強い磁着のある塊状の物質である。

蛍光 X 線分析では、鉄が酸化物 (Fe₂O₃) 換算で約 95% と極めて高い割合で検出された。また、ヒ素 (As₂O₃) やモリブデン (MoO₃) の検出が特徴的であった。電子顕微鏡観察では、鉄滓にみられる鉱物組織は認められず、鉄滓ではない可能性が高い。中心部は腐食による空洞化が発生し、空洞の周囲は鉄の含有量が少ない腐食生成物に覆われた状態と考えられる。腐食が進んでおり、金属組織は観察できなかった。

[分析 No.3] 鍛冶滓

扁平で、磁着のある鉄滓である。

蛍光 X 線分析では、鉄が酸化物 (Fe₂O₃) 換算で約 80% 以上と高い割合で検出された。チタン (TiO₂) 含有量は少ない。電子顕微鏡観察および鉱物組織の X 線分析では、ウスタイト (第 73 図 3D の a)、ファイヤライト (同 b)、基質のガラス質 (同 c) が確認された。

以上の結果より、分析 No.3 は鍛冶滓と考えられる。

[分析 No.4] 鍛冶滓

扁平で、強い磁着のある鉄滓である。

蛍光 X 線分析では、鉄が酸化物 (Fe₂O₃) 換算で約 75% と高い割合で検出された。チタン (TiO₂) 含有量は少ない。電子顕微鏡観察および鉱物組織の X 線分析では、ウスタイト (第 73 図 4D の a)、ファイヤライト (同 b)、基質のガラス質 (同 c) が確認された。

以上の結果より、分析 No.4 は鍛冶滓と考えられる。

[分析 No.5] 鍛冶滓

強い磁着のある塊状の鉄滓である。

蛍光 X 線分析では、鉄が酸化物 (Fe_2O_3) 換算で約 70% と高い割合で検出された。チタン (TiO_2) 含有量は少ない。電子顕微鏡観察および鉱物組織の X 線分析では、ウスタイト (第 74 図 5D の a)、ファイヤライト (同 b)、基質のガラス質 (同 c) が確認された。

以上の結果より、分析 No.5 は鍛冶滓と考えられる。

[分析 No.6] 鍛冶滓

強い磁着のある塊状の鉄滓である。

蛍光 X 線分析では、鉄が酸化物 (Fe_2O_3) 換算で約 90% と高い割合で検出された。チタン (TiO_2) 含有量は少ない。電子顕微鏡観察および鉱物組織の X 線分析では、ウスタイト (第 74 図 6D の a)、ファイヤライト (同 b)、基質のガラス質 (同 c) が確認された。

以上の結果より、分析 No.6 は鍛冶滓と考えられる。

[分析 No.7] 鍛冶滓

強い磁着のある塊状の鉄滓である。

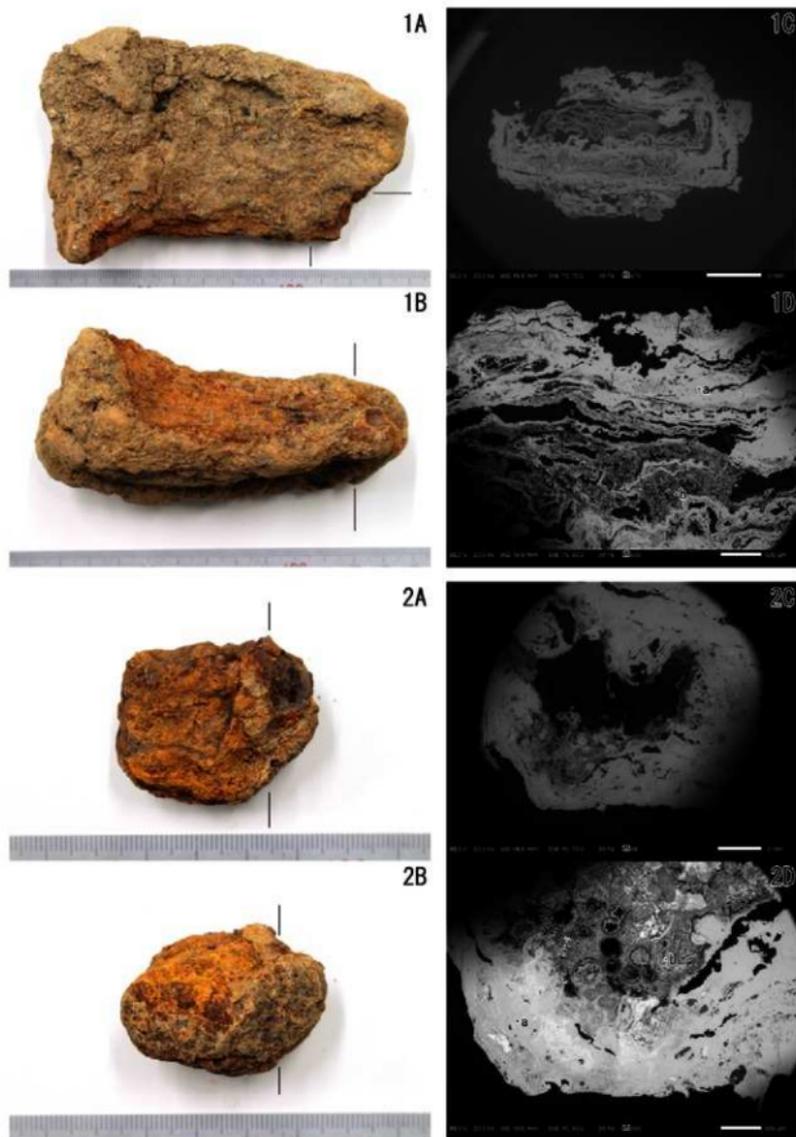
蛍光 X 線分析では、鉄が酸化物 (Fe_2O_3) 換算で約 90% と高い割合で検出された。チタン (TiO_2) 含有量は少ない。電子顕微鏡観察および鉱物組織の X 線分析では、ウスタイト (第 75 図 7D の a)、ファイヤライト (同 b)、基質のガラス質 (同 c) が確認された。

以上の結果より、分析 No.7 は鍛冶滓と考えられる。

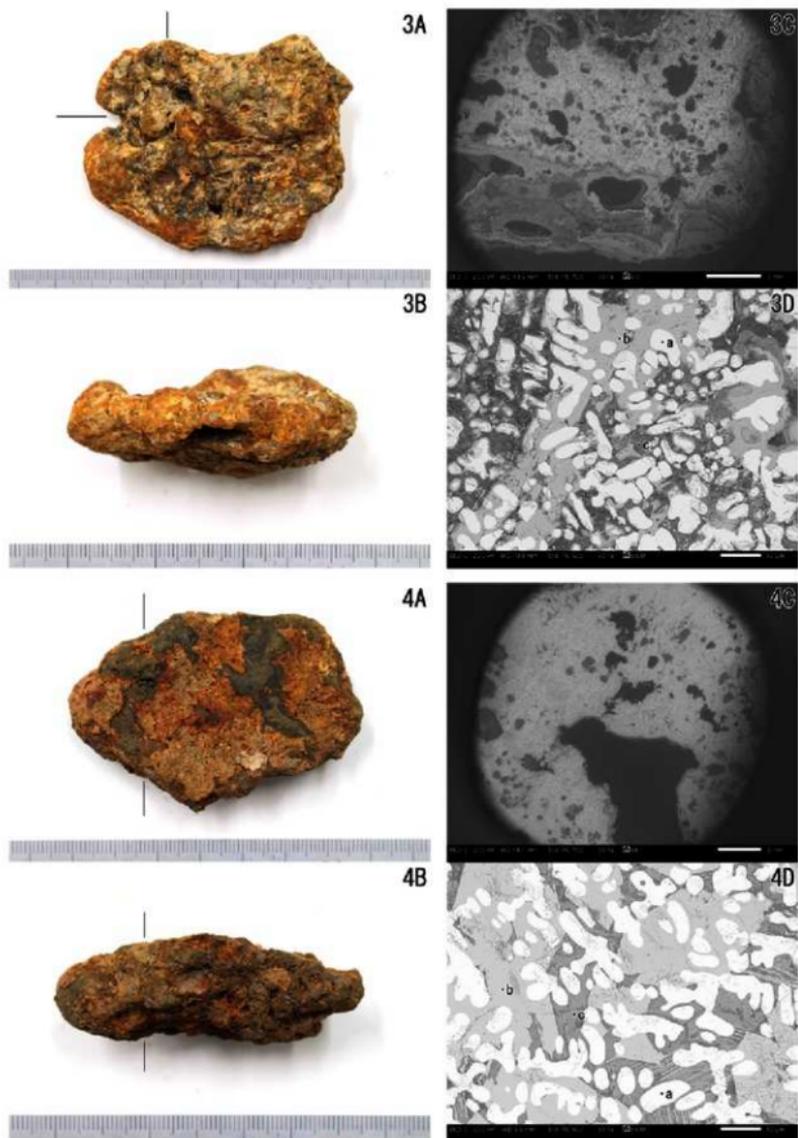
今回分析した鉄滓は、全体的にチタンの含有量が少なく、鉄の含有量が多く、鍛冶滓と考えられる。2022 年度の分析で見られたようなチタンがやや多い試料はみられなかった。精錬鍛冶や鍛錬鍛冶などの鍛冶作業が行われていたと推定される。

第 39 表 鉱物組織の X 線分析結果

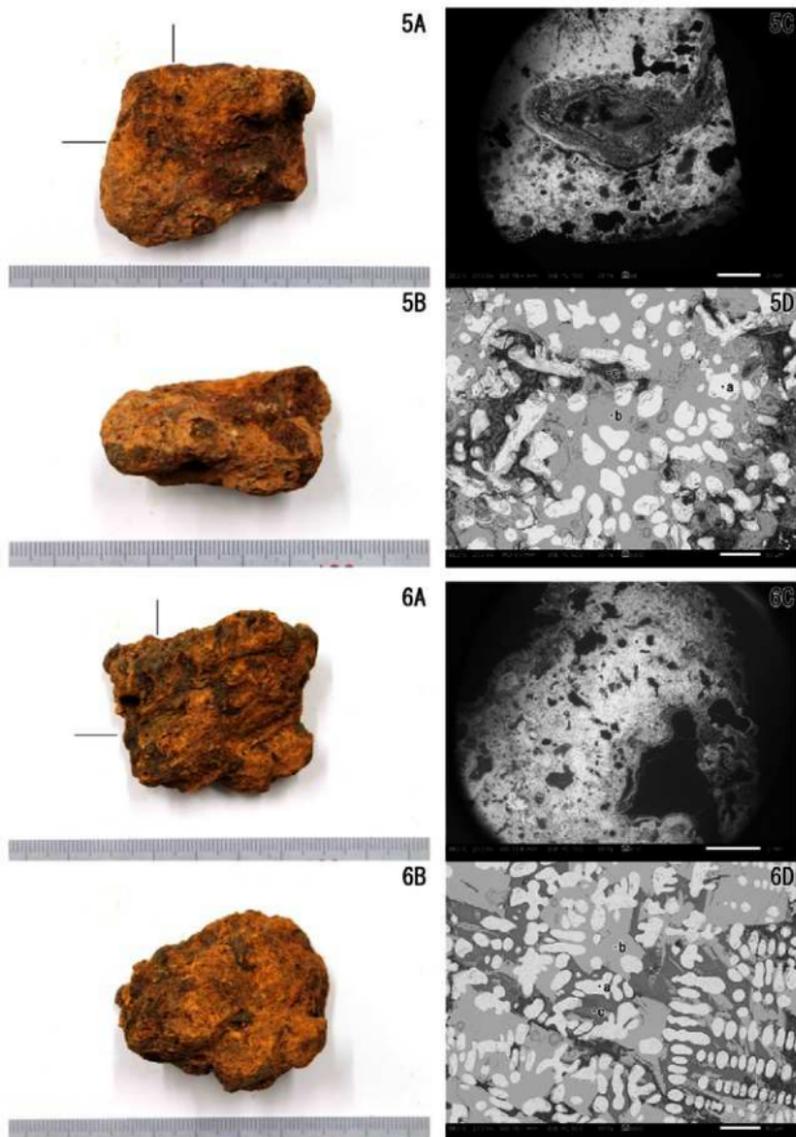
分析 No.	ポイント	主な検出元素	組織	所見
1	a	O,Fe	錆化鉄	鉄製品 (釘)
	b	O,Al,Si,Fe	錆化鉄	
2	a	O,Fe	錆化鉄	鉄製品か
	b	O,Al,Si,Fe	錆化鉄	
3	a	O,Fe	ウスタイト	鍛冶滓
	b	O,Si,Fe	ファイヤライト	
	c	O,Na,Al,Si,K,Fe	ガラス質	
4	a	O,Fe	ウスタイト	鍛冶滓
	b	O,Si,Fe	ファイヤライト	
	c	O,Al,Si,K,Ca,Fe	ガラス質	
5	a	O,Fe	ウスタイト	鍛冶滓
	b	O,Si,Fe	ファイヤライト	
	c	O,Al,Si,Ca,Fe	ガラス質	
6	a	O,Fe	ウスタイト	鍛冶滓
	b	O,Si,Fe	ファイヤライト	
	c	O,Al,Si,K,Ca,Fe	ガラス質	
7	a	O,Fe	ウスタイト	鍛冶滓
	b	O,Si,Fe	ファイヤライト	
	c	O,Al,Si,Fe	ガラス質	



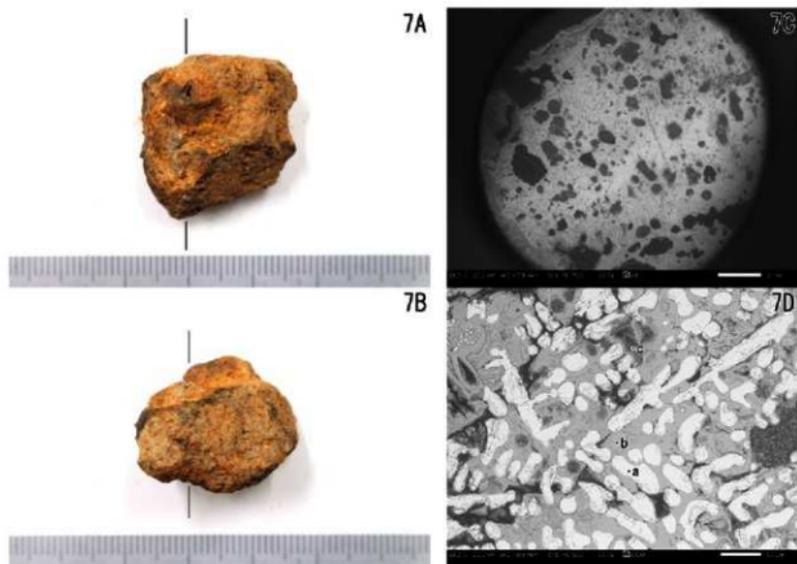
第 72 図 鉄関連遺物の遺物写真 (A、B) と断面組織の走査型電子顕微鏡反射電子像 (C、D) (1)
 (右上数字は分析 No.)



第73図 鉄関連遺物の遺物写真 (A、B) と断面組織の走査型電子顕微鏡反射電子像 (C、D) (2)
 (右上数字は分析 No.)



第 74 図 鉄関連遺物の遺物写真 (A、B) と断面組織の走査型電子顕微鏡反射電子像 (C、D) (3)
 (右上数字は分析 No.)



第 75 図 鉄関連遺物の遺物写真 (A、B) と断面組織の走査型電子顕微鏡反射電子像 (C、D) (4)
(右上数字は分析 No.)

参考文献

- 中井 泉編 (2005) 蛍光 X 線分析の実際, 242p, 朝倉書店.
- 村上 隆 (2003) 金工技術, 日本の美術, 443, 98p, 至文堂.
- 大澤正己・鈴木瑞穂 (2005) 中道東山西山遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査, 鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センター編「中道東山西山遺跡」; 149-173, 鳥取県教育文化財団.
- 大澤正己・鈴木瑞穂 (2013) 石塚遺跡 (第 2 次) の鍛冶滓等の自然科学分析, 萩原義彦・伊藤裕偉編「石塚遺跡 (第 1・2 次)・高樋遺跡 (第 1・2 次) 発掘調査報告」; 49-65, 三重県埋蔵文化財センター.
- 材料技術教育研究会編 (2008) 組織検査用試料のつくり方, 226p, 大河出版.
- 材料技術教育研究会編 (2015) 標準顕微鏡組織 第 1 類 (炭素鋼・鋳鉄編) 改定 8 版, 128p, 山本科学工具研究社.

V 総 括

下平野遺跡では、才賀川南側の丘陵先端部の台地上に立地する、中世を主体とする集落を確認し、掘立柱建物 10 棟、柱列 15 条、柱穴約 1,470 個、土坑約 290 基、木炭焼成坑 1 基、溝 15 条を検出した。その他、古墳時代の遺物包含層や旧石器・縄文時代の遺物も確認した。

以下、中世の集落及び出土遺物のほか、本遺跡で出土した各時代の特筆すべき遺物について述べ、総括とする。

1 中世の集落

(1) 出土遺物について (第 76 図)

中世の遺物は、多数の土師器をはじめ、東播系須恵器や常滑焼、青磁や白磁、中国銭等、他地域からの搬入品のほか、椀形滓等の鍛冶滓、鉄釘や鉄製品が出土している。

①在地土器の変遷

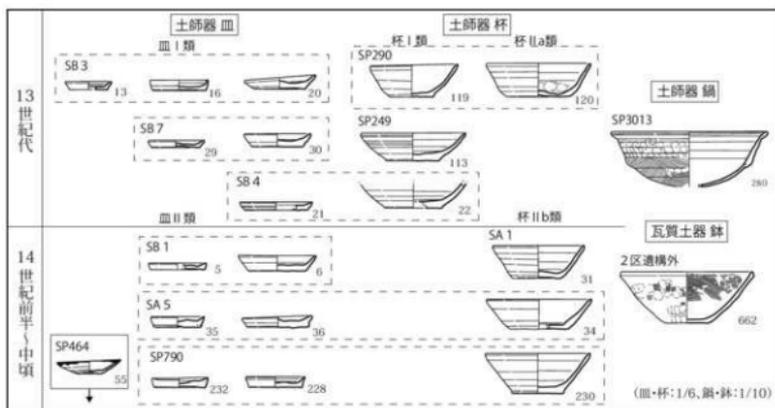
まず、土師器を中心とする在地土器をみると、皿・杯の食膳具、とりわけ皿が大多数を占め、煮沸具の鍋も一定量出土する。皿は、口径によって大(8~9cm)、中(7~8cm)、小(5~6cm)がみられる。形態は、Ⅰ)外傾するか内湾気味に開くものと、Ⅱ)体部がわずかに立ち上がるものなどに大きく分けられる。すなわち、前者が意識的に深底につくるのに対して、後者は底部外周の高さをほとんど意識しないもので、前者から後者への変化が想定できる。これらとは別に、SP464 出土の土師器皿(55)は、底部が狭く、体部が強く外傾するとともに、薄手で灰白色を呈し、底部は回転系切りである。燈明皿として使用され、他の皿と形態、胎土とも異なっている。大内式の在来系土師器皿の搬入品またはその影響を受けたもので、大内Ⅰ式(14世紀後半~末)に比定できる。

杯は、法量に大きな差異はないが、形態から、Ⅰ)体部が内湾気味に開くものと、Ⅱ)体部が外傾するものに分けられ、後者は a)底部から湾曲しながら立ち上がるものと、b)底部から屈曲して立ち上がるものがあり、a から b への変化が想定できる。この他に、高台付椀(第 30 図 285 ほか)も少量出土している。

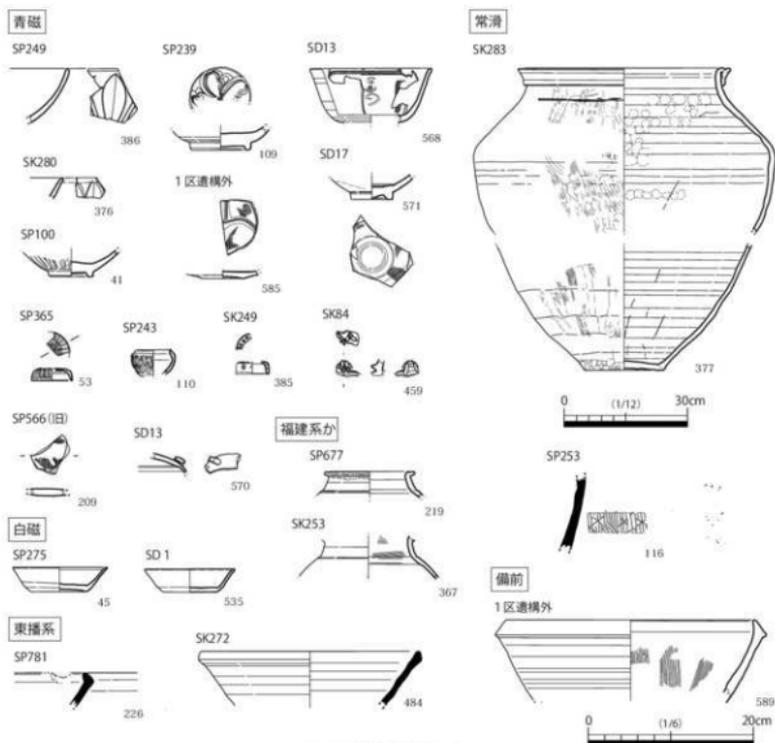
底部の切り離し技法は、ほとんどの皿が回転ヘラ切り、杯が回転系切りであり、皿の中には回転ヘラ切りと回転系切りの区別がつきにくいものも少量みられる。

これらの皿と杯の変遷について考える。SB 4 では皿Ⅰ類と杯Ⅰ類、SP290 では杯Ⅰ類と杯Ⅱ a 類が共伴することから、皿Ⅰ類と杯Ⅰ・Ⅱ a 類が同一の様相に、SA 5 と SP790 では皿Ⅱ類と杯Ⅱ b 類が同一の様相にそれぞれ位置付けられる。そして、従来の研究から(鈴木・北島ほか 2022 等)、両様相が先後関係と捉え、前者を 13 世紀代、後者を 14 世紀前半~中頃(大内 0 式併行)に比定したい。この年代は、放射性炭素年代測定における、SB 4 が 13 世紀代、SB 1 が 14 世紀前半~後半とする結果とも大きく矛盾しない。

また、鍋は土師器にほぼ限られ、脚部(足)のないものが大半とみられる。口縁部はわずかに外



下平野遺跡出土在地土器の変遷



下平野遺跡出土搬入品

第76図 下平野遺跡出土の中世土器・陶磁器

反させるものがほとんどで、口縁部を屈曲させ、上側に向かって内湾させるものがわずかにみられ（第38図388）、体部外面の格子目タタキはみられない。これらの特徴は、防長型足鍋成立以前のものとみられ、大内0式以前の13世紀代から14世紀前半（岩崎2018）に比定できる。瓦質土器の鉢は、体部や内定面の描目の状況が不明だが、口縁部形態等から東播系須恵器の影響を受けたものとみられ、14世紀前半（岩崎2017）に比定する。さらに、SK58では皿Ⅰ類と鍋が共伴する（第49図429～431）。このように、鍋や瓦質土器の鉢からみても、本遺跡出土の在地土器の年代は13世紀代～14世紀中頃、下っても14世紀代の範囲におさまると考える。

②搬入品について

次に、他地域からの搬入品をみている。青磁は椀を中心とし、皿や鉢、耳付壺のほか、小壺等の蓋や青白磁の合子等の稀少品も出土している。内面や見込みに櫛歯による草花文や飛雲文等をもつ椀（571・568）や櫛歯文のある皿（585）が、同安窯系または龍泉窯系で12世紀中頃～後半、外面に鎗蓮弁文をもつ椀（41・376・386）や双鱼文を貼花する盤または鉢（209）が龍泉窯系で13世紀代に比定する。菊花文や蓮弁文をもつ青白磁の合子（53）は14世紀前半～中頃に比定する。

白磁の皿2点（45・535）は、外底面の全体または一部が露胎し、いずれも口縁部は口禿で、胎土や軸は良質である。福建省系で13世紀中頃～14世紀初頭に比定する。無軸陶器の壺2点（219・360）は、同一の形態と考える。福建省系とみられ、14世紀中頃～後半に比定する。

東播系須恵器の鉢は、口縁端部を器壁に対して外傾させ、端部の稜線が弱く丸みを帯びることから、Ⅲ-2～Ⅲ-3類、すなわち13世紀前半～14世紀初頭（佐藤2022）に比定する。

常滑焼の甕は、SK283出土の完形に近い赤褐色～橙色系のもの（377）と、須恵質で、胴部外面にスタンプをもつもの（116）の2個体が出土している。このうち前者は、口縁部縁帯を下方に長く垂下させる形態や、胴部上位に最大径をもつ形態等から、常滑窯大甕8型式〔1350～1400年〕（中野2022）、すなわち14世紀後半に比定できる。

備前焼の播鉢2点（588・589）は、いずれも口縁部外面を押さえて内傾させる形態である。端部の狭いもの（588）と端部が広く段をつくるもの（589）があり、いずれもⅣA、すなわち14世紀後半～15世紀前半（重根2022）に比定する。遺構外出土であり、直接集落の時期とは関わらないと考える。

常滑焼と備前焼については、萩市上七重窯跡で常滑系陶器、山口市陶窯跡群（動物愛護センター窯）で備前系陶器を生産したことが明らかとなっている（岩崎2000）。本遺跡出土の常滑甕と備前摺鉢は、いずれも県内の生産地とは型式及び時期とも異なっており、詳細な検討が必要であろうが、常滑及び備前の製品が搬入したと考えておきたい。

このように、搬入品も概ね13世紀～14世紀代が中心であり、在地土器の年代と齟齬はない。本遺跡では、日常の食膳具及び煮沸具として在地の土師器を用い、高級品である青磁や白磁等の貿易陶磁器も取り入れる。一方、鉢や甕は、当初は東播系須恵器や常滑甕等の搬入品を入手するが、14世紀になると防長産の瓦質土器を使用するようになる。

(2) 集落の変遷 (第77図)

まず、台地の北端付近、2区から1区にかけて南西—北東方向に延び、東流する溝(流路)SD 1と、掘立柱建物をはじめとする遺構群との関係である。SD 1の埋土中からは多くの遺物が出土したが、中世の柱穴や土坑等の遺構がSD 1埋土を掘り込んで築かれており、とくに上層では、SD 1出土遺物との識別ができないものが多かった。確実に後世の遺構の影響を受けていない下層～最下層出土の遺物としては、弥生土器の壺や甕(第47図 545・547・549)、8世紀代の須恵器の蓋杯(同 552・553)のほか、図化できない小片だが土師器の皿や杯、椀形滓(同 559)も出土している。このことから、SD 1は8世紀代までは溝として確実に機能していたが、中世の集落が営まれる段階には埋没したと考える。

次に、出土遺物や遺構間の関係等をもとに、掘立柱建物の変遷を考える。13世紀は概ね13世紀前半～中頃と13世紀後半に分けられる。13世紀前半～中頃は、1区SB 4・6・7、2区SB 2・3から構成される。1区SB 4と2区SB 2・3はいずれも南北棟、1区SB 6・7は方形建物である。南北棟は、桁行が3～4m程度の小規模な建物で居住施設に相当し、方形建物はそれらに付属する施設と考える。SK223やSK249は大型の土坑で、水溜め等の用途があったと推測する。

13世紀後半になると、1区北半の中央にSB 2・3・5が築かれる。これらは桁行が5～7mの南北棟の建物で、なかでもSB 2は両廂、SB 5は北廂の建物に復元できる。SB 3とSB 5は梁の位置を揃えないが、平行する建物である。また、SA 2はSB 5及びSB 6と平行しており、塀や柵等の関連施設の可能性がある。2区SB 2・3は存続するが、台地の西端付近に位置すること、1区の方が出土遺物が圧倒的に多いことから、集落の中心は1区SB 2・3・5にあり、この集落の主たる人物及びその家族の屋敷に相当する可能性がある。

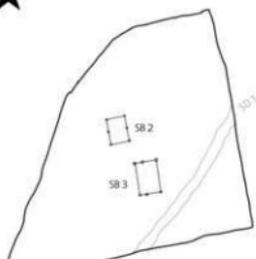
14世紀前半～中頃までSB 2・3は継続するが、SB 5は14世紀前半のある時期に廃絶され、代わって東西方向のSB 1が現れる。SB 1の南側のSA 1はSB 1と平行しており、SB 1に伴う塀や柵等の関連施設の可能性がある。SA 5やSA 14も、建物と主軸を揃えることから、何らかの関連施設であろう。2区では、SB 2が廃絶し、すぐ北側に南北棟のSB 1が築かれる。木炭焼成坑SK246は、13世紀末以降、この時期を中心として、鍛冶等に必要の木炭の生産に使用されたと考える。

このように、本遺跡では、SD 1の埋没後、13世紀に集落が形成されはじめ、13世紀後半～14世紀前半にかけて最盛期を迎え、14世紀中頃以降、廃絶されたと考える。しかし、今回の調査では、1,400個を超える柱穴を確認しており、建物や関連施設等の復元が十分に行えたとはいえない。また、大半の柱穴や土坑に焼土や炭が含まれていた点も問題である。この集落の特徴は、約150年の間に、限られた範囲の中で建物等を何度も建て替えたこと、その中で多量の土器・陶磁器が使用されたことにある。これは、近隣の辻花遺跡が、同じ頃に低地部に営まれ、在土器を中心に使用することと比較しても、本遺跡の性格は大きく異なるものといえよう。

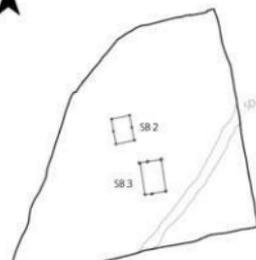
2 古墳時代の遺物包含層出土土器

2区西側の遺物包含層から、古墳時代と考える土師器の壺と甕が多数出土した。これらは、表面が摩滅するが、小片ではなく、形を残したまま出土したものが多く、また、中世の掘立柱建物SB 2付

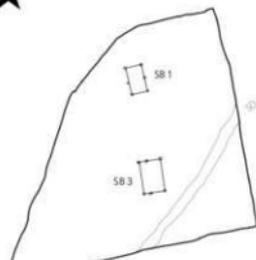
13世紀前半～中頃



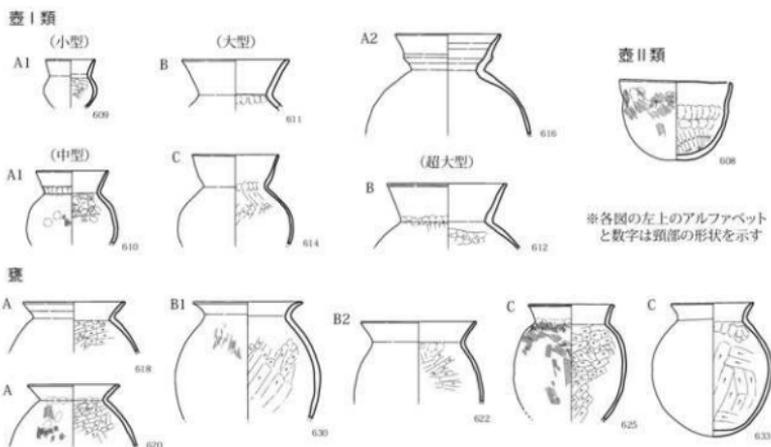
13世紀後半



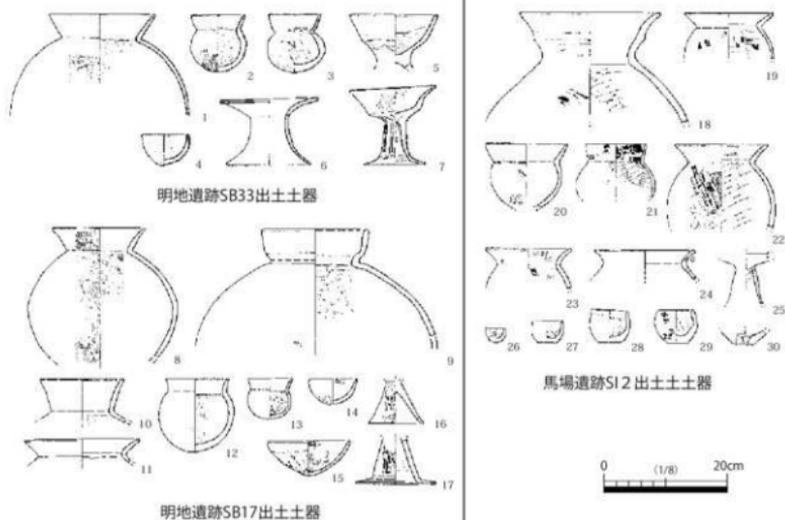
14世紀前半～中頃



第77図 下野遺跡の建物・柱列と主な土坑の変遷



下平野遺跡2区西側包含層出土土器



第78図 下平野遺跡と周辺遺跡出土の古墳時代の土師器

近の上面に厚く堆積する粘質土層に含まれ、中世の土師器も混在することから、すぐ近くに古墳時代の集落等があり、中世集落が形成される時期また廃絶後に混入したものと考えられる。

土師器の壺は、Ⅰ類) 頸部と胴部の境が屈曲し、頸部が長いもの、Ⅱ類) 頸部と胴部の境のくびれが少ないもの(608)に大きく分類でき、そして、Ⅰ類は口径によって小型:7.7cm(609)、中型:11.6cm(610)、大型:14.0~17.4cm(611・614・616)、超大型19.4cm(612)がみられる。さらに、頸部の形状から、A 1) 外傾するもの(609・610)、A 2) 外傾し下半に突帯を貼り付けるもの(616)、B) 外反するもの(611・612)、C) 薄手で内湾気味に開くもの(614)に分けられる。胴部外面は、ほとんどがナデもしくはハケ目後ナデを行い、胴部内面のケズリは、A 1 型式がヨコ方向、壺Ⅱ類とC型式がタテ方向である。

また甕は、頸部の形状から、A) 外傾するもの(617・618・620・626~629・635・637)、B 1) 胴部との境から外反するもの(619・621・630・634)、B 2) 胴部から湾曲して外反するもの(622・624)、C) 胴部との境から直立気味に立ち上がり、わずかに開くもの(623・625・631~633)に分けられる。口縁端部は大半が丸く仕上げるか、先細りにするが、面取りするもの(620・625・627~629)もある。胴部は、わずかに肩部をつくる倒卵形状(625・634)か、胴部中位に最大径がある球形状(627・630・633)に分けられ、胴部内面のケズリは、概ね前者が上半をヨコ方向、下半をタテ方向、後者がタテ方向に施す。

これらの特徴を同じ田布施町内の遺跡と比較してみる。ほぼ同時期の資料が出土する遺跡として、県下有数の低地性集落跡である明地遺跡と、本遺跡から約800m東側の丘陵斜面に位置する馬場遺跡が挙げられる。

まず、明地遺跡の竪穴建物SB33出土の甕は、頸部が長く、強く外傾しており(1)、下平野遺跡の甕B 2 型式と近いが、胴部は球形状を呈する点で異なる。壺は、頸部下半に段をもち二重口縁壺の要素を残す点(2・3)でやはり異なる。明地遺跡の竪穴建物SB17出土の甕は、頸部が外反し、胴部が球形状を呈するもの(8)と、頸部が外傾するもの(11)があり、それぞれ下平野遺跡の甕B 1 型式とA 型式に近い。壺は、頸部が長く外反するもの(10)が壺B 型式と対比でき、小型で頸部が外傾するもの(13)と中型で頸部がやや開くもの(12)はいずれも壺A 1 型式に相当するが、頸部下半に段をもち直立する壺(9)は二重口縁壺の特徴を残している。

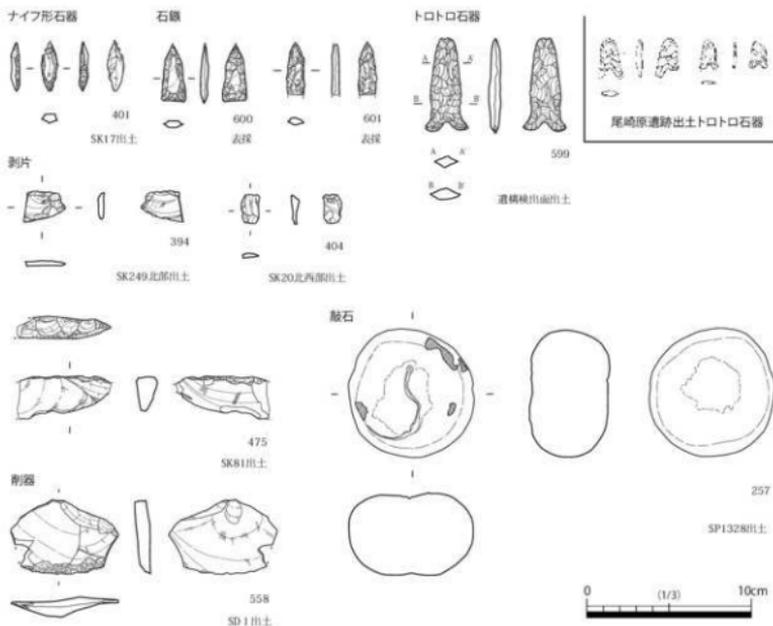
次に、馬場遺跡の竪穴建物SI 2 出土の壺のうち、頸部下半に突帯をもち、そこから外反するもの(18)は、壺A 2 型式に近い。中型の壺は、頸部が内湾気味に強く開くもの(20)と頸部が直立気味のもの(21)があり、いずれも下平野遺跡の壺と対比できない。甕については、頸部が強く外傾する点(19・22・23)は甕A 型式に近いが、いずれもわずかに肩が張る倒卵形状を呈するのに対して、下平野遺跡の甕は長卵形と球形状の2者があり様相が異なる。

このように、下平野遺跡出土の土師器は、明地遺跡SB17や馬場遺跡SI 2 出土の土師器の中に、類似する特徴を見出せる。小林善也氏の編年によれば、明地遺跡SB33出土土器が中期ⅠA期、同SB17出土土器が中期ⅠB期のそれぞれ指標とされている(小林2021)。また、町内の遺跡では確認できないが、壺Ⅱ類は山口市朝田墳墓群Ⅶ地区SC10あるいは同SC 7 出土の壺(それぞれ小林分類の壺Cb 2 とDa 2)に近い要素をもち、それぞれ中期ⅠB期と中期Ⅱ期に位置付けられる。また、

甕の胴部内面にみられるタテ方向のケズリは中期ⅠB期以降の特徴とされ、本遺跡ではヨコ方向のケズリと混在している。以上から、下平野遺跡出土の土師器は小林編年の中期ⅠB期、すなわち中期前半でも中頃に近い時期に比定しておきたい。

3 縄文時代以前の石器

下平野遺跡では、縄文時代を中心とする石器が少数ながら出土した。その中で、県内でも稀少なものが、トロトロ石器(599)である。本遺跡の例は、全長が5.7cmで、両脚部が外反し、先端部は丸みをもち、側縁部から先端に向かって膨らみながら伸びる。表面は細かな加工がみられるが、全体に滑らかな仕上がりである。石材は暗色系(灰緑色)のチャートであり、表面には縦横に黒色の縞模様を伴う。県内では、この他に柳井市日積の尾崎原遺跡でも2点が出土している。尾崎原遺跡の例は、いずれもチャート製であるが、脚部の外反は少なく、残存長は2.4cmと1.7cmであり、本遺跡のものとは形状や大きさともに異なっている。石材であるチャートの産地は、県東部では錦川流域を含む岩国市中東部から周南市北東部に至る玖珂層群等に存在し、灰白色のチャートと黒色の薄い泥岩による互層構造の縞状チャートを産出する。このことから、本遺跡のトロトロ石器の産地に該当する可能性



第79図 下平野遺跡出土の石器

があるが、チャートの産地自体は各地にあるので特定はできない。トトロ石器は、縄文時代早期に、東北部から九州にかけて分布し、異形局部磨製石器等とも呼ばれるが、その用途は不明である。

ナイフ形石器(401)は、残存長が3.0cm、横長剥片素材で、左右の二側縁加工を施す。安山岩製である。県内のナイフ形石器は、宇部台地遺跡群をはじめ県中部～西部に分布がみられ、県東部では、柳井市伊保庄の黒島浜遺跡で、国府型ナイフ形石器の素材となる翼状剥片が採集されている。本遺跡出土のナイフ形石器は、県東部で数少ない後期旧石器時代の資料といえる。

その他の石器では、石鏃(600・601)や削器(558)、敲石(257)といった狩猟用や堅果類の加工用があり、本遺跡の近辺に狩猟の場や住まいが存在した可能性を示唆している。本遺跡から約300m西側に位置する辻花遺跡では、縄文時代晩期とみられるドングリ類貯蔵用土坑9基が確認されており、この時期における生活の拠点の一つが存在したことが推定される。同遺跡では、石鏃や削器、敲石の他に、本遺跡ではみられない磨石や石錘が出土しているが、とくに石錘は、才賀川流域の低地に立地するという遺跡の特徴を示すものであろう。

また、下平野遺跡出土の石器の石材をみると、石鏃と削器は安山岩製、敲石が花崗岩製で、剥片(394・404・475)は黒曜石製(腰岳産か)と安山岩製がある。先述の辻花遺跡では、安山岩が主要な石材として使用されるほか、近隣の弥生時代集落である馬場遺跡でも石鏃の石材として安山岩が高い割合で使用されている。このように、本遺跡における石材獲得にも周辺遺跡と同様の傾向がみられるといえよう。

まとめ

以上、本遺跡の調査において、旧石器・縄文時代には、県東部で調査例の少ないナイフ形石器や、県内でもめずらしいトトロ石器が出土したほか、才賀川流域の縄文遺跡によくみられる安山岩を石材とする石器が出土しており、この地における人々の活動の一端を垣間見ることができた。また、古墳時代中期前半の土師器は、近隣に所在する馬場遺跡や明地遺跡といった主要な古墳時代集落と比較しうる良好な資料を追加するとともに、本遺跡に接して同時期の集落が存在する可能性を想定させてくれた。そして、13世紀～14世紀中頃の鎌倉時代を中心とする集落は、周辺遺跡と比べても、建物の内容や搬入品を含む豊富な出土品、集落内での頻繁な建て替え等、当該地域の中でも有力な集落であったといえよう。

参考文献 ※「Ⅲ 調査の成果」と「Ⅴ 総括」は、主に以下の文献を参考にした。

岩崎仁志 2000「防長地域の中世陶器窯」『陶埴』第13号、山口県埋蔵文化財センター

岩崎仁志 2017「防長型播鉢の成立と展開—防長型瓦質土器の再検討(1)—」『山口考古』第37号、山口考古学会

岩崎仁志 2018「防長型足鍋の成立と展開—防長型瓦質土器の再検討(2)—」『山口考古』第38号、山口考古学会

河村吉行 2000「黒島浜遺跡」『山口県史』資料編・考古1、山口県

- 木村元浩 1988 「先土器時代の山口地方—遺跡の分布と立地—」『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』、山口大学
- 小林善也 2021 「山口県」『中期古墳研究の現状と課題Ⅴ～古墳時代中期の土師器・須恵器をめぐって～』、中国四国前方後円墳研究会 第24回研究集会
- 佐藤亜理 2022 「東播系須恵器」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』（日本中世土器研究会編）、真陽社
- 鈴木康之・北島大輔・草原孝典 2022 「山陽」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』（日本中世土器研究会編）、真陽社
- 中野晴久 2022 「中世陶器」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』（日本中世土器研究会編）、真陽社
- (財)山口県教育財団・山口県教育委員会 1993 『明地遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第162集
- (財)山口県教育財団・山口県教育委員会 1994 『明地遺跡Ⅱ』山口県埋蔵文化財調査報告第167集
- (財)山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター 2005 『尾崎原遺跡 大里遺跡 北智雲院遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第50集
- (公財)山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター 2022 『馬場遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第110集
- (公財)山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター 2023 『辻花遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第114集
- 山本信夫 2022 「中世前期の貿易陶磁器」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』（日本中世土器研究会編）、真陽社



写真図版

遺跡上空から石城山を臨む

図版 1



1 遺跡遠景（北西から）



2 遺跡遠景（西から）



1 遺跡遠景（北東から）



2 遺跡全景（東から）

図版 3



1 遺跡全景（西から）



2 遺跡全景（真上から、上が東）



1 1区全景（真上から、上が東）



2 2区全景（真上から、上が南）



1 1区北半近景（真上から、上が東）



2 1区北半完掘状況（東から）

1 1区西壁 (A-A')
土層 (東から)



2 1区西壁 (B-B')
土層 (東から)



3 1区南壁 (C-C')
土層 (北西から)





1 1区掘立柱建物配置 (真上から、上が東)



2 1区SB 1完掘状況 (東から)